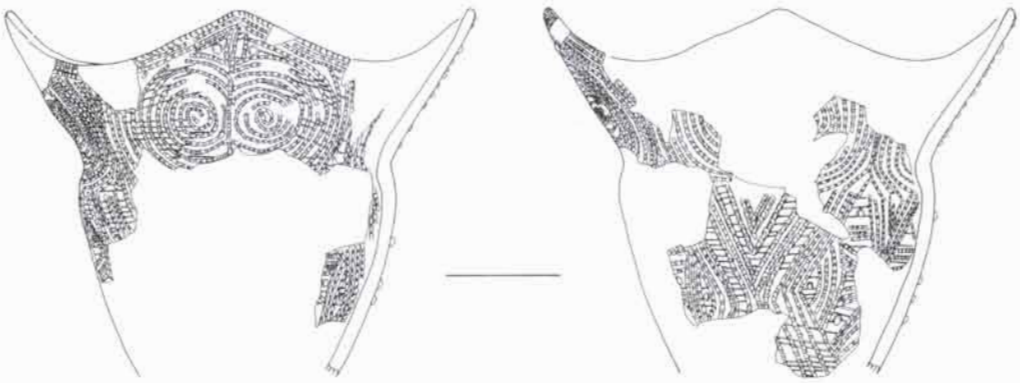
小暮地区遺跡群

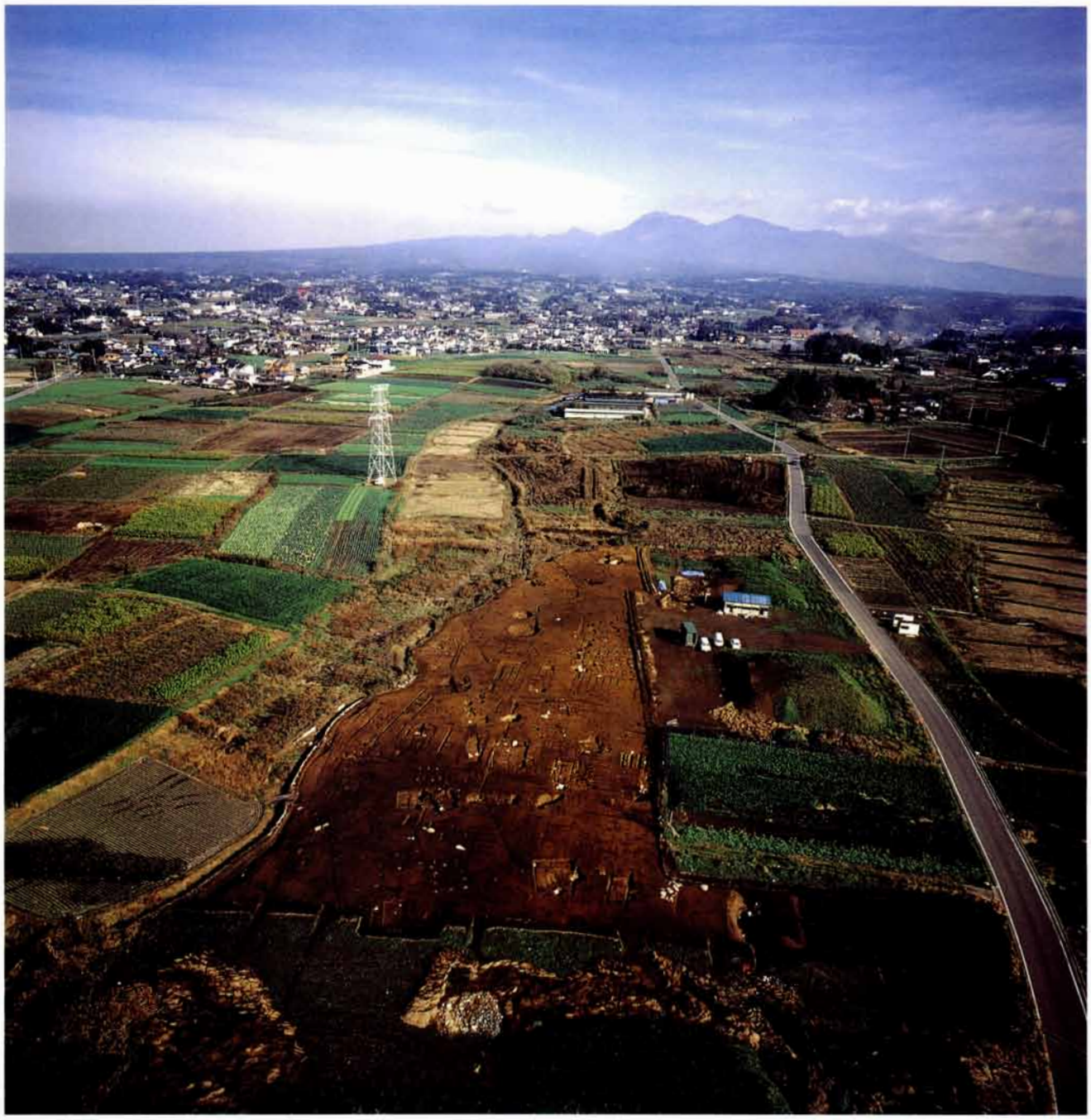
上百駄山遺跡
寺間遺跡
孫田遺跡

平成５年度県営ほ場整備事業嶺地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



１９９５

群馬県勢多郡富士見村教育委員会



上百駄山遺跡全景

孫田遺跡Ｊ４号土坑出土玦状耳飾

寺間遺跡遺物包含層出土線刻礫

序　　文

富士見村では平成元年度より前橋市北部で実施されている県営圃場整備事業嶺地区に伴い本村の南東部で発掘調査を行っています。平成2年度には広面遺跡の発掘調査を行い、その成果はすでに『広面遺跡』発掘調査報告書として刊行しました。

本報告書の上百駄山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡は、平成5年度の事業として事前調査を行い、その後整理作業を進めて参りました。

上百駄山遺跡では、主に縄文時代前期後半の集落、平安時代の集落、中世の城館跡が検出されました。縄文時代前期後半の集落は先年同じ県営ほ場整備事業に伴う広面遺跡の調査でもほぼ同時期の集落の調査を行い、良好な資料が出土していますが、今回の調査でも良好な遺物が出土し、該期の歴史を解明する上で大きな成果を上げることができました。富士見村で初めて縄文時代草創期の遺物が出土したことも特筆されます。

平安時代の集落からはこれまでの調査の中では最も良好な鍛冶遺構が検出されました。

中世の城館跡では面的に調査が行われたこともあり、掘立柱建物跡等の内部施設も調査できたため、城館跡の構造解明の資料が得られました。

寺間遺跡では縄文時代前期の住居跡や土坑、平安時代の住居跡や掘立柱建物跡、時期不明の土坑群や井戸、溝跡など多時期にわたる遺構・遺物が検出されました。

孫田遺跡でも縄文時代前期の土坑群、平安時代の道路跡、時期不明の溝跡などやはり多時期にわたる遺構・遺物が検出されました。

発掘調査に関連して行った自然科学分析により、調査地周辺の赤城白川の離水年代が判明したことも大きな成果と思います。

発掘調査や整理作業に必ずしも十分な時間と経費を費やしたわけではありませんが、本報告書が当地の歴史を解明する上で多少なりとも資すれば幸いと思います。

最後に、発掘調査にご協力いただきました諸機関、調査をご指導いただいた方々、さらに、厳しい自然条件の中で発掘作業に従事していただいた作業員の皆様に心より感謝申し上げ序といたします。

平成7年3月

富士見村教育委員会

教育長　鈴　木　清　茂

例　　言

1．本書は県営ほ場整備事業嶺地区に伴い事前調査を行った上百駄山遺跡、寺間遺跡、孫田遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の所在地は以下のとおりである。

上百駄山遺跡　　群馬県勢多郡富士見村大字時沢字上百駄山1420－1番地外

寺 間 遺 跡　　群馬県勢多郡富士見村大字小暮字寺間569－2番地外

孫 田 遺 跡　　群馬県勢多郡富士見村大字小暮字孫田536番地外

3．調査期間　上百駄山遺跡　平成5年9月1日～平成5年11月30日

寺 間 遺 跡　平成5年11月5日～平成6年1月10日

孫 田 遺 跡　平成6年1月4日～平成6年2月6日

整理作業　平成6年2月7日～平成7年3月22日

4．調査は前橋土地改良事務所の委託を受け、富士見村教育委員会が主体となって行った。

調査に要した費用は国庫補助金、県費補助金、農政委託金、村費をあてた。

5．調査組織は次のとおりである。

富士見村教育委員会　教　育　長　鈴木清茂

社会教育課長　青木鶴男（～平成6年3月）　品川良治（平成6年4月～）

係　　長　樺沢幹男

文 化 財 係　羽鳥政彦（調査担当）

6．本書の作成は編集、執筆、遺物写真の撮影を羽鳥政彦が行ったが、縄文時代遺物についての観察には関根慎二・谷藤保彦（群馬県埋蔵文化財調査事業団職員）の助力を得た。遺物実測、遺構・遺物図版トレース、版組、写真図版作成は舩津かほるが行った。自然科学分析は㈱古環境研究所に委託した。

7．遺構実測、空中写真撮影は技研測量設計㈱に委託した。

8．発掘調査から整理作業にかけて以下の方々からご指導・ご助言を賜った。また地元地権者各位には調査に際し、全面的な協力を受けた。記して心より感謝の意を表したい。　（敬称略　順不同）

群馬県教育委員会文化財保護課　前橋土地改良事務所　富士見村土地改良課　嶺土地改良区

長谷川福次　関根慎二　谷藤保彦　井上唯雄　山下歳信　藤坂和延　細野高伯　松田光太郎　山口逸弘

小菅将夫　勢多郡社教部会文化財分会会員諸氏

9．発掘調査・整理作業員は以下のとおりである。

青木真由美　池田由平　小見きぬ　小見岩造　小見菊枝　小野沢正江　樺沢ふみ子　木村利男

小暮朋一郎　小暮芳司　小林徳治　小林美智子　関口すみ子　関口照子　田中喜代子　田中秀道

中根きみ　中根とみ　舩津かほる　松村タカ子　目黒友子　室橋みち子　横堀春夫

凡　　例

1．本書の挿図の方位は座標北を表す。

2．挿図の縮尺は以下のとおりである。なお、スケールを付したので参照していただきたい。

遺構図	竪穴住居跡　掘立柱建物跡	1／60	竪穴状遺構	1／60	
	炉・竈の一部	1／40	溝	1／200、1／120、1／100、	
	土坑・井戸	1／40		1／80	
遺物図		1／3、1／2			

3．遺物写真の縮尺は統一していない。 石器写真にはスケールを付した。

4．遺構番号は基本的に調査時点に付したものをそのまま用いているが、整理作業によって掘立柱建物跡には新たに加わったものがある。また、土坑番号は遺跡によって付け替えを行ったもの、一部の掲載となったため欠番が生じているものがある。

5．グリッド名は南東杭で呼称している。

6．遺構図のうち、出土遺物及び出土位置ドットに付けられた番号は、遺物実測図の番号と一致する。

7．平安時代の竪穴住居跡実測図中のスクリーントーンはローム粘土である。

8．第1・117・126図は建設省国土地理院発行の5万分の1地形図「前橋」を一部加筆して使用した。第2図は富士見村役場発行の2千5百分の1現形図を1／2に縮尺して用いた。

目　　次

口絵　序文　例言　凡例　目次　抄録

I　発掘調査の経緯 …… 1
1．発掘調査に至る経緯 …… 3
2．発掘調査の経過 …… 3
3．遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 5
4．遺跡の立地 …… 5
5．発掘調査の方法 …… 7
6．土層堆積状況 …… 7

II　上百駄山遺跡 …… 9
1．縄文時代の遺構と遺物
(1)　概　　要 …… 12
(2)　竪穴住居跡 …… 13
(3)　土　　坑 …… 20
(4)　遺物包含層 …… 21
(5)　出土土器 …… 22
2．平安時代の遺構と遺物
(1)　概　　要 …… 45
(2)　竪穴住居跡 …… 45
(3)　掘立柱建物跡 …… 62
(4)　溝　　跡 …… 65
(5)　柱 穴 群 …… 65
(6)　出土遺物 …… 65
3．中近世の遺構
(1)　概　　要 …… 79
(2)　掘立柱建物跡 …… 79
(3)　竪穴状遺構 …… 93
(4)　土　　坑 …… 96
(5)　井　　戸 …… 96
(6)　溝　　跡 ……102
(7)　1号遺構 ……105

III　寺 間 遺 跡 ……107
1．概　　要 ……109
2．縄文時代の遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡 ……109
(2)　土　　坑 ……111
(3)　ピット群 ……111
(4)　出土遺物 ……115
3．平安時代の遺構と遺物
(1)　竪穴住居跡 ……119
(2)　掘立柱建物跡 ……121
(3)　溝　　跡 ……123
4．その他の時代の遺構と遺物
(1)　長方形土坑 ……123
(2)　井 戸 跡 ……123
(3)　溝　　跡 ……125
(4)　そ の 他 ……125

IV　孫 田 遺 跡 ……131
1．概　　要 ……133
2．縄文時代の遺構と遺物
(1)　土　　坑 ……134
(2)　出土遺物 ……135
3．平安時代の遺構
3 号 溝 ……136
4．時期不明の遺構
(1)　溝　　跡 ……136
(2)　1号土坑 ……139

V　自然科学分析 ……141

VI　発掘調査の成果と課題 ……157
1．縄文時代の成果と課題 ……159
2．平安時代の成果と課題 ……180
3．中近世の成果と課題 ……182

挿図目次

第 1 図　遺跡の位置及び周辺の遺跡…… 4
第 2 図　遺跡周辺の地形現況図…… 6
第 3 図　基本土層模式図…… 7
〈上百駄山遺跡〉
第 4 図　縄文時代遺構配置図…… 11
第 5 図　Ｊ１号住居跡及び炉跡…… 12
第 6 図　Ｊ１号住居跡出土土器位置図…… 13
第 7 図　Ｊ２号住居跡…… 14
第 8 図　Ｊ３号住居跡及び炉跡…… 16
第 9 図　Ｊ４号住居跡…… 17
第10図　Ｊ４号住居跡出土土器位置図…… 18
第11図　Ｊ５号住居跡…… 18
第12図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡…… 19
第13図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器位置図…… 20
第14図　縄文土坑…… 21
第15図　Ｊ１号住居跡出土土器(1)…… 23
第16図　Ｊ１号住居跡出土土器(2)…… 24
第17図　Ｊ１号住居跡出土土器(3)…… 25
第18図　Ｊ１号住居跡出土土器(4)…… 26
第19図　Ｊ２号住居跡出土土器…… 27
第20図　Ｊ３号住居跡出土土器(1)…… 28
第21図　Ｊ３号住居跡出土土器(2)…… 29
第22図　Ｊ４号住居跡出土土器…… 30
第23図　Ｊ５号住居跡出土土器…… 31
第24図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器(1)…… 32
第25図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器(2)…… 33
第26図　Ｊ１号土坑出土土器…… 34
第27図　Ｊ３号土坑出土土器…… 34
第28図　遺構外出土土器(1)…… 35
第29図　遺構外出土土器(2)…… 36
第30図　遺構外出土土器(3)…… 37
第31図　平安時代遺構配置図…… 46
第32図　１号住居跡…… 47
第33図　２号住居跡…… 47
第34図　３Ａ・Ｂ号住居跡…… 48
第35図　４号住居跡及び竈…… 49
第36図　５号住居跡…… 50
第37図　６Ａ・Ｂ号住居跡…… 51
第38図　７Ａ号住居跡…… 53
第39図　７Ｂ号住居跡…… 54
第40図　８号住居跡…… 55
第41図　９号住居跡…… 57
第42図　10号住居跡…… 58
第43図　11号住居跡…… 60
第44図　12号住居跡…… 60
第45図　13Ａ・Ｂ号住居跡…… 61
第46図　１号掘立柱建物跡…… 63
第47図　４号掘立柱建物跡…… 63
第48図　５号掘立柱建物跡…… 64
第49図　２・３号掘立柱建物跡…… 64
第50図　６号溝…… 65
第51図　１号住居跡出土遺物…… 66
第52図　３号住居跡出土遺物…… 66
第53図　４号住居跡出土遺物…… 67
第54図　５号住居跡出土遺物…… 68
第55図　６号住居跡出土遺物(1)…… 68
第56図　６号住居跡出土遺物(2)…… 69
第57図　７号住居跡出土遺物(1)…… 70
第58図　７号住居跡出土遺物(2)…… 71
第59図　８号住居跡出土遺物…… 72
第60図　９号住居跡出土遺物…… 73
第61図　10号住居跡出土遺物(1)…… 74
第62図　10号住居跡出土遺物(2)…… 75
第63図　12号住居跡出土遺物…… 75
第64図　13号住居跡出土遺物…… 76
第65図　中近世遺構配置図…… 80
第66図　中近世遺構枢要部…… 81
第67図　掘立柱建物跡・柱穴配置図…… 82
第68図　６号掘立柱建物跡(1)…… 83
第69図　６号掘立柱建物跡(2)…… 84
第70図　７号掘立柱建物跡…… 84
第71図　８号掘立柱建物跡…… 85
第72図　９号掘立柱建物跡…… 86
第73図　10号掘立柱建物跡…… 87
第74図　11号掘立柱建物跡…… 87
第75図　12号掘立柱建物跡…… 88
第76図　13号掘立柱建物跡…… 89
第77図　14号掘立柱建物跡…… 90
第78図　15号掘立柱建物跡…… 90
第79図　16号掘立柱建物跡…… 91
第80図　17号掘立柱建物跡…… 91
第81図　18号掘立柱建物跡…… 92
第82図　19号掘立柱建物跡…… 92
第83図　竪穴状遺構・土坑・井戸配置図…… 94
第84図　竪穴状遺構…… 95
第85図　土坑(1)…… 98
第86図　土坑(2)…… 99
第87図　土坑(3)…… 100
第88図　土坑(4)…… 101
第89図　井戸跡…… 102
第90図　１～４号、７・８号溝…… 104
第91図　５号溝…… 105
〈寺　間　遺　跡〉
第92図　Ｊ１・Ｊ２号住居跡…… 110
第93図　縄文土坑(1)…… 112
第94図　縄文土坑(2)…… 113
第95図　小ピット群…… 114
第96図　Ｊ１・Ｊ２号住居跡出土土器…… 116
第97図　遺構外出土土器…… 117
第98図　１号住居跡…… 119
第99図　１号住居跡出土遺物…… 120
第100図　１号掘立柱建物跡…… 121
第101図　２号掘立柱建物跡…… 122
第102図　１・２号溝…… 124
第103図　土坑(1)…… 126
第104図　土坑(2)…… 127
第105図　土坑(3)…… 128
第106図　土坑(4)、井戸…… 129
第107図　４Ａ・Ｂ号溝…… 130
〈孫　田　遺　跡〉
第108図　孫田遺跡全体図…… 133
第109図　縄文土坑…… 134
第110図　出土遺物…… 136
第111図　１号土坑…… 137
第112図　１号溝…… 137
第113図　２号溝…… 138
第114図　３号溝…… 139
第115図　４号溝…… 139

〈発掘調査の成果と課題〉
第116図　富士見村の諸磯ｃ式土器変遷図(1)……164
第117図　富士見村の諸磯ｃ式土器変遷図(2)……165
第118図　富士見村の諸磯式土器出土遺跡分布図……168
第119図　参考資料　陣場遺跡Ｊ１号住居跡出土土器……170
第120図　参考資料　陣場遺跡Ｊ２号住居跡出土土器……171
第121図　参考資料　陣場遺跡Ｊ９号住居跡出土土器……172
第122図　参考資料　陣場遺跡Ｊ17号住居跡出土土器(1)……173
第123図　参考資料　陣場遺跡Ｊ17号住居跡出土土器(2)……174
第124図　参考資料　庚東遺跡出土土器……177
第125図　参考資料　陣場・上庄司原東遺跡出土石棒……178
第126図　寺間遺跡出土線刻礫……179
第127図　上百駄山遺跡掘立柱建物跡群別図……183
第128図　中世城館跡調査資料集成図(1)……186
第129図　中世城館跡調査資料集成図(2)……187
第130図　富士見村と周辺の中世城館跡分布図……191

表　目　次

〈上百駄山遺跡〉
第１表　Ｊ１号住居跡出土土器観察表 …… 39
第２表　Ｊ２号住居跡出土土器観察表 …… 40
第３表　Ｊ３号住居跡出土土器観察表 …… 41
第４表　Ｊ４号住居跡出土土器観察表 …… 41
第５表　Ｊ５号住居跡出土土器観察表 …… 42
第６表　Ｊ６号住居跡出土土器観察表 …… 42
第７表　Ｊ１号土坑出土土器観察表 …… 43
第８表　Ｊ２号土坑出土土器観察表 …… 43
第９表　遺構外出土土器観察表 …… 43
第10表　１号住居跡出土遺物観察表 …… 76
第11表　３号住居跡出土遺物観察表 …… 76
第12表　４号住居跡出土遺物観察表 …… 76
第13表　５号住居跡出土遺物観察表 …… 77
第14表　６号住居跡出土遺物観察表 …… 77
第15表　７号住居跡出土遺物観察表 …… 77
第16表　８号住居跡出土遺物観察表 …… 78
第17表　９号住居跡出土遺物観察表 …… 78
第18表　10号住居跡出土遺物観察表 …… 78
第19表　12号住居跡出土遺物観察表 …… 79
第20表　13号住居跡出土遺物観察表 …… 79
第21表　中世土坑一覧表 …… 96
〈寺　間　遺　跡〉
第22表　縄文土坑一覧表 ……111
第23表　Ｊ１号住居跡出土土器観察表 ……115
第24表　Ｊ２号住居跡出土土器観察表 ……115
第25表　Ｊ１号土坑出土土器観察表 ……118
第26表　Ｊ５号土坑出土土器観察表 ……118
第27表　Ｊ10号土坑出土土器観察表 ……118
第28表　遺構外出土土器観察表 ……118
第29表　１号住居跡出土遺物観察表 ……122
第30表　長方形土坑一覧表 ……125
〈孫　田　遺　跡〉
第31表　縄文土坑一覧表 ……135
第32表　縄文土器観察表 ……135
〈成 果 と 課 題〉
第33表　富士見村の諸磯ｃ式期の土器変遷表 ……163
第34表　富士見村の諸磯式期の遺跡一覧表 ……167
第35表　陣場遺跡出土土器観察表 ……175
第36表　富士見村の既調査中世城館跡一覧表 ……185
第37表　周辺地域を含めた中世城館跡一覧表 ……190

写真図版目次

巻頭図版　上百駄山遺跡全景
〈上百駄山遺跡〉
ＰＬ１　上百駄山遺跡全景
縄文時代の遺構
ＰＬ２　Ｊ１・２号住居跡
ＰＬ３　Ｊ３・４号住居跡
ＰＬ４　Ｊ５・６号住居跡
平安時代の竪穴住居跡
ＰＬ５　１～４号住居跡
ＰＬ６　４～６号住居跡
ＰＬ７　７号住居跡
ＰＬ８　８～10号住居跡
ＰＬ９　10～13号住居跡
平安時代の他の遺構
ＰＬ10　１～５号掘立柱建物跡、ピット群、６号溝
中近世の遺構
ＰＬ11　中近世遺構群中心部、掘立柱建物跡
ＰＬ12　竪穴状遺構、土坑
ＰＬ13　土坑
ＰＬ14　土坑、井戸
ＰＬ15　溝跡
ＰＬ16　溝跡、作業風景
縄文時代の遺物
ＰＬ17　Ｊ１号住居跡出土土器
ＰＬ18　Ｊ１号・Ｊ２号住居跡出土土器
ＰＬ19　Ｊ３号・Ｊ４号住居跡出土土器
ＰＬ20　Ｊ４号・Ｊ５号・Ｊ６号住居跡出土土器
ＰＬ21　遺構外出土土器
ＰＬ22　遺構外出土土器、Ｊ１号・Ｊ２号住居跡出土石器
ＰＬ23　Ｊ３号・Ｊ４号・Ｊ６号住居跡出土石器
ＰＬ24　遺構外出土石器
平安時代の遺物
ＰＬ25　１号・３号・４号住居跡出土遺物
ＰＬ26　５号・６号・７号住居跡出土遺物
ＰＬ27　７号住居跡出土遺物
ＰＬ28　８号・９号住居跡出土遺物
ＰＬ29　10号・13号住居跡出土遺物
〈寺　間　遺　跡〉
ＰＬ30　寺間遺跡全景
縄文時代
ＰＬ31　Ｊ１号・Ｊ２号住居跡、Ｊ１号・Ｊ２号・Ｊ３号土坑
ＰＬ32　Ｊ４～Ｊ12号土坑、包含層遺物出土状態、縄文小ピット群
平安時代
ＰＬ33　１号住居跡、１号・２号掘立柱建物跡
中近世
ＰＬ34　１号井戸、２～８号土坑
ＰＬ35　９号～19号土坑
ＰＬ36　１号～４号溝
出土遺物
ＰＬ37　縄文時代の出土遺物
ＰＬ38　縄文時代・平安時代の出土遺物
〈孫　田　遺　跡〉
ＰＬ39　孫田遺跡全景
ＰＬ40　縄文時代土坑、１号溝
ＰＬ41　２～４号溝、出土遺物

発掘調査報告書抄録

フリガナ	カミヒャクダヤマイセキ　テラマイセキ　マゴタイセキ
書名	上百駄山遺跡、寺間遺跡、孫田遺跡
副書名	県営圃場整備事業嶺地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
編著者名	羽鳥　政彦
編集機関	群馬県勢多郡富士見村教育委員会
編集機関所在地	〒371—01　群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1　☎ 0272—88—6111
発行年月日	西暦1995年3月22日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上百駄山遺跡（カミヒャクダヤマ）	勢多郡富士見村大字時沢（トキザワ）字上百駄山（カミヒャクダヤマ）	10303		36°25′48″	139°6′00″	19930901 ～ 19931130	5,000m²	県営圃場整備事業
寺間遺跡（テラマ）	勢多郡富士見村大字小暮（コグレ）字寺間（テラマ）	10303		36°26′10″	139°6′19″	19931201 ～ 19940110	3,500m²	県営圃場整備事業
孫田遺跡（マゴタ）	勢多郡富士見村大字小暮（コグレ）字孫田（マゴタ）	10303		36°25′57″	139°6′7″	19940104 ～ 19940206	1,500m²	県営圃場整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上百駄山遺跡	集落	縄文	住居跡　7軒 土坑　3基	前期土器・石器	微隆起線文土器片出土 諸磯b～c式期の良好な資料
	集落	平安	住居跡　13(17)軒 掘立柱建物跡　5棟 溝跡　1条	土器類、紡錘車 鉄製品（鋤先、鎌など）、鉄滓	小鍛冶遺構1
	城館跡	中近世（時期不明を含む）	掘立柱建物跡　14棟 溝跡　7条 土坑　52基 井戸　2基		
寺間遺跡	集落	縄文	住居跡　2(3)軒 土坑　10基	前期土器・石器	
	集落	平安	住居跡　1軒 掘立柱建物跡　2棟	土器、鉄・銅製品	
		時期不詳	溝跡　4条 土坑　20基		
孫田遺跡	墓域	縄文時代 平安時代 時期不詳	土坑　8基 道路跡　1条 溝跡　3条 土坑　1基		路面直上に浅間B軽石が堆積

Ⅰ　発掘調査の経緯

1．発掘調査に至る経緯

富士見村では平成2年から前橋市と隣接する小暮地区で県営の圃場整備事業を行っている。平成5年度の事業は大字時沢から大字小暮にまたがる県道渋川―大胡線の南側を予定しており、この中には周知の遺跡も含まれていた為、事業実施以前に埋蔵文化財の保護措置を執る必要があった。

事業実施に先立ち遺跡の範囲・密度等を把握するため、平成5年7月に圃場整備予定地区の内、時沢字上百駄山と小暮字寺間の一部の主に道路予定地を対象として試掘調査を行ったところ、上百駄山では縄文時代・平安時代の住居跡、中近世と思われる柱穴・土坑・溝等、寺間では縄文時代の土坑、平安時代と思われる住居跡・溝等が検出された。この結果に基づき前橋土地改良事務所、富士見村役場土地改良課、富士見村教育委員会の三者で埋蔵文化財の保存について協議を行ったが、事業計画の変更は不可能との結論に至り、遺跡範囲内の道水路部分と工事により破壊の予想される切り土部分を中心に発掘調査を行うこととなった。また、この2遺跡以外の時沢字上百駄山と小暮字寺間・孫田の圃場整備事業予定地区については、上百駄山遺跡の調査開始後に試掘調査を行い、その結果により改めて協議することで合意した。

2．発掘調査の経過

〈上百駄山遺跡〉

8月24日―試掘調査・抜根に引き続き表土剝ぎを開始した。

9月1日―作業員を投入した。遺構の精査は1号溝と平安時代の竪穴住居跡から開始した。

9月下旬―平安時代の住居跡・掘立柱建物跡の調査と並行して中世の土坑群の調査を開始した。

10月初旬―縄文時代住居跡の調査を開始した。

10月中旬―中世の掘立柱建物跡・柱穴群調査を開始した。また、時沢小学校郷土クラブの生徒が発掘の体験学習を行った。

10月下旬―上百駄山遺跡周辺の数ケ所で試掘調査を行ったが、新たな遺跡は検出できなかった。

11月下旬―空中写真撮影。縄文時代の遺構・遺物包含層・10号住居跡調査を最後に調査を終了した。

〈寺間遺跡〉

11月初旬―寺間遺跡周辺の試掘調査を行い、本調査区域を確定した。

11月中旬―本調査区域の表土剝ぎを開始した。

11月下旬―事務所の引っ越し作業を行い、寺間遺跡の遺構検出作業を開始した。

12月初旬―遺構精査を開始した。遺構密度が薄いため各時代の調査を並行して行った。

12月下旬―空中写真撮影を行った。縄文時代の遺構調査・グリッド下げ・テストピット掘削を行った。

1月初旬―若干の補足調査、実測作業を最後に調査を終了した。

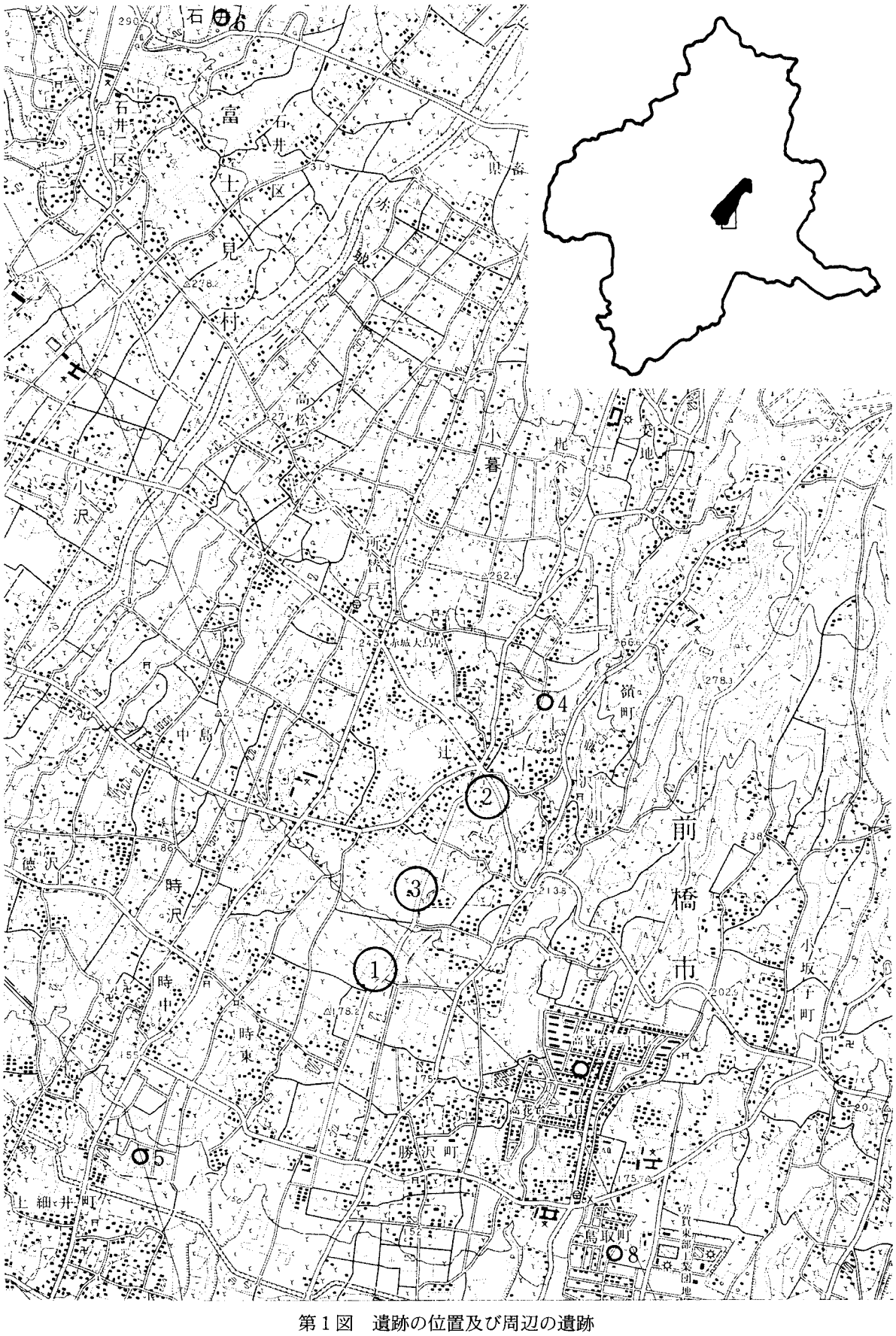
〈孫田遺跡〉

11月下旬―試掘調査を行い、本調査範囲を確定した。

1月中旬―溝調査から精査を開始した。調査終了まで遺物洗浄作業を並行して行った。

1月中旬―縄文土坑調査を開始した。1月下旬―空中写真撮影を行った。

2月上旬―若干の残務整理と事務所の撤収作業を行い全ての調査を終了した。



第１図　遺跡の位置及び周辺の遺跡

3．遺跡の位置と周辺の遺跡

〈位置〉

富士見村は群馬県の県庁所在地である前橋市に北接し、上毛三山の一峰赤城山の南西に位置する。村域は赤城山頂までも含む狭長な村である。東方に大胡町・宮城村、西方に北橘村、赤城村等が隣接している。標高は南端の約150mから山頂の1,828mまでを測り、標高450m前後の傾斜変換点を境として、北東部の山岳地と南西の裾野部分に分けられる。さらに、裾野部は東方の扇状地形（白川扇状地）と西方の比較的開析谷の発達した丘陵状地形とに大まかに区分できる。上百駄山（第１図１）・寺間（同図２）・孫田（同図３）遺跡はこの白川扇状地の東端の低台地上に位置する。

〈周辺の遺跡〉

富士見村域内では今回の調査地周辺ではあまり調査を行っていない。包蔵地は何カ所かが知られているものの詳細は不明である。

第１図４は広面遺跡で縄文時代前期後半を中心とする遺跡で、縄文時代前期中葉、中・後期の遺構・遺物や平安時代の住居跡も検出されている。５は東紺屋谷戸遺跡で平安時代の住居跡と平安時代～中世頃の掘立柱建物跡を調査しており、この中には三間四面の建物跡も含まれている。６の坂上遺跡は距離的にかなり離れているが、古墳時代の「牧」や縄文時代の陥し穴・土坑・集石を調査している。このうち縄文時代前期後半の土坑から結節浮線文土器が出土している。

今回の調査地の南東に近接する前橋市域では芳賀北部団地遺跡、芳賀東部団地遺跡等を始めとして多くの遺跡を調査しており、縄文時代から近世に及ぶ多量の遺構・遺物が検出されている。

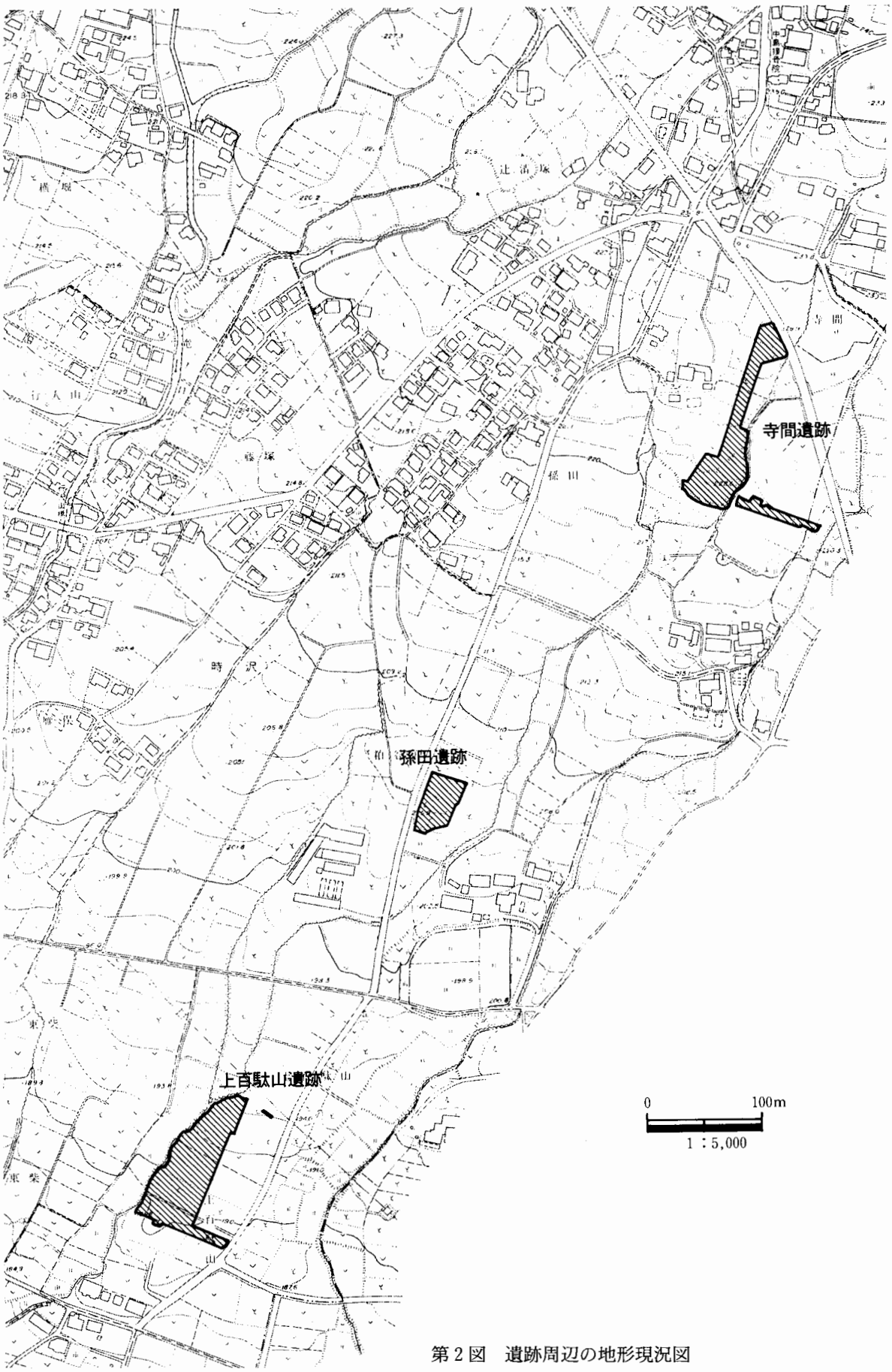
4．遺跡の立地

本報告の３遺跡はいずれも前橋市と富士見村の境付近を流下する藤沢川に近接する台地上に位置する。

上百駄山遺跡の西側は旧河川跡であり、現況で水田となっている。遺跡の乗る台地から急激に落ち込むが比高はわずか１～２m程である。台地の東側は西側と異なり緩斜面が東方の河川跡まで続いており、遺跡の東限は不明瞭である。遺跡の北側は現在水田となっているが、地元の古老の話では昔は池になっていたとのことである。遺跡周辺は蛇行する幾筋かの旧河川により台地が複雑に浸食を受けている。遺跡の南限は不明であるが、南北180～200m、東西100m程が遺跡の範囲と推測される。

寺間遺跡も低台地上に位置する。この台地の西側はごくわずかな比高差の旧河川があり、現在は水田となっている。また、台地の中央部を南北に縦断する形で小河川が流れ下っているが、調査により平安時代頃に流路が変化したことが確認されている。台地の東側は比高差10mほどの河川であり急激に落ち込んでいる。遺跡の範囲は、南西は調査地が限界であるが他は不明である。いずれにしても台地上の広範囲に占地すると推測されるが密度的には薄い。平安時代集落は台地を縦断する小河川の西側に限定されている。

孫田遺跡も東西を旧河川に挟まれた低台地上に占地するが、遺跡付近から南側は急激に台地幅が狭まり、上百駄山遺跡の乗る台地近くまで伸びている。遺跡の北限・西限は明瞭でないが、遺物の散布状況からは余り大規模な遺跡ではないと推定している。



第２図　遺跡周辺の地形現況図

5．発掘調査の方法

表土除去は重機を用いて行った。作業員による遺構検出作業ののち、住居跡は基本的に土層観察のためのベルトを十字に残し、床面・壁面精査を行った。土坑・柱穴は検出した平面のほぼ中央で半裁し、土層観察後全掘した。溝は適宜ベルトを設定し掘り下げた。

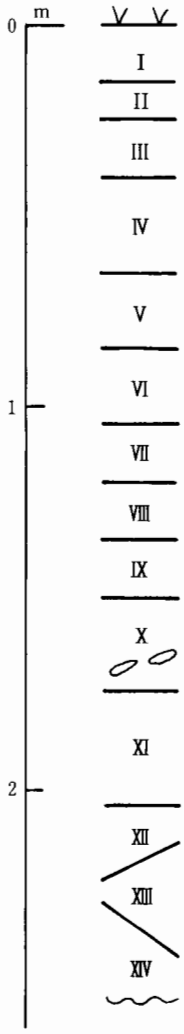
遺物は基本的に床面近くのもの、残りのよいものを優先して図面と写真で出土状況・出土位置を記録してから取り上げたが、覆土中から出土したものについては一括して取り上げたものも多い。

測量の基準杭は、上百駄山遺跡では国家座標に合わせて設定したが、寺間遺跡と孫田遺跡は調査地の形状の関係で任意に設定している。杭の間隔は５ｍで、グリッド名は南東杭で呼称している。

各遺構の土層断面図は基本的に１／20で作成した。遺構平面図は基本的に平板実測を行い１／20で作成したが、一部の住居跡では写真実測を行った。溝跡の平面実測は１／40で行っている。遺跡の全体図は基本的に写真実測を行ったが、部分的に平板実測を行い１／100で作成した。

写真撮影は白黒・カラースライドともに35㎜カメラを用いて行った。

遺跡の全体写真は気球を用いて撮影した。



第３図　基本土層模式図

6．土層堆積状況

全体的には３遺跡の土層堆積状況に差はない。

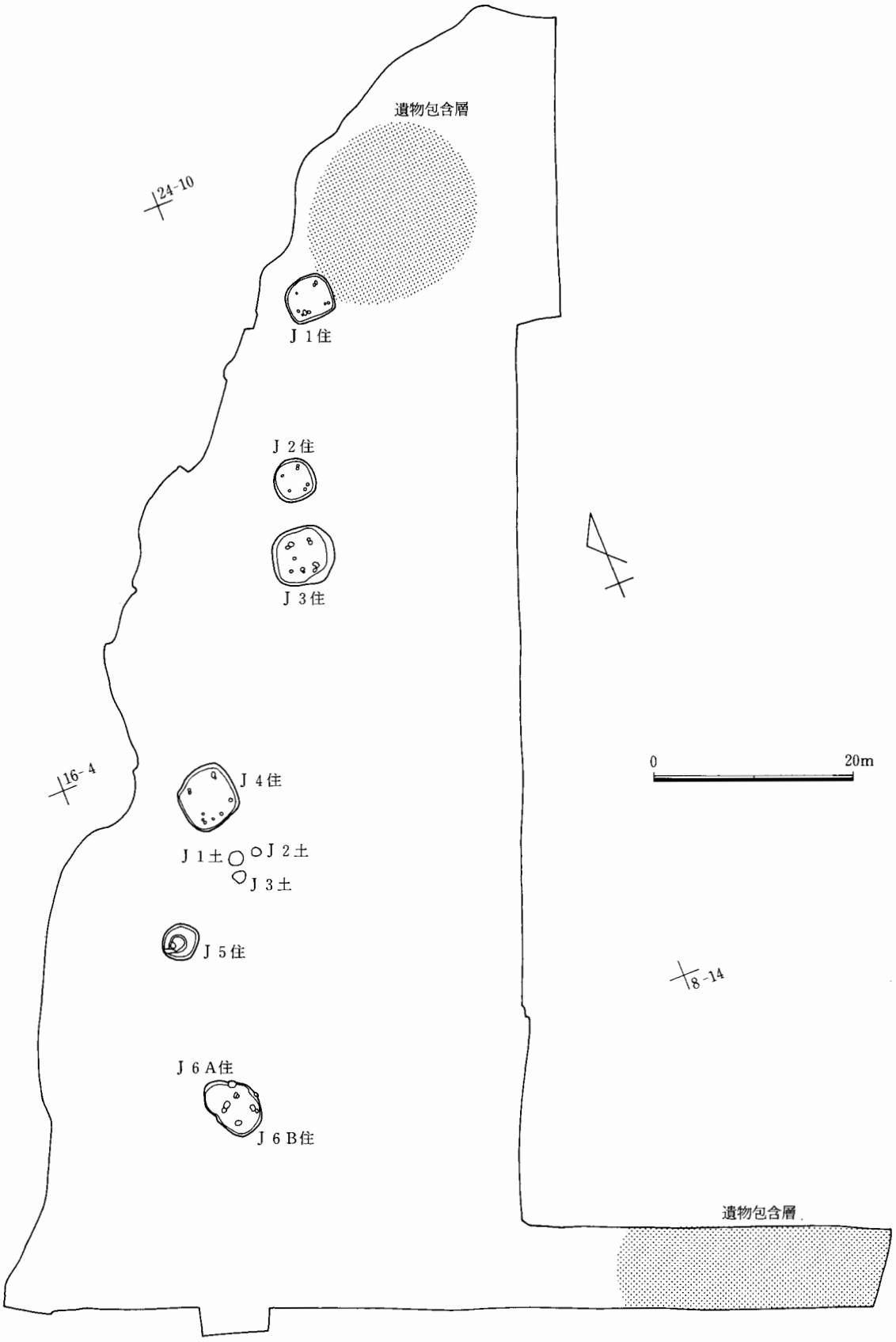
ここでは、上百駄山遺跡の土層堆積状況を簡単に説明するが、寺間遺跡と孫田遺跡では自然科学分析を行っているのでそちらを参照していただきたい。

一般的にはII層の上に榛名山二ツ岳FP軽石を含む黒褐色土が堆積するが、本跡では耕作等の関係ですべて削平されている。

X層以下は赤城白川の影響下にあると思われ、砂層・鉄錆層が堆積している。XIV層の下は人頭大の礫が等質的に堆積する礫層であるが、XIV層以上の層中にも大小の礫が散在して含まれる。

Ⅰ．表土、砂質暗褐色土。　II．黒色土、浅間Ｃ軽石を多量に含む。
III．黒色土、浅間Ｃ軽石を少量含む。
IV．黒褐色土。縄文時代の遺物包含層。
Ⅴ．小礫を含む黒褐色土。　VI．褐色土ににぶい黄褐色土ブロック。
VII．黄褐色土。
VIII．汚れた黄褐色土。黄色パミス（As－YP）含む。
IX．黄色パミス。（As－SP）　X．灰褐色土、砂層を含む。
XI．砂質灰褐色土。　XII．砂層。
XIII．赤褐色土（鉄錆多量に含むXIV）。　XIV．浅黄褐色土。

II　上百駄山遺跡

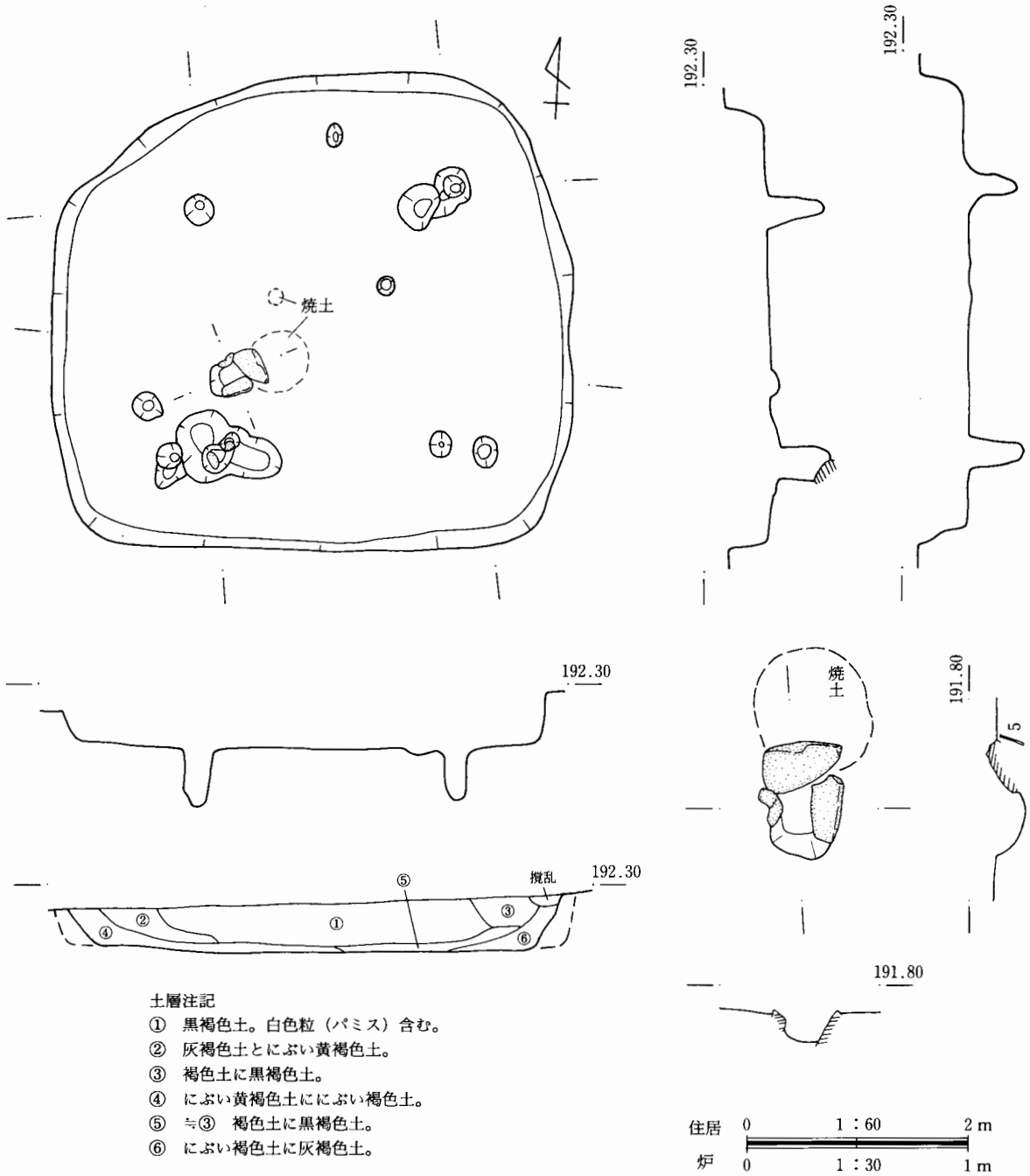


第4図　縄文時代遺構配置図

1．縄文時代の遺構と遺物

(1) 概　　要

縄文時代の遺構は竪穴住居跡７軒と土坑３基である。竪穴住居跡は台地の縁辺に沿うように、南北方向に散在する。土坑はＪ４号住居跡の南に集中して検出された３基を認定した。これ以外にも十数ケ所で土坑の可能性のある染み状の部分を半截してみたが、人為的な土坑とするに至らなかった。遺構の時期は出土土器から諸磯ｂ式期終末～諸磯ｃ式期初頭期と思われる。遺物包含層はＪ１号住居跡の東側と６号溝の東側の概



第５図　Ｊ１号住居跡及び炉跡

ね２ケ所に検出されている。前者からは草創期、早期、前期の土器片が、後者からは前期、中期の土器片が出土している。

(2) 竪穴住居跡

Ｊ１号住居跡（遺構第５～６図、遺物第15～18図、ＰＬ２）

23―12～23―13グリッドを中心に位置する。南西約14mにＪ２号住居跡が近接する。東方には薄い該期の遺物包含層が存在する。

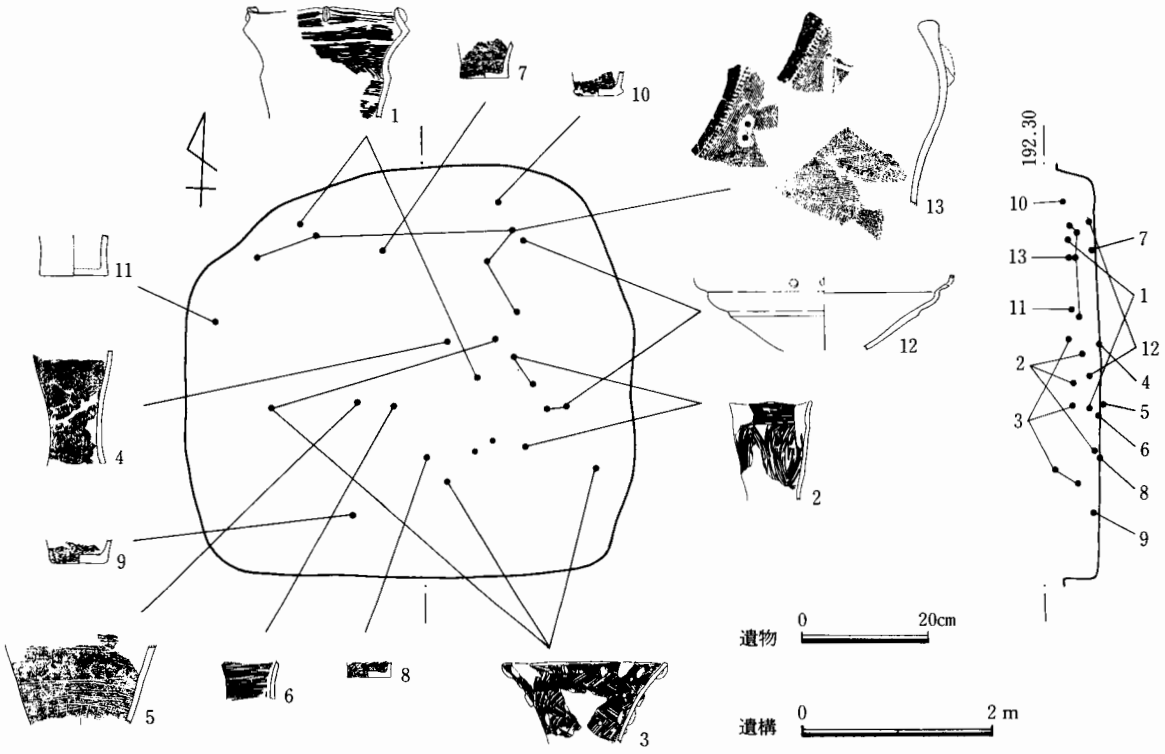
東西約4.8m、南北4.3m、深さ50～30cmを測る。平面形状は北壁・東壁が不明瞭であるが、東西に長い歪んだ隅丸長方形状を呈する。壁面は比較的直に立ち上がる。床面は周縁部を除き良く踏み固められている。柱穴はほぼ対角線上の４ケ所に検出されており、北西を除いて建て替えが認められる。直径約30～40cm、深さ50cm前後を測る。炉は中央部の南西寄りに付設されており、埋め甕炉から石囲い炉への作り替えを行っている。この北側でも床面の小範囲が円形に焼土化しており、地床炉の可能性がある。

遺物は覆土を中心に比較的多量に出土しているが、器形を復元できたものは少ない。尚、本跡覆土中から草創期の土器破片が１点出土している(資料提示は遺構外出土土器の中で行っている)。石器は打製石斧が多く、磨石・凹石・スクレイパーの他、有溝砥石２点が出土している。

Ｊ２号住居跡（遺構第７図、遺物第19図、ＰＬ２）

19―11グリッドを中心に位置する。南方約2.5mにＪ３号住居跡が近接する。

東西4.0m、南北4.2m、深さ70cm前後を測る。平面形状は円形に近い隅丸方形を呈する。壁面は若干角度



第６図　Ｊ１号住居跡出土土器位置図

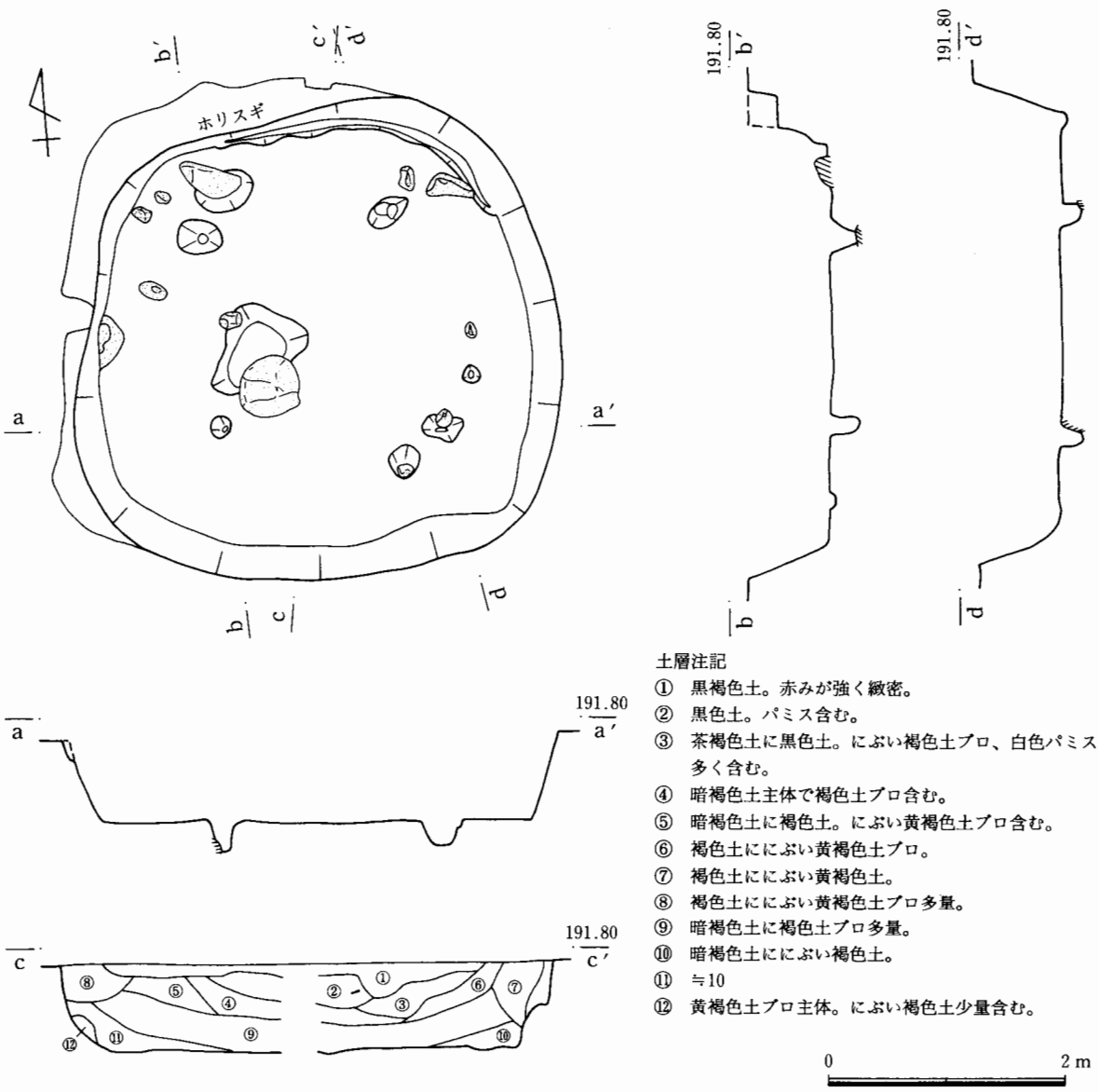
をもって立ち上がる。床面は良く踏み固められているが、所々に地山の礫が露出している。主柱穴はほぼ対角線上の４ケ所に検出されている。径20～40cmで、深さは20cm前後と浅い。炉は中央部西寄りに焼土が認められており、地床炉と思われる。

遺物は覆土中から土器小破片が少量出土しただけである。石器はスクレイパー類が多く、他には打製石斧・磨石・石皿・台石が出土している。

Ｊ３号住居跡（遺構第８図、遺物第20・21図、ＰＬ３）

18―10～18―11グリッドを中心に位置する。２号住居跡、１号溝と重複する。北方約2.5mにＪ２号住居跡が近接する。

東西6.2m、南北5.7m、深さ70～80cmを測る。東～南壁の立ち上がりは不明瞭であり、拡幅の可能性もある。平面形状はほぼ円形を呈する。壁面は緩やかに立ち上がる。床面は良く踏み固められているが、西壁際や東～南壁際に低い段差が認められる。主柱穴は４ケ所に検出されている。４ケ所とも３基以上重複してお



第７図　Ｊ２号住居跡

り、少なくとも２回の建て替えを行ったと思われる。それぞれの最も規模の大きい柱穴で直径30～40cm、深さ40～50cmを測る。南壁寄りの柱穴の間にも補助柱穴が認められるが、深さは30cmと若干浅く、やはり重複が認められる。炉は南西柱穴に寄った位置に埋甕が２基付設されており、埋甕炉と思われるが、作り替えを行ったか、同時に使用したかは明瞭な切り合いがないため不明である。

遺物は２個の埋甕の他には覆土中からごく少量の土器破片が出土しただけである。石器は打製石斧・スクレイパー・凹石・石皿等が出土している。

Ｊ４号住居跡（遺構第９・10図、遺物第22図、ＰＬ３）

14－７グリッドを中心に位置する。南西約10mにＪ５号住居跡、南約３mに土坑群が近接する。

東西5.5m、南北5.8m、深さ60～40cmを測る。平面形状は菱形状に歪んだ隅丸方形を呈する。

壁面は比較的直に立ち上がる。床面は中央部以外はあまり踏み固められていない。南西寄りに地山から礫が露出している。主柱穴は対角線上の４ケ所に検出されており、重複の認められるものもあることから、建て替えが行われた可能性もある。南側主柱穴間には若干西寄りに２基の小ピットが検出されており入口施設と思われる。炉は中央部西寄りの床面２ケ所が焼土化しており、地床炉と思われる。

遺物は覆土中位を中心に土器破片が出土しているが、量は多くない。尚、Ｊ６号住居跡出土土器と接合したものがある。石器は打製石斧・スクレイパー・石匙・石錐・磨石・凹石が出土している。

Ｊ５号住居跡（遺構第11図、遺物第23図、ＰＬ４）

12－６グリッドに位置する。北東10mにＪ４号住居跡が近接する。中央部に土坑が重複し土坑が新しい。

長径4.0m、短径3.7m、深さ15～25cmを測り、わずかに楕円形状を呈する。床面はあまり踏み固められていない。西寄りにかなり大きな地山の礫が露出している。北壁に半円状の張出しがあり、土坑の重複が考えられる。炉・柱穴等の施設は検出されていない。

遺物は南東部壁際から深鉢の胴下半部が出土しただけである。

重複土坑は径1.6m前後、床面からの深さ20cmを測り、円形を呈するが、南西の礫方向に不明瞭な浅い掘り込みが続いており、あるいはさらに別の土坑が重複している可能性もある。底面は平坦で、壁は開いて立ち上がる。遺物は出土していない。

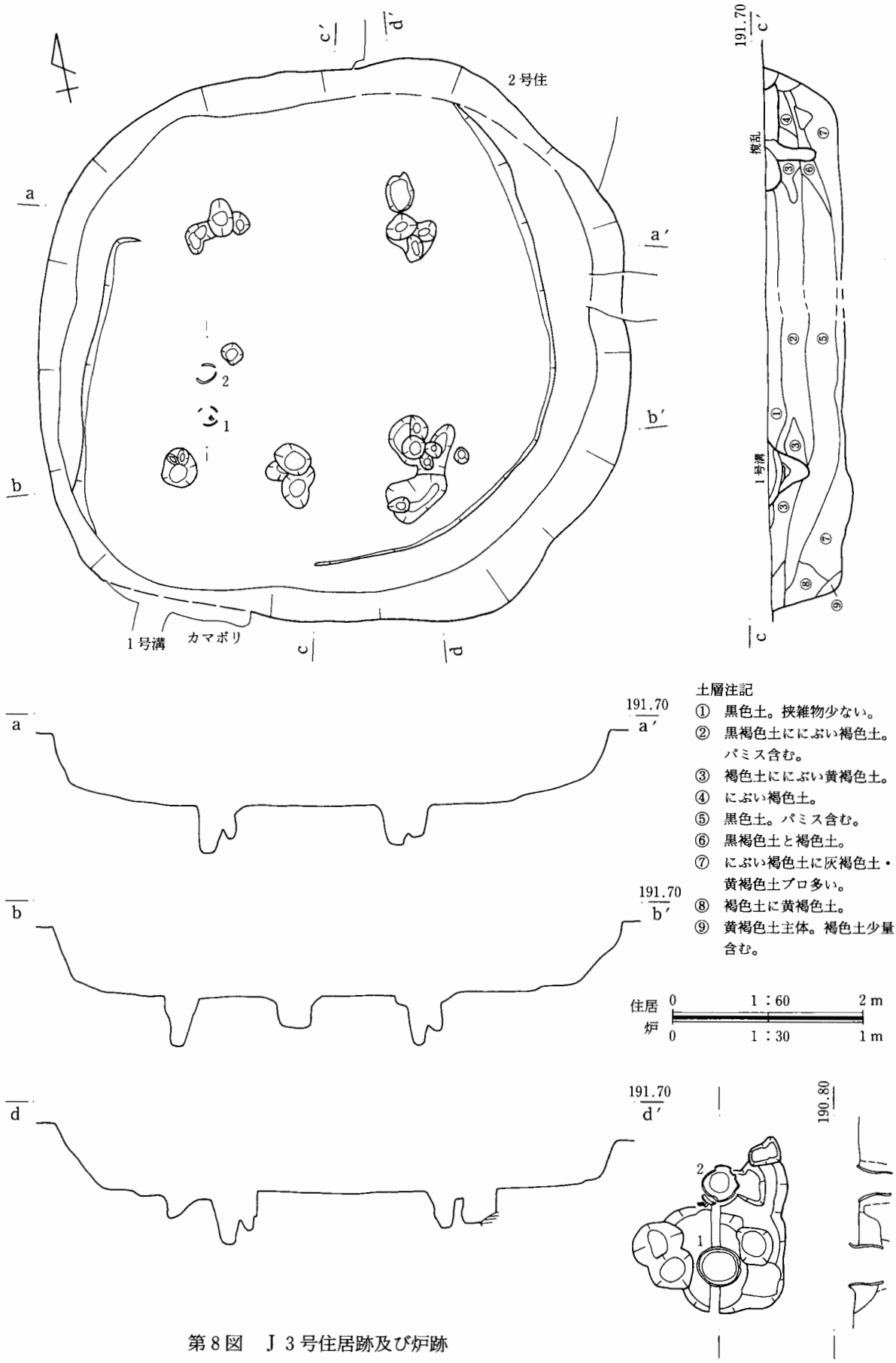
Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡（遺構第12・13図、遺物第24・25図、ＰＬ４）

２軒の住居跡が南北に重複する。北側が新しくこれをＡ号とし、古い南側をＢ号とする。Ａ・Ｂ号住居跡の東側にも円形の張出しがあり、さらに別の住居が重複する可能性もあるが詳細は不明である。

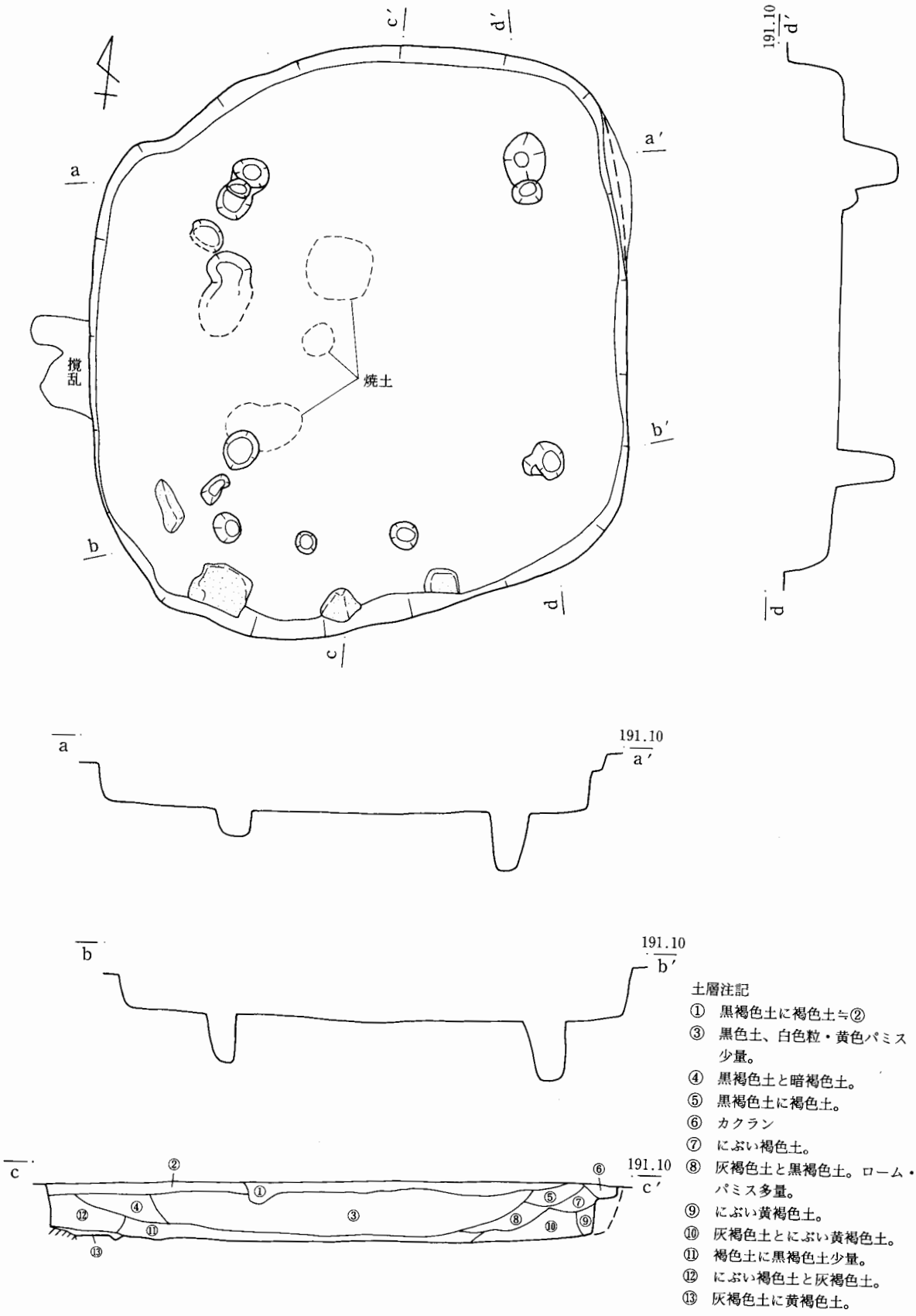
Ａ号は９－６グリッドを中心に位置する。西側に６号住居跡が重複する。直径約3.4mで円形を呈する。深さは70cm前後を測る。床面はよく踏み固められている。北部壁際に浅い周溝状の掘り込みが断続的に認められる。炉・柱穴等の施設は検出されていない。遺物は少量出土しただけである。

Ｂ号住居跡は９－５グリッドを中心に位置する。規模は径4.2m前後で、円形に近い隅丸方形状を呈する。深さは60cm前後を測る。覆土中にはロームブロックが多量に含まれ、人為的に埋められた可能性もある。床面はあまり踏み固められておらず、中央部に地山の礫が露出する。主柱穴は４ケ所に検出されている。柱穴の径は20cm前後であるが、不整形の掘り方が掘削されている。炉は検出されていない。

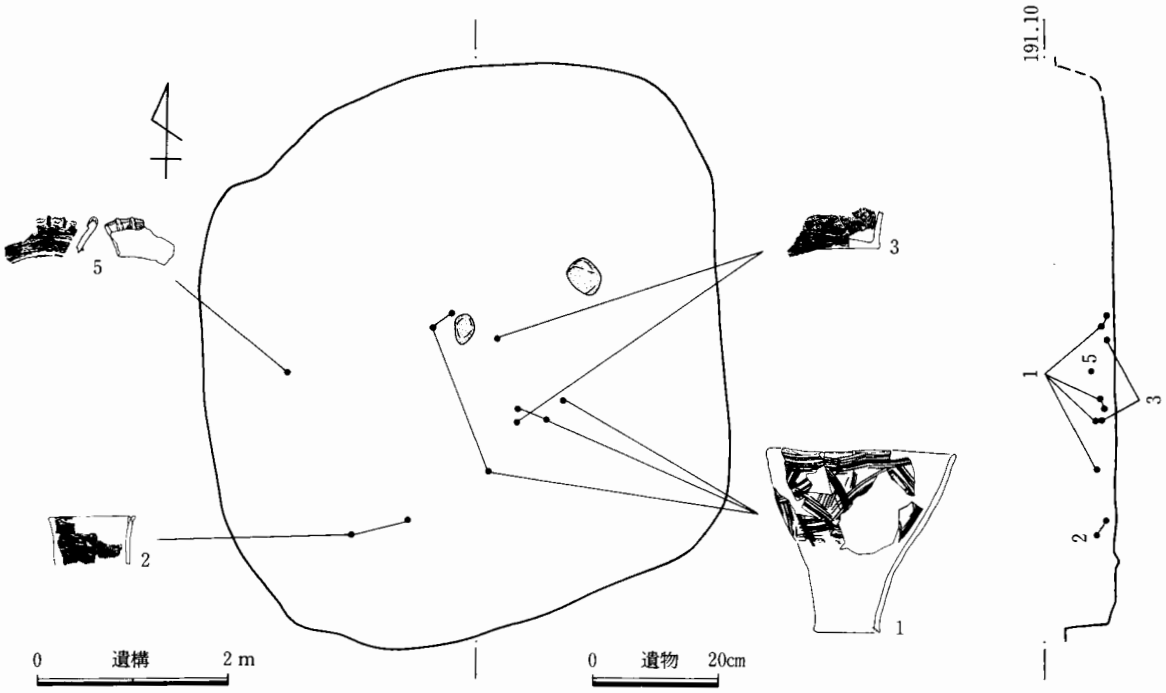
遺物はＢ号住居跡の覆土上層に長さ50cmほどの礫が出土し、その周辺から土器、磨石・凹石、剝片がそれ



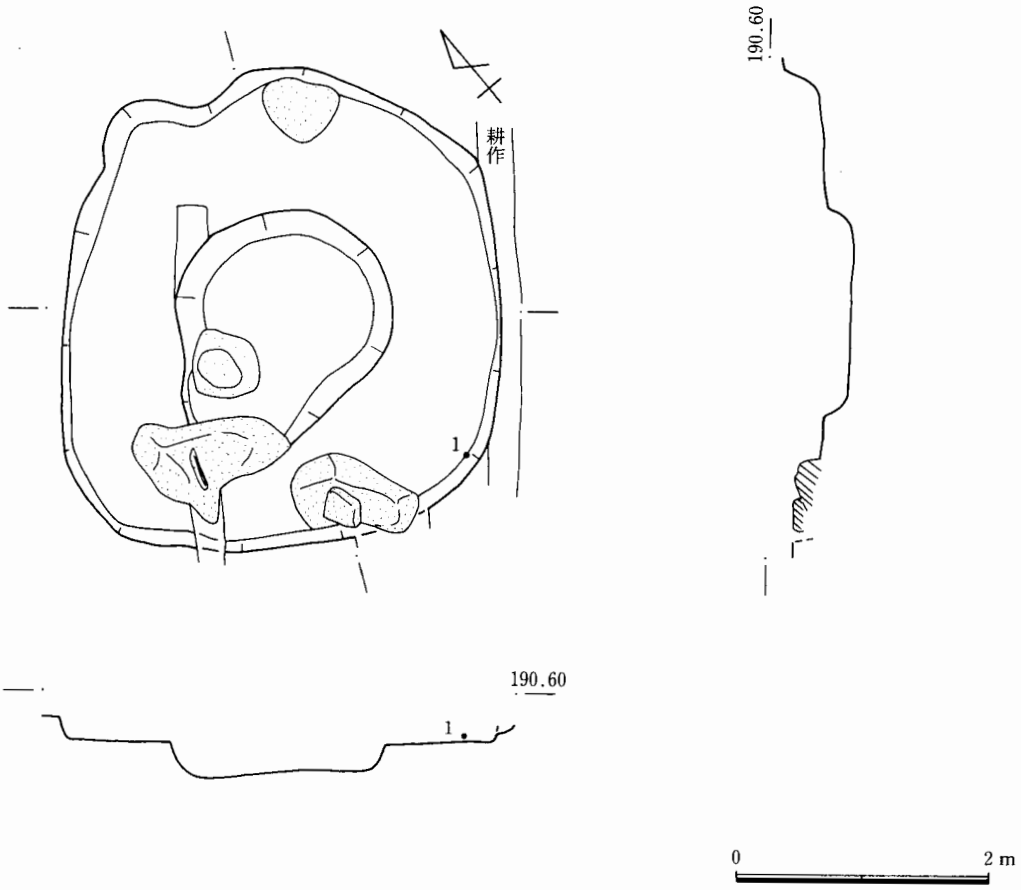
第8図　J 3号住居跡及び炉跡


a
a′
b
b′
c
c′
d
d′
撹乱
焼土
191.10
土層注記
① 黒褐色土に褐色土≒②
③ 黒色土、白色粒・黄色パミス少量。
④ 黒褐色土と暗褐色土。
⑤ 黒褐色土に褐色土。
⑥ カクラン
⑦ にぶい褐色土。
⑧ 灰褐色土と黒褐色土。ローム・パミス多量。
⑨ にぶい黄褐色土。
⑩ 灰褐色土とにぶい黄褐色土。
⑪ 褐色土に黒褐色土少量。
⑫ にぶい褐色土と灰褐色土。
⑬ 灰褐色土に黄褐色土。
0
2 m

第9図　J 4号住居跡

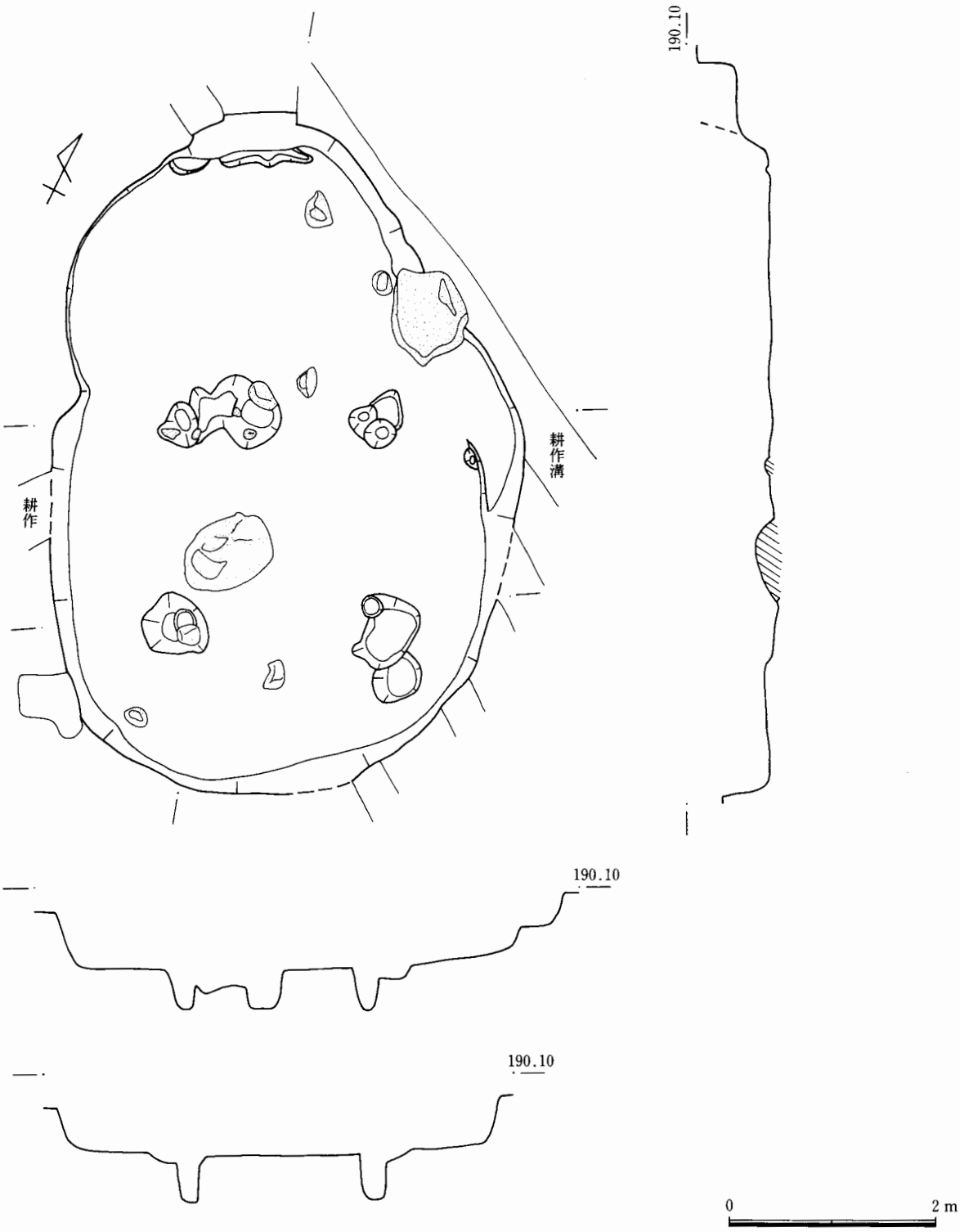


第10図　Ｊ４号住居跡出土土器位置図

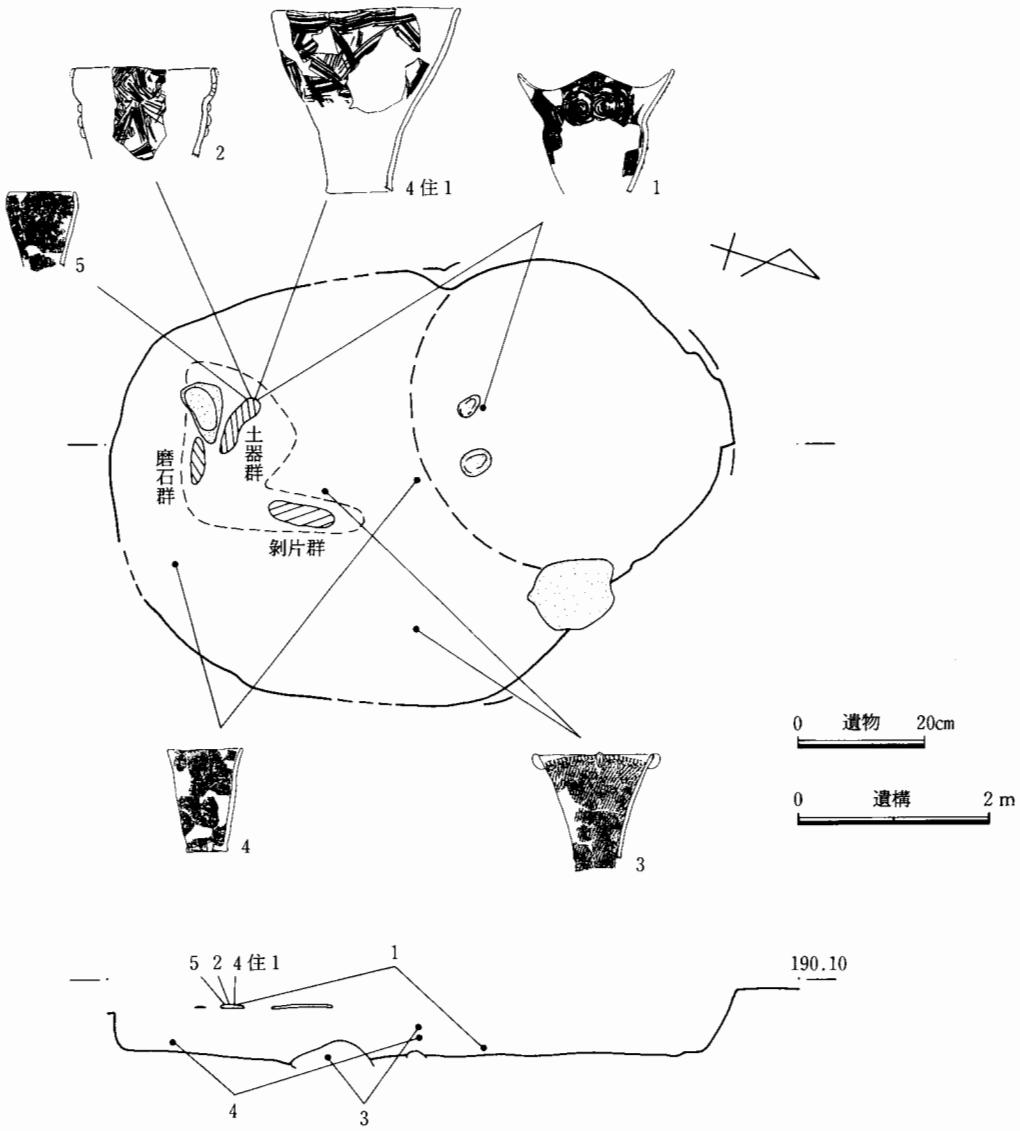


第11図　Ｊ５号住居跡

ぞれまとまって出土している。この土器群とA号住居跡出土土器に接合関係が認められるため、A号住居跡に係わる何らかの施設が存在した可能性が考えられるものの、詳細は不明である。また、ここから出土した土器破片は4号住居跡出土土器とも接合関係にある。覆土中～下層の土器は2点が器形復元できただけで、破片の量も少ない。石器は打製石斧・スクレイパー・磨石・凹石・台石が出土している。



第12図　J 6 A・B号住居跡



第13図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器位置図

(3)　土　　坑（遺構第14図、遺物第26・27図）

Ｊ１号土坑

13―７グリッドに位置する。Ｊ４号住居跡の南約３ｍに近接し、Ｊ２・３号土坑とも近接する。

径1.6～1.5m、深さ70cmを測り、ほぼ円形を呈する。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。南側に礫が露出する。遺物は覆土内より少量の土器片が出土した。

Ｊ２号土坑

13―８グリッドに位置する。Ｊ１・３号土坑が西方に近接する。北東部に２基のピットが重複する。

径1.1m、深さ40cmを測り、円形を呈する。底面は平坦で、壁は直立気味に立ち上がる。

遺物は出土していない。

Ｊ３号土坑

13－７グリッドに位置する。Ｊ１号土坑が北約40cmに近接する。カマボリが重複する。

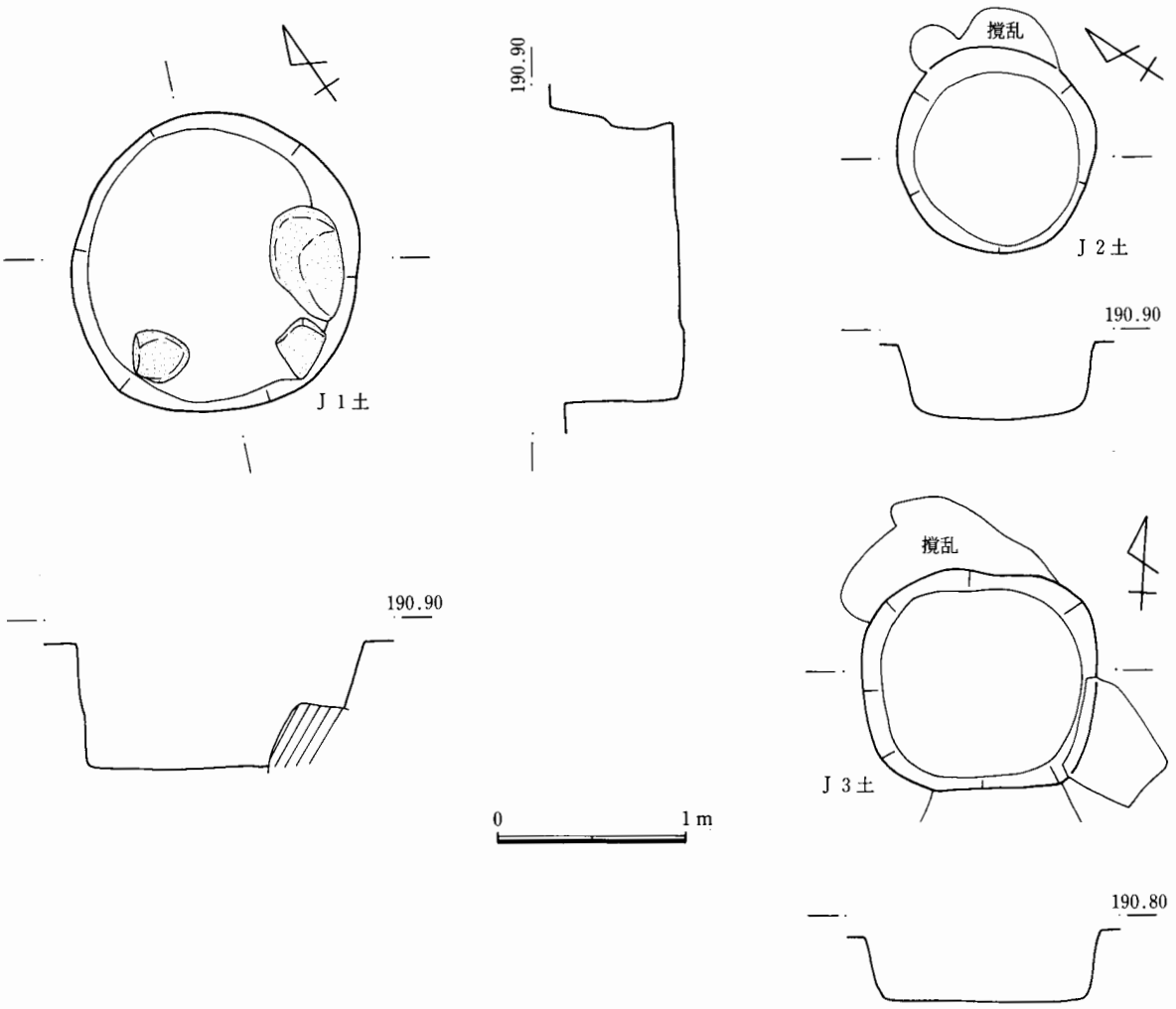
長辺1.2m、短辺1.1m、深さ40cmを測り、隅丸方形状を呈する。底面は平坦で、壁は直に立ち上がる。遺物は覆土上～中層から少量の土器片が出土した。

(4) 遺物包含層

①Ｊ１号住居跡と10号住居跡の間からその北側にかけた部分、Ｘ＝22～25ライン、Ｙ＝12～15ラインに位置する。遺物包含層の厚さは10cm前後であまり厚くない。この範囲内の数カ所に染み状の部分があり、土坑を想定して半截してみたが、良好な掘り方を持つものがなく、土坑と認定していない。

出土遺物は早期～前期の土器破片が比較的まとまった数量出土している。遺構外とした遺物の大半は本包含層から出土した。Ｊ１号住居跡から出土した草創期・早期遺物は本包含層からの流れ込みと思われる。

②調査区の南東端、道路予定地部分に位置する。地形的には南に向かう緩傾斜面であり、東方に向かっても緩傾斜している。５号溝よりも東側が全体的に包含層になっている。包含層の厚さは20cm前後であるが、遺物の密度はごく薄い。遺構外とした前期後半の浮線文土器や中期の遺物が本包含層から出土している。



第14図　縄文土坑

(5)　縄文時代の出土土器

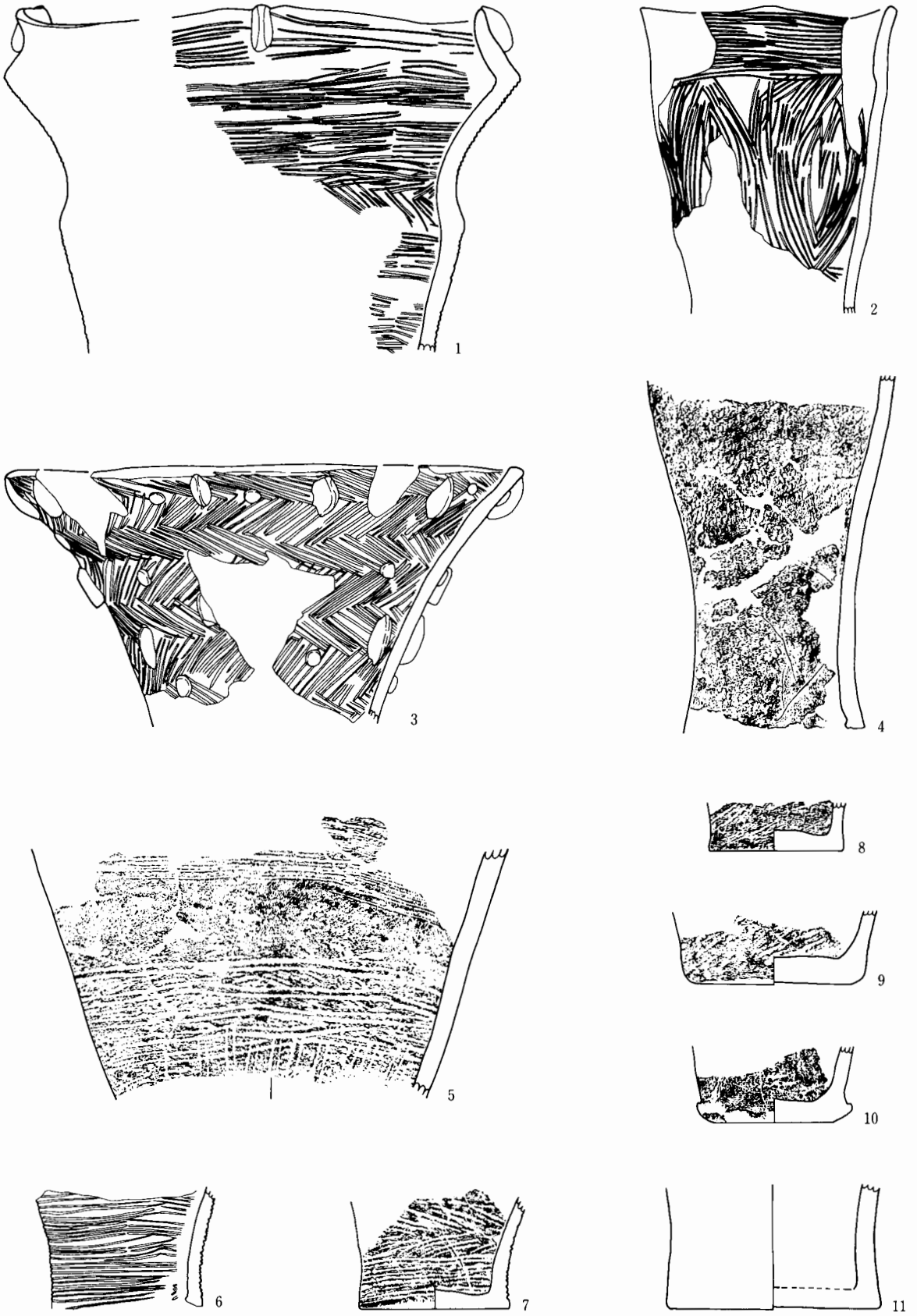
Ｊ１号住居跡出土土器（第15～18図、観察表第１表、ＰＬ18）

１は底部から徐々に開く胴部が、中（上）位で一旦内折れし、口縁部に向かって大きく外反する。さらにそこから口縁部が内傾する。口縁部は波頂部がさらに内折し、棒状の貼付文が付く。文様は平行沈線が連続して横位に施文されるが、胴部上半の屈曲部分には矢羽根状に施文する。現状で口径約24cm、高さ17cmを計る。２は胴部が徐々に開きながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反するコップのような器形である。ごく弱い４単位の波状口縁を呈すると思われる。口縁部には横位に平行沈線を連続施文し、胴部には縦位にレンズ状文を連続する。下端にも横位に施文されると思われる。３は胴部から口縁部が大きく外反する平口縁の深鉢である。現状で全面に横位の矢羽根状文を連続し、楕円状とボタン状の貼付文を交互に付す。口径26cm、高さは13cmが残存する。４は胴部下半で、底部を接合部から欠く。粗い無節Ｌを上端に施文し、下位は無文である。５はウメガメで、平行沈線を疎らに横位に施文し、下半部にはやはり疎らに縦位施文する。６～11は底部で、６は胴部下端まで平行沈線を横位に連続的に施文する。７は横帯文の上に矢羽根状文、８は絡状体、９はＬＲで、10・11は無文である。12は浅鉢で口縁部と底部を欠失する。13は大波状の口縁部で端部は肥厚する。器形変化・文様構成からすれば波頂部は２～３山と推測される。波頂（山）下に棒状の貼付文を付すが剝落している。この貼付文の下には縦長の切り欠きを配置する。裾部に２個一対のボタン状貼付文を付す。文様は集合沈線で横帯状、孤状に付す。胴部は縦位に区画する。口縁端部には凹凸文を連続施文する。14は口縁端部が外方に突出する。口縁部に横帯文、胴部は縦区画施文である。15は横帯文間に矢羽根状文帯を挟み、胴部は縦区画施文である。16は口縁端部を内側に折り返し４単位の輪花状に整形し、半截竹管で連続刺突する貼付文を付す。この貼付文の周囲には内面だけに小ボタン状貼付文を付す。口縁端には凹凸文を連続する。施文は集合・連続沈線により口縁部内面は基本的に矢羽根状文、口縁部外面は横帯文、胴部は単斜施文帯を挟む懸垂帯で区画し、レンズ状文を施文する。

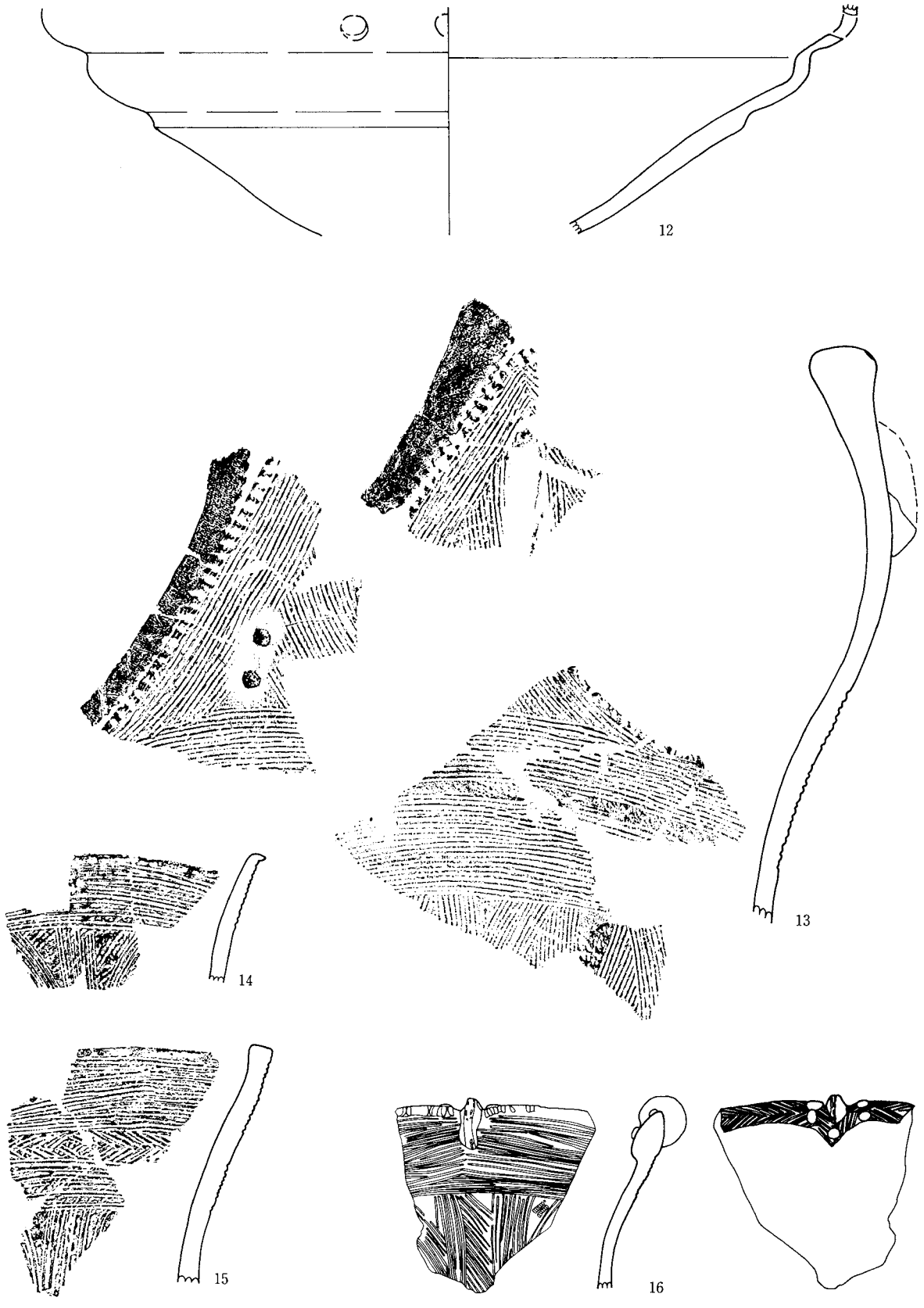
17～30は平行沈線文土器の口縁部である。23・24は内折波状口縁である。28は平行沈線施文前に貼付文を付す。29は波頂部が靴先状を呈する波状口縁の波頂部で先端を欠失する。30は波頂部にキザミを付す。31～53は平行沈線文土器の胴部破片である。32～34は横方向の連続刺突文を付す。32・33は結節沈線状、34は凹凸文状である。35・36は同一個体である。37は小型土器である。40と50、47と48もそれぞれ同一個体である。37～46・50・51・53の文様は縦構成である。54～62も平行沈線文土器である。57～61は施文具が太いのが特徴である。62は底部。63～69は口縁部である。63は爪形文、64は小ボタン（粒状）貼付文を密に２段付す。65・66は縄文施文土器に貼付文を付す。67～69は無文土器の口縁部。70～77・79は縄文施文土器の胴部、78は条痕文土器である。80～83は無文土器の胴部・底部である。84・85は貝殻文土器である。

Ｊ２号住居跡出土土器（第19図、観察表第２表、ＰＬ18）

１は小型の平行沈線文土器である。口縁部は直角に近く内折れし波状を呈する。２は浅鉢である。３～９は口縁部で、４は単沈線で細区画し内部に爪形文を施文する。５は櫛歯状工具により渦巻文？等を施文する。胎土は細かく異質な感じがする。６はごく粗い平行沈線である。９は縄文施文土器である。10～22は胴部で、10は靴先状を呈する波状口縁土器の口辺部である。12・14は同一個体で幅広の横帯文区画内を縦位に区画し、区画内に円文（若しくは渦巻文？）を施文する。22は浮線文である。23は横方向に粗いナデを施す無文土器の口縁部である。24は貝殻文である。25は無文の胴部、26～28は縄文施文土器の底部である。

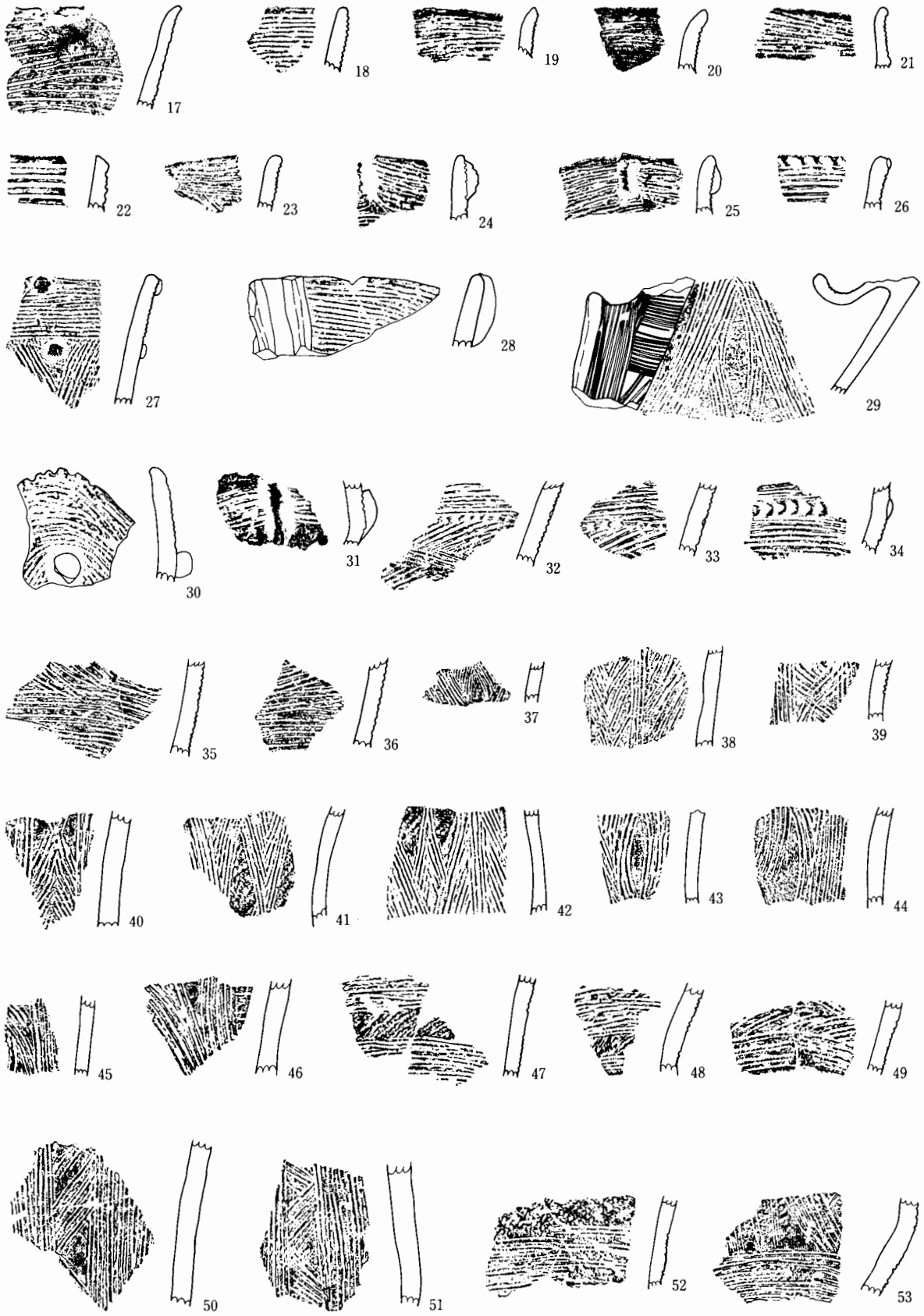


第15図　Ｊ１号住居跡出土土器(1)



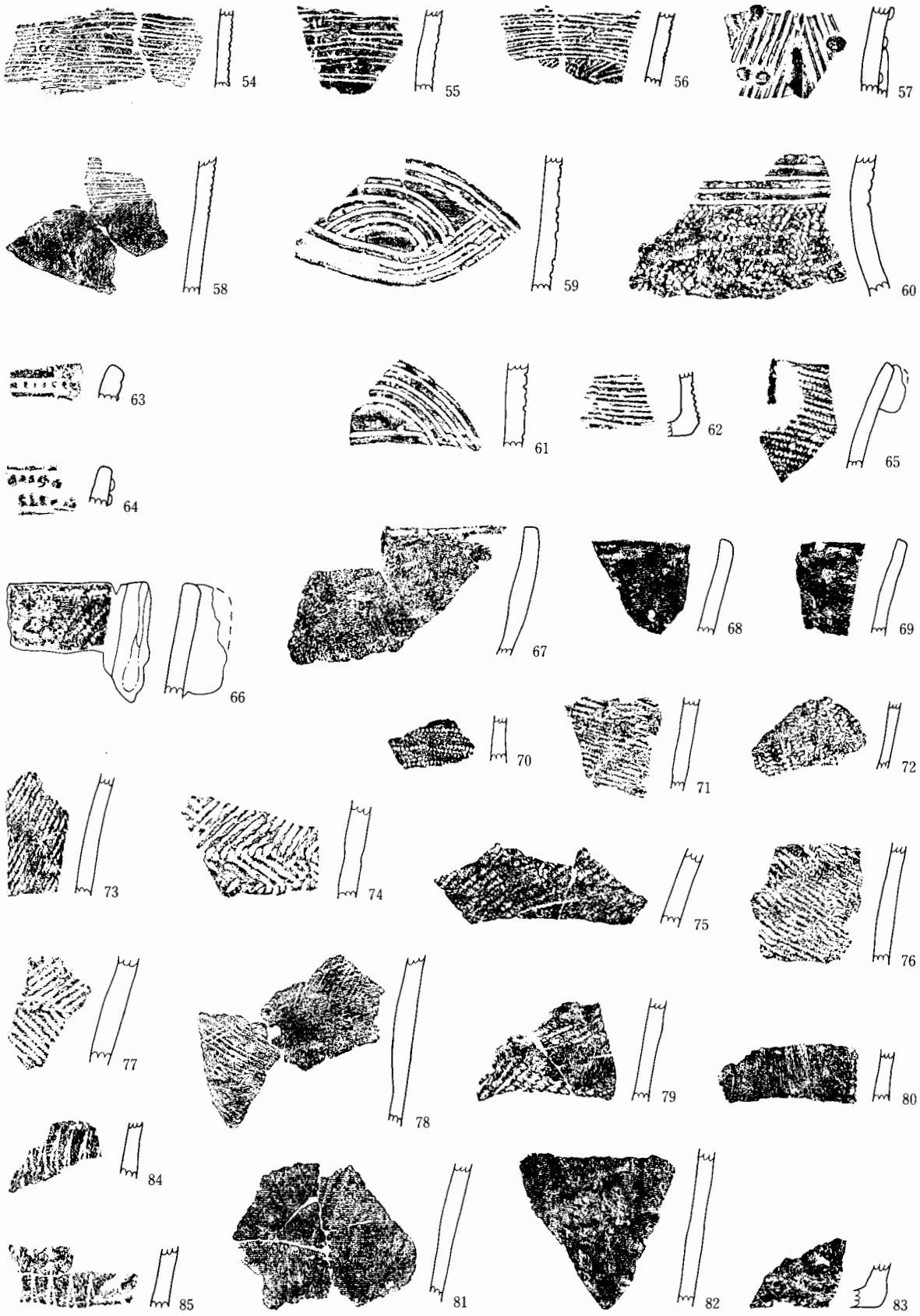
第16図　Ｊ１号住居跡出土土器(2)

0　10cm



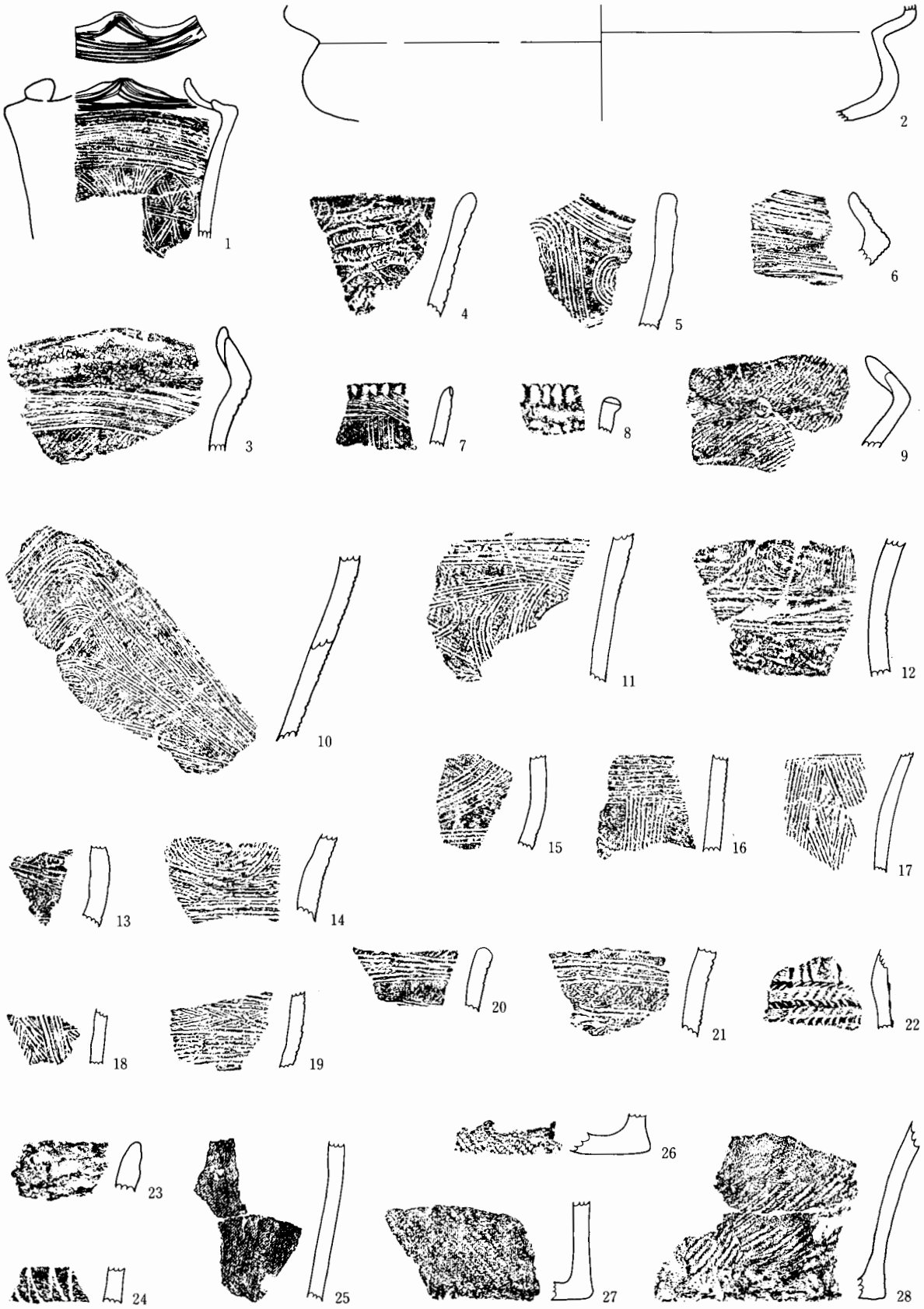
第17図　Ｊ１号住居跡出土土器(3)

0　10cm



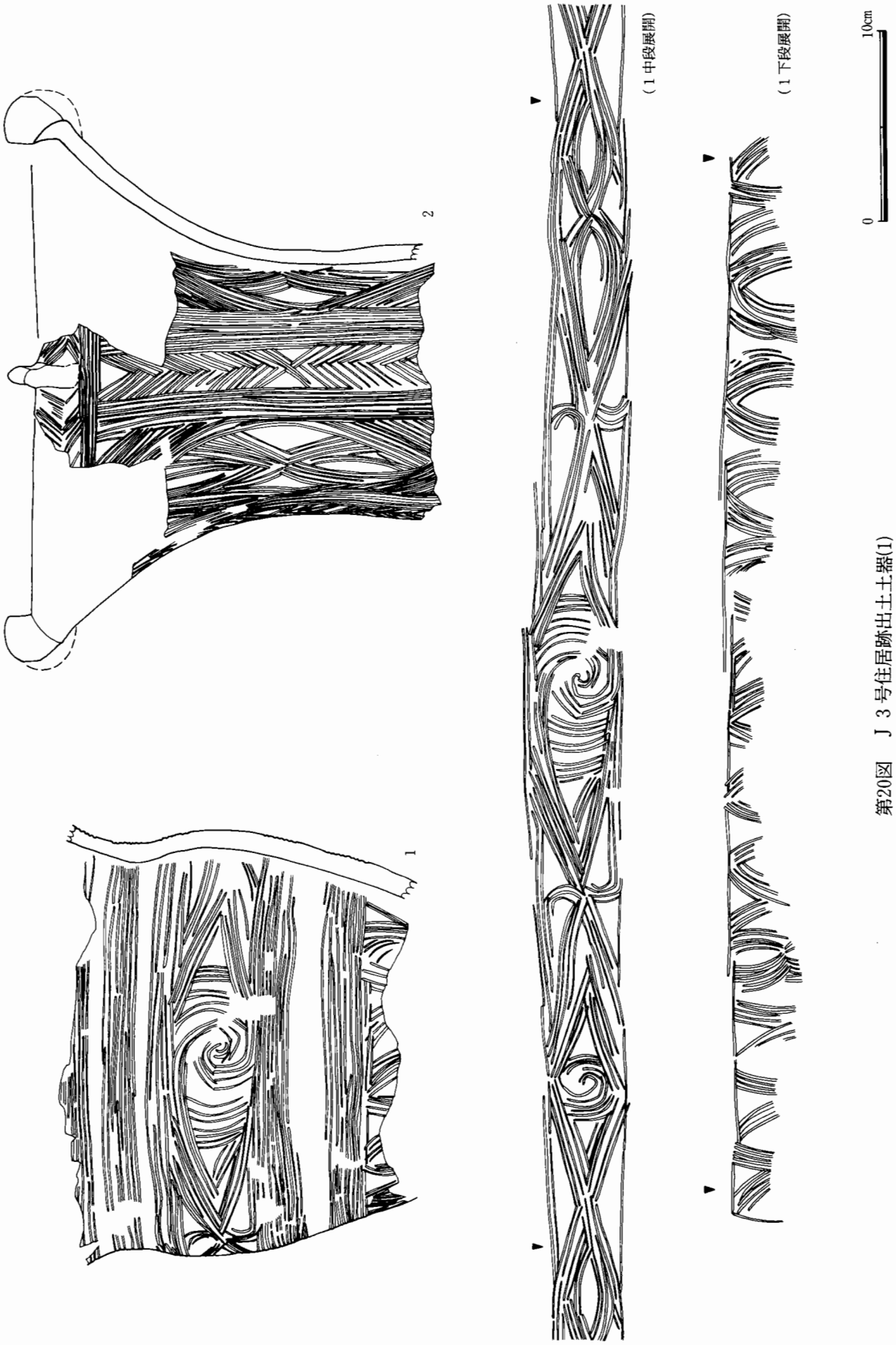
第18図　Ｊ１号住居跡出土土器(4)

0　10cm



第19図　Ｊ２号住居跡出土土器

0　10cm



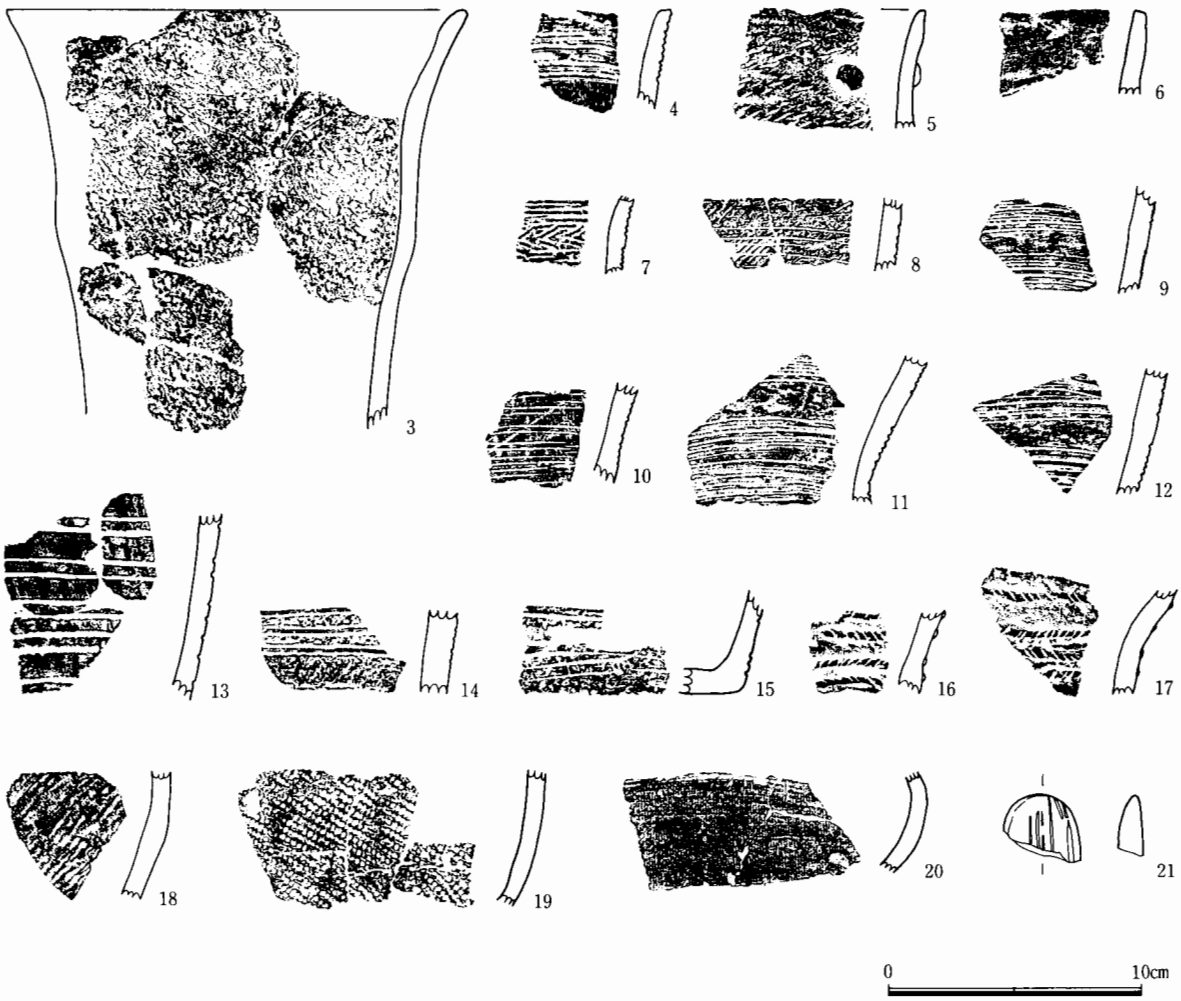
第20図　J 3 号住居跡出土土器(1)

Ｊ３号住居跡出土土器（第20・21図、観察表第３表、ＰＬ19）

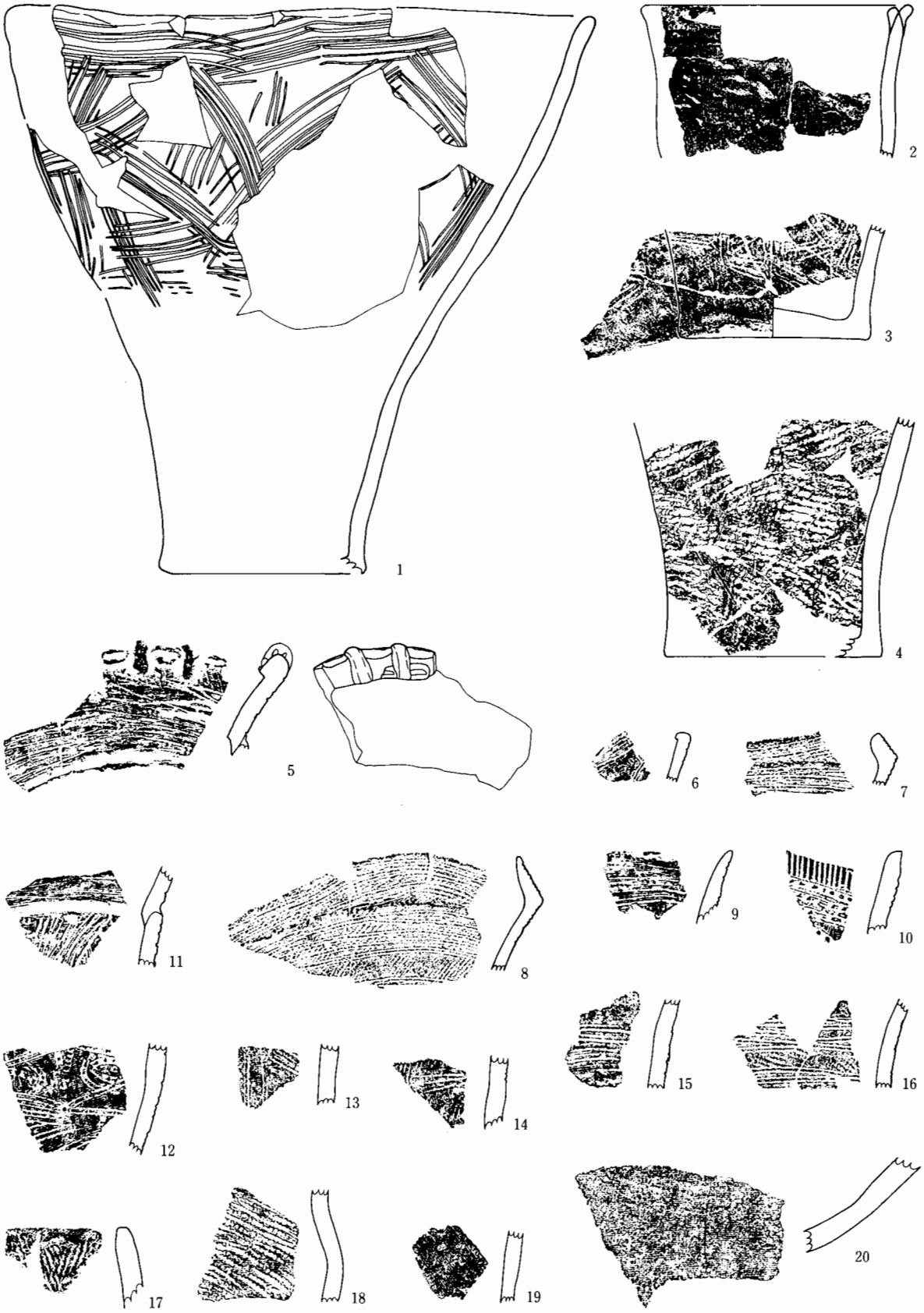
１・２はウメガメである。１は口縁部・底部を欠失する。文様は横帯区画文で幅広の区画内に渦巻文やレンズ状文を連続する。胴部径22.6cmを計る。２は底部を欠失し、口縁部の大半も打ち欠かれているが、一部分が残存する。口縁部の文様は矢羽根状文を巡らせ、４単位の貼付文を付す。胴部は矢羽根状文を挟む懸垂帯で区画し、区画内にレンズ状文を施文する。口径（貼付文を除く）27.6cm、残存高（貼付文含む）23.0cmを計る。３は縄文施文土器で口径18.3cmを計る。４～６は口縁部で４は平行沈線文、５は縄文施文土器でボタン状貼付文を付す。６は無文土器である。７～14は平行沈線文の胴部破片である。15は平行沈線文の底部である。16・17は浮線文土器の胴部破片である。18・19は縄文施文の胴部破片、20は浅鉢である。21は土製品で土偶の一部分の可能性もある。

Ｊ４号住居跡出土土器（第22図、観察表第４表、ＰＬ19～20）

１は平行沈線文土器で複数の半截竹管を組み合わせて施文する。器面全体に丁寧にミガキを施し、上半部だけに沈線で菱形文などを施文する。器面調整や器形的には諸磯式というよりも浮島・興津式に近い。口径30cm強、高さ29cmを計る。２は小型の内折波状口縁の無文土器で口径13.8cmを計る。３・４は底部で、３は平行沈線で菱形文？を施文する。底径は9.8cmである。４は縄文施文土器である。５～９は平行沈線文土器の



第21図　Ｊ３号住居跡出土土器(2)



第22図　Ｊ４号住居跡出土土器

0　10cm

口縁部破片で、5は口縁端を内側に折り返し、棒状・コーヒー豆状の貼付文を密に付す。施文は雑な平行沈線文である。10は興津式土器で口縁端に縦のキザミを連続し、以下に爪形文を施文する。11・13～16は平行沈線文土器の胴部破片で、11は5と同一個体、13・14は3と同一個体である。12は平行沈線で区画文等を施文し、部分的に沈線の内外に爪形文状に刺突を連続する。17は縄文施文土器の口縁部、18は胴部である。19は深鉢の胴部破片、20は浅鉢である。

Ｊ５号住居跡出土土器（第23図、観察表第５表、ＰＬ20）

1は平行沈線文土器の胴下半部である。矢羽根状文を挟む懸垂帯で区画し、区画内にはレンズ状文等を施文する。2～4は平行沈線文土器の口縁部で、4は波頂部が内折れし、貼付文状に内側に肥厚する。5も平行沈線文土器の胴部破片である。

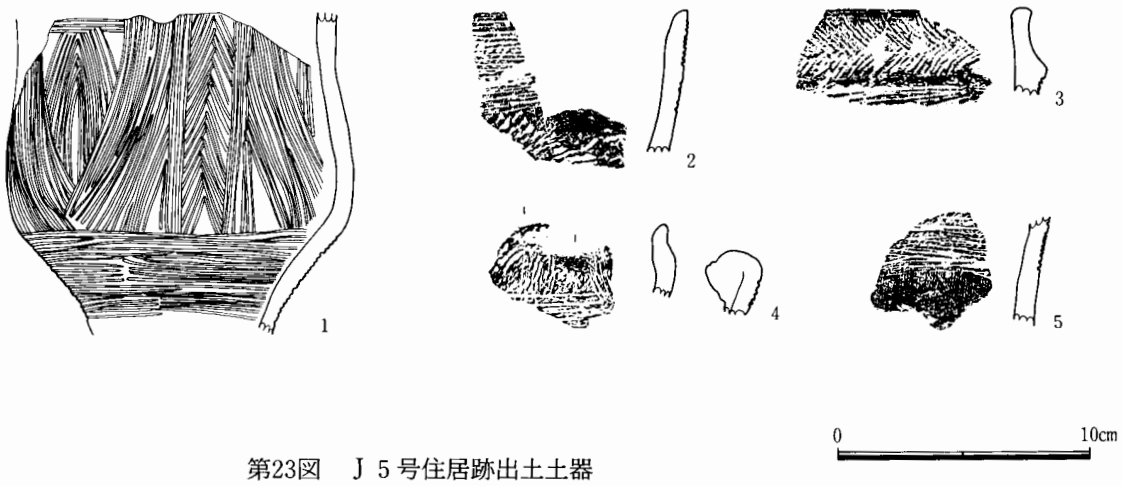
Ｊ６号住居跡出土土器（第24・25図、観察表第６表、ＰＬ20）

1は結節浮線文土器である。器形は卵型の胴部から頸部で括れ、口縁部が内湾気味に開く4単位の波状口縁土器である。文様は口縁端部に刺突文を連続し、口縁部には結節浮線文で双円（渦巻）文、胴部には菱形文等を施文し、小ボタン状貼付文を付す。地文は横方向の連続沈線である。口縁部最大径約25cmを計る。2は平行沈線で乱雑に菱形文？等を施文し、貼付文を付す。口縁部に焼成後の穿孔が2個ある。口径約22cmである。3は底部を欠失する縄文施文土器で、口縁端部に凹凸文を連続し、4単位に貼付文を付す。口径18.4cmを計る。4も縄文施文土器であるが、ごく浅い平行沈線で縦のレンズ状文を疎らに施文する。口径12cm、高さ18cmを計る。5は無文土器で最大径11.5cmを計る。

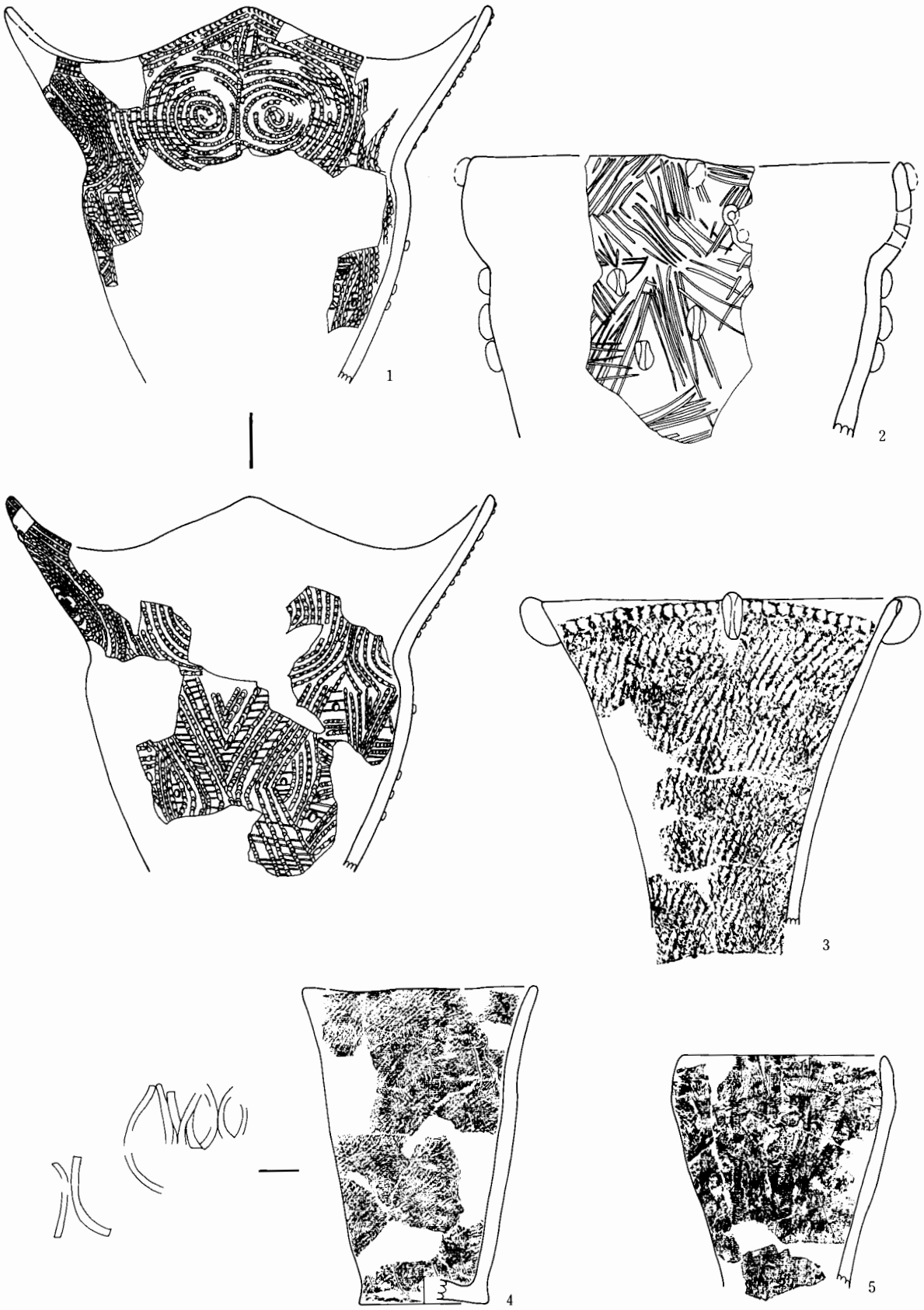
6～12は口縁部である。6は4号住居跡1と同一個体である。7は口縁端に押圧文を連続する。10は小突起が付されるが、2個一組の可能性がある。11は小さな貼付文を付す。13～31は平行沈線文土器の胴部破片である。26・27・29～31は2と同一個体である。32は波状口縁を呈する縄文施文土器の口縁部である。33も縄文施文土器の口縁部、34は胴部である。35は平行沈線文土器の底部である。

Ｊ１号土坑出土土器（第26図、観察表第７表）

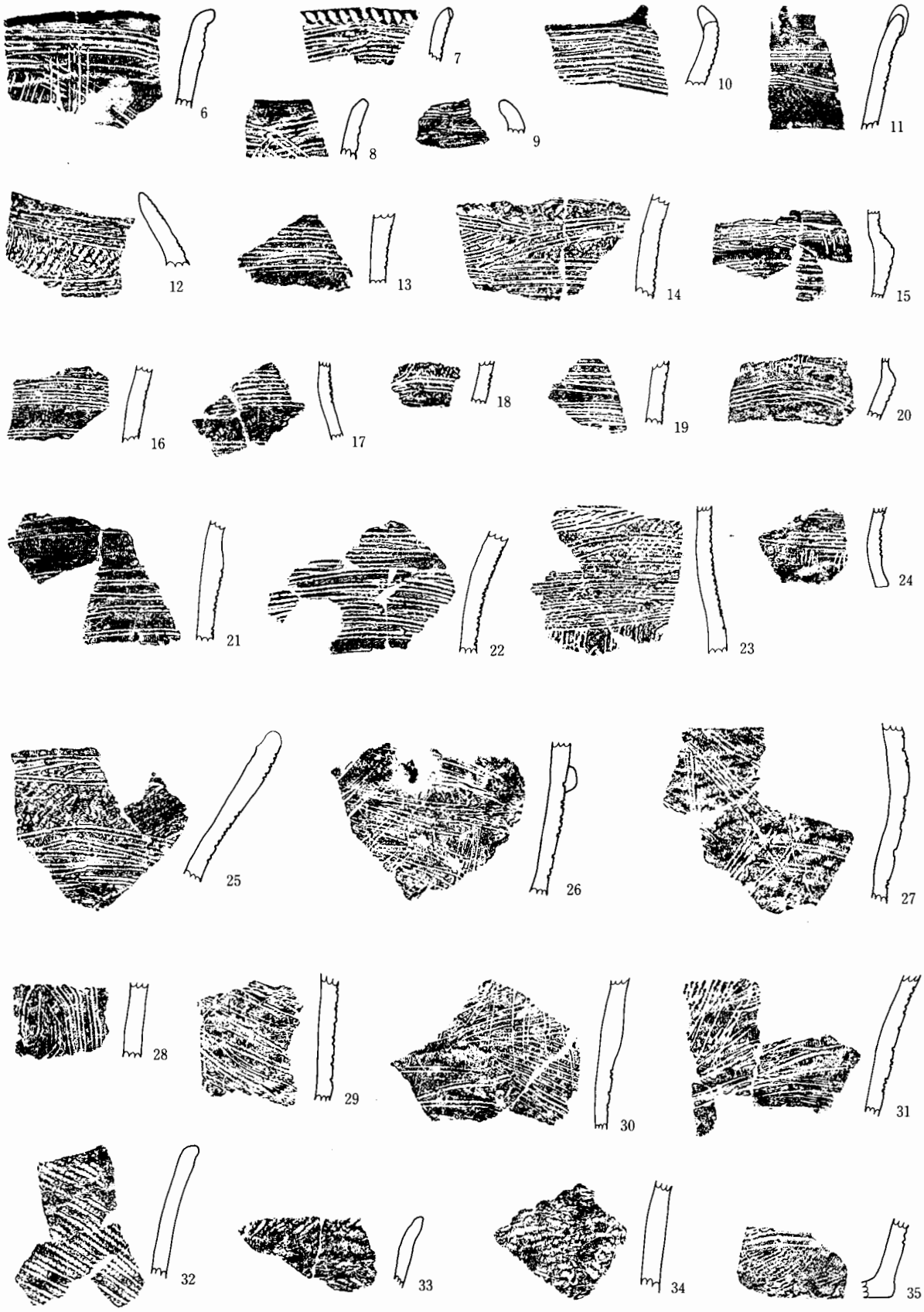
1は粗い平行沈線を付す口縁部破片である。口縁部は尖る。2～4は平行沈線文土器の胴部、5は底部である。底径11.2cmを計る。



第23図　Ｊ５号住居跡出土土器



第24図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器(1)



第25図　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器(2)

0　10cm

Ｊ３号土坑出土土器（第27図、観察表第８表）

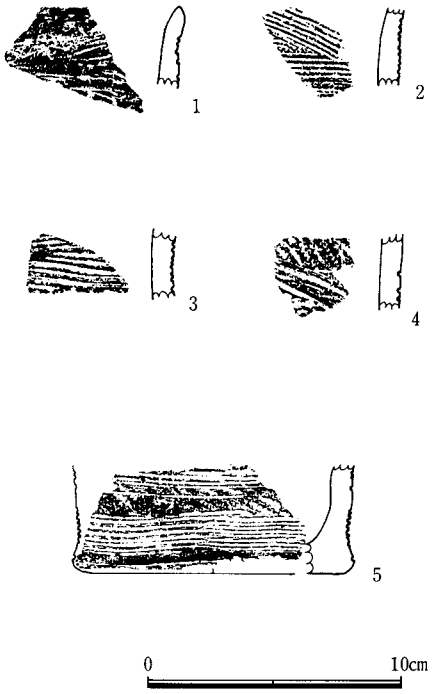
１～３は口縁部で、１は口縁端部に縦のキザミを連続し、平行沈線と爪形文で施文する。興津式である。３はごく浅い平行沈線を施文する。４・５は平行沈線文土器の胴部破片、６は無文の浅鉢である。

遺構外出土土器（第28～30図、観察表第９表、ＰＬ21・22）

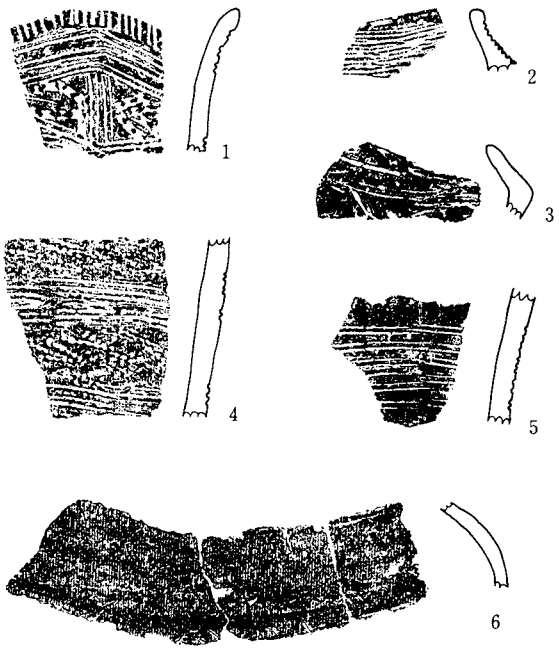
１は微隆起線文土器の口縁部である。２は不明瞭であるが爪型文土器の可能性がある。３～10は条痕文土器で３～７は表裏に、８～10は表にだけ条痕文が施される。以上は草創期～早期である。11はコンパス文を付す。12～14は縄文施文土器である。以上は前期初頭～中葉である。15～19は爪形文土器である。20・21は浮線文土器で、20には突起が付され、20は小波状を呈する。

22～33は平行沈線文土器の口縁部破片である。22は口唇部に押圧文を連続し、口縁部には斜格子文を施文する。24は波頂部が２山状を呈すると思われる。28は靴先状口縁の先端がかなり突出すると思われる。33は口縁端部に凹凸文を連続する。34～53は平行沈線文土器で基本的に横方向の文様構成のものである。37・38は横帯区画内に渦巻文、43はＸ字状に施文する。48は口縁部がくの字状に立ち上がり、稜部に凹凸文を付す。49も拓本上は類似するが、刺突或いはキザミ的である。54は平行沈線文の底部である。

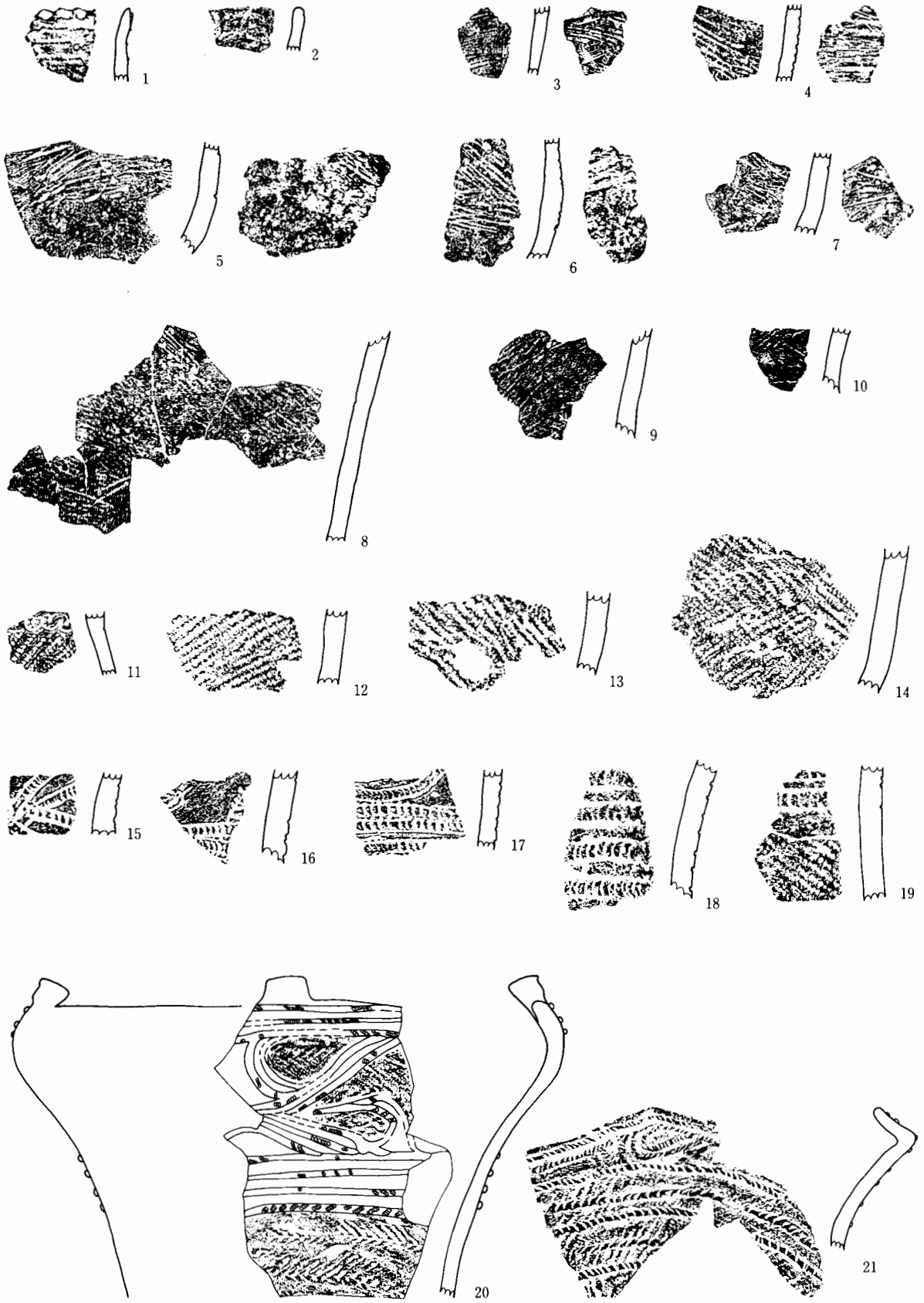
55～59は縦構成の平行沈線文土器である。55は口唇端部に凹凸文を付し、レンズ状文を施文するが縦位の区画帯は無い。口径約19cm、残存高約20cmを計る。60～63は縄文施文土器である。60の地文は疎らで、棒状貼付文を付す。61は波頂部で、波頂部周辺の口縁端だけ外方に突出する。地文も疎らである。64・65は縄文地文の胴部破片で、65には焼成後に穿孔する。66～71は無文の口縁部、72・73は胴部、74は底部である。75は胴部破片であるが、上下２段を１単位として押し引く。以上の大半は前期後半であるが縄文施文土器と無文土器には早期・中期が少量混じる。76・77は太沈線で区画し、疎らに縄文地文を付す。後期前半頃か？。78は粘土接合痕を残す。79は押圧隆帯が垂下する。阿玉台式と思われる。80は微隆帯で口縁部無文帯を区画



第26図　Ｊ１号土坑出土土器

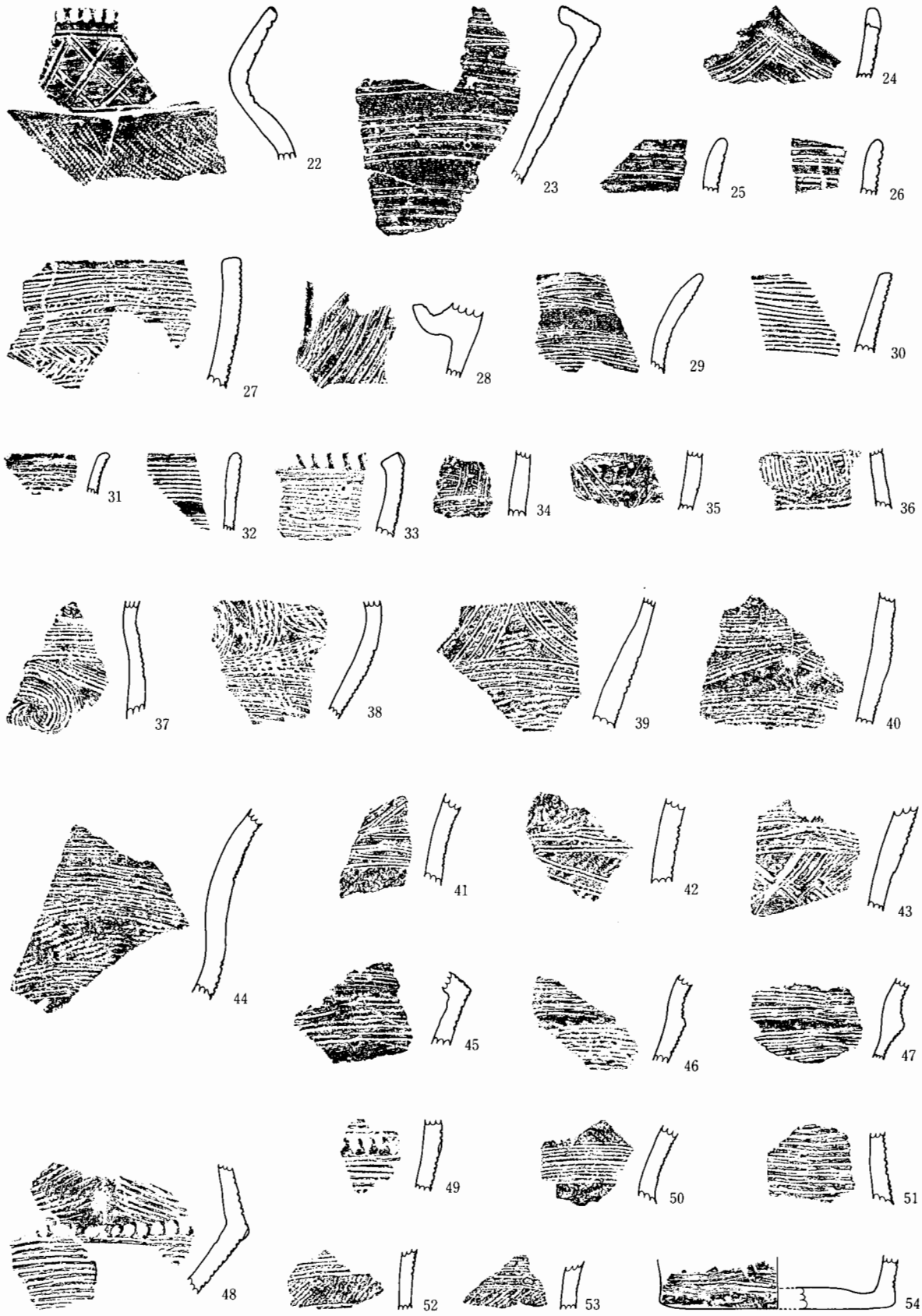


第27図　Ｊ３号土坑出土土器



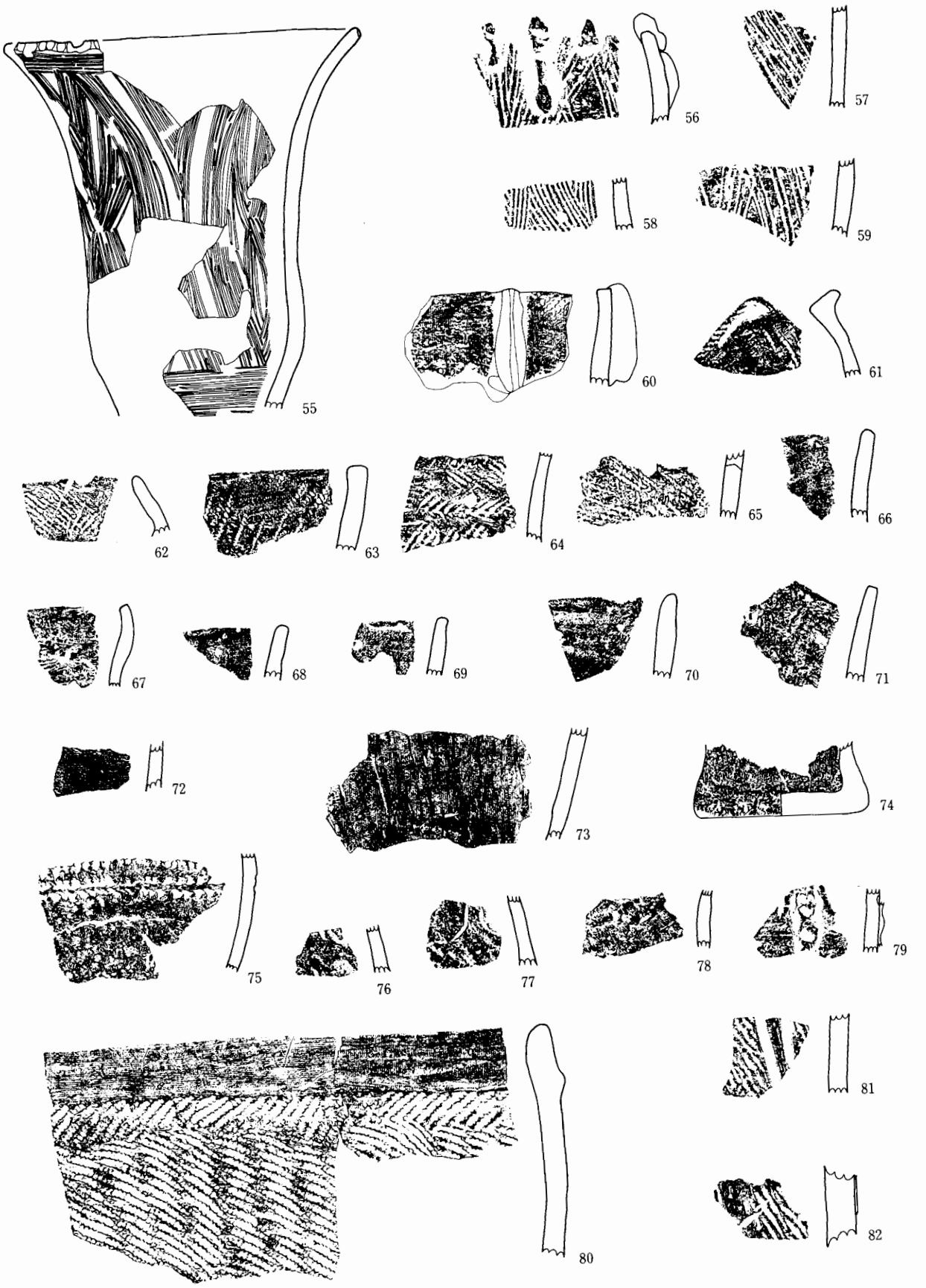
第28図　遺構外出土土器(1)

0　10cm



第29図　遺構外出土土器(2)

0　10cm



第30図　遺構外出土土器(3)

し、胴部には縄文を施文する。81は縦位の隆帯に沈線が沿う。82は低い隆帯が垂下する。以上は加曽利E式土器である。

〈観察表の説明〉

出土土器の概要についてはすでに簡単に説明してきたが、ここでは上百駄山遺跡から主体的に出土した諸磯b～c式土器の諸属性について、観察表中での用語・表記法を中心に説明したい。

器種：大半は深鉢であるため、深鉢以外の器種だけ表示した。浅鉢、土製品（土偶？）である。

器形：深鉢は口縁部の形状として平口縁と波状口縁がある。これらの内、基本的に外反りする平口縁の口縁部で、波頂部だけを内側に折り曲げ、側面観が平縁で上面観が花弁状を呈する口縁部を内折波状口縁と仮称している。また、口縁部が内折れし、波頂部下が袋状に突出する波状口縁には靴先状と追記した。

文様：本文中で多少の説明を行ったが、観察表中では基本的に文様説明を行っていない。

文様要素：

貼付文―基本的に貼付文とだけ記載する。尚、第V章では特に小ボタン状貼付文については別記している。

凹凸文―施文部位、段数の説明は行わず、凹凸文とだけ表記した。原体の種別や大小、凹みやメクレの程度による区分も可能と思うが行っていない。単純な刺突文やキザミとの判別は行っているが、必ずしも厳密に区別しているわけではない。

平行沈線―平行沈線の多くは半截竹管によって施されたものと思うが、沈線が深くても半截竹管内側の形状が認められないものも多く、厳密に原体の判別をすることは困難である。今回の観察では特に本期に特徴的な平行沈線の施文方法に観察の主眼を置いた。集合沈線と連続沈線は共に複数の平行沈線を密に施文する技法であるが、集合沈線は先の平行沈線の片側に次の平行沈線の片側を重ね合わせて施文していく技法であり、連続沈線は先の平行沈線とほぼ沈線間の幅に等しい間隔を開けて次の平行沈線を施文する技法である。最小単位は集合沈線が3本、連続沈線が4本である。実際の施文では必ずしも一貫した技法が用いられるわけではなく、また、施文部位や施文の段階によって使い分ける事例もある。具体的な一例として横帯文は連続沈線、縦区画施文部は集合沈線と使い分けているものが多く認められる。あるいは、基本的な施文は集合沈線で行い、付け足しの施文は連続沈線で行うような場合もある。但し、部位や施文段階での技法の違いを全て表記している訳ではない。観察表の集合・連続沈線という表記は基本的に残存部位において、前者が主体的に施文されていることを表す。但し、平行沈線との混用の場合には前後関係が使用頻度を表すわけではない。さらに、3者がある場合には平行沈線を略している。尚、平行沈線間の距離がある程度開いたものを平行沈線としたが、厳密に連続沈線と区別しているわけではなく、多分に感覚的な部分もある。平行沈線の沈線間の幅は基本的に沈線の中心部間の距離で計測している。平行沈線の深さは様々であるものの、大半は2本とも同じ深さで施文されている。しかし、少数ではあるが片側が深く、片側が浅く施文されたものが存在する。この場合には「深浅」と付記する。極端な場合は片側の痕跡がほとんど認められないものもあり、この場合拓本上では巾の広い平行沈線か単沈線のように見える。原体の大半は全体を同一の原体を用いて施文するが、施文種別と同様に横帯文と縦区画部の施文で原体（幅）を変えているものがある。平行沈線には3本以上が同時に施文されたと思われるものがある。この中には半截竹管状工具を2本まとめて施文したと思われるものもあるが、多くは原体復元が困難である（いわゆる櫛歯状工具）。半截竹管状工具を用いたものは「半截竹管2本（沈

線４本)」、櫛歯状工具を用いたものは「沈線５本」のように本数で表記した。また、これらの中で沈線間の幅が等しくないものについては「広一狭一広」或いは数値を記した。さらに、沈線の深さが等しくないものについては「深一深一浅」のように付記した。

浮線一浮線の場合太さ（巾・厚さ）が大きな要素であるが、必ずしも一定して付されているとは限らないので、今回は計測していない。観察表では浮線上の施文（キザミ・刺突文・縄文施文）を主に記した。

胎土：基本的に胎土に含まれる挟雑物について目に付いた順に記したもので、含有率を厳密に表示したものではない。また記入していないことが含まれていないことを意味するわけでもない。白色粒は軽石質の火山噴出物と思われる。赤色粒は発色の度合いによって、実際には褐色～黒色を呈する。

色調：基本は外表面の色調である。色調の判別は標準土色帖（農林省農林水産技術会議事務局監修）によった。

第１表　Ｊ１号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	波状口縁、貼付文、連続・集合沈線２㎜		粗砂、白色多、赤色粒	橙色～にぶい赤褐色
2	波状口縁、２単位？、レンズ文５単位、連続・集合沈線３㎜		白色粗粒	赤褐色
3	平口縁、貼付文、連続・集合沈線３㎜		粗砂、白色粒、赤色粒	浅黄色～暗褐色
4	胴部～底部	L	白色粒、小礫、石英	にぶい赤褐色
5	胴部、上半部地文無文、下半部地文縄文、平行沈線４㎜	R	白色粒、粗砂	橙色
6	胴部下端、３本一組4.5㎜を連続施文		白色粒	橙色～にぶい橙色
7	底部、連続・集合沈線２㎜強		白色粒	橙色
8	底部	L	赤色粒、白色粒	赤褐色
9	底部	L	粗砂多量、長石、黒粒	にぶい橙色
10	底部	無文	白色粒、粗砂	にぶい橙色
11	底部、タテミガキ	無文	粗砂、赤色粒、白色粒	橙色
12	浅鉢、体部、円孔	無文	白色粒	暗赤褐色
13	波状口縁、凹凸文、貼付文、集合2.5㎜（横）・２㎜（縦）	R	白色粒、赤色粒、粗砂	にぶい褐色
14	平口縁、連続沈線2.5㎜（横帯文）・２㎜（縦）／貼付文剝落	L	白色粒、赤色粒	赤褐色～黒褐色
15	平口縁、連続沈線2.5㎜　／遺構外27と同一個体	L	（砂粒）	にぶい橙色～灰褐色
16	平口縁、凹凸文、貼付文、集合・連続沈線２㎜	多条ＬＲ	粗砂、片岩多量	にぶい橙色
17	平口縁、連続沈線３㎜		（砂粒）	にぶい橙色
18	平口縁、集合沈線２㎜		赤色粒	にぶい黄橙色
19	平口縁、連続沈線２㎜　／25と同一個体		赤色粒	暗赤褐色
20	平口縁、連続沈線３㎜		片岩	赤褐色
21	平口縁？、連続・集合沈線２㎜		（砂粒）	にぶい黄橙色
22	平口縁、連続沈線６㎜		（砂粒）	にぶい黄橙色
23	内折波状口縁、連続沈線３㎜		白色粒・赤色粒多量	にぶい赤褐色
24	内折波状口縁、貼付文、集合・連続沈線２㎜弱		白色粒、赤色粒	赤褐色
25	平口縁、貼付文、集合・連続沈線２㎜弱　／19と同一個体		白色粒、赤色粒	暗赤褐色
26	平口縁、凹凸文、集合沈線３㎜		白色粒、赤色粒	暗赤褐色
27	平口縁、貼付文、集合沈線２㎜	ＲＬ	白色粒、赤色粒	橙色～暗褐色
28	平口縁、貼付文、集合沈線2.5㎜		粗砂、赤色粒	浅黄橙色
29	波状口縁靴先状、集合沈線２㎜	ＲＬ	白・赤色粒・粗砂多量	赤褐色
30	波状口縁、貼付文、キザミ、連続沈線３㎜		白色粒	橙色
31	口辺部、貼付文、連続沈線2.5㎜ 、貼付文上にも施文		赤色粒、白色粒	暗褐色～極暗褐色
32	胴部、集合沈線2.5㎜、結節沈線　／33と同一個体		白色粒、赤色粒	明赤褐色
33	胴部、集合沈線３㎜、結節沈線　／32と同一個体		白色粒	暗褐色
34	胴部、集合沈線2.5㎜、凹凸文		（砂粒）	赤褐色
35	胴部、連続沈線2.5㎜強　／36と同一個体		（砂粒）	赤褐色～黒褐色
36	胴部、連続沈線2.5㎜強　／35と同一個体		（砂粒）	極暗赤褐色
37	胴部、連続・集合沈線１㎜		白色粒	にぶい褐色
38	胴部、連続沈線２㎜・1.5㎜（懸垂区画帯中）		粗砂、白色粒	にぶい黄橙色～灰褐色
39	胴部、集合沈線2.5㎜	ＲＬ？	粗砂	赤褐色

II　上百駄山遺跡

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
40	胴部、連続沈線2.5mm　／50と同一個体		（砂粒）	黒褐色
41	胴部、集合沈線1.5mm	ＬＲ	粗砂・白色粒多量	にぶい赤褐色
42	胴部、集合沈線２mm	ＬＲ	片岩、長石、粗砂	橙色
43	胴部、集合沈線２mm		（砂粒）	にぶい赤褐色
44	胴部、連続沈線２mm		赤色粒、白色粒、粗砂	にぶい赤褐色
45	胴部、連続沈線２mm強		白色粒、粗砂	にぶい褐色
46	胴部、連続沈線2.5mm		白色粒、赤色粒	赤褐色
47	胴部、連続沈線２mm　／48と同一個体	Ｌ	白色粒	赤褐色～にぶい赤褐色
48	胴部、連続沈線２mm　／47と同一個体	Ｌ	白色粒・赤色粒極多量	にぶい赤褐色
49	胴部、連続沈線２mm強		白色粒	橙色
50	胴部、連続沈線２mm　／40と同一個体		白色粒	にぶい黄橙色～黒褐色
51	胴部、連続沈線2.5mm	ＲＬ	粗砂	橙色
52	胴部、平行・連続沈線３mm弱	ＲＬ	粗砂極多量	橙色
53	胴部、連続沈線３mm弱	Ｌ？	粗砂	橙色
54	胴部、連続沈線2.5mm	Ｌ	白色粒	橙色～赤褐色
55	胴部、平行沈線３mm	？	砂粒	橙色
56	胴部、集合・連続沈線2.5mm		白色粒、赤色粒	にぶい赤褐色
57	胴部、貼付文、集合沈線（半隆起線状）４mm		砂粒少なめ	にぶい橙色～橙色
58	胴部、連続沈線2.5mm		白色粒、赤色粒	赤褐色
59	胴部、平行・連続沈線６mm　／60・61と同一個体		白色粒、赤色粒	浅黄橙色
60	胴部、連続沈線６mm　／59・61と同一個体	ＬＲ	白色粒、赤色粒	橙色
61	胴部、連続沈線６mm　／59・60と同一個体		白色粒、赤色粒	浅黄橙色
62	底部、集合沈線2.5mm		粗砂、白色粒	浅黄橙色～橙色
63	平口縁？、爪形文		砂粒	にぶい赤褐色
64	平口縁、豆粒状貼付文２段に密接		片岩	にぶい黄褐色
65	平口縁、貼付文	ＲＬ	粗砂	橙色
66	平口縁、貼付文	ＬＲ	白色粒、粗砂	赤褐色
67	平口縁、ナデ	無文	白色粒	にぶい赤褐色
68	平口縁	無文	白色粒	にぶい黄橙色～橙色
69	平口縁　早期？	無文	（砂粒）	にぶい黄橙色
70	胴部	撚糸ＲＬ縄	（砂粒）	明赤褐色
71	胴部　／76と同一個体	ＲＬ	粗砂	橙色
72	胴部	ＲＬ	白色粒	赤褐色
73	胴部	Ｌ	白色粒	にぶい褐色
74	胴部	Ｒ－Ｌ	砂粒	橙色
75	胴部	Ｌ	粗砂、白色粒	浅黄橙色～黒褐色
76	胴部　／71と同一個体	Ｒ	砂粒	にぶい橙色
77	胴部　ＲＬ多条－ＬＲ多条で羽状	←	砂粒多量、石英	明赤褐色
78	胴部	条痕文	砂粒少（きめ細かい）	にぶい黄橙色
79	胴部	Ｌ？	砂粒	暗赤褐色
80	胴部	無文	（砂粒）	橙色～にぶい褐色
81	胴部　細かなタテミガキ	無文	白色粒	橙色
82	胴部	無文	白色粒	赤褐色
83	底部	無文	白色粒、粗砂	赤褐色
84	胴部、波状貝殻文		混和材少ない	浅黄橙色
85	胴部、波状貝殻文		混和材少ない	浅黄橙色

第２表　Ｊ２号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	波状口縁、平行・連続沈線1.5mm	？	粗砂、片岩	にぶい褐色
2	浅鉢	無文	白色粒、赤色粒	赤褐色
3	波状口縁、集合沈線？４mm　口縁部ＲＬ、胴部Ｌ	←	白色粒	赤褐色～浅黄橙色
4	平口縁、単沈線区画、爪形文		白色粒	橙色
5	波状口縁、櫛歯状工具11mm６本２－２－２－２－３mm		白色粒	にぶい褐色～黒褐色
6	波状口縁、集合沈線４mm（内側に条線が沿う）		白色粒、赤色粒	明赤褐色～褐灰色
7	平口縁、キザミ、連続沈線２mm		白色粒	にぶい赤褐色
8	平口縁、口唇部キザミ	？	細砂	浅黄橙色
9	波状口縁	Ｌ	白色粒、赤色粒	浅黄橙色～橙色

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
10	口辺部、連続沈線２㎜	L	白色粒、赤色粒	浅黄色、褐灰色
11	胴部、連続沈線2.5㎜	L	白色粒、粗砂	橙色
12	胴部、横帯文2.5㎜、櫛歯状工具７本一組８㎜？、14と同一	撚糸ＲＬ縄	粗砂	浅黄色～橙色
13	胴部、平行沈線３㎜	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
14	胴部、横帯文2.5㎜、櫛歯状工具７本一組８㎜？、12と同一	撚糸ＲＬ縄	粗砂	橙色
15	胴部、連続沈線２㎜		粗砂	にぶい赤褐色
16	胴部、集合沈線2.5㎜（横帯文）、集合・連続沈線２㎜		粗砂多量	橙色
17	胴部、集合沈線２㎜	ＲＬ	粗砂	にぶい橙色
18	胴部、集合沈線２㎜		白色粒	にぶい橙色
19	胴部、連続・集合沈線2.5㎜		粗砂・白色粒多量	橙色
20	胴部、集合・連続沈線2.5㎜	L	（白色粒）	橙色
21	胴部、連続沈線2.5㎜	ＬＲ	砂粒、白色粒	橙色
22	胴部、浮線上矢羽根キザミ（横）、キザミ無し（縦）	ＬＲ	粗砂	浅黄色～橙色
23	口縁部、粗い指ナデ		白色粒	にぶい橙色
24	胴部、波状貝殻文		細砂	にぶい黄橙色
25	胴部、細かい丁寧なタテミガキ		白色粒、細砂	にぶい橙色
26	底部	ＲＬ	白色粒	にぶい橙色
27	底部	ＲＬ	砂粒	浅黄橙色～にぶい橙色
28	底部	L	砂粒多量	にぶい赤褐色

第３表　Ｊ３号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部、集合・連続沈線２㎜	ＲＬ	白色粒、赤色粒、粗砂	にぶい黄橙色
2	口縁部～胴部、貼付文、集合沈線2.5㎜		赤色粒・片岩・粗砂多	橙色
3	口縁部～胴部	ＲＬＲ？	白色粒、赤色粒	橙色～暗褐色
4	平口縁？、連続沈線２㎜		粗砂極多量、片岩	にぶい橙色
5	平口縁、貼付文	撚糸	白色粒、赤色粒	にぶい黄橙色～褐灰色
6	平口縁？	無文	砂粒	浅黄橙色～灰褐色
7	胴部、連続沈線２㎜		白色粒	浅黄橙色
8	胴部、平行沈線４㎜	L	白色粒、石英	明赤褐色
9	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	灰赤色
10	胴部、連続沈線2.5㎜		砂粒	橙色
11	胴部、連続沈線（深浅）2.5㎜		砂粒	明赤褐色
12	胴部、連続沈線３㎜		白色粒	明赤褐色
13	胴部、平行沈線６㎜		砂粒	橙色～灰褐色
14	胴部、平行沈線2.5㎜	L	白色粒、粗砂	橙色
15	胴部、平行沈線５㎜		砂粒	橙色
16	胴部、浮線矢羽根状キザミ（器面にもかかる）　17と同一		砂粒	浅黄橙色
17	胴部、浮線矢羽根状キザミ　16と同一		砂粒	浅黄橙色
18	胴部	L	砂粒、片岩、雲母	明赤褐色～暗赤灰色
19	胴部	ＲＬ	白色粒	橙色
20	浅鉢	無文	白色粒	橙色
21	土製品（土偶？）、平行沈線2.5㎜		砂粒	橙色

第４表　Ｊ４号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	平口縁、集合・連続沈線3.5㎜		粗砂	浅黄橙色～橙色
2	内折波状口縁、ミガキ		白色粗粒	暗赤褐色
3	底部、平行沈線2.5㎜　13・14と同一個体		砂粒	にぶい橙色～赤褐色
4	胴部～底部	ＬＲ？	粗砂多量	にぶい赤褐色
5	平口縁、貼付文、連続沈線3.5㎜？		粗砂、白色粒、黒色粒	橙色
6	波状口縁、集合沈線1.5㎜		砂粒	にぶい褐色
7	波状口縁、連続沈線２㎜（口）、５㎜？（胴）		砂粒	褐灰色～黒色
8	波状口縁、連続沈線1.5㎜	L	粗砂、赤色粒	にぶい赤褐色～暗赤褐色
9	平口縁、集合・連続沈線2.5㎜		粗砂多量	にぶい黄褐色
10	波状口縁、タテキザミ、爪形文		細砂	褐灰色～にぶい橙色

II　上百駄山遺跡

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
11	連続沈線2.5㎜　5と同一個体		粗砂、白色粒、黒色粒	にぶい赤褐色
12	胴部、平行沈線2.5㎜、爪形文、C字刺突連続（縦）		（砂粒）	橙色
13	胴部、平行沈線2.5㎜？　3・14と同一個体		砂粒	赤褐色
14	胴部、平行沈線2.5㎜、単沈線？　3・13と同一個体		砂粒	赤褐色
15	胴部、連続沈線2.5㎜		粗砂多量	にぶい橙色
16	胴部、連続沈線２㎜	RL	白色粒、赤色粒	褐灰色～浅黄橙色
17	平口縁	L	白色粒	赤褐色
18	胴部	RL	小礫	橙色～にぶい黄橙色
19	胴部、ミガキ		白色粒	明赤褐色
20	浅鉢、ミガキ		粗砂多量	にぶい赤褐色

第５表　Ｊ５号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部、集合沈線２㎜		砂粒	にぶい橙色
2	平口縁、連続沈線２㎜	LR	白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
3	平口縁、連続沈線２㎜		粗砂	にぶい橙色～暗赤褐色
4	波状口縁、平行・連続沈線２㎜		粗砂	にぶい橙色
5	胴部、連続沈線２㎜		砂粒、白色粒	にぶい褐色

第６表　Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	波状口縁、結節浮線、小ボタン貼付文、地文連続沈線2.5㎜	←	粗砂多量	にぶい橙色
2	平口縁、貼付文、平行沈線（深浅）２㎜		粗砂	にぶい褐色～暗赤褐色
3	平口縁、貼付文、凹凸文	L	粗砂多量	橙色～黒褐色
4	平口縁、ヘラ状工具？	LR	白色粒	明赤褐色
5	平口縁、口縁部横方向ナデ、胴部縦方向ナデ	無文	粗砂、赤色粒	浅黄橙色～灰褐色
6	平口縁、集合・連続沈線3.5㎜　4住１と同一個体		粗砂	浅黄橙色～橙色
7	平口縁、キザミ、集合沈線２㎜		白色粒	にぶい橙色
8	平口縁、集合・連続沈線3.5㎜		粗砂	橙色
9	平口縁？、平行沈線1.5㎜		白色粒	黒褐色
10	平口縁、突起、連続沈線2.5㎜		砂粒	にぶい橙色
11	平口縁、貼付文、平行沈線３㎜（半截竹管２本並び？）		白色粒、粗砂	橙色～極暗褐色
12	波状口縁、平行沈線3.5㎜（内面に条線）	L	赤色粒、粗砂	橙色～浅黄橙色
13	胴部、連続沈線２㎜	L	砂粒	にぶい橙色
14	胴部、連続沈線２㎜	L	赤色粗粒	黄橙色～黒褐色
15	胴部、連続沈線３㎜		粗砂	赤褐色
16	胴部、連続沈線２㎜		粗砂	明赤褐色～黒褐色
17	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	橙色
18	胴部、平行・連続沈線1.5㎜	LR	砂粒少ない	浅黄橙色
19	胴部、連続沈線３㎜		粗砂、片岩	赤褐色
20	胴部、集合沈線２㎜		粗砂多量	橙色
21	胴部、平行沈線2.5㎜		砂粒	にぶい橙色～橙色
22	胴部、連続沈線2.5㎜		砂粒	黒褐色（内：にぶい橙色）
23	胴部、連続沈線２㎜	LR	赤色粒、白色粒	暗赤褐色
24	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	橙色
25	胴部、平行沈線2.5㎜	L	赤色粒、片岩	橙色
26	胴部、貼付文、平行沈線２㎜　29・30・31と同一個体		粗砂、石英極多量	橙色～にぶい赤褐色
27	胴部、平行沈線２㎜		粗砂、石英極多量	橙色～にぶい赤褐色
28	胴部、連続・集合沈線２㎜		白色粒	にぶい赤褐色
29	胴部、平行沈線２㎜　26・27と同一個体		粗砂、石英極多量	橙色
30	胴部、平行沈線２㎜		粗砂、石英極多量	橙色
31	胴部、平行沈線２㎜		粗砂、石英極多量	橙色
32	波状口縁	RL	砂粒	にぶい橙色
33	平口縁	LとR？	砂粒多量	橙色
34	胴部	L	粗砂、赤色粒	赤褐色
35	底部、集合沈線3.5㎜	L	褐色	にぶい橙色

第７表　Ｊ１号土坑出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	波状口縁？、平行沈線		粗砂、白色粒	橙色
2	胴部、集合沈線２㎜	Ｌ？	粗砂	にぶい橙色
3	胴部、集合沈線2.5㎜		砂粒	橙色
4	胴部、平行沈線３㎜	ＲＬ	粗砂多量	にぶい橙色
5	底部、集合沈線２㎜	ＲＬ	粗砂	橙色

第８表　Ｊ３号土坑出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	波状口縁、縦キザミ、爪形文（結節沈線）、連続沈線2.5㎜		粗砂	にぶい橙色
2	波状口縁、集合沈線２㎜		砂粒	にぶい橙色
3	波状口縁、平行沈線（深浅）3.5㎜		（砂粒）	明赤褐色
4	胴部、連続沈線2.5㎜	撚糸	砂粒	にぶい橙色
5	胴部、平行沈線2.5㎜		（砂粒）	橙色
6	浅鉢、ミガキ		粗砂、白色粒	にぶい赤褐色

第９表　遺構外出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	平口縁、口唇部連続押圧文、微隆起線文		白色粒、砂粒	にぶい橙色
2	平口縁、爪形文？		白色粗粒、赤色粒	赤褐色
3	胴部、条痕文		白色粒・赤色粒多量	にぶい赤褐色（内：黒色）
4	胴部、条痕文		粗砂多量、繊維少量	橙色～にぶい赤褐色
5	胴部、条痕文		粗砂多量、繊維少量	橙色～にぶい赤褐色
6	胴部、条痕文		粗砂多量、繊維少量	橙色～にぶい赤褐色
7	胴部、条痕文		粗砂多量、繊維少量	橙色～にぶい赤褐色
8	胴部、条痕文		砂粒少量	にぶい黄橙色
9	胴部、条痕文		砂粒少量	にぶい黄橙色
10	胴部、条痕文		砂粒少量	にぶい黄橙色
11	胴部、コンパス文	ＬＲ	砂粒、繊維少なめ	極暗赤褐色
12	胴部	ＬＲ多条	砂粒・繊維多量	にぶい橙色～灰褐色
13	胴部	ＲＬ	繊維	橙色
14	胴部	ＲＬ－ＬＲ	繊維、砂粒	橙色～褐灰色
15	胴部、爪形文６㎜		粗砂	にぶい褐色
16	胴部、爪形文６㎜		粗砂	赤褐色
17	胴部、爪形文６㎜		白色粒、粗砂	にぶい赤褐色～灰褐色
18	胴部、爪形文10㎜		砂粒、赤色粒、白色粒	浅黄橙色
19	胴部、爪形文10㎜	ＲＬ	砂粒、赤色粒、白色粒	浅黄橙色
20	平口縁、突起、浮線文（縄文施文）　多条ＲＬ－多条ＬＲ	←	粗砂	赤褐色、～浅黄橙色
21	波状口縁、浮線文上矢羽根状キザミ	ＬＲ	粗砂	褐灰色～にぶい黄橙色
22	平口縁、口唇部連続押圧文、平行沈線3.5㎜	ＲＬ	白色粒、砂粒	赤褐色
23	波状口縁、連続沈線４㎜、円形刺突文？		赤色粒、砂粒	赤褐色
24	波状口縁、波頂部２～３山、３本一組（浅一深一浅）.5㎜		砂粒	灰褐色
25	平口縁、平行沈線４㎜（両側に条線が沿う）		砂粒、金雲母	にぶい赤褐色
26	波状口縁、平行沈線3.5㎜		（砂粒）	にぶい赤褐色
27	平口縁、連続・集合沈線2.5㎜	Ｌ	白色粒	にぶい黄橙色～灰褐色
28	靴先状波状口縁、平行・連続沈線３㎜		白色粒、赤色粒	赤褐色
29	平口縁、連続・集合沈線（深浅）２㎜		粗砂、赤色粒	にぶい橙色
30	平口縁、集合沈線２㎜		（砂粒）	にぶい黄橙色
31	平口縁、集合沈線２㎜		粗砂	にぶい黄橙色
32	平口縁、集合沈線2.5㎜		（砂粒）	にぶい褐色
33	平口縁、凹凸文、連続・集合沈線２㎜		白色粒	にぶい橙色
34	胴部、平行沈線3.5㎜（内側に条線が沿う）		白色粒、赤色粒	赤褐色
35	胴部、平行沈線3.5㎜		（砂粒）	にぶい橙色
36	胴部、平行沈線で区画、集合・連続沈線2.5㎜		粗砂極多量	にぶい赤褐色
37	胴部、沈線５本一組（太太細細細、深深浅浅浅）9.5㎜		粗砂多量	にぶい橙色
38	胴部、連続・集合沈線３㎜	ＲＬ	（砂粒）	にぶい橙色～灰褐色

II　上百駄山遺跡

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
39	胴部、平行（連続）沈線２㎜	L	粗砂多量	明赤褐色
40	胴部、沈線５本一組8.5㎜		粗砂極多量	橙色
41	胴部、平行沈線（深浅）1.5㎜	ＲＬ？	粗砂	にぶい橙色
42	胴部、平行沈線2.5㎜		粗砂極多量	橙色
43	胴部、連続沈線2.5㎜		白色粒、赤色粒	赤褐色
44	胴部、連続沈線２㎜	L	粗砂多量	明赤褐色
45	胴部、連続沈線３㎜		粗砂	にぶい赤褐色
46	胴部、連続沈線2.5㎜		粗砂	にぶい赤褐色～灰褐色
47	胴部、沈線４本一組6.5㎜		粗砂	にぶい赤褐色
48	胴部、凹凸文、集合沈線3.5㎜（一部半隆起線状）		粗砂	にぶい赤褐色～赤褐色
49	胴部、刺突文、集合沈線３㎜		白色粒、粗砂	にぶい赤褐色
50	胴部、集合沈線２㎜？、６本一組？		砂粒多量	橙色
51	胴部、連続沈線３㎜		粗砂多量	明赤褐色
52	胴部、連続沈線２㎜	L	粗砂、白色粒	明赤褐色～にぶい赤褐色
53	胴部、連続沈線？条線状、単位不明瞭	L	砂粒	明赤褐色
54	底部、条線の伴う単位不明瞭な平行沈線２㎜		粗砂多量	橙色～にぶい橙色
55	平口縁、凹凸文、集合・連続沈線２㎜		白色粒	にぶい橙色～赤褐色
56	平口縁、貼付文、連続沈線３㎜		粗砂	にぶい橙色
57	胴部、集合・連続沈線3.5㎜		粗砂、赤色粒	にぶい橙色
58	胴部、集合沈線２㎜		砂粒	にぶい黄橙色
59	胴部、平行沈線４㎜		（砂粒）	にぶい黄橙色
60	平口縁、貼付文	ＬＲ疎ら	白色粒、砂粒	赤褐色
61	波状口縁	ＲＬ	粗砂	にぶい橙色
62	平口縁	L	粗砂	にぶい赤褐色～暗赤灰色
63	平口縁	撚糸ＬＲ縄	粗砂	赤褐色
64	胴部　ＲＬ一多条ＬＲ	←	砂粒、片岩	赤褐色
65	胴部、円孔	撚糸？	砂粒	にぶい橙色～橙色
66	平口縁	無文	砂粒	橙色～赤褐色
67	平口縁、条痕？、粘土帯		金雲母、粗砂	にぶい赤褐色
68	平口縁	無文	砂粒	赤褐色
69	平口縁、円孔（外方から円錐状に開ける）	無文	砂粒、赤色粒	にぶい橙色
70	平口縁	無文	粗砂	橙色
71	波状口縁	？	白色粒	にぶい橙色
72	胴部	無文	砂粒	赤褐色
73	胴部、タテミガキ、内面もタテミガキ	無文	粗砂	橙色
74	底部	無文	砂粒	橙色～にぶい橙色
75	胴部、連続押し引き文２列一単位		砂粒	にぶい橙色～灰褐色
76	胴部、太沈線	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
77	胴部、太沈線	ＲＬ	砂粒	橙色
78	胴部、粘土帯接合痕残る		粗砂、白色粒	にぶい橙色
79	胴部、押圧隆帯、刺突文		金雲母・粗砂多量	赤褐色
80	平口縁、微隆帯	ＬＲ	粗砂	にぶい橙色
81	胴部、磨消懸垂帯？	L	白色粒、粗砂	にぶい橙色
82	胴部	L	粗砂	にぶい橙色

2．平安時代の遺構と遺物

(1) 概　　要

本期の遺構は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡５棟、溝１条、柱穴多数である。竪穴住居跡の内４軒は建て替えを行っており、１軒は小鍛冶遺構を併設する。大半が南半部に集中して検出されており、北半部には竪穴住居跡３軒と土坑１基が検出されただけである。調査区の中央部に検出された柱穴群は中近世のものが含まれる可能性もあるが、判別不可能なため、一応本期に入れた。

(2) 竪穴住居跡

１号住居跡（遺構第32図、遺物第51図、ＰＬ５）

21―14グリッドに位置する。南西約14mに２号住居跡、北東約４mに10号住居跡が近接する。

東西3.4m、南北4.4m、深さ30cmを測り、南北に長い隅丸長方形状を呈する。覆土上層には浅間Ｂ軽石が堆積する。主軸方位はＮ―22°―Ｅである。小礫混じりの淡褐色土を床面とするが軟弱である。カマド南側東壁と南壁の中央部を除いて幅10cm前後の周溝が巡る。壁面は若干角度をもって立ち上り、上端でさらに大きく開く。床の南東隅、南西隅、カマドの左袖脇に小ピットが検出されている。カマドは東壁の南寄りに付設されている。左右両袖部に若干の粘土が残存しており、右袖には補強のための礫も残存する。燃焼部から煙道部まで良好に焼けている。規模は焚口幅約50cm、焚口から煙道部先端まで約1.2mを測る。

遺物は須恵器皿・椀、土師器脚付小型甕・甕・鉢、砥石、鉄滓、羽口片などが出土している。

２号住居跡（遺構第33図、ＰＬ５）

18―11～19―11グリッドに位置する。北東約14mに１号住居跡が近接する。１号溝により東壁際を床下まで削平されている。

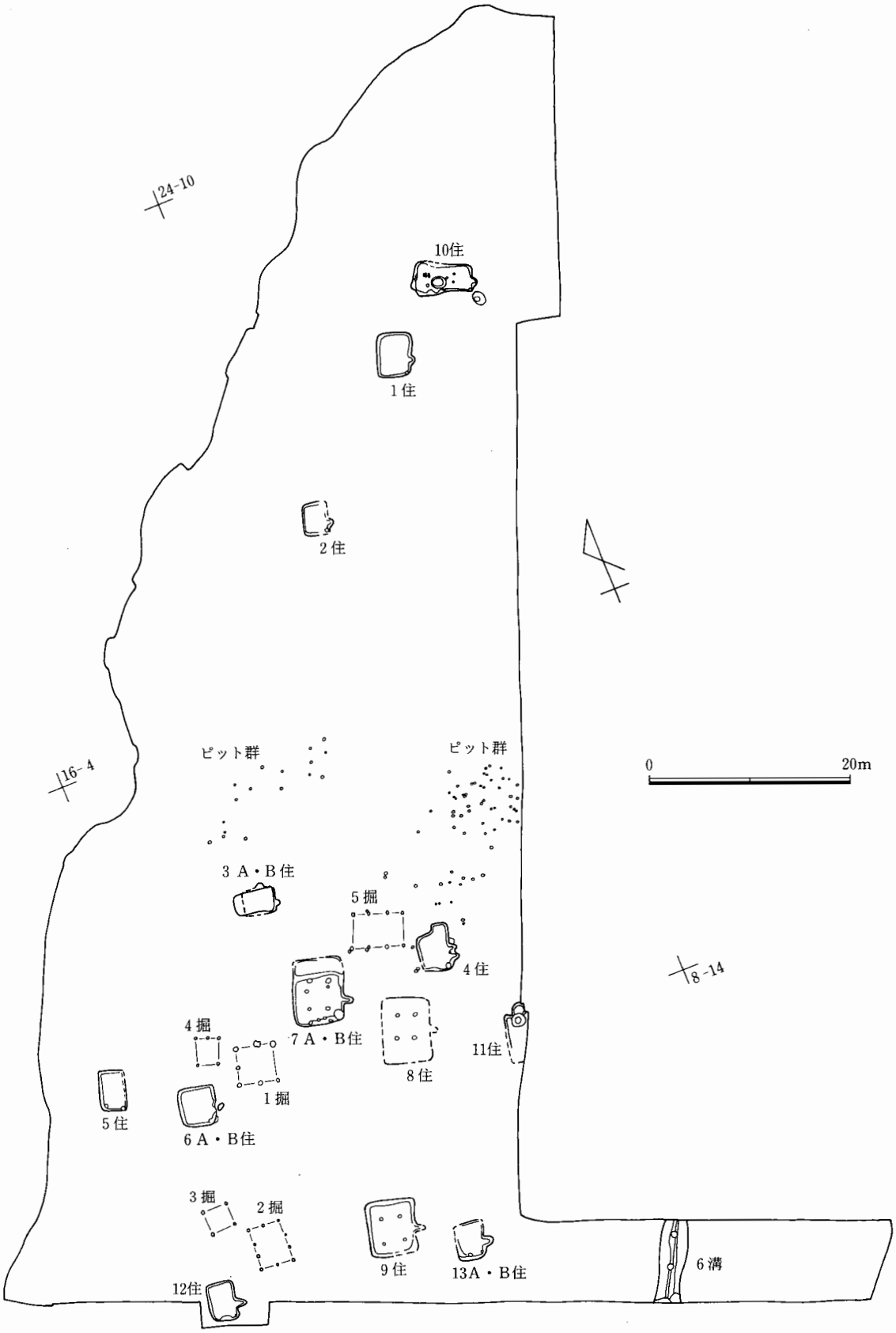
東西2.6m、南北3.0m、深さ30cmを測り、南北に若干長い隅丸長方形を呈する。覆土上層には浅間Ｂ軽石が堆積する。主軸方位はＮ―17°―Ｅである。床面は軟弱で不明瞭である。壁面は角度をもって立ち上がり、周溝は認められない。南東隅に柱穴状のピットが検出され、礫が出土している。規模は長径50cm×短径40cm、床面からの深さ約30cmを測る。

遺物は少量の須恵器片、土師器片が出土しただけである。

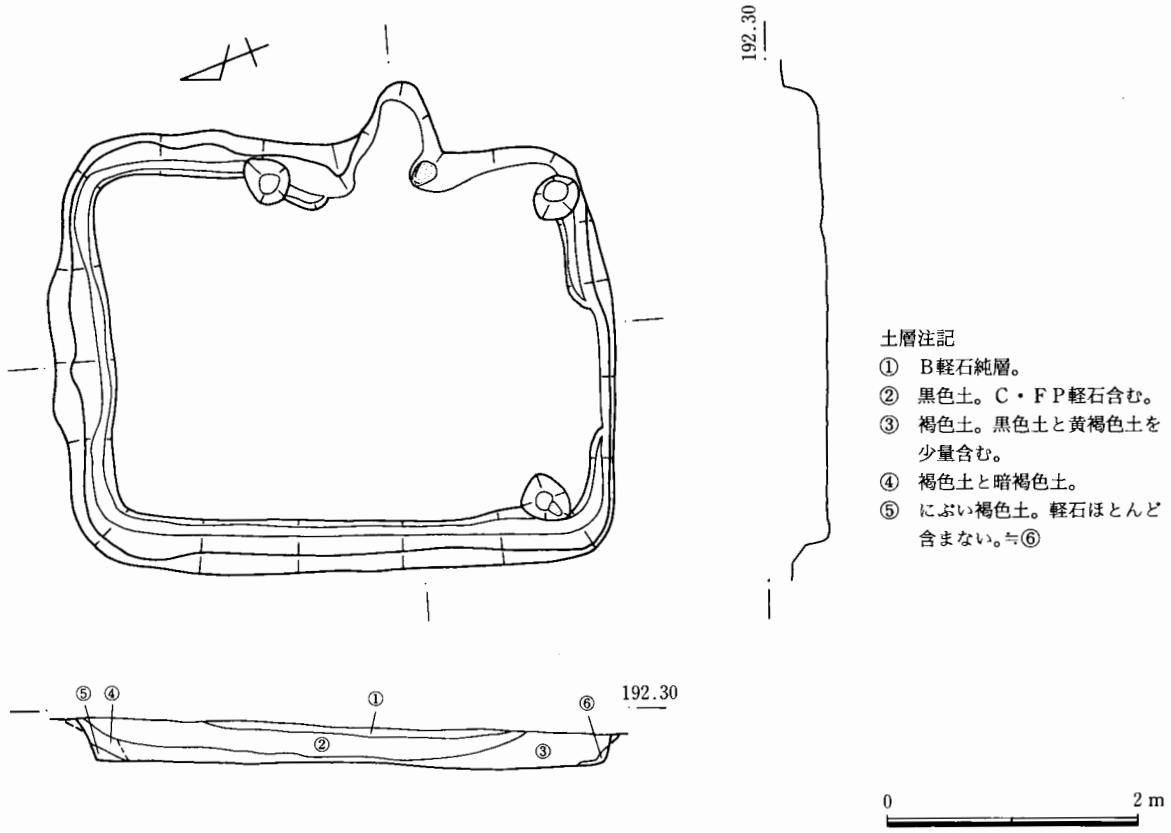
３Ａ・Ｂ号住居跡（遺構第34図、遺物第52図、ＰＬ５）

12―７グリッドに位置する。Ａ号住居跡がＢ号住居跡の東半部に重複する形で検出されており、Ａ号住居跡が新しいと思われる。Ａ号住居跡の西辺部すべて（Ｂ号住居跡の西半上部）は攪乱を受けており、さらに周辺には耕作に伴う攪乱が多いため、Ａ号住居跡には不明な点が多い。

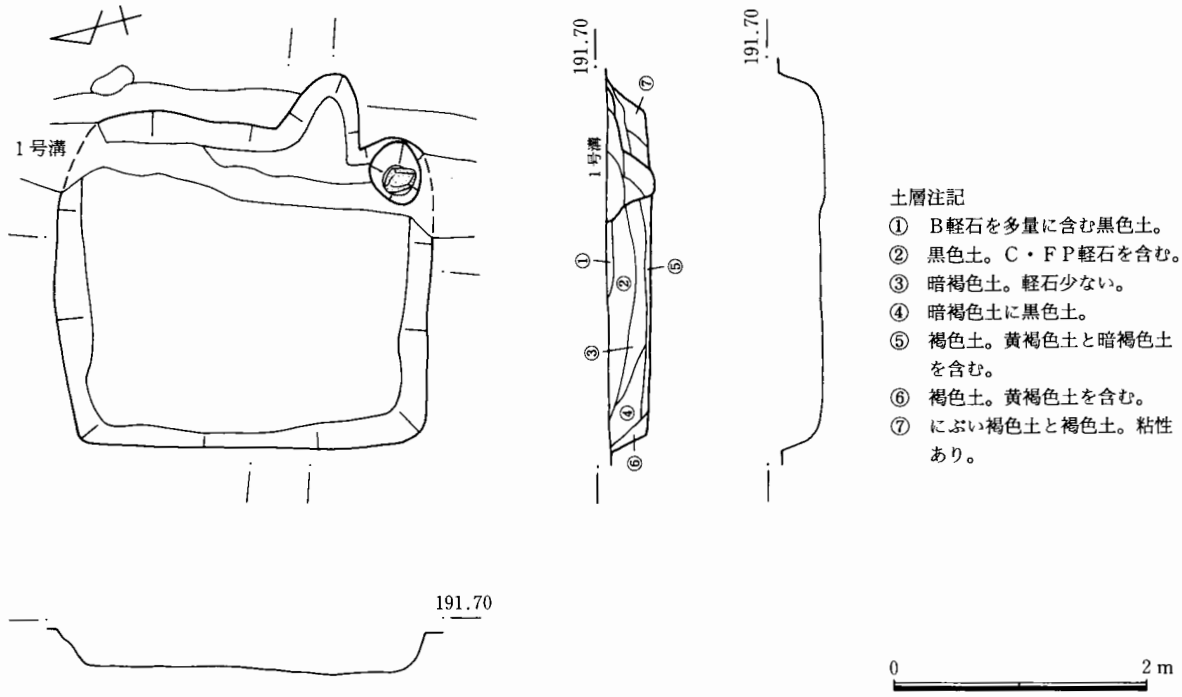
Ａ号住居跡は東西に長い隅丸長方形状を呈すると思われる。規模は東西3.3m、南北2.6m、深さ30cmを測る。南東隅に貯蔵穴が付設されている。主軸方位はＮ―11°―Ｅである。カマドは東壁のかなり南に寄って付設されている。床面は３Ｂ号住居跡の覆土中に構築されているため、明瞭には捕らえられなかった。東壁沿いには浅い周溝が確認されている。壁面は角度をもって立ち上がる。東壁沿いの覆土中からは人頭大の礫が



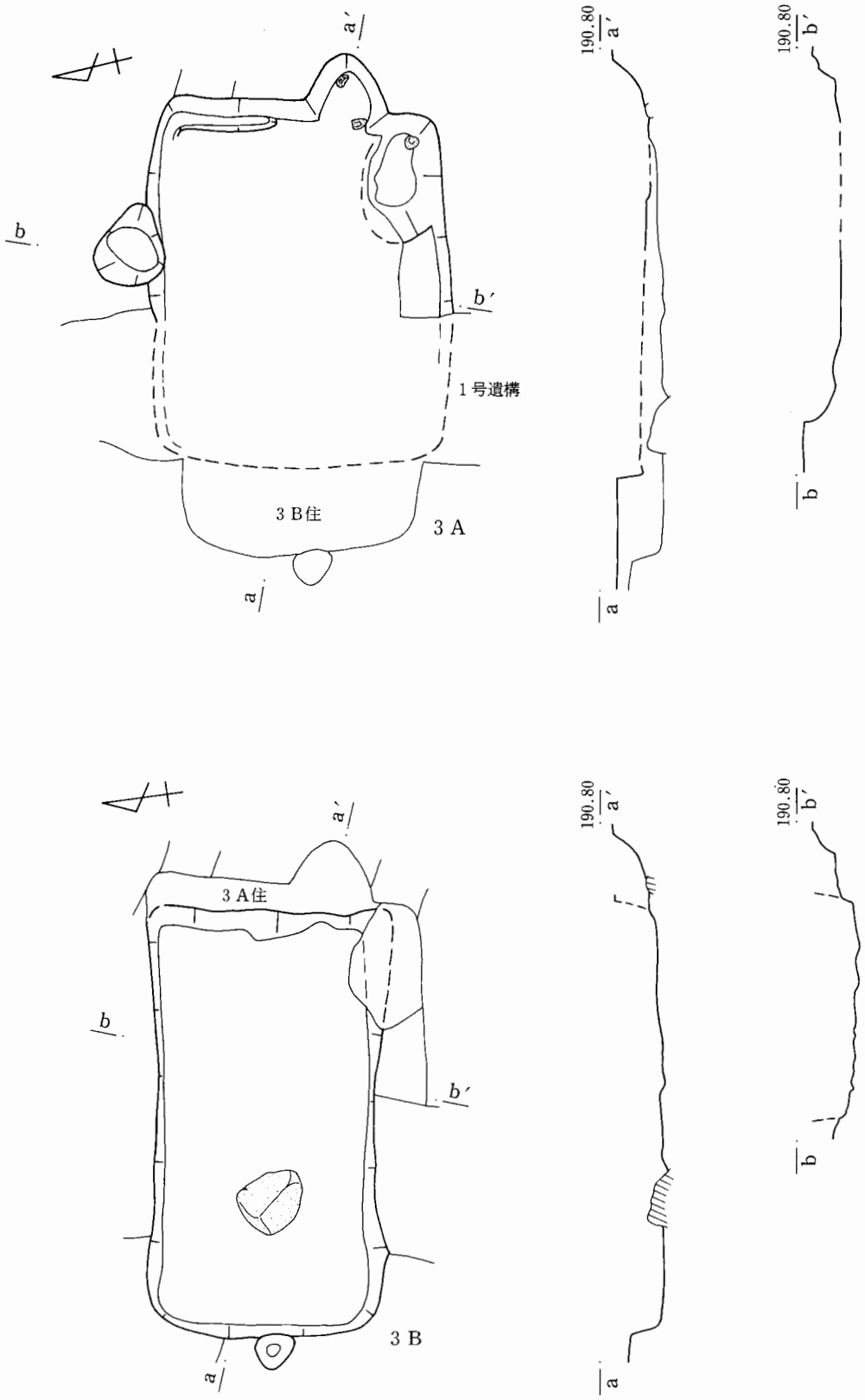
第31図　平安時代遺構配置図



第32図　1号住居跡



第33図　2号住居跡

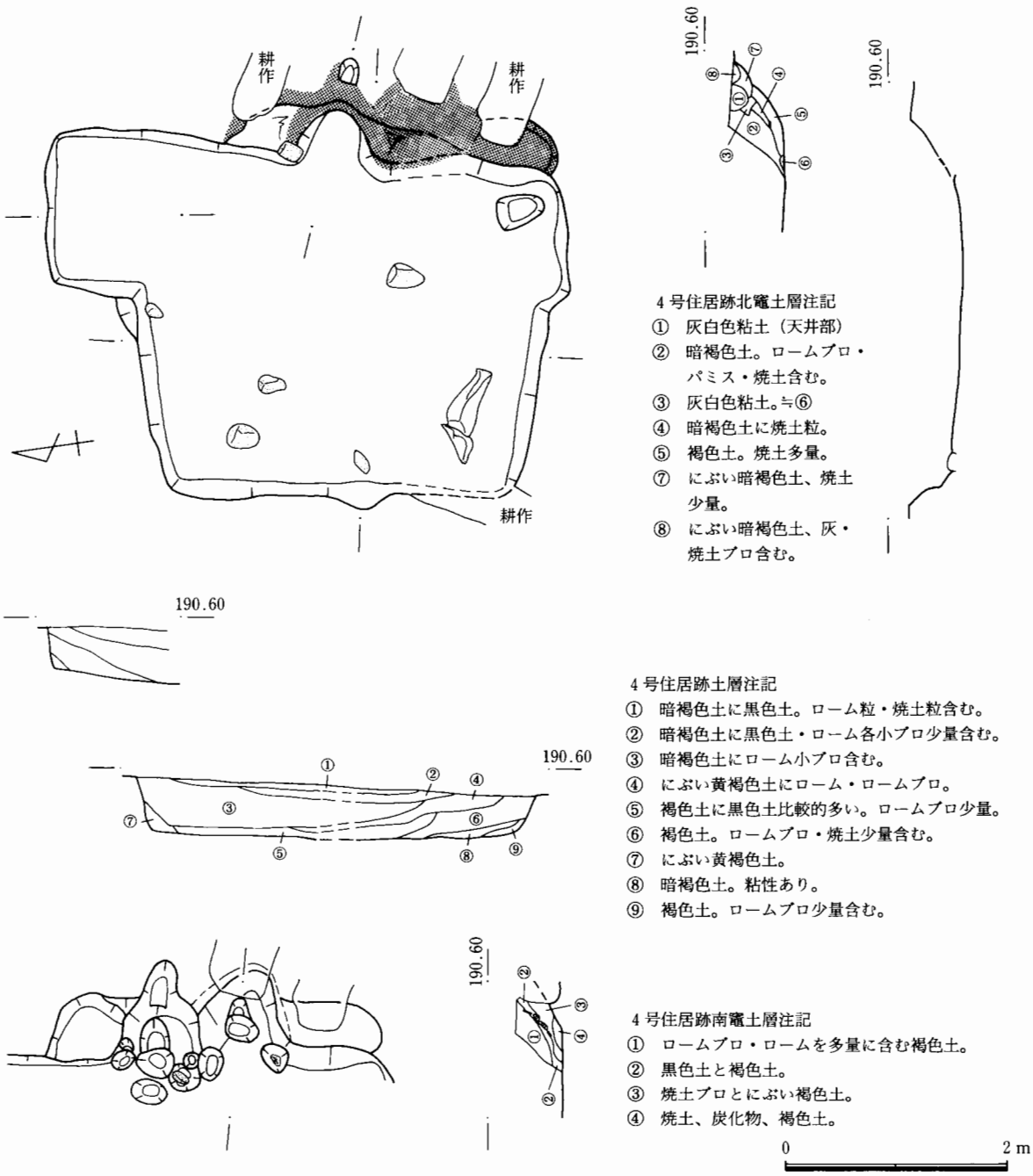


第34図　3 A・B号住居跡

多量に出土している。

B号住居跡は東西に長い隅丸長方形状を呈する。規模は東西3.9m、南北約2.2m、深さ50cmを測る。主軸方位はN―11°―Eである。床面はまったく捉えられず、掘り方が確認できただけであり、生活臭は感じられない。カマドはA号住居跡のカマドと同じ位置に構築されていたと思われる痕跡があるが、明瞭には確認できなかった。

遺物は須恵器椀、土師器脚付小型甕の脚部、折頭釘などが少量出土しているが、大半はA号住居跡部分からの出土である。



第35図　4号住居跡及び竈

4号住居跡（遺構第35図、遺物第53図、ＰＬ５・６）

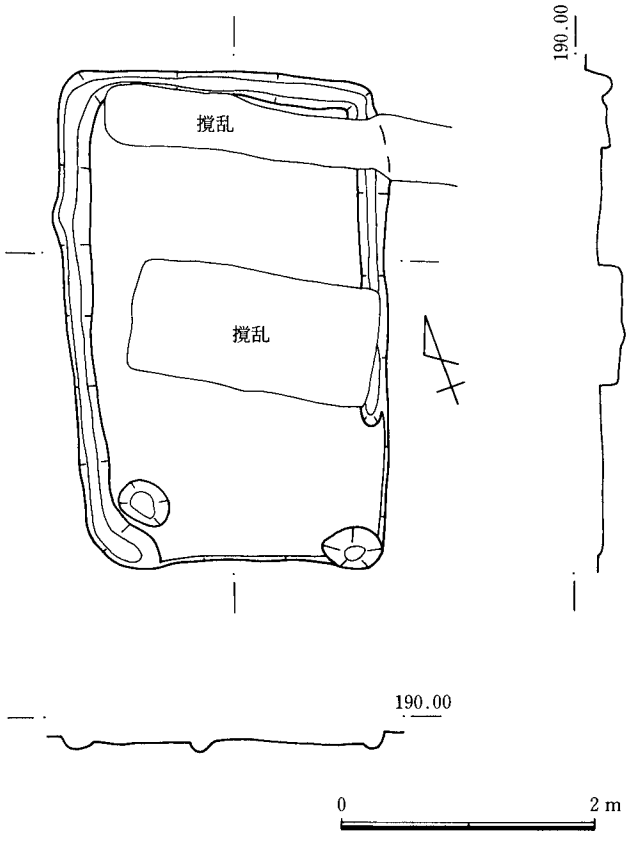
９－９～10－９グリッドに位置する。南西隅に耕作溝が重複しており、床面近くまで削平されている。

形状は基本的には東辺の若干長い隅丸長方形状を呈する。規模は東西3.2m、南北3.6mで、深さ約45～30cmを測る。北壁東半部には幅1.5m、長さ0.8mの張り出しが設けられている。また、南壁の東半部にも幅約1.2m、長さ0.2mの張り出しが認められる。主軸方位はN－10°－Eである。床面は中央部が若干凹んでおり、全体的に非常によく踏み固められている。南西隅には地山の自然礫が頭を出している。壁の立ち上りは比較的直である。南東隅部には長径40cm、短径30cmほどの楕円形のピットが付設されている。カマドは東壁に新旧２基が付設されており、北側が新しい。北カマドを構築する際にはローム粘土を用いて南カマドを完全に埋めている。北カマドは東壁の上部を一旦掘削し、ローム粘土で補強して構築している。左袖部からは崩れかかった状態で円筒状の角閃石安山岩が出土しており、補強材の一部と思われる。検出面での煙道口は８cm×13cmの規模で、住居側が直線的な楕円形を呈しており、天井部が残存する。現状で焚口から煙道部先端まで約１ｍを測る。南カマドの先端には耕作坑が重複しており、煙道部が削平されているが、規模は北カマドと同様と思われる。焚口部の両脇には小ピットが検出されており、袖部補強の石抜き痕と思われる。

遺物は土師器甕・小型甕（脚付き）・坏、須恵器坏、刀子などが出土している。

5号住居跡（遺構第36図、遺物第54図、ＰＬ６）

９－３～10－３グリッドに位置する。南東約３ｍに６号住居跡が近接する。北端部を耕作溝、中央部を耕作坑によって床下まで削平されている。カマドが付設されていないため、住居跡というよりも竪穴状遺構としたほうが適当かもしれない。



第36図　５号住居跡

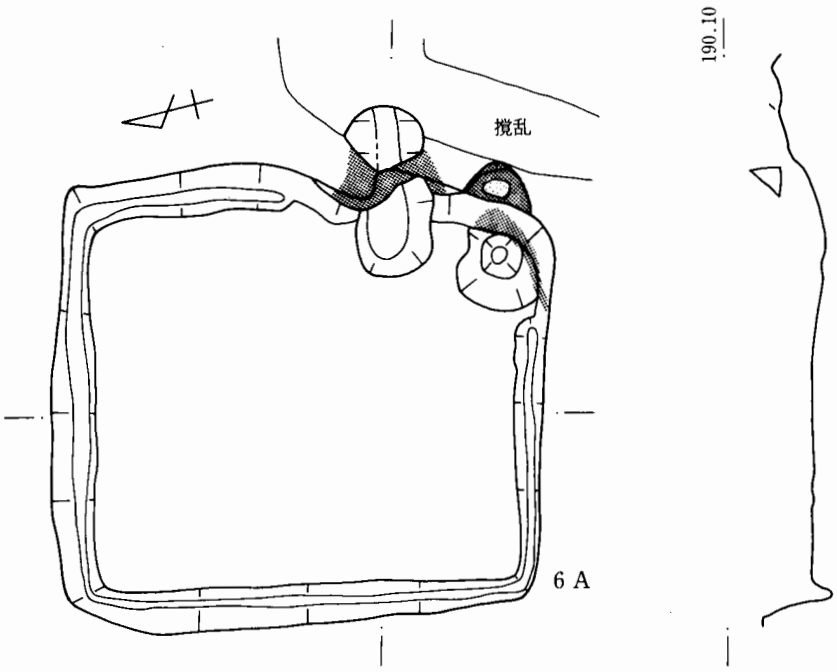
規模は東西2.6m、南北3.9mで、深さは10cm前後と浅い。主軸方位はN－17°－Eである。床面は南半部に比較的堅い部分もあるが、全体的にはあまり踏み固められていない。南壁から東壁南端部を除き幅20cm前後、深さ10～20cmの周溝が巡る。東南隅と西南隅には長径40cm、短径30cm、深さ10cmの浅いピットが検出されている。

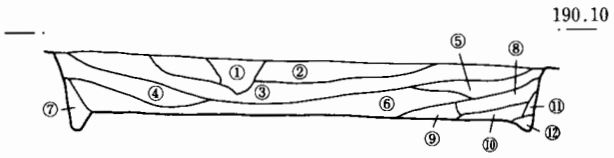
遺物は南壁際西寄り床直から土師器坏が１点出土しただけである。

６Ａ・Ｂ号住居跡（遺構第37図、遺物第55・56図、ＰＬ６）

８－５～９－５グリッドに位置する。縄文時代のＪ６号住居跡と重複する。北西約３ｍに５号住居跡、北約１ｍに４号掘立柱建物跡、東約1.5mに１号掘立柱建物跡が近接する。Ｂ号住居からＡ号住居への拡幅住居と思われる。

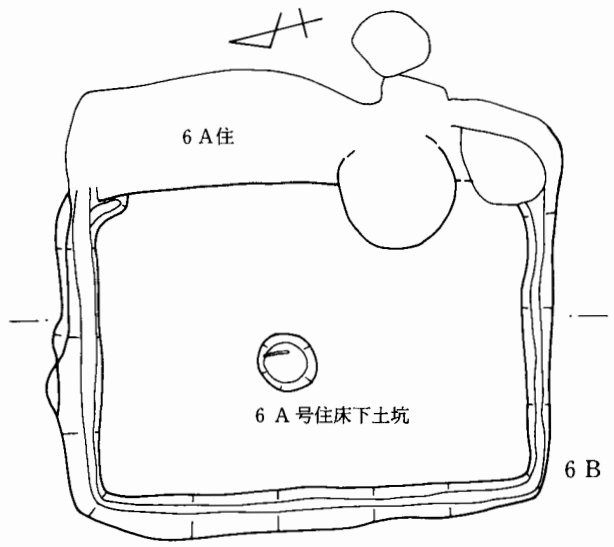
Ａ号住居跡の規模は東西3.6m、南北3.9m、





土層注記

① 攪乱
② 褐色土に黒色土ブロ含む。
③ 暗褐色土に黒色土多く含む。
④ 褐色土に黒色土少量含む。
⑤ 褐色土に黒色土、焼土粒・ブロ含む。
⑥ 褐色土にローム少量含む。
⑦ 褐色土。
⑧ 褐色土に暗褐色土。ローム・焼土粒含む。
⑨ 褐色土に暗褐色土。
⑩ 褐色土に黄褐色土（ローム）。焼土含む。
⑪ 褐色土。
⑫ 褐色土に暗褐色土。



第37図　6 A・B号住居跡

深さ35～60cmを測る。形状は隅丸長方形状を呈するが、東壁はカマド北側が若干張出し気味である。主軸方位はN－12°－Eである。床面はカマド前面を中心としてほぼ全面がよく踏み固められている。カマド周辺を除いて幅10～20cm、深さ10cm前後の周溝が巡る。壁面は比較的直に立ち上がるが、上端で開き気味となる。カマドの南側の東壁から南壁にかけての壁面にはローム粘土が貼られている。また、東壁南端部壁外に径約60cmの半円形にローム粘土を底面に貼った棚状遺構が付設されている。ただし、検出面からの深さはわずかである。貯蔵穴は東南隅に付設されている。長径約80cm、短径約60cm、深さ30cmを測る。カマドは東壁の南寄りに付設されているが、煙道部先端は上部が攪乱されている。燃焼部の大半は壁内に位置するタイプである。ローム粘土で補強されており、天井部が残存するが、袖部は残存しない。焚口から煙道部先端まで1.3mほどを測る。床の中央部西寄りには直径約45cm、深さ約10cmを測る浅い床下土坑が検出されており、内部から刀子と須恵器坏が出土した。

B号住居跡の床面はA号住居跡の床面よりも約5cm下に検出されている。南北の規模はA号住居跡と同じであるが、東西は約80cm短い。床面は比較的よく踏み固められているが、中央部にはA号住居跡の床下土坑が掘り込まれている。周溝は東壁北端部を除くとA号住居跡の周溝との区別は不可能である。カマドはA号住居跡の拡幅により壊されたと思われる。貯蔵穴や柱穴は検出されていない。

遺物は大半がA号住居跡に帰属すると思われるが、土師器甕・坏、須恵器坏・蓋・甕、鋤鍬先、鎌、石製紡錘車などが出土している。B号住居跡の遺物は明瞭に判別できないが、A号住居跡の床下から出土した土師器坏と石製紡錘車はB号住居跡に帰属すると思われる。

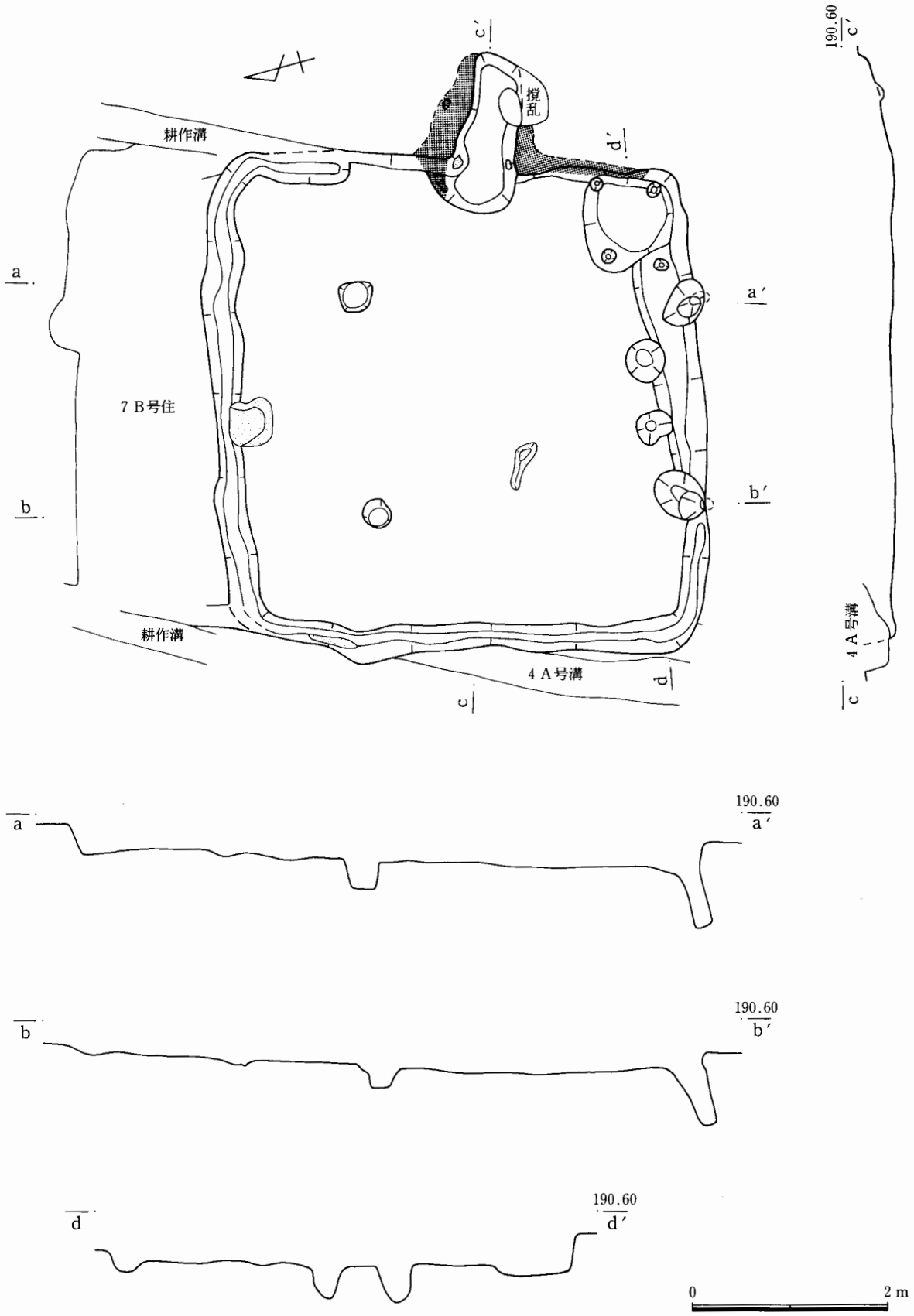
7 A・B号住居跡（遺構第38・39図、遺物第57・58図、PL7）

10－8グリッドを中心に位置する。4号溝が西壁上に重複する。3・4・6・8号住居跡、1・4・5号掘立柱建物跡が周囲に近接する。

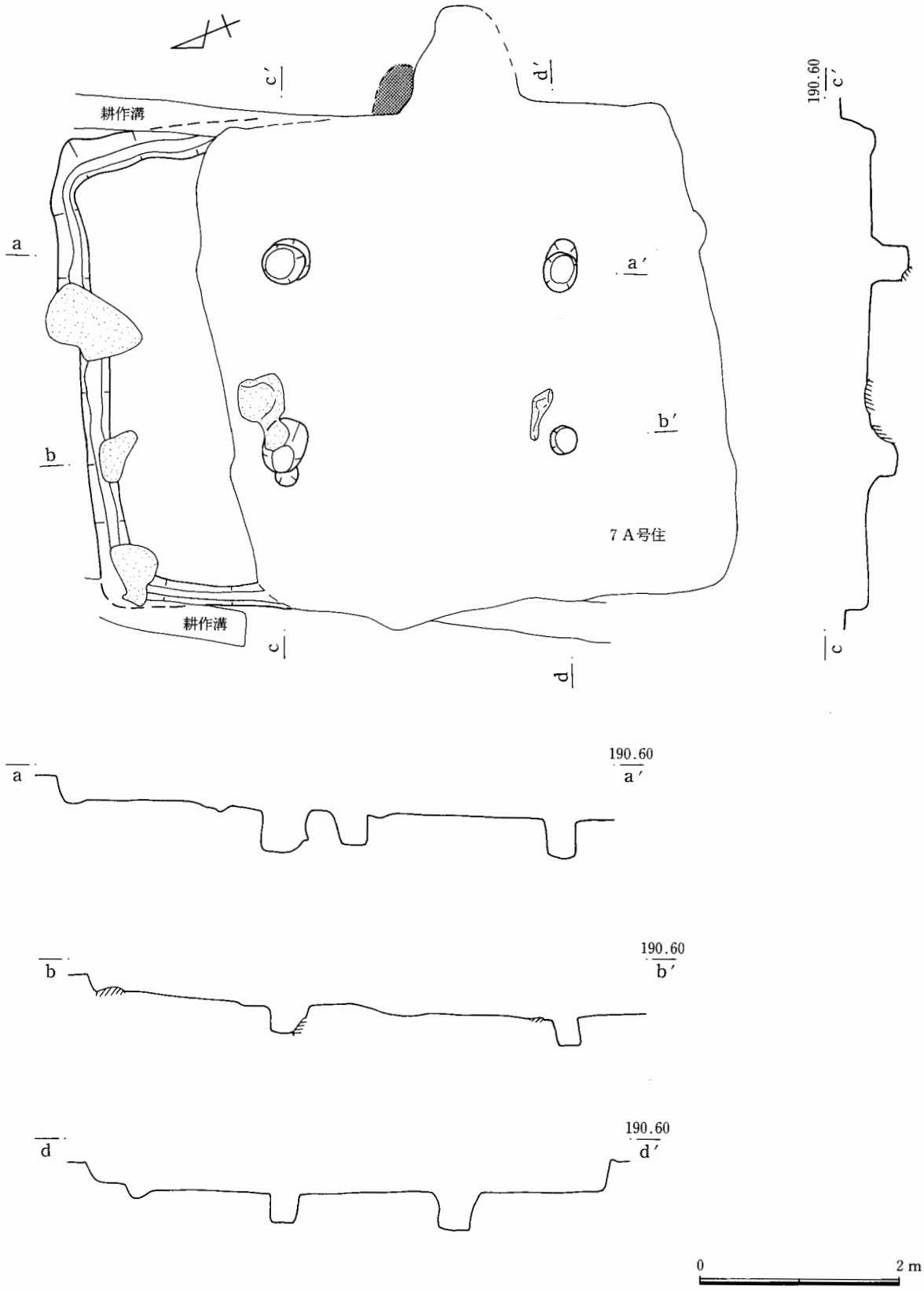
A号住居は東西、南北ともに約5mを測り、菱形状に歪んだ形状を呈する隅丸方形住居跡である。深さは30cm前後である。主軸方位はN－20°－Eである。壁面は若干角度をもって立ち上がる。カマド南側の東壁壁面にはローム粘土が残存する。床面はカマド前面を中心として全体的に比較的よく踏み固められている。東壁北端から南壁西端にかけて幅30cm前後の浅い周溝が巡っている。柱穴は北壁寄りの2本はほぼ対角線上に位置するが、南側の2本は壁に接して掘り込まれている。南壁際の中央には中心距離で約0.7m離れて2本の柱穴が検出されており、入口の梯子を固定した柱穴と思われる。貯蔵穴は南東隅に掘削されている。直径約1m、深さ約15cmを測り、歪んだ円形を呈するが、四方に小ピットが検出されており、貯蔵穴上部に棚あるいは覆いなどの施設を設けていたものと思われる。カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。補強の粘土と礫が残存しており、壁面は良好に焼けている。煙道長約1.2mを測る。

B号住居はA号住居の北側に北端部だけが約1.4mの長さで残存する。東西の規模は全く同じである。床面はA号住居の床面よりもわずかに高い。残存部分には周溝が巡っている。主柱穴はA号住居の床下から4本検出されている。覆土にはロームを多量に含む褐色土が人為的に埋め込まれていた。B号住居に伴うカマドは明瞭には検出されていないが、A号住居のカマド燃焼部の北側にA号住居と異なる粘土が検出されていることから、ほぼ同位置で作り替えを行ったものと考えている。B号住居の南壁の位置は不明であるが、カマドはかなり南に寄った位置に付設されていたものと思われる。

遺物の大半はA号住居跡部分から出土したものである。土師器甕・坏、須恵器坏・椀・甕・蓋、折頭釘などが多量に出土している。



第38図　7 A号住居跡

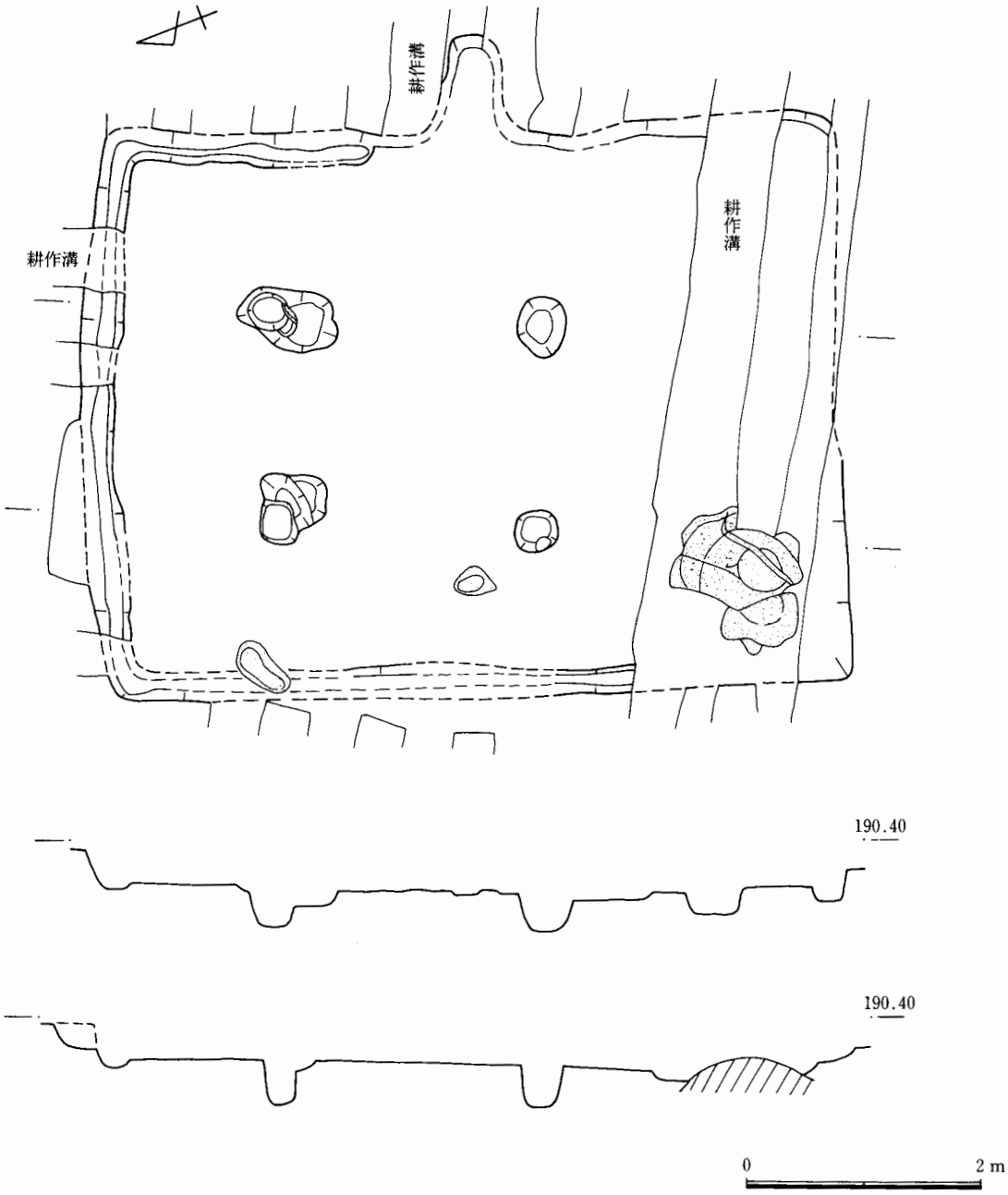


第39図　7 B号住居跡

8号住居跡（遺構第40図、遺物第59図、ＰＬ８）

８－９～９－９グリッドを中心に位置する。全体的に耕作溝によって激しく攪乱されている。４、７、11号住居跡などが近接する。

規模は東西4.8m、南北は南壁がほとんど削平されているため不確実であるが6.4m前後と思われる。深さは30～10cmを測る。平面形状はほぼ長方形を呈する。主軸方位はＮ－19°－Ｅである。残存する床面は北端部を除きよく踏み固められている。床面直上から多量の炭化材、焼土が出土しており、焼失家屋と思われる。東壁から西壁にかけて幅30cm前後、深さ10cm前後の浅い周溝が巡っている。主柱穴は４本検出されているが、プランに比してやや小さめに配置されている。カマドの大半は削平されているが、東壁のほぼ中央部に付設されている。壁面から煙道先端まで約80cmを測る。



第40図　８号住居跡

遺物はほぼ完形の土師器の甕がカマド前面右手から出土した他、土師器甕・坏、須恵器坏などが出土しているが、攪乱のためもあり量的には少ない。

9号住居跡（遺構第41図、遺物第60図、ＰＬ８）

５－７～６－７グリッドを中心に位置する。住居の中央部は現代の攪乱を受け、カマド全体と南壁中央部も時期不明の土坑によって攪乱されている。東約３ｍに13号住居跡、西約7.5ｍに２号掘立柱建物跡が近接する。

東西4.8ｍ、南北5.6ｍ、深さ約30cmを測る。平面形状は南壁が短く、若干歪んだ長方形状を呈する。主軸方位はＮ－15°－Ｅである。

床面はカマド前面を中心に、ほぼ全体がよく踏み固められている。幅20cm、深さ10cm前後の周溝が全面に巡っている。南東隅部は耕作溝の攪乱によって不明瞭であるが、長さ90cm、幅70cm程度に拡幅することから貯蔵穴の可能性がある。主柱穴はほぼ対角線上に４本検出されている。直径30cm前後、深さ30～40cmの規模である。

遺物は土師器甕・坏、須恵器坏・甕、刀子、石製紡錘車などが出土している。

10号住居跡（遺構第42図、遺物第61・62図、ＰＬ８・９）

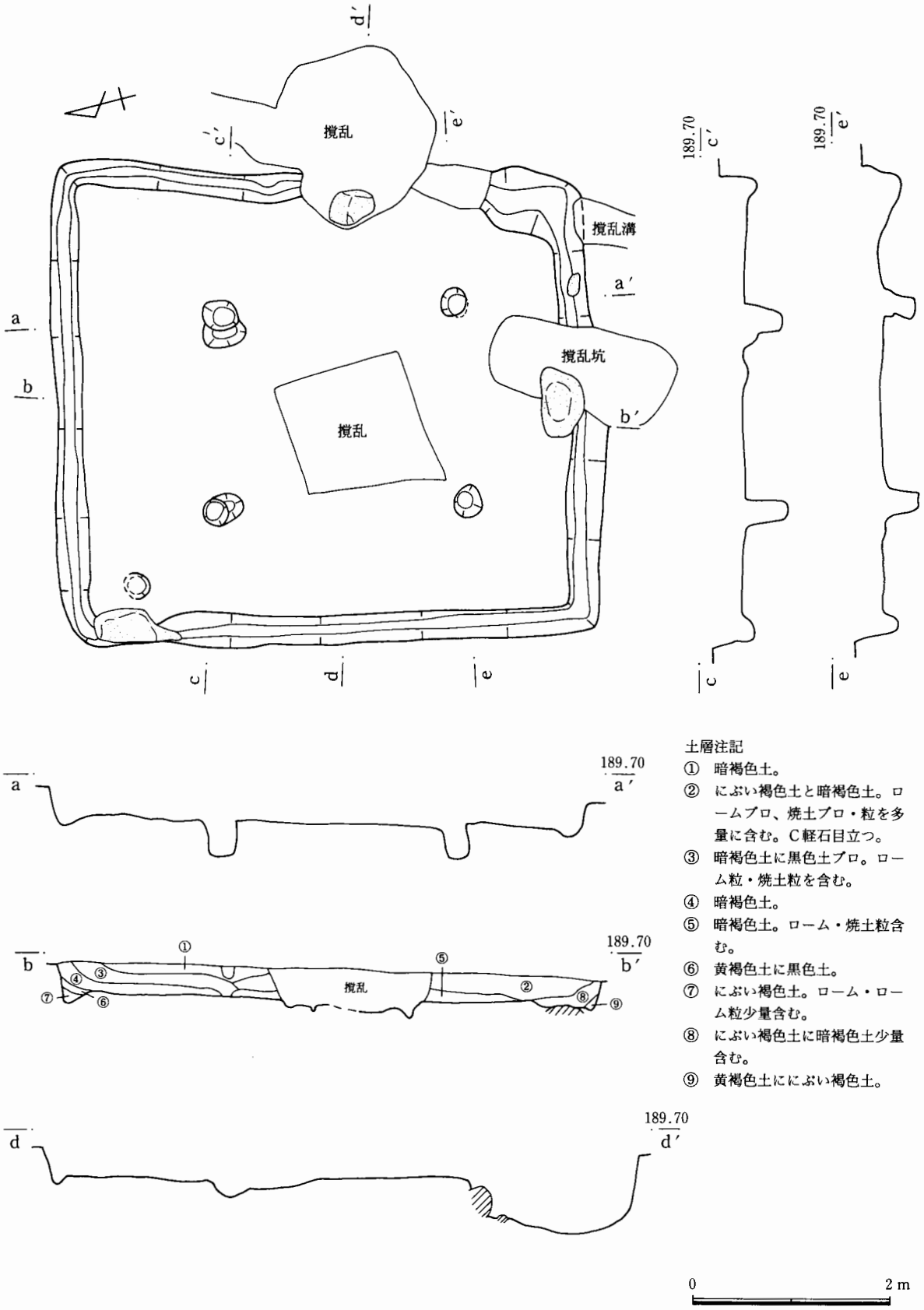
22－15～22－16グリッドに位置する。北壁西寄りには比較的新しい土坑状の攪乱が重複する。南西４ｍに１号住居跡が近接する。また、南東約40cmに土坑が近接するが、本項で後述する。

平面形状はほぼ方形を呈する東半部と、西に行くに従い幅が漸増する隅丸方形状の西半部を結合させたような東西に細長い形状である。規模は東西が約６ｍ、南北は東半部が約2.6ｍ、西端部が約3.4ｍを測る。深さは20～40cmである。主軸方位はＮ－21°－Ｅである。

床面は平坦で西側は非常によく踏み固められているが、東側は若干柔らか目である。貯蔵穴は南東隅に検出された。径50cm前後、深さ30cmを測り、円形を呈する。カマドは東壁の南寄りに付設され、燃焼部から煙道の縁辺にローム粘土が残存する。焚口直前の床面に密着してカマド軸線上から羽口が出土している。東半部の南半には南壁に寄せて截頭円錐形を呈するローム粘土を用いた台状の施設が設けられていた。この頂部東寄りには長さ約40cmの細長い台石状の礫が据えられ、中央部北寄りの凹みを中心にして多量の鉄滓、鉄片、羽口が出土している。なお、この施設の南端中央から南壁を剔り込む形でピットが検出されたが、その機能は不明である。西半部の若干北西に寄って石組炉が検出されている。底面の土は高温の焼成により青味がかっており、内部から羽口が出土した。この石組炉の南側には重複する深浅の土坑２基が穿たれ、その埋土中位に台石状の礫が据えられていた。さらにその東側に重複して長径1.3ｍ×短径1.2ｍ×深さ0.7ｍの楕円形を呈する土坑が検出され、埋土中から多量の鉄滓、羽口片が出土した。柱穴は中央部に南北に並んで２基、南壁の中央に１基、北壁の西寄りに１基、西壁の中央に南北に並んで２基が検出されている。西壁南寄りにかかる土坑は攪乱の可能性がある。

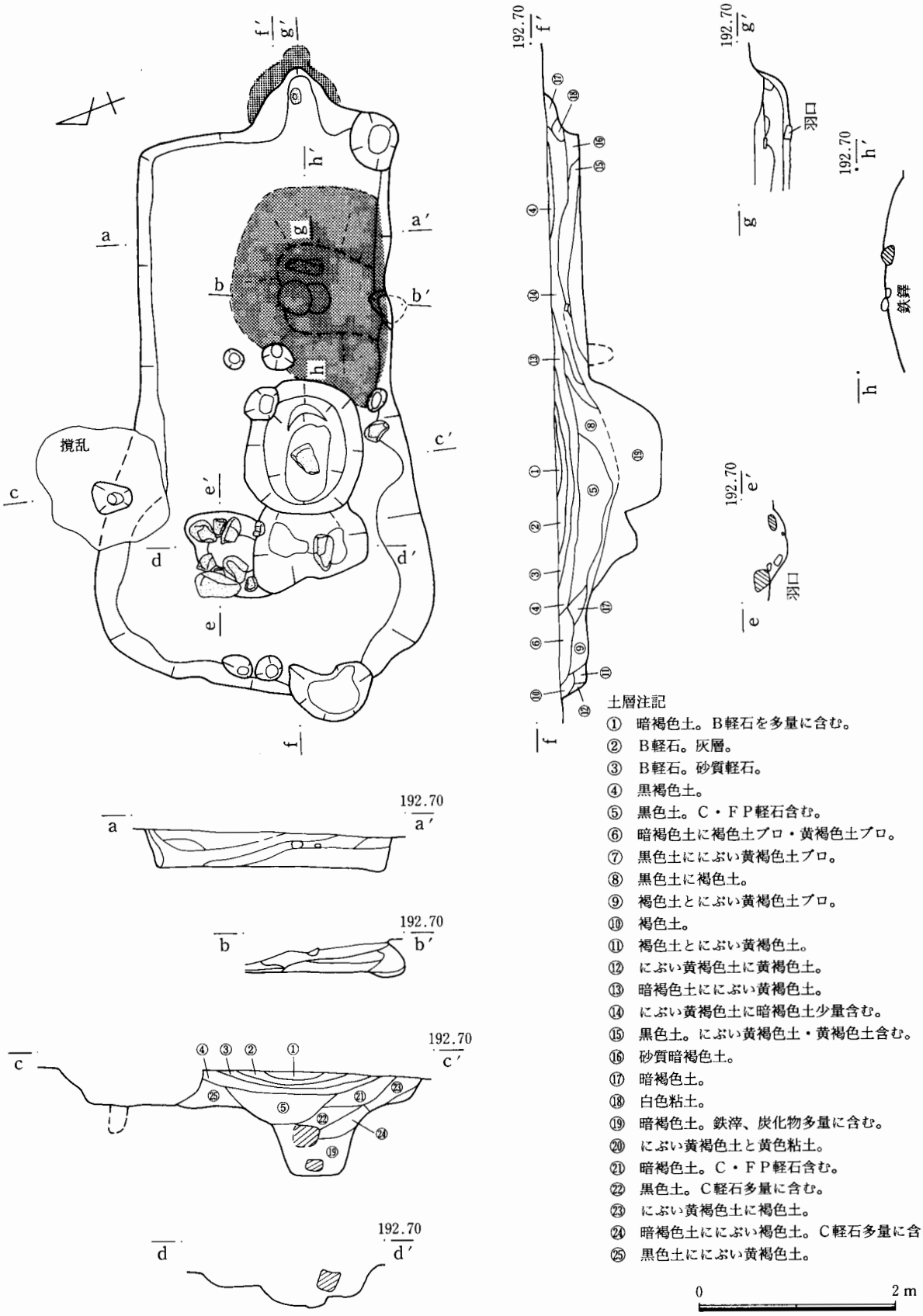
遺物は鉄滓、湯玉、鉄片、羽口が多量に出土している。前記した排滓坑とローム施設以外では、北西隅と南壁西端部には床面から壁面に密着して多量の鉄滓、羽口が投棄され、東半部の埋土中からは羽口が目立って出土している。土器は土師器坏・甕・脚付小型甕・鉢、須恵器蓋・坏・皿・甕が出土している。

南東に近接する土坑は、長径1.3ｍ、短径1.15ｍ、深さ20cmで多少歪んだ円形を呈する土坑である。掘り込みは浅いが、底面から壁面にかけて厚くローム粘土が貼られており、少量の鉄滓が出土している。用途ははっ



土層注記
① 暗褐色土。
② にぶい褐色土と暗褐色土。ロームブロ、焼土ブロ・粒を多量に含む。C軽石目立つ。
③ 暗褐色土に黒色土ブロ。ローム粒・焼土粒を含む。
④ 暗褐色土。
⑤ 暗褐色土。ローム・焼土粒含む。
⑥ 黄褐色土に黒色土。
⑦ にぶい褐色土。ローム・ローム粒少量含む。
⑧ にぶい褐色土に暗褐色土少量含む。
⑨ 黄褐色土ににぶい褐色土。

第41図　9号住居跡


f′ g′
h′
a
a′
g
b
b′
h
c′
撹乱
c
e′
d
d′
e
f
192.70
f′
192.70
g′
羽口
g
192.70
h′
鉄滓
h
192.70
e′
羽口
e
192.70
a
a′
192.70
b
b′
192.70
c
c′
192.70
d
d′
土層注記
① 暗褐色土。B軽石を多量に含む。
② B軽石。灰層。
③ B軽石。砂質軽石。
④ 黒褐色土。
⑤ 黒色土。C・FP軽石含む。
⑥ 暗褐色土に褐色土ブロ・黄褐色土ブロ。
⑦ 黒色土ににぶい黄褐色土ブロ。
⑧ 黒色土に褐色土。
⑨ 褐色土とにぶい黄褐色土ブロ。
⑩ 褐色土。
⑪ 褐色土とにぶい黄褐色土。
⑫ にぶい黄褐色土に黄褐色土。
⑬ 暗褐色土ににぶい黄褐色土。
⑭ にぶい黄褐色土に暗褐色土少量含む。
⑮ 黒色土。にぶい黄褐色土・黄褐色土含む。
⑯ 砂質暗褐色土。
⑰ 暗褐色土。
⑱ 白色粘土。
⑲ 暗褐色土。鉄滓、炭化物多量に含む。
⑳ にぶい黄褐色土と黄色粘土。
㉑ 暗褐色土。C・FP軽石含む。
㉒ 黒色土。C軽石多量に含む。
㉓ にぶい黄褐色土に褐色土。
㉔ 暗褐色土ににぶい褐色土。C軽石多量に含む。
㉕ 黒色土ににぶい黄褐色土。
0
2 m

第42図　10号住居跡

きりしないが、位置や特殊な構造から10号住居跡に伴うものと考えている。

11号住居跡（遺構第43図、ＰＬ９）

７―11～８―11グリッドに位置する。南側は石抜き坑により攪乱されている。東側は調査区域外である。北壁には２基の土坑が重複するが新旧関係は不明である。

規模は東西約2.4m以上、南北4.2m以上である。深さは約10cmと浅い。床面は比較的堅緻である。北壁から西壁にかけて明瞭に周溝が巡るが、地山から露出する礫の影響のためか幅が一定していない。幅20cm以上で、深さ10cm前後を測る。遺物は土師器・須恵器の小破片が出土しただけである。

南側の土坑は長径1.4m、短径1.1m、深さ40cmを測り、楕円形を呈する。

北側の土坑は短辺1.2m、長辺1.2m以上、深さ25cmを測り、歪んだ隅丸長方形状を呈する。

12号住居跡（遺構第44図、遺物第63図、ＰＬ９）

５―３～５―４グリッドに位置する。北～東に２・３号掘立柱建物跡が近接する。

東西2.6m、南北3.7m、深さ36～12cmを測る。平面形状はやや歪んだ隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ―10°―Ｅである。南東隅に柱穴状の小ピットが掘削されている。径30cm、深さ20cmを測る。床面はカマド前面を中心に比較的良く踏み固められている。壁は若干角度をもって立ち上がる。南壁の中央部に接して東西60cm、南北40cm、床面からの高さ15cmほどの範囲にローム粘土を盛り上げており、入口施設と思われる。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部の両側面はかなり焼土化が進んでいる。右袖部には礫が残存する。焚口から煙道部先端まで約１ｍを測る。

遺物は土師器坏、須恵器坏・高台付椀等が少量出土した。

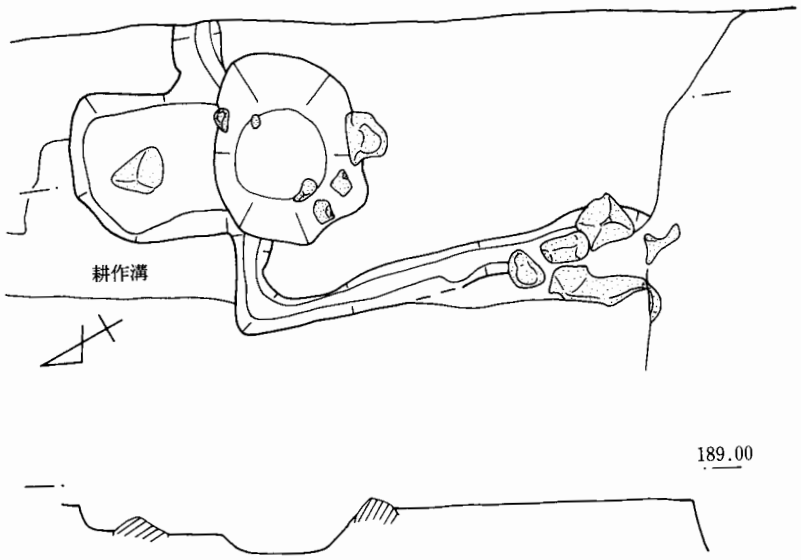
13Ａ・Ｂ号住居跡（遺構第45図、遺物第64図、ＰＬ９）

４―８～４―９グリッドに位置する。西方に９号住居跡が近接する。２本の耕作溝により床面下まで攪乱されている。床面を上げ、南側に約30cm拡幅を行ったと考えられる。拡張後の住居をＡ号、拡張前の住居をＢ号とする。

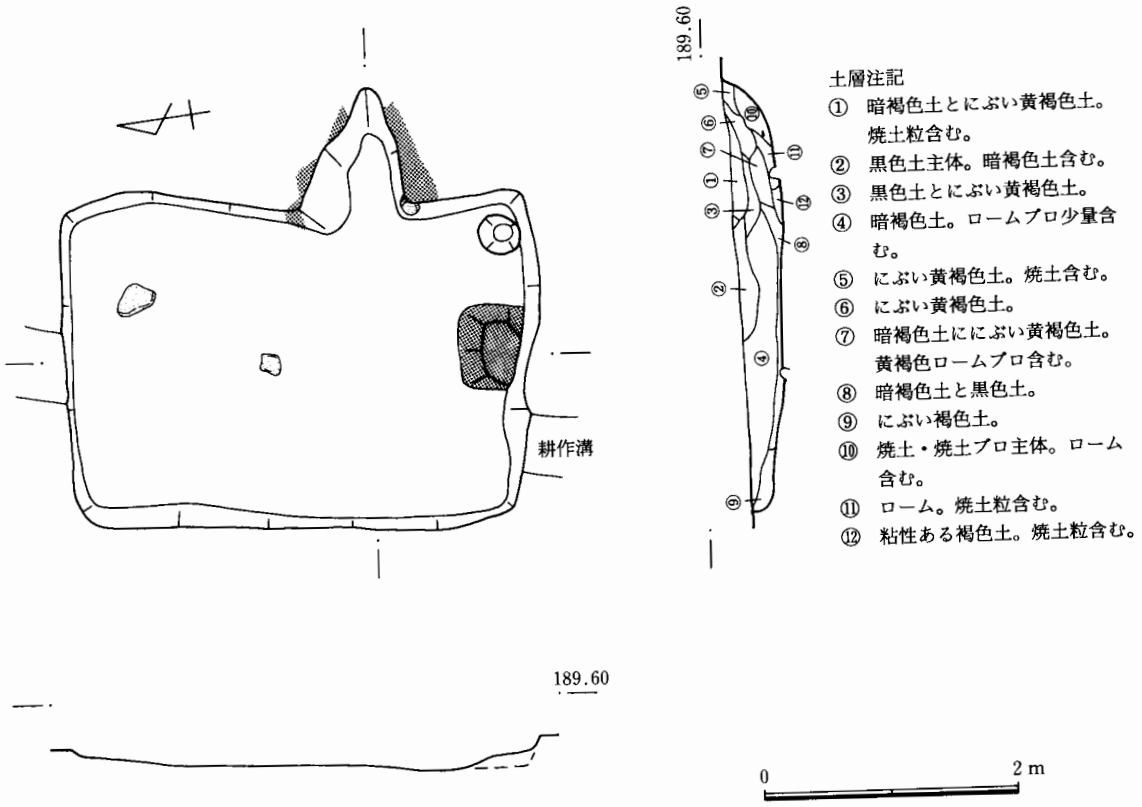
Ａ号住居跡は東西3.0m、南北3.8m、深さ24cmを測る。平面形状は南壁が北壁よりもやや短く歪んだ隅丸方形を呈する。主軸方位はＮ―14°―Ｅである。床面は平坦であるがあまり踏み固められていない。壁面は比較的直に立ち上がる。西壁の中央部に周溝が検出されているが、他の部分に続くかどうか不明瞭である。南東隅には長径50cm×短径40cm、深さ15cmの貯蔵穴が掘削されている。カマドは東壁のほぼ中央に付設されている。右袖が残存しており、長さ約60cmを測る。左袖は不明確である。現況での焚口幅約80cm、左袖部から煙道部先端まで約１ｍを測る。

Ｂ号住居は東西3.0m、南北3.5m、深さ35cmを測る。平面形状は南壁が北壁よりもやや短く歪んだ隅丸方形状を呈する。主軸方位はＮ―14°―Ｅである。床面は堅緻で数回の貼り替えが認められる。壁面は比較的直に立ち上がる。西壁から南壁にかけて周溝が検出されている。南東隅には長径40cm×短径30cm、深さ20cmの貯蔵穴が掘削されている。カマドはＡ号住居と同位置、東壁のやや南寄りに付設されていたと思われる。カマド南側の東壁上段には検出面直下にローム粘土を貼った施設（棚状遺構）が検出されているが、明確な形状、用途は不明である。

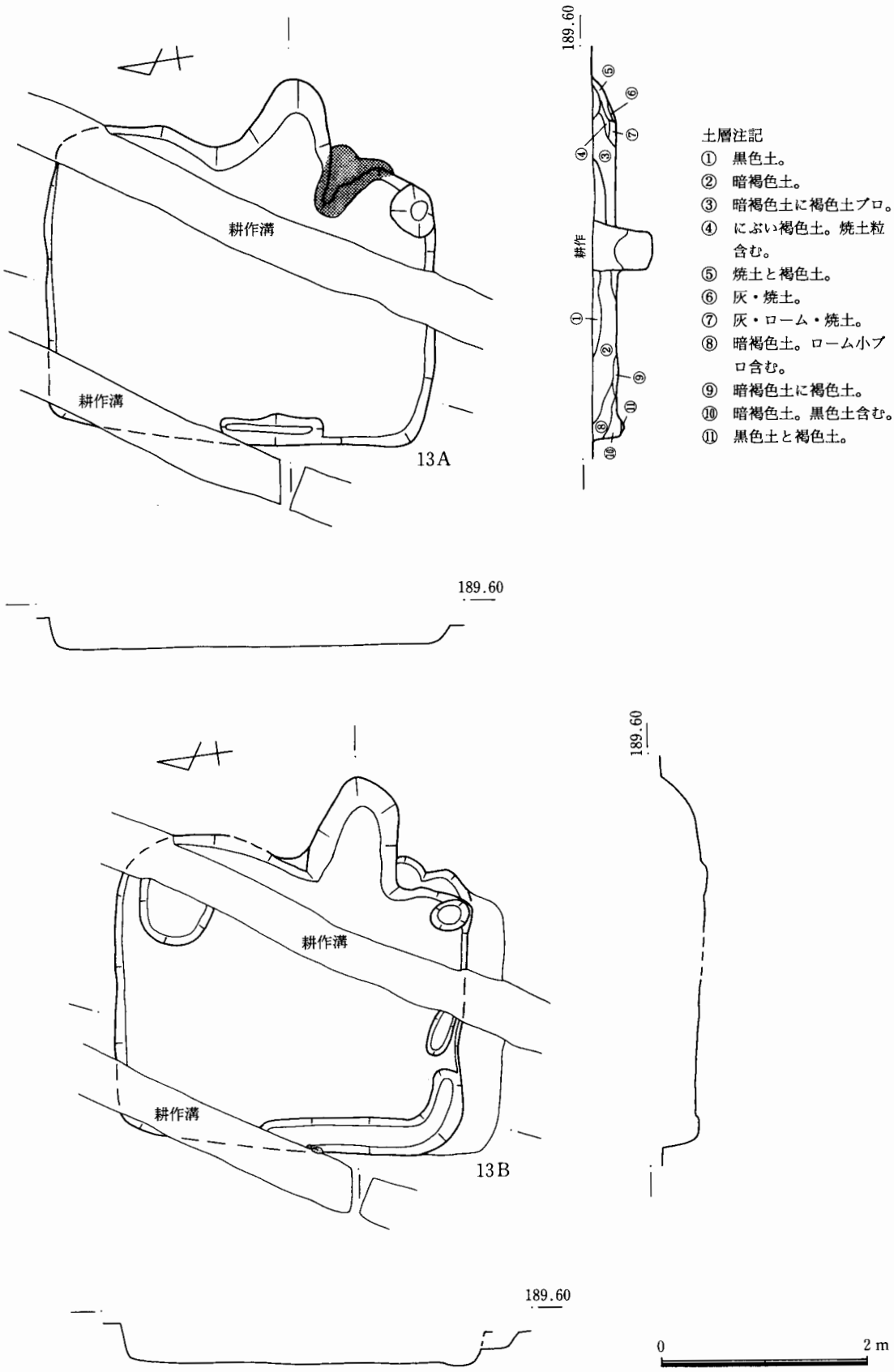
遺物の大半はＡ号住居部分から出土したもので、土師器甕、須恵器坏等少量出土しただけである。



第43図　11号住居跡



第44図　12号住居跡



第45図　13A・B号住居跡

(3)　掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（遺構第46図、ＰＬ10）

９－６グリッドに位置する。４号掘立柱建物跡が西約1.5mに近接する。

建物構造は２間×２間であるが、東辺の間柱は検出されていない。規模は東西3.6m×南北3.8mを測る。主軸方位はＮ－12°－Ｅである。柱間はほぼ等間隔である。柱穴形状は円形で径20～40cm、深さ20cm前後を測る。

遺物は出土していないが、覆土の状況等から平安時代と考えている。

2号掘立柱建物跡（遺構第49図、ＰＬ10）

実測図紛失のため詳細は提示できないが、全体図から平面図だけ復元する。

５－５～６－５グリッドに位置する。北西約1.5mに３号掘立柱建物跡が近接する。

建物構造は東西２間×南北３間で、規模は東西約3.3m×南北約4.2mを測る。主軸方位はＮ－１°－Ｅである。柱間は梁間は1.6m前後でほぼ等間隔であるが、桁行は北側一間が１尺程度長い。柱穴形状は円形で径15～30cmである。

遺物は出土していないが、覆土の状況等から平安時代の構築と考えている。

3号掘立柱建物跡（遺構第49図、ＰＬ10）

実測図紛失のため詳細は提示できなが、全体図から平面図だけ復元する。

６－４～７－４グリッドに位置する。南東1.5mに１号掘立柱建物跡、南５mに12号住居跡が近接する。

建物構造は東西１間×南北１間で、規模は東西2.5m×南北2.3mを測る。短軸方位はほぼ南北である。柱穴形状は円形で、径20～25cmである。

遺物は出土していないが、覆土の状況等から平安時代の構築と考えている。

4号掘立柱建物跡（遺構第47図、ＰＬ10）

９－５～10－５グリッドに位置する。東1.5mに１号掘立柱建物跡、南東２mに６号住居跡が近接する。

建物構造は基本的に東西１間×南北１間と思われるが、北辺だけ２間となっている。規模は東西2.3m、南北2.6mを測る。長軸方位はＮ－20°－Ｅである。柱穴形状は円形で、南東隅柱だけが径30cm、深さ30cmと大きく、他は径15cm前後、深さ10cm前後と揃っている。

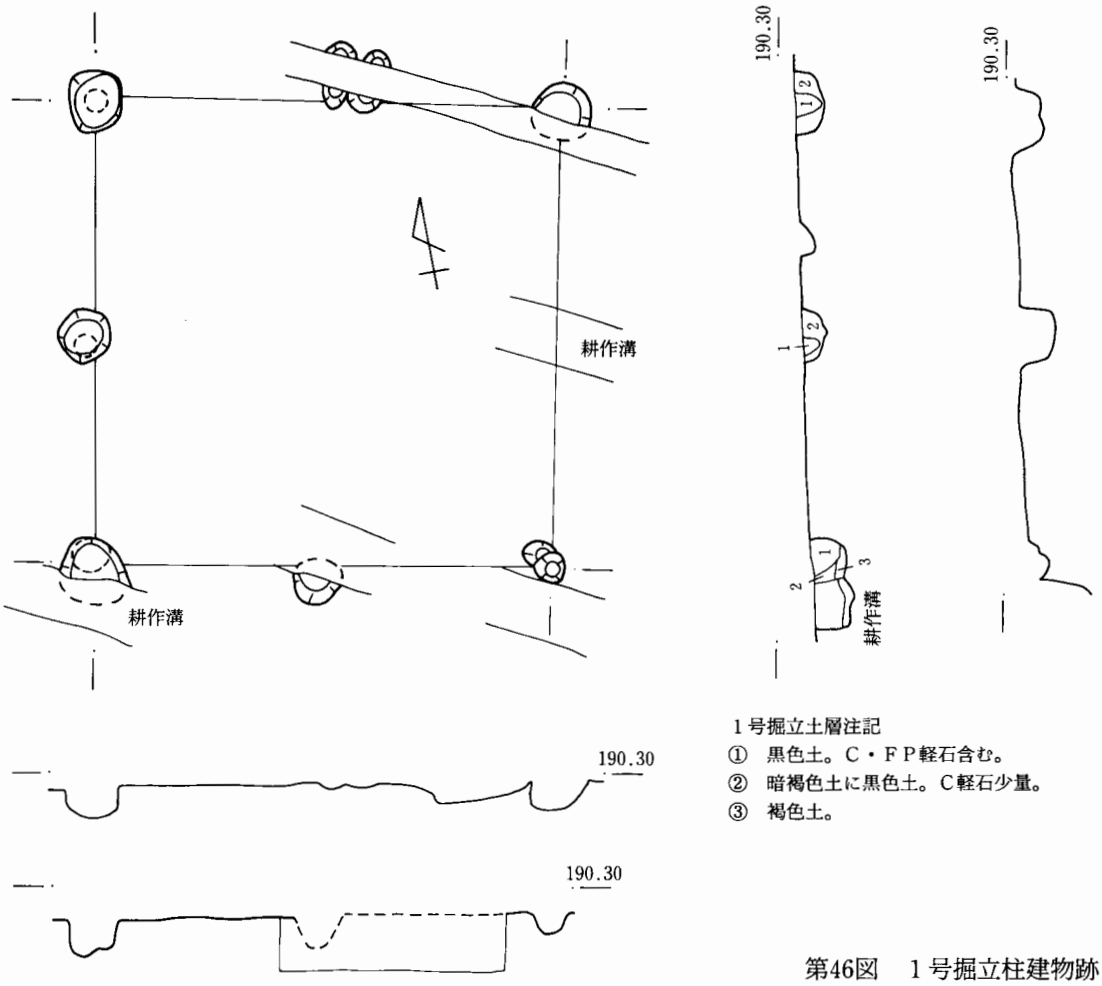
遺物は出土していないが、覆土の状況等から平安時代の構築と考えている。

5号掘立柱建物跡（遺構第48図、ＰＬ10）

10－９～11－９グリッドに位置する。東１mに４号住居跡、南西１mに７号住居跡が近接する。

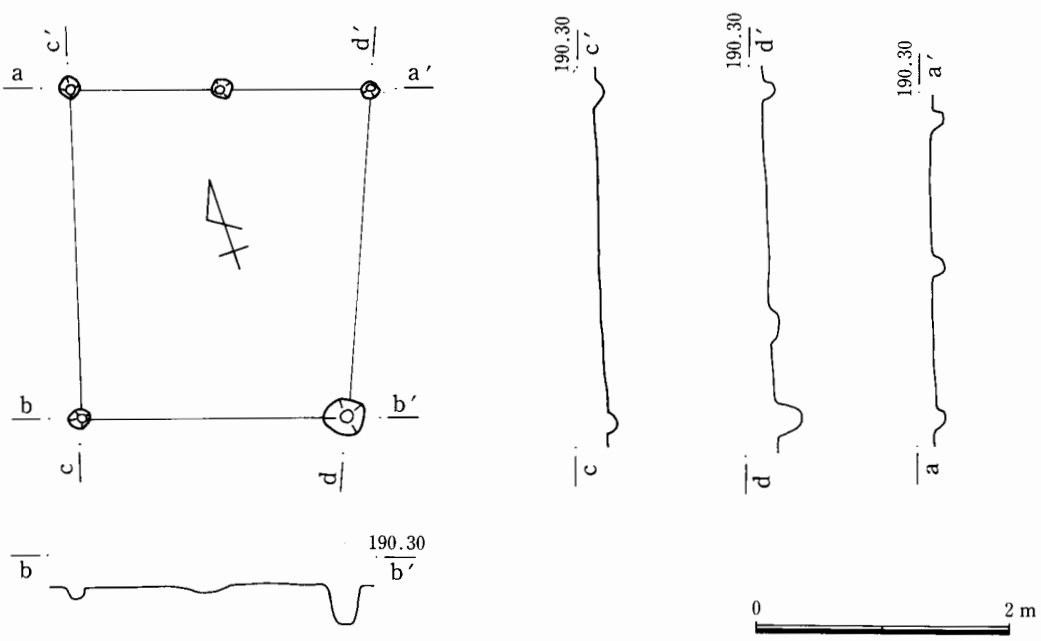
建物構造は東西３間×南北１間で、規模は東西5.05m×南北3.3mを測る。主軸方位はＮ－72°－Ｗである。桁行の柱間は中央が1.95m前後と広く、他は1.4～1.6mと狭くなっている。柱穴形状は円形で、径20～30cm、深さ20～40cmを測る。

遺物は出土しておらず、平安時代の構築と考えたが、構造的には中近世の可能性もある。

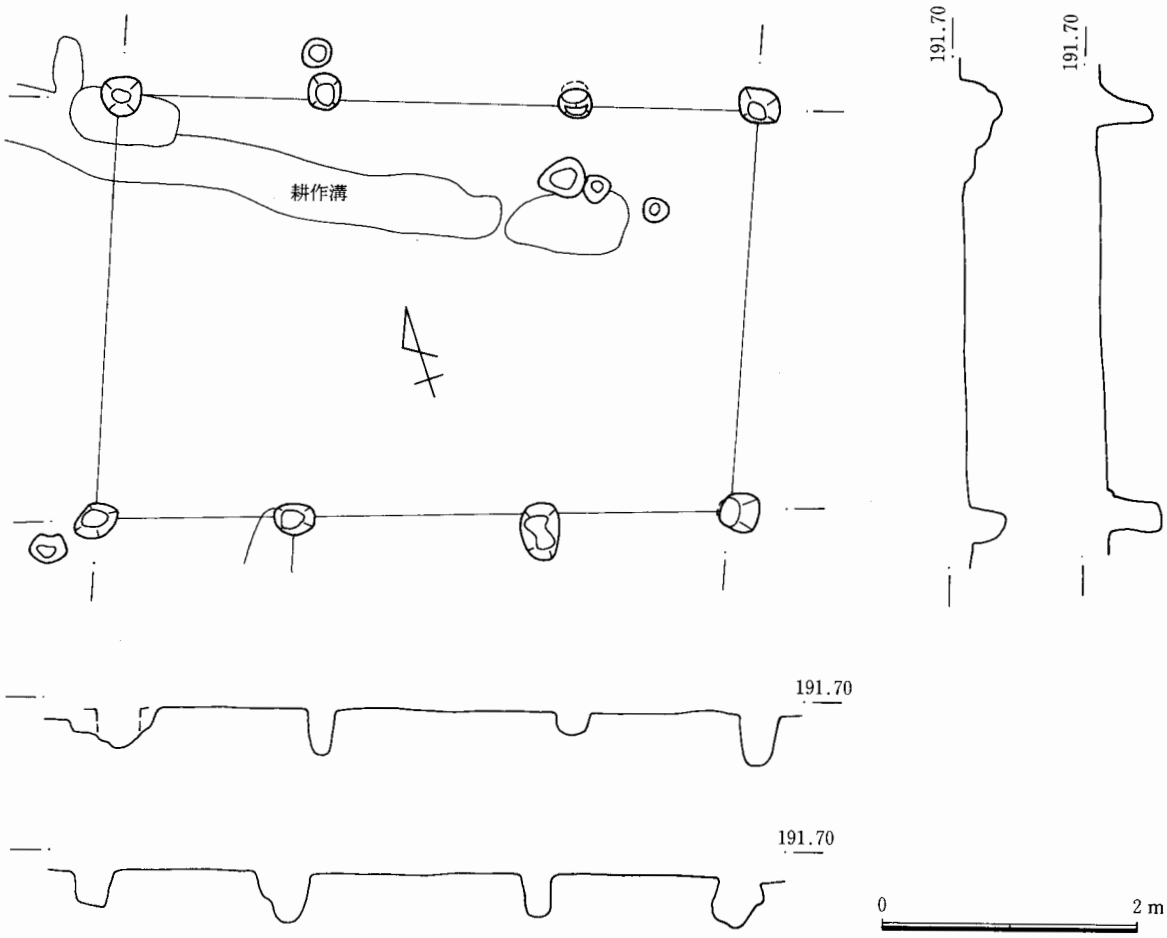


1号掘立土層注記
① 黒色土。C・FP軽石含む。
② 暗褐色土に黒色土。C軽石少量。
③ 褐色土。

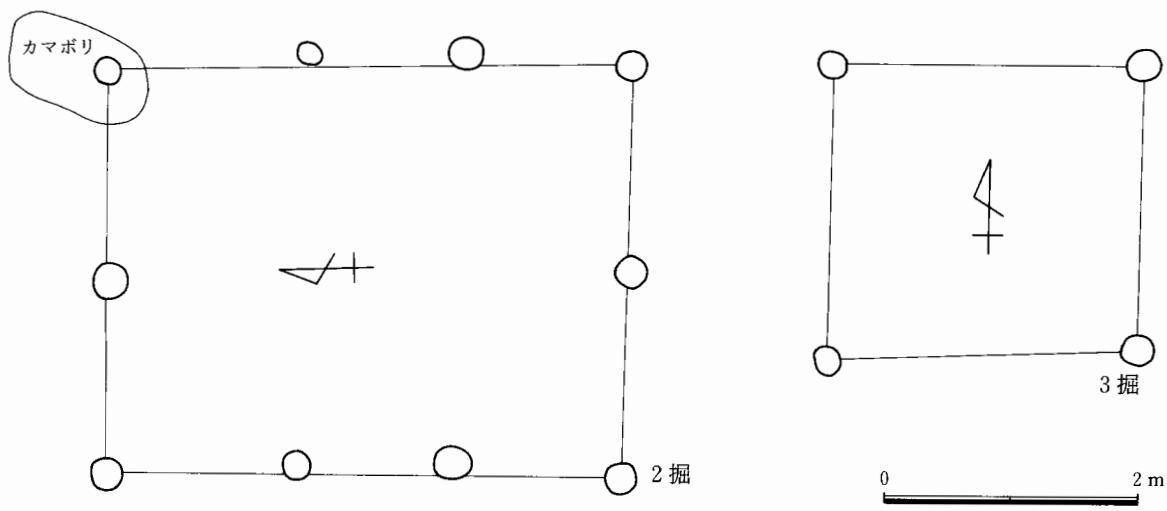
第46図　1号掘立柱建物跡



第47図　4号掘立柱建物跡



第48図　5号掘立柱建物跡



第49図　2・3号掘立柱建物跡

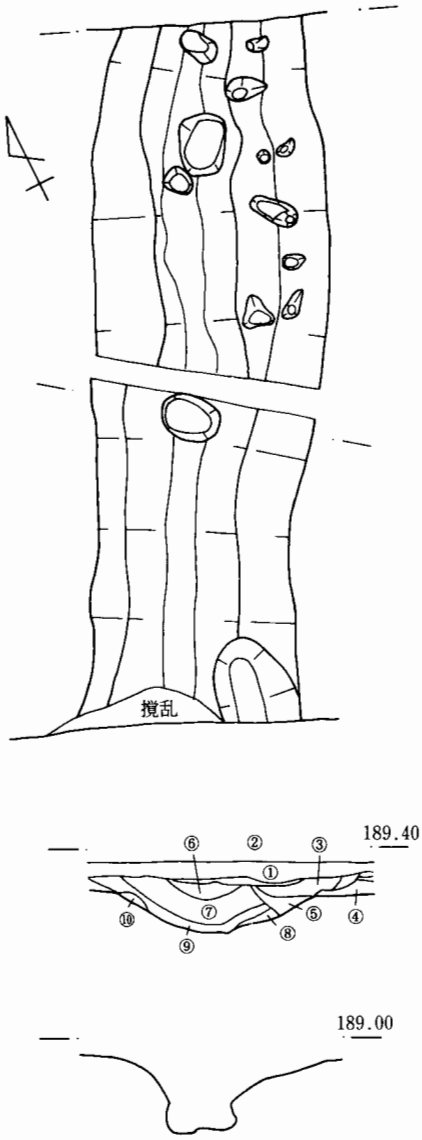
(4) 溝　　跡

6号溝（遺構第50図、ＰＬ10）

調査区の南東端部、２―12グリッドを中心に位置する。５号溝とほぼ平行している。

幅2.4m、深さ40～60cmを測り、長さ約7.4mの範囲を調査した。埋土上層に浅間Ｂ軽石が純層堆積する。方位はＮ―28°―Ｅである。断面形は鍋底状を呈し、底面には砂礫で埋まった流水痕が検出されている。

遺物は出土していない。



土層注記
① 砂質暗褐色土（表土）。
② Ｂ軽石純層（砂質軽石）。
③ 黒色土。Ｃ軽石含む。
④ 黒褐色土に褐色土。
⑤ 暗褐色土に黒褐色土。
⑥ 暗褐色土。
⑦ 黒褐色土。ローム、Ｃ・ＦＰ軽石含む。
⑧ 暗褐色土に褐色土。ローム含む。
⑨ 暗褐色土。ロームブロック少量含む。
⑩ 褐色土に黄褐色ローム多量。

0　　2 m

第50図　６号溝

(5) 柱 穴 群（実測図未掲載）

掘立柱建物跡や柵列として明確には復元できない柱穴群が概ね３ケ所に検出されている。

柱穴群Ａ

Ｊ４号住居跡の南側から東側にかけて疎らに検出された。Ｊ４号住居跡の覆土中にも数基が検出されている。この中には直線的な配列を呈するものもあり、その位置関係からすれば中世の城館跡に伴うものが含まれる可能性がある。

柱穴群Ｂ

中世掘立柱建物跡群の南側、４号溝の東側にまとまって検出された。この場合でも１列３～４基の配列が看取できた部分もあるが、柵列として報告できるほど明瞭ではない。

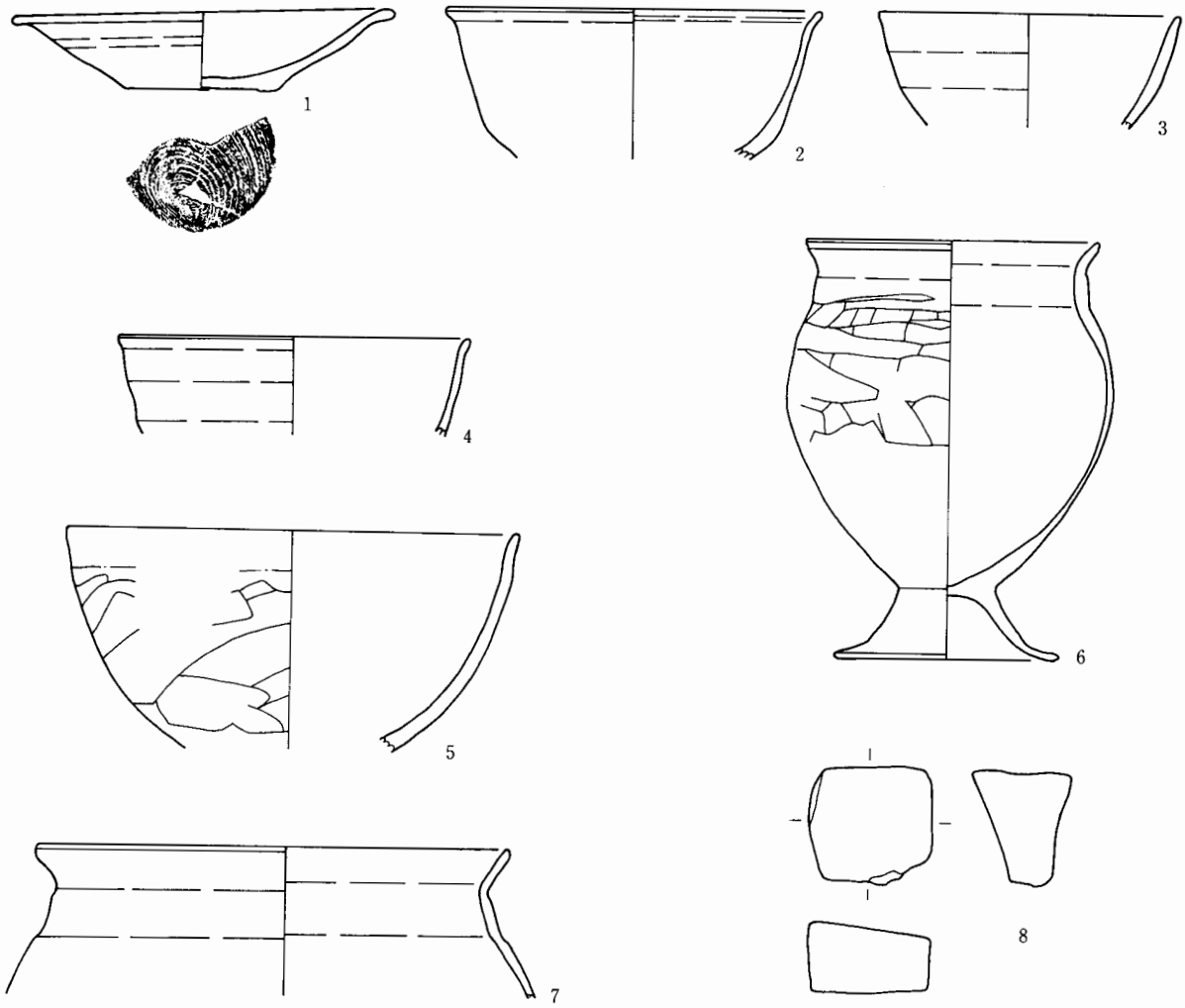
柱穴群Ｃ

Ｂ群の南西に空白帯を挟んで検出された。５号掘立柱建物跡・４号住居跡の周辺を含んで北側に位置する。この場合はごく疎らであり、概ね直線的に配列されるものは、区画のための柵列を想定することも可能と思われる。

柱穴の形状はすべて円形である。規模は一定していないが、径や深さが総じて小さく、中世の掘立柱建物跡とは明瞭な差が認められる。平安時代の３・４号掘立柱建物跡の柱穴の規模と近似するものが多い。

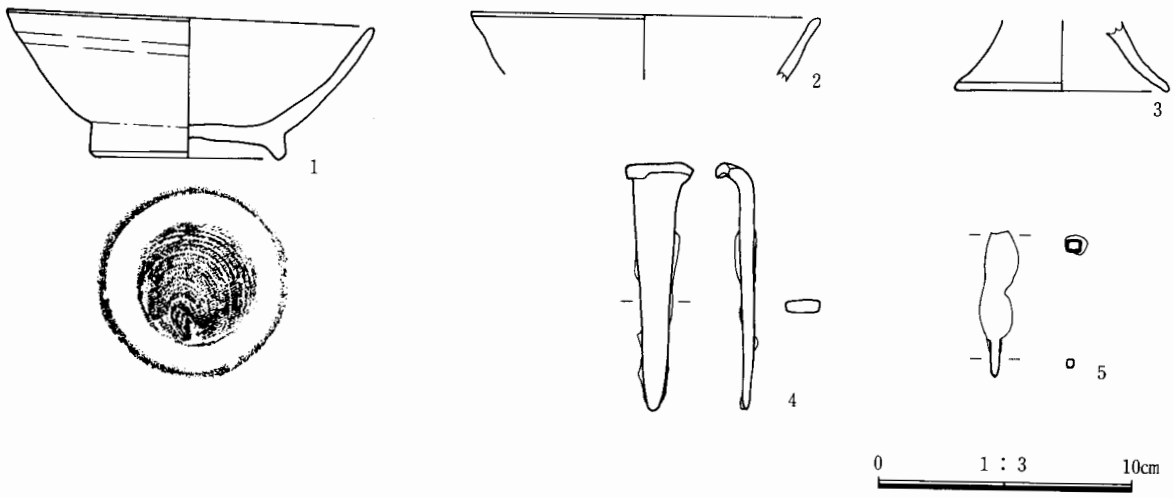
(6) 出土遺物

（第51図～第64図、観察表第10表～第20表、ＰＬ25～ＰＬ29）



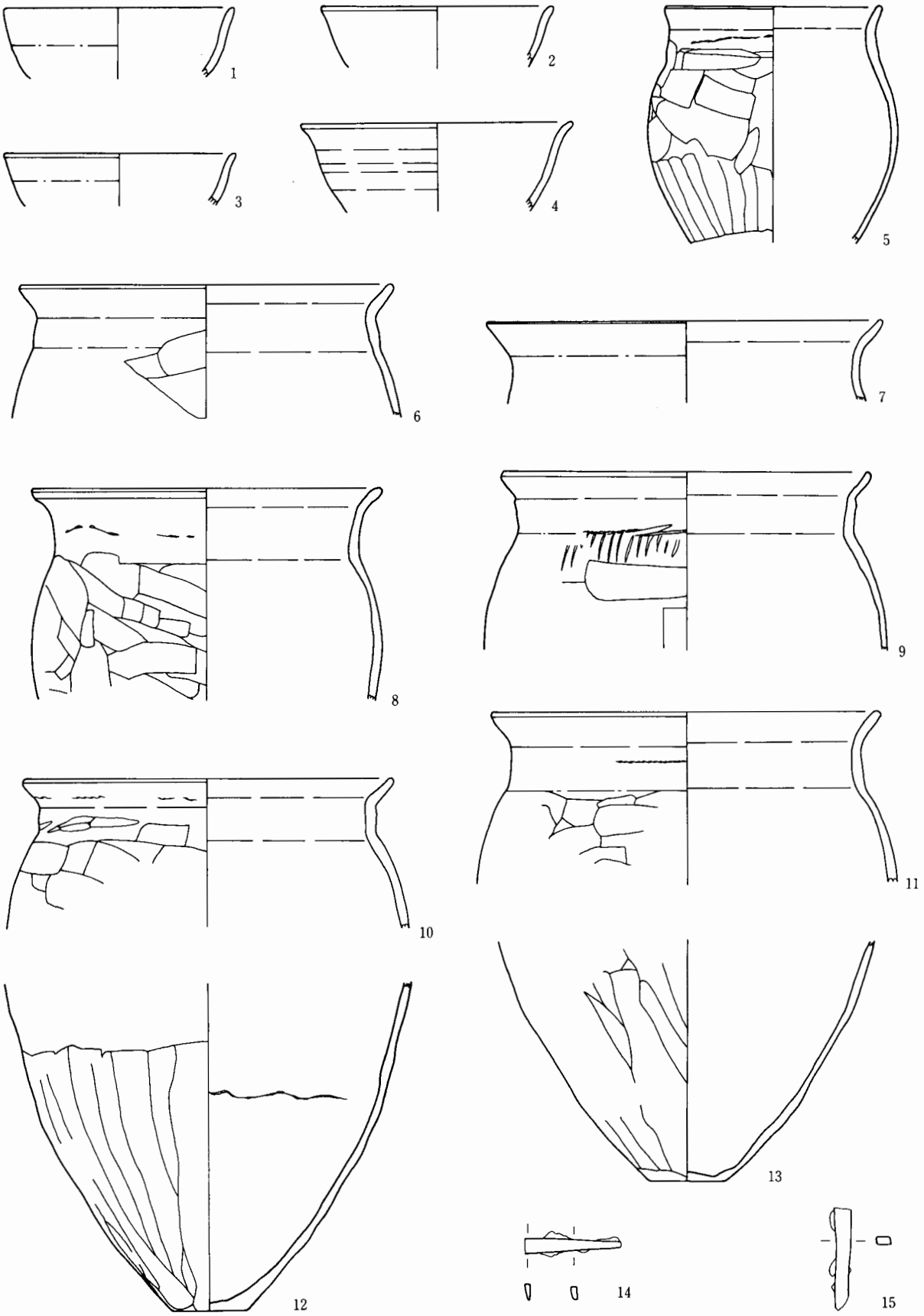
第51図　1号住居跡出土遺物

0　1：3　10cm



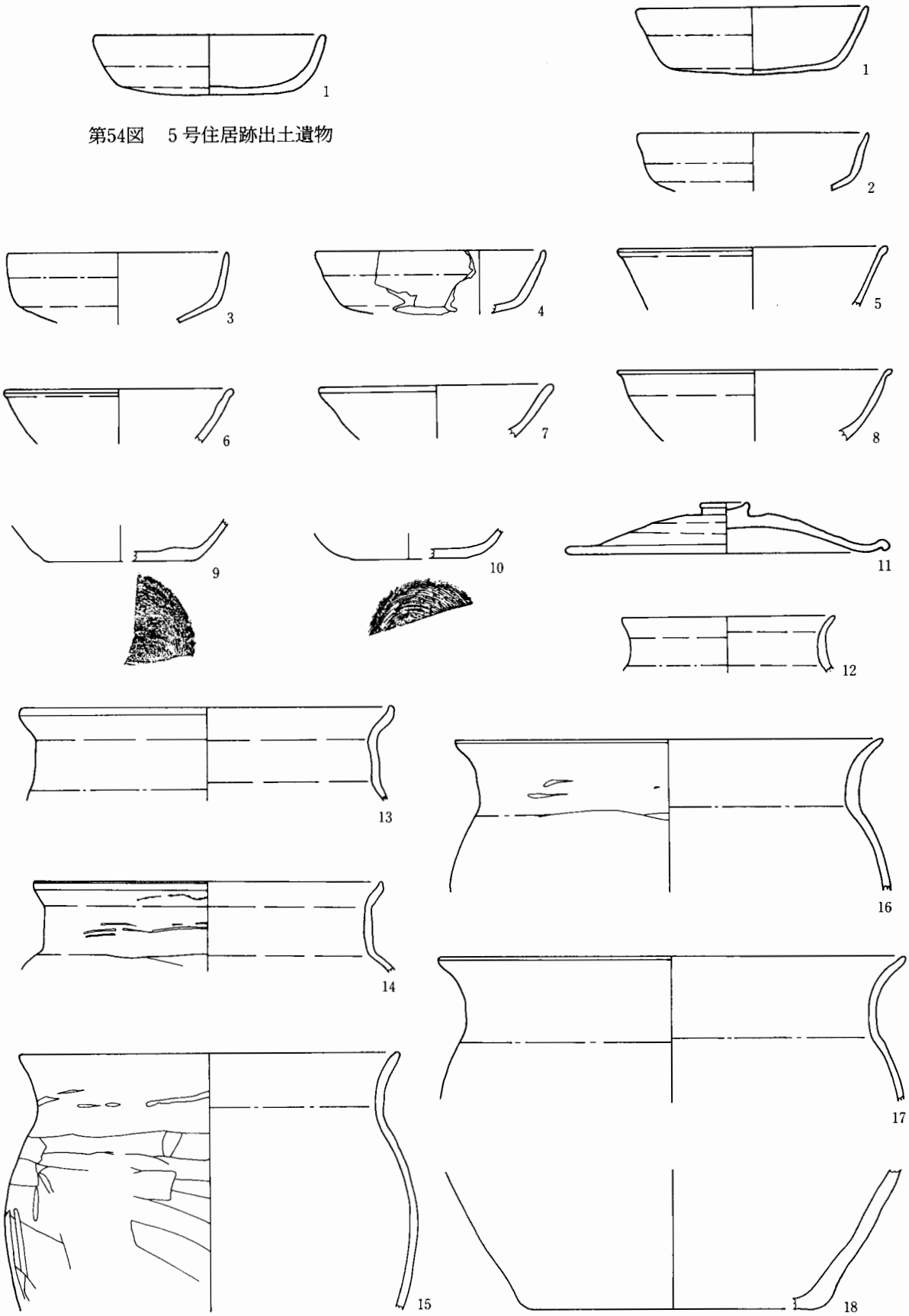
0　1：3　10cm

第52図　3号住居跡出土遺物



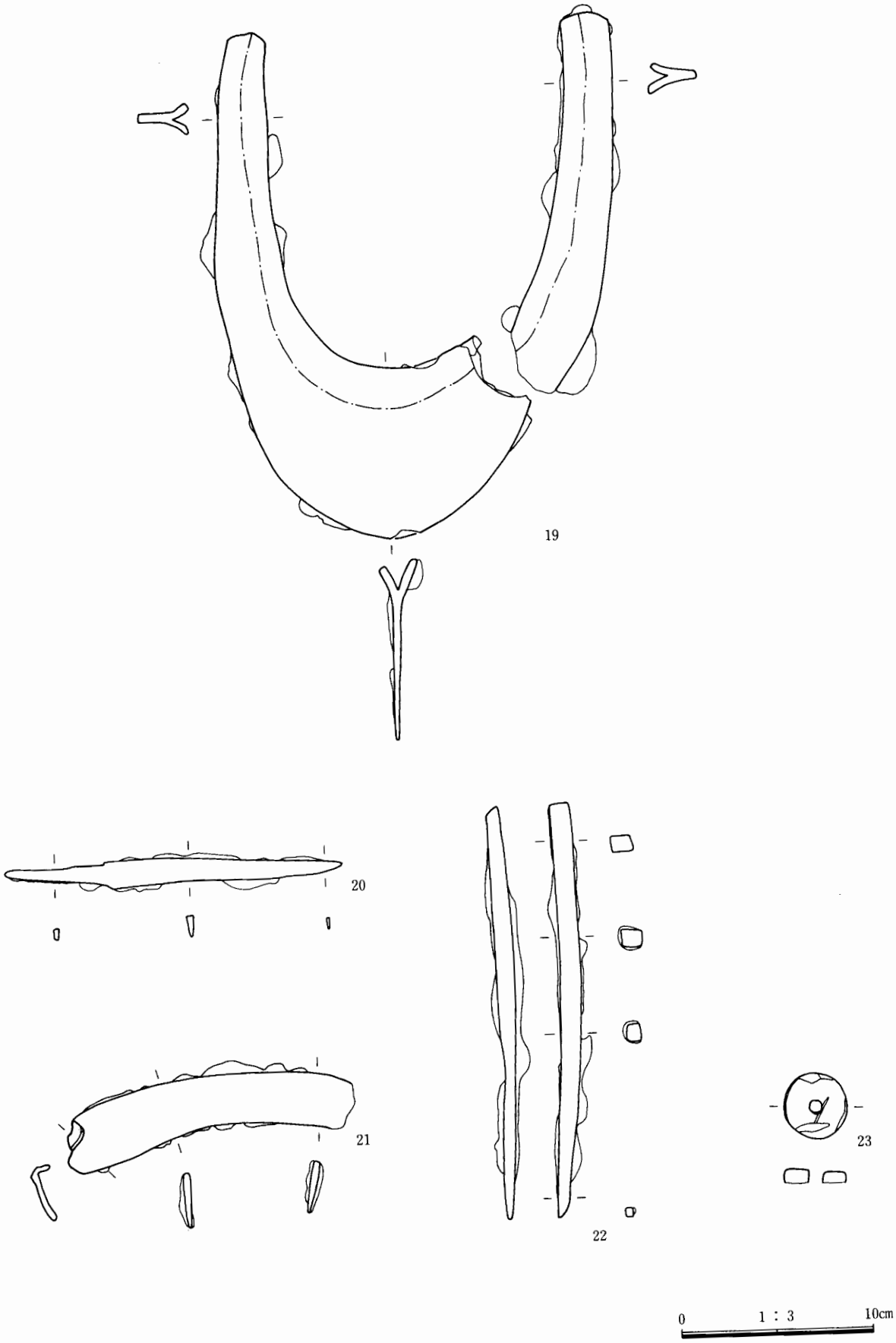
第53図　4号住居跡出土遺物

第54図　5号住居跡出土遺物

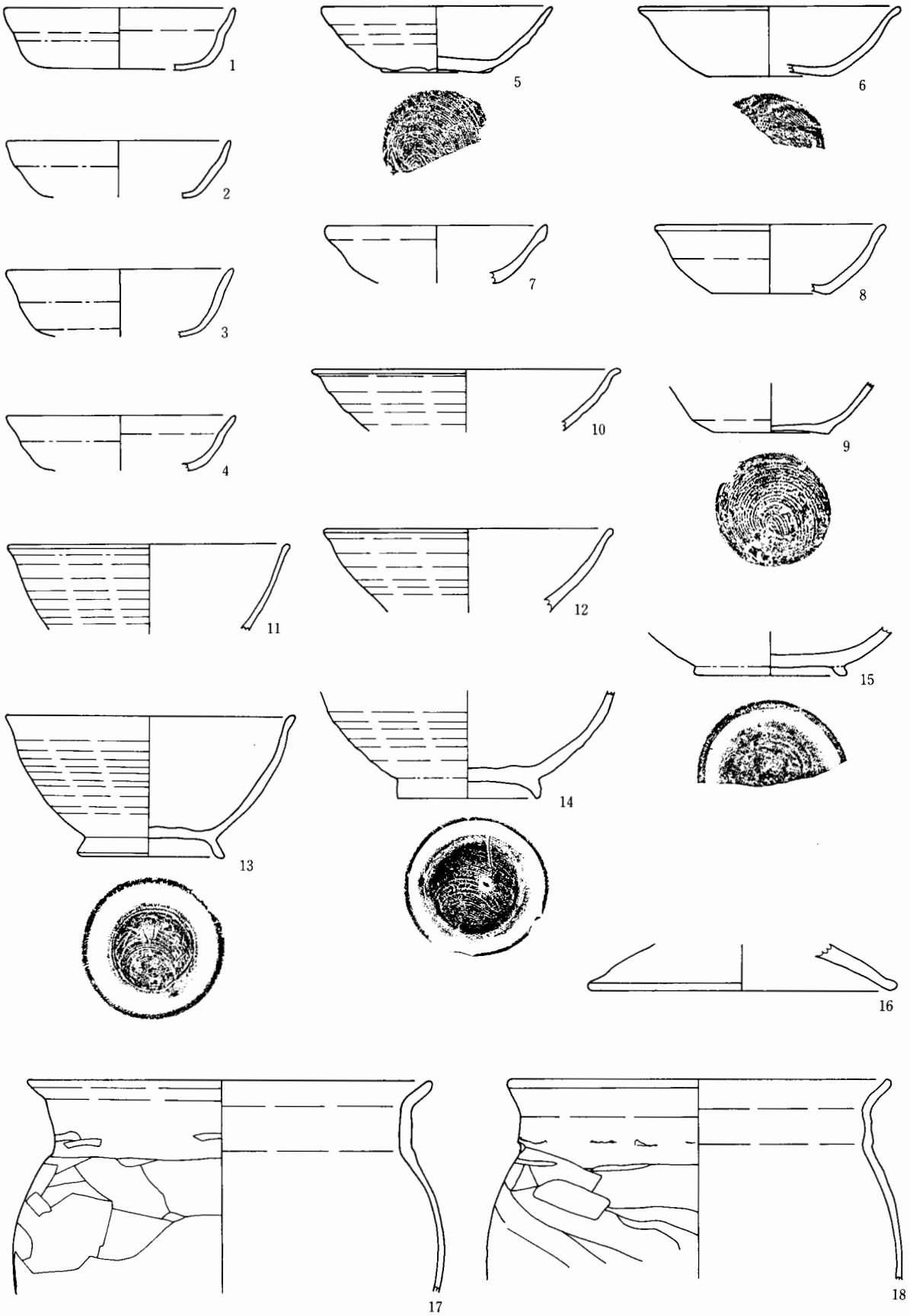


第55図　6号住居跡出土遺物(1)

0　1：3　10cm

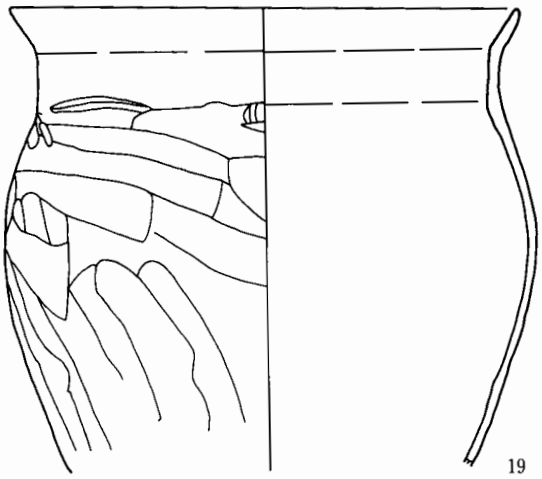


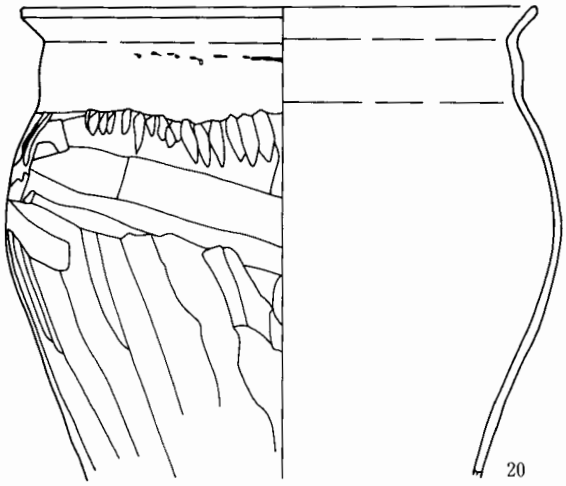
第56図　6号住居跡出土遺物(2)

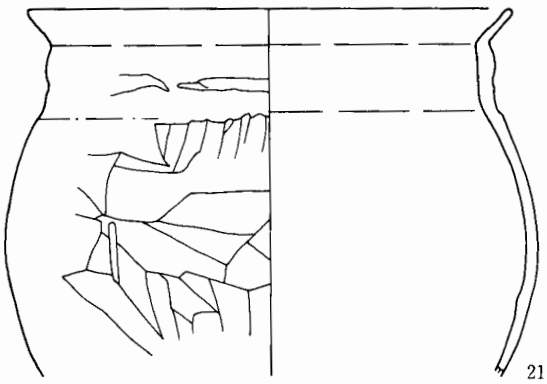


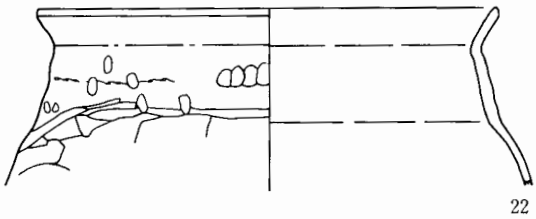
第57図　7号住居跡出土遺物(1)

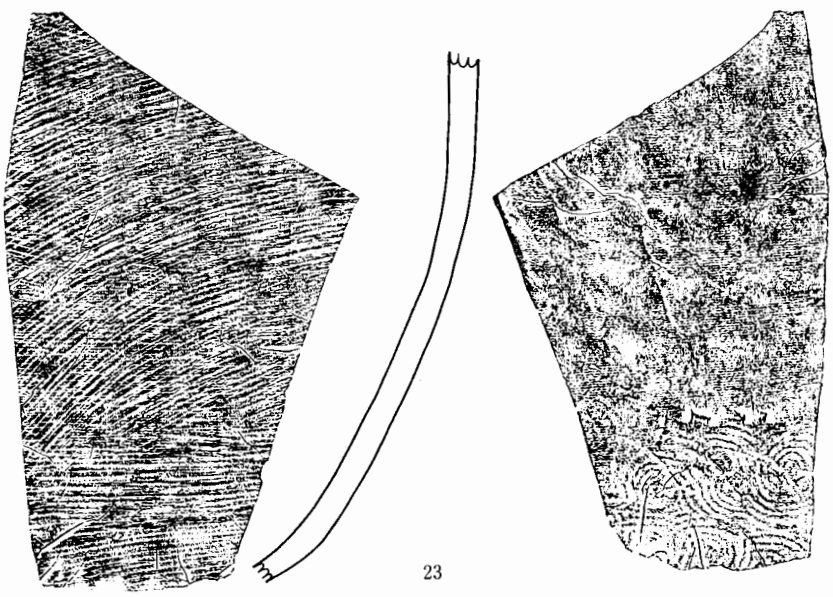
0　1：3　10cm

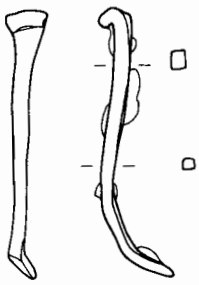


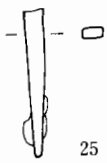


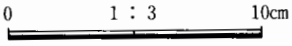




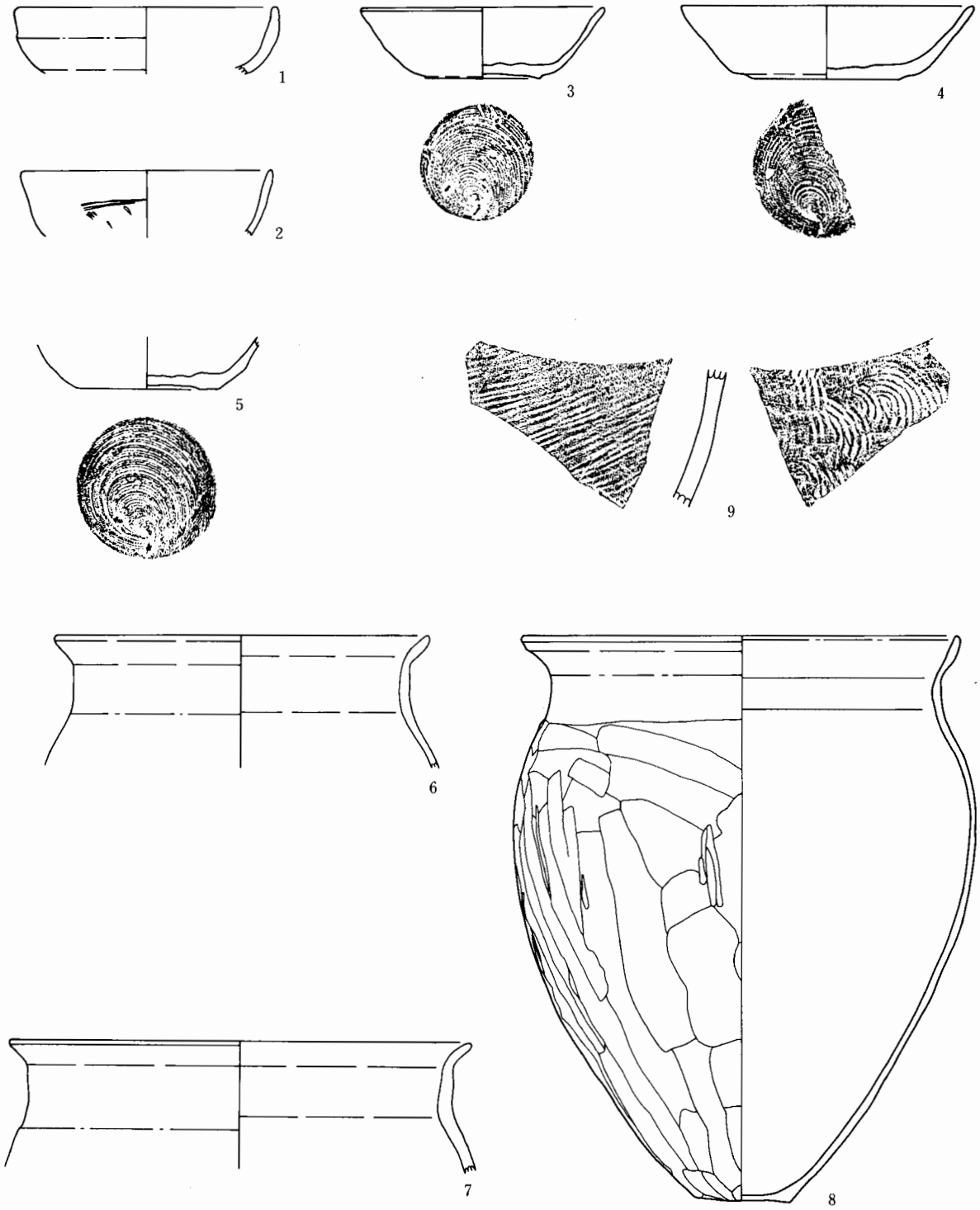




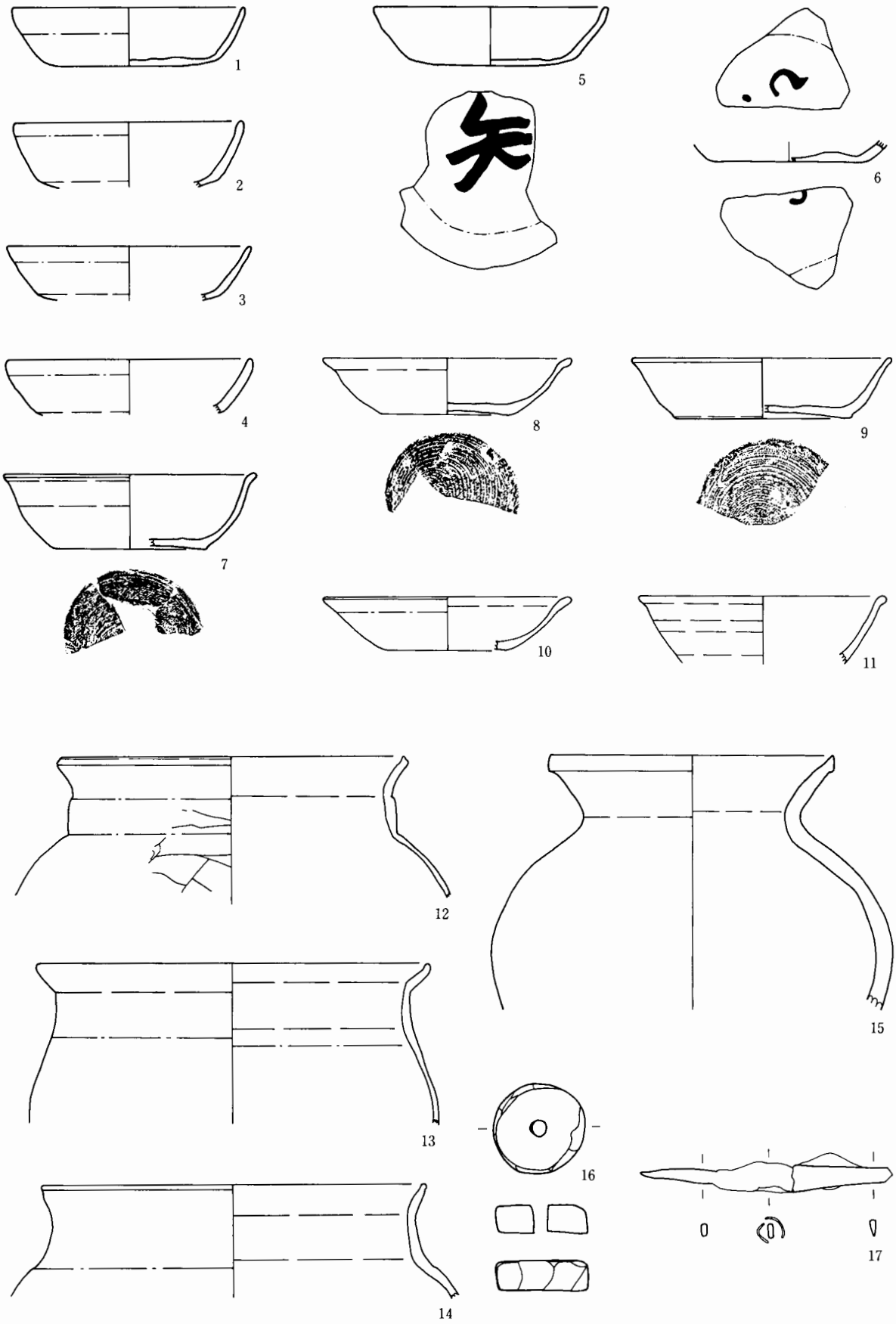




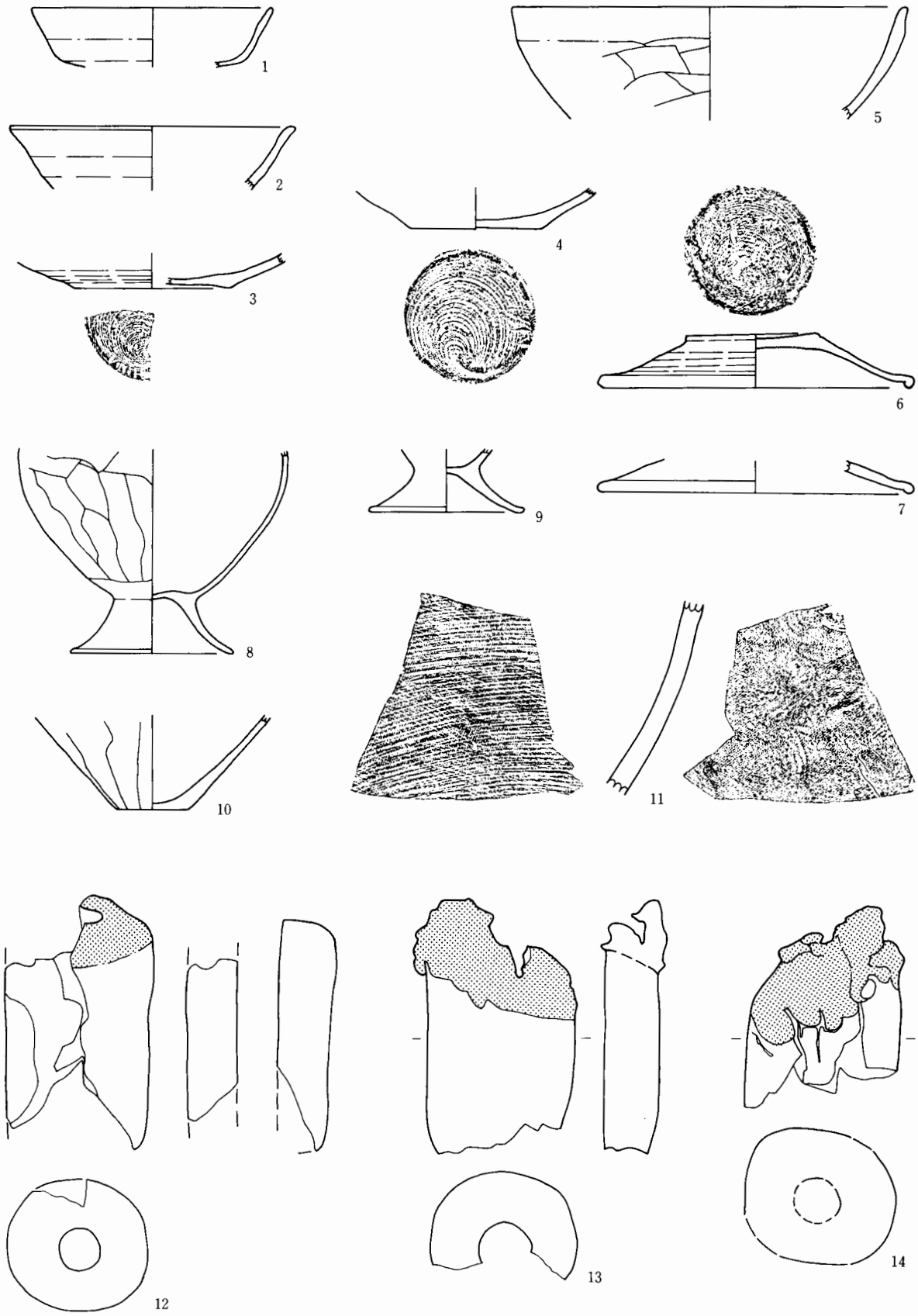
第58図　7号住居跡出土遺物(2)



第59図　8号住居跡出土遺物

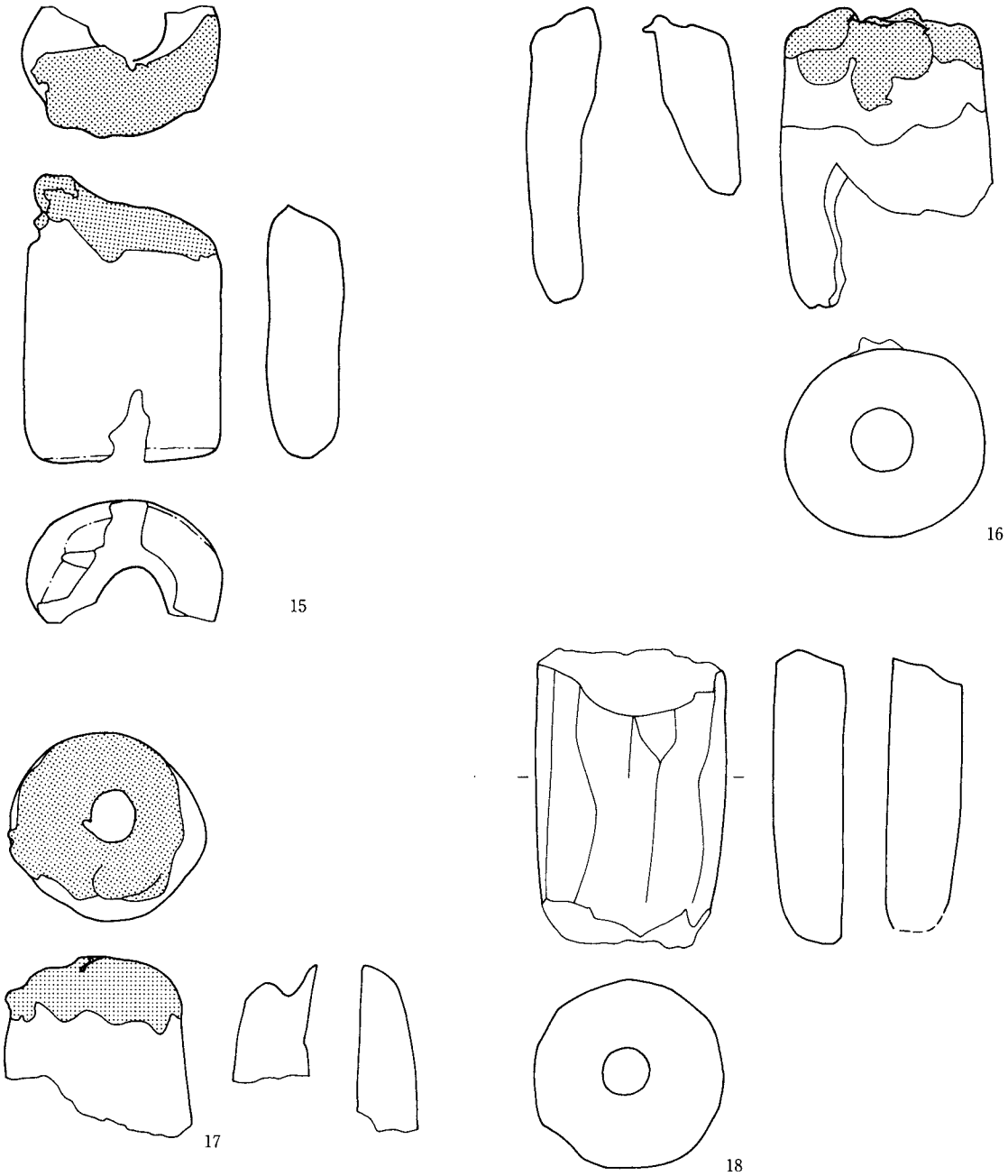


第60図　9号住居跡出土遺物

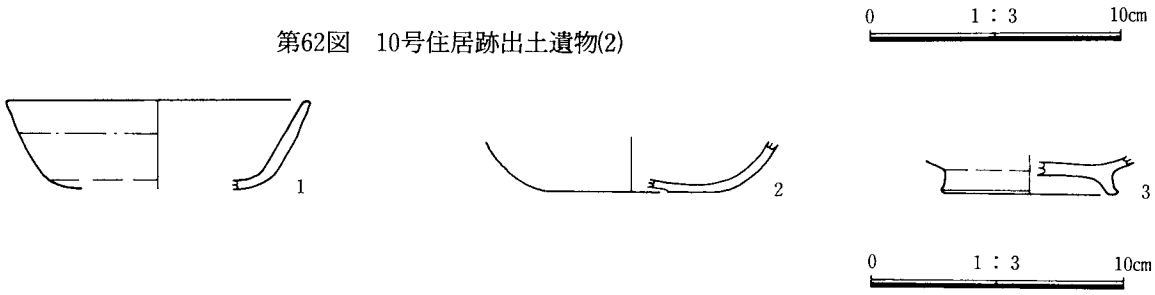


第61図　10号住居跡出土遺物(1)

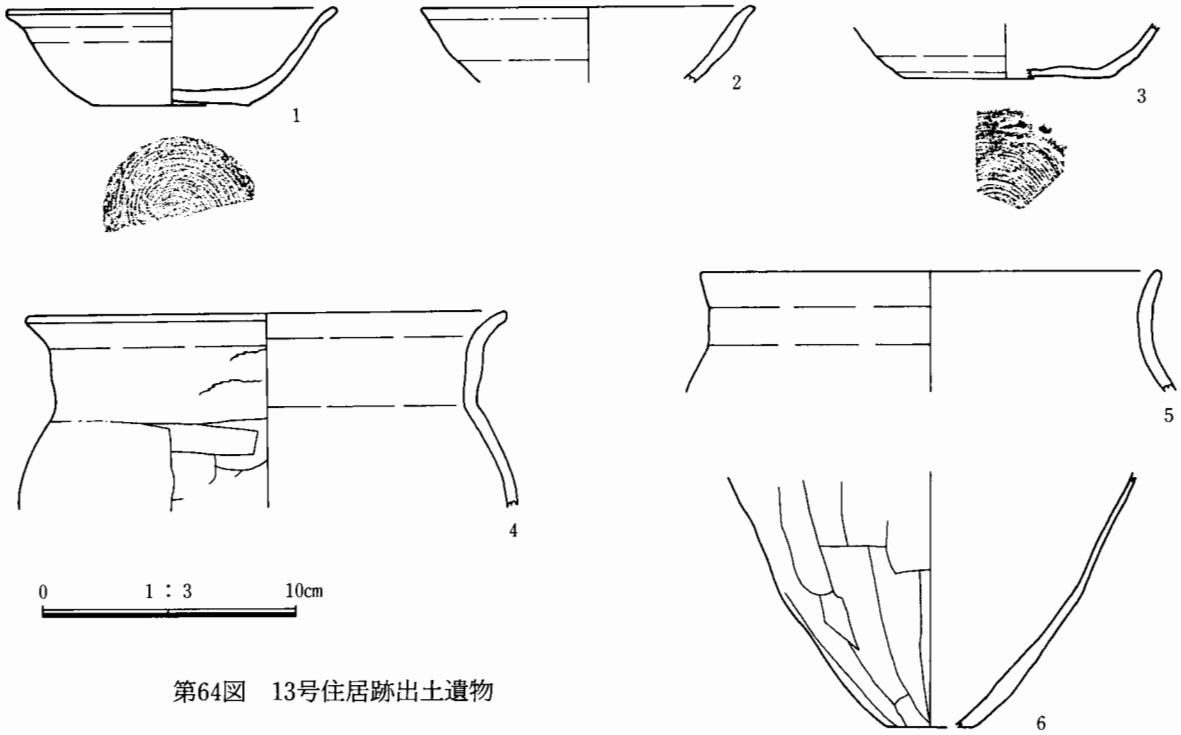
0　1：3　10cm



第62図　10号住居跡出土遺物(2)



第63図　12号住居跡出土遺物



第64図　13号住居跡出土遺物

第10表　1号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	須恵器	坏	西壁際床直	ほぼ完形	15.2	3.4	6.1	白色粒	灰色
2	須恵器	椀	東壁寄覆土	口縁部1/4	(15.0)			白色粒	灰色
3	須恵器	椀	南西隅床直	口縁部破片	(12.0)			小礫、砂粒	灰白色
4	須恵器	椀	覆土	口縁部破片	(14.0)			砂粒、石英	灰色（内面灰オリーブ）
5	土師器	鉢	カマド左袖部・西壁際床直	1/3	18.0			砂粒、白色粒	橙色～暗赤褐色
6	土師器	脚付甕	北壁際	脚部完存 1/3	11.7	16.5	8.4	砂粒、白色粒	赤褐色～暗赤褐色
7	土師器	甕	南西隅床直	口縁部破片	18.9			砂粒、白色粒	橙色
8	石製品	砥石	西壁周溝	欠損	巾4.9cm、長さ4.6cm、高さ3.9cm				

第11表　3号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	須恵器	高台付椀	カマド脇	4/5	14.5	5.8	7.2	白色粒、砂粒	灰オルーブ色～灰色
2	須恵器	椀	覆土	口縁部破片	13.8			白色粒、小礫	灰黄色
3	土師器	脚付甕	カマド	脚部1/3			8.4	砂粒	明赤褐色
4	鉄製品	折頭釘	覆土	ほぼ完存	長さ9.9				
5	鉄製品	鉄鏃？	覆土	茎部？	残存長5.8				

第12表　4号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			白色粒	にぶい赤褐色
2	須恵器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			赤色粒	にぶい橙色
3	土師器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			赤色粒	にぶい褐色
4	須恵器	坏	覆土	口縁部破片	(14.0)			白色粒	灰色（内面灰オリーブ色）
5	土師器	小型甕	南カマド	1/2	11.2		胴13.2	白・黒色粒	赤褐色
6	土師器	甕	南カマド	口縁部破片	19.2			赤・黒色粒	橙色
7	土師器	甕	覆土	口縁部破片	20.4			砂粒	橙色
8	土師器	甕	南・北カマド	1/4	18.0			白色粒	にぶい橙色
9	土師器	甕	北カマド	1/7	19.0			白色粒	にぶい橙色
10	土師器	甕	南カマド	1/3	19.0			白・黒色粒	明赤褐色
11	土師器	甕		1/2	20.0				明赤褐色

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
12	土師器	甕	南・北カマド	1/2			3.8	赤・白色粒	暗赤褐色～黒褐色
13	土師器	甕		1/5			3.8	砂粒	黒褐色
14	鉄製品	刀子	覆土	刃部～茎部	残存長5.1				
15	鉄製品	鏃？	覆土	茎部？	残存長5.5				

第13表　5号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	南壁際床直	ほぼ完形	12.0	3.2		白色粒	赤褐色～にぶい黄褐色

第14表　6号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	南東土坑	1/2	12.0	3.5		白色粒	明赤褐色
2	土師器	坏	カマド	1/8	(12.0)			白色粒	明赤褐色
3	土師器	坏	覆土	1/8	(11.5)			砂粒	明赤褐色
4	土師器	坏	覆土	1/8	(12.0)			白色粒	橙色　／意識的に打ち欠く
5	須恵器	坏	南東土坑	口縁部破片	(14.0)			白色粒	明黄褐色～オリーブ黒色
6	須恵器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			白・黒色粒	灰色～オリーブ灰色
7	須恵器	坏	覆土	1/6	(12.0)			砂粒	灰白色
8	須恵器	椀？	覆土	1/8	(14.2)			白・黒色粒	灰白色
9	須恵器	坏	床下中央土坑	1/4			7.6	白色粒	暗青灰色
10	須恵器	坏	カマド	1/2			5.8	白・黒色粒	オルーブ灰色
11	須恵器	蓋	カマド	4/5	16.7	2.7		小礫、白色粒	暗青灰色
12	土師器	小型甕	覆土	口縁部破片	(10.9)			白色粒	暗赤褐色
13	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(19.4)			砂粒	赤褐色
14	土師器	甕	床直	口縁部破片	(18.0)			白色粒	明赤褐色
15	土師器	甕	カマド	1/3	19.6		胴21.2	砂粒、赤色粒	明赤褐色
16	土師器	甕	カマド、床直	口縁部破片	(11.5)			赤色粒	にぶい橙色
17	土師器	甕	床直	口縁部破片	(24.2)			白色粒	橙色
18	須恵器	甕	床直	底部破片			(14.8)	白色粒、小礫	オリーブ灰色
19	鉄製品	鋤鍬先	竈左袖部床直 南西隅部床直	長さ25.8、最大幅19.8、最大厚2.0　完存					
20	鉄製品	刀子	6A号住床下 中央土坑	長さ17.6、刃部長12.6、刃部幅1.5、茎部長5.0　完存					
21	鉄製品	鎌	南東土坑	残存長15.5、幅3.3　刃部先端欠損					
22	鉄製品	不明	竈左袖部床直	長さ21.6　完存					
23	石製品	紡錘車	南壁際床直	径3.4×3.2、厚さ0.75、孔径0.7					

第15表　7号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	貯蔵穴	1/4	12.0	(3.2)		白・黒色粒	橙色
2	土師器	坏	貯蔵穴	1/4	11.5			白色粒	橙色～明赤褐色
3	土師器	坏	覆土	1/6	11.8			白色粒	橙色
4	土師器	坏	覆土	1/6	11.9			白色粒	にぶい橙色
5	須恵器	坏	中央西寄床直	1/2	12.0	3.4	5.5	白色粒	暗青灰色～オリーブ灰色
6	須恵器	坏	覆土	1/4	13.6	3.6	6.4	黒・白色粒	灰色
7	須恵器	坏	覆土	1/6	11.4		3.0	小礫、白色粒	暗青灰色
8	須恵器	坏	竈燃焼部	1/3	11.9	3.6	6.0	黒・白色粒	灰色
9	須恵器	坏	覆土	底部完形			5.9	小礫、白色粒	オリーブ灰色
10	須恵器	坏	貯蔵穴	1/8	16.0			白色粒、小礫	灰白色
11	須恵器	椀	覆土	1/4	14.6			白色粒	青黒色
12	須恵器	椀	覆土	1/5	15.0			小礫	明オリーブ灰色
13	須恵器	高台付椀	竈焚口	1/3	15.0	7.3	7.2	白・黒色粒	暗緑灰色
14	須恵器	高台付椀	覆土	1/5			7.2	小礫、黒色粒	オルーブ灰色
15	灰釉陶器	皿	覆土	1/2			7.8	黒色粒	灰白色
16	須恵器	蓋	竈	1/3	16.0			赤色粒、小礫	にぶい橙色～緑灰色
17	土師器	甕	竈前面床直	1/3	20.9			赤・白色粒	明赤褐色
18	土師器	甕	竈前面床直	口縁部完存	19.8			赤・黒色粒	橙色～赤褐色

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
19	土師器	甕	東壁柱穴縁床	口縁部完存	20.0			白色粒	赤褐色～明赤褐色
20	土師器	甕	竈前面床直	1/2	20.4			白・黒色粒・小礫	赤褐色
21	土師器	甕	竈前面	1/5	19.0			赤色粒	橙色
22	土師器	甕	南壁際、竈前	1/8	18.2			赤色粒	橙色
23	須恵器	甕	南西隅床直	破片				黒色粒	暗青灰色
24	鉄製品	折頭釘	竈左側壁際	長さ11.0					
25	鉄製品	鏃？	覆土	残存長6.0					

第16表　8号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	覆土	口縁部破片	(12.6)				にぶい赤褐色
2	土師器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			砂粒、赤色粒	橙色
3	須恵器	坏	竈焚口南床直	完形	11.7	3.4	5.4	白色粒	暗青灰色
4	須恵器	坏	覆土	1/3	13.9	3.5	6.8		灰白色～オリーブ黒色
5	須恵器	坏	西壁際中床直	底部完存			6.6	白色粒	オリーブ黒～灰オリーブ色
6	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(17.9)			白色粒	赤色
7	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(22.0)				赤褐色～黒褐色
8	土師器	甕	竈前面南床直	ほぼ完形	20.9	26.9	4.4	石英、白色粒	橙色～赤黒色
9	須恵器	甕	西壁際中床直	胴部破片					赤褐色～黒褐色

第17表　9号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	覆土	3/5	12.2	3.1		白色粒、砂粒	にぶい橙色
2	土師器	坏	覆土	口縁部破片	(12.0)			白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
3	土師器	坏	竈前床直	1/8	(12.7)			白色粒	橙色
4	土師器	坏	覆土	1/8	(13.0)			白色粒	橙色
5	土師器	坏	覆土	2/5	12.2	3.1	9.0	砂粒	橙色　／墨書「矢」？
6	土師器	坏	覆土	1/2			8.1	白色粒	橙色　／表裏墨書
7	土師器	坏	覆土	1/3	13.2	3.9	7.9	白色粒、砂粒	灰オリーブ色
8	須恵器	坏	北壁際床直	1/3	13.0	2.9	6.5	白色粒、小礫	灰色
9	須恵器	坏	西壁際床直	1/4	13.6	3.2	9.0	白色粒、砂粒	灰色
10	須恵器	坏	北壁際床直	破片	(13.0)	2.8	(6.2)	白・赤色粒	灰白色～灰色
11	須恵器	坏	覆土	口縁部破片	(13.0)			白色粒	暗青灰色
12	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(18.2)			砂粒	赤色
13	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(20.5)			白色粒	にぶい赤褐色
14	土師器	甕	覆土	口縁部破片	(20.0)			黒色粒	明赤褐色～赤色
15	須恵器	甕	竈前面	1/3	14.9		胴21.2	白色粒	青灰色～暗青灰色
16	石製品	紡錘車	竈北側周溝	完存	径4.7、厚1.5、孔径0.8　／ 滑石				
17	鉄製品	刀子	北西隅床直	刃部先端	欠損残存長13.5　／鞘？残存				

第18表　10号住居跡

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	竈	破片	(12.2)			白	橙色
2	須恵器	坏	覆土	破片	(14.5)			砂粒	灰白色
3	須恵器	皿	北壁際中央部	1/4			7.8	黒・白色粒	暗青灰色
4	須恵器	皿	北壁際中央部	底部完存			6.6	小礫、白色粒	灰色
5	土師器	鉢	覆土	口縁部破片	(20.0)			白色粒	橙色
6	須恵器	蓋	竈	3/4	16.0	2.9	6.6	白・黒色粒	暗青灰色
7	須恵器	蓋	南東隅ピット	1/4	16.0			白色粒	暗青灰色
8	土師器	脚付甕	竈	1/4脚部完			脚 8.3	砂粒	橙色～明赤褐色
9	土師器	脚付甕	北壁際中央部	1/8			脚 8.0	砂粒	橙色
10	土師器	甕	南西部	底部1/5			3.6	石英、砂粒	明赤褐色～赤灰色
11	須恵器	甕	覆土	胴部破片				黒色粒	暗青灰色
12	土製品	羽口			残存長12.9、径７～7.5、孔径2.1				
13	土製品	羽口			残存長12.9、径7.5、孔径2.7				
14	土製品	羽口			残存長10.3、径6.8～7.6、孔径2.4				

番号	種　別	器　種	出土位置	残　存	口　径	高　さ	底　径	胎　土	色調／備考
15	土　製　品	羽　　口			残存長12.5、径8.5、孔径３				
16	土　製　品	羽　　口			残存長13.1、径８～９、孔径2.7				
17	土　製　品	羽　　口			残存長 7.8、径8.1、孔径2.4				
18	土　製　品	羽　　口			残存長12.9、径8.4、孔径1.9				

第19表　12号住居跡

番号	種　別	器　種	出土位置	残　存	口　径	高　さ	底　径	胎　土	色調／備考
1	土　師　器	坏	覆土	1/8	(12.0)	3.6		砂粒	にぶい赤褐色
2	土　師　器	坏	覆土	1/2			7.0	白色粒、石英	赤褐色
3	須　恵　器	高台付椀	竈	1/4			6.9	白色粒、小礫	暗緑灰色

第20表　13号住居跡

番号	種　別	器　種	出土位置	残　存	口　径	高　さ	底　径	胎　土	色調／備考
1	須　恵　器	坏	B号住竈	1/2	13.0	3.8	6.1	白色粒、小礫	暗オリーブ灰色
2	須　恵　器	坏	覆土	1/8	(13.1)				灰白色～オリーブ灰色
3	須　恵　器	坏	覆土	1/8			(8.0)	砂粒	灰白色
4	土　師　器	甕	覆土	1/8	(18.9)				明赤褐色
5	土　師　器	甕	B号住	口縁部破片	(18.0)			赤色粒	にぶい赤褐色
6	土　師　器	甕	B号住竈	1/2			3.5		にぶい橙色～にぶい赤褐色

3．中近世の遺構

(1) 概　　要

中近世の遺構は掘立柱建物跡14棟以上、竪穴状遺構５基、土坑46基、井戸２基、溝７条(時期不明を含む)である。南限は不明であるが、５号溝によって台地を東西に分断しており、北～西側に流下する旧河川との間に城館を構えていたものと思われる。この内部は屈折する小溝によって、さらに区画されているが、掘立柱建物跡（柱穴）群、土坑群は調査区域の中央部北寄りに集中して検出されている。遺物は石製品が１点出土しただけで、土器は全く出土していない。

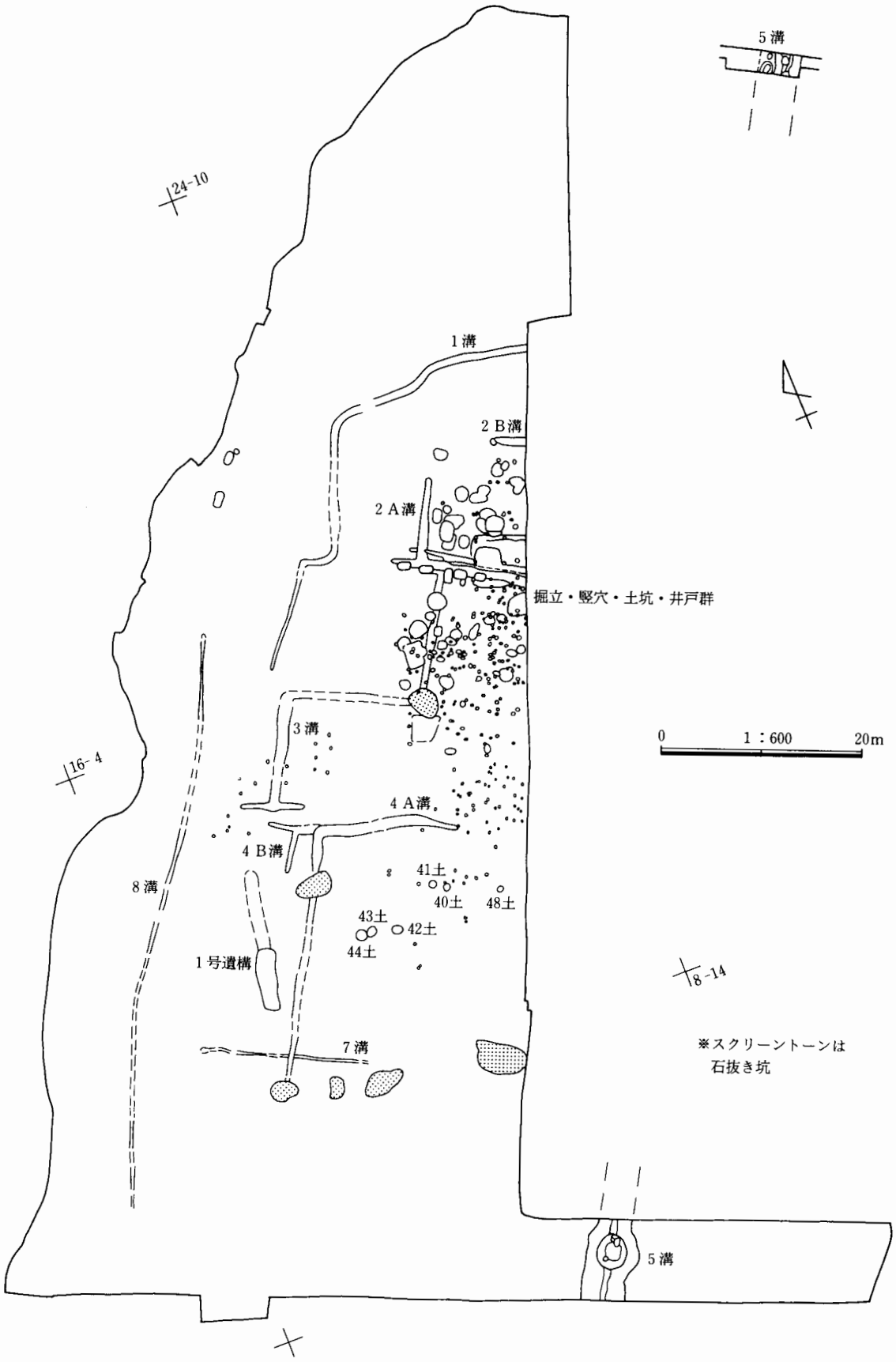
(2) 掘立柱建物跡

６号掘立柱建物跡（遺構第68・69図、ＰＬ11）

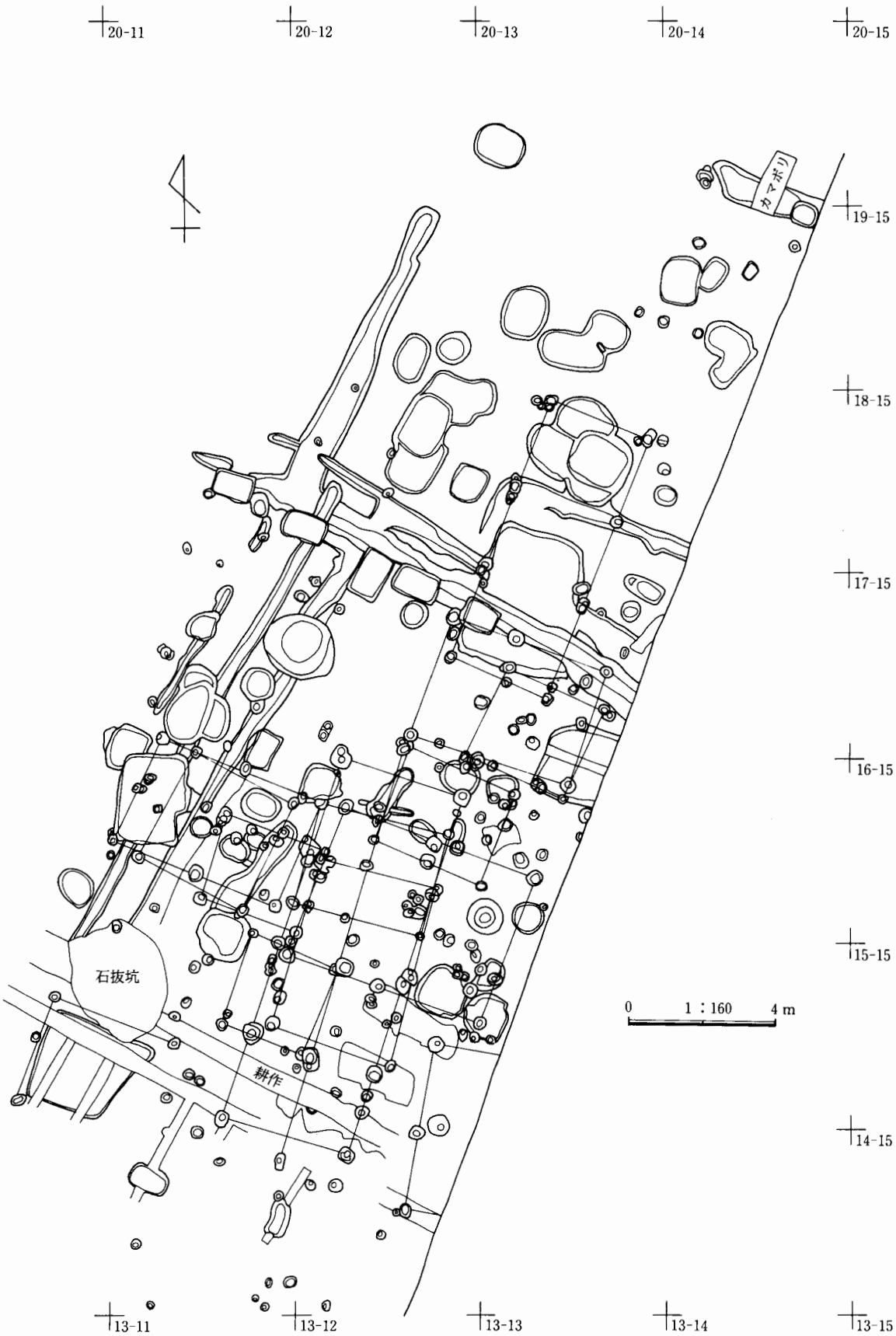
15―13グリッドに位置する。８・12～16号掘立柱建物跡、30・32・49号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。柱の配置は２間×４間で、総柱であるが、棟持柱は約70cm外側に位置する。規模は東西3.5m、南北10.2mを測る。長軸の方位はＮ―17°―Ｅである。桁行の柱間は最長2.88m、最短2.25mで東辺にバラツキが大きい。柱穴掘り方の形状は方形が主体である。多くの柱穴には柱痕が検出されている。柱痕の規模は15cm前後が多い。掘り方の規模は一辺（径）約30～40cm、深さ30～60cmを測る。

７号掘立柱建物跡（遺構第70図、ＰＬ11）

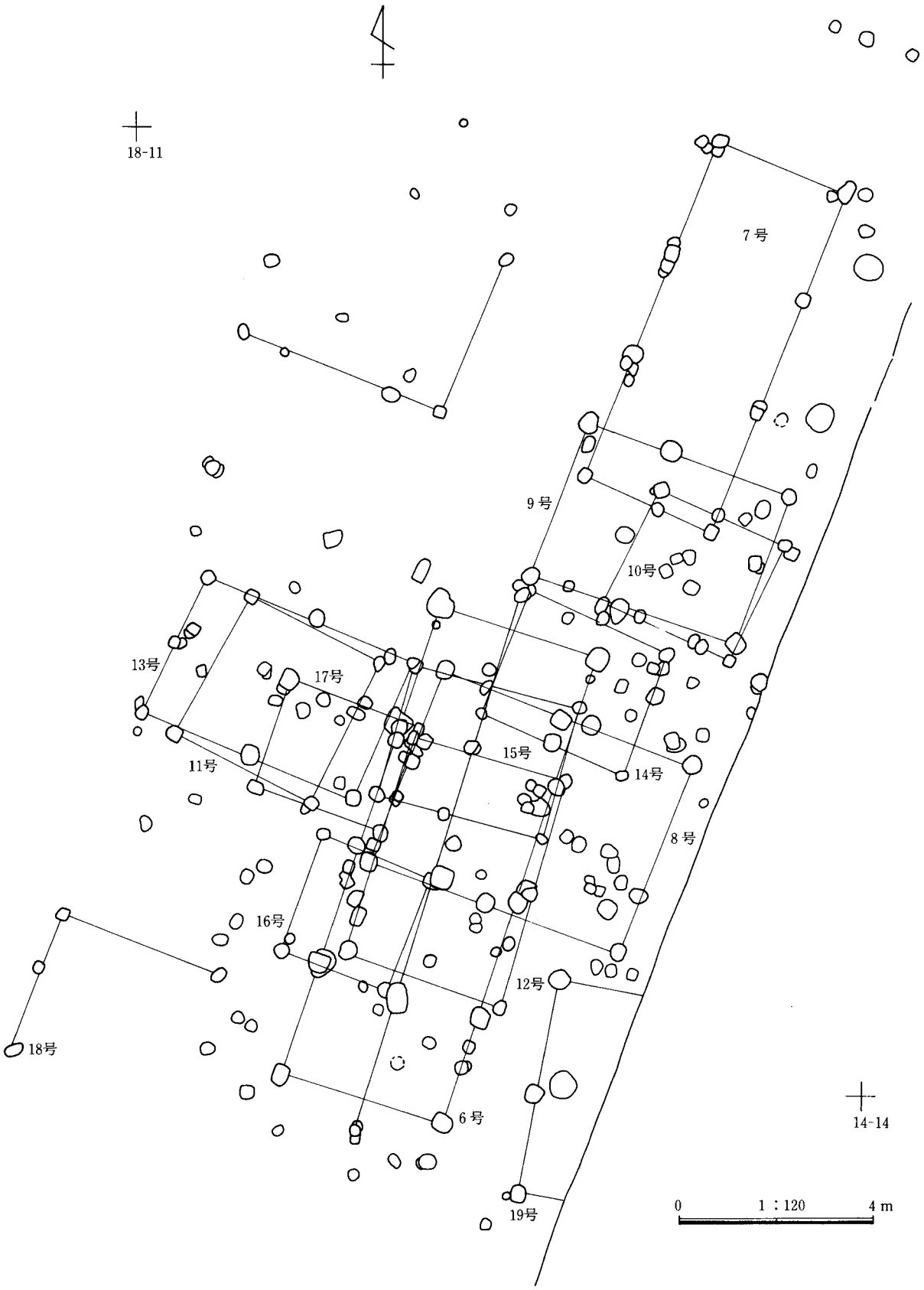
17―14グリッドに位置する。９・10号掘立、１ａ・ｂ号竪穴、17号土坑、２・３号溝と重複するが、新旧関係は不明である。位置的にみると１ｂ号竪穴あるいは17ａ～ｄ号土坑が内部施設の可能性もある。柱の配置は１間×３間である。規模は東西2.8m、南北は東辺が若干長く7.5mを測る。長軸の方位はＮ―21°―Ｅである。桁行の柱間は2.35～2.6mを測る。柱穴掘り方の形状は方形基調である。いくつかの柱穴には柱痕が検出されている。掘り方の規模は一辺（径）30cm、深さ36～60cmを測る。



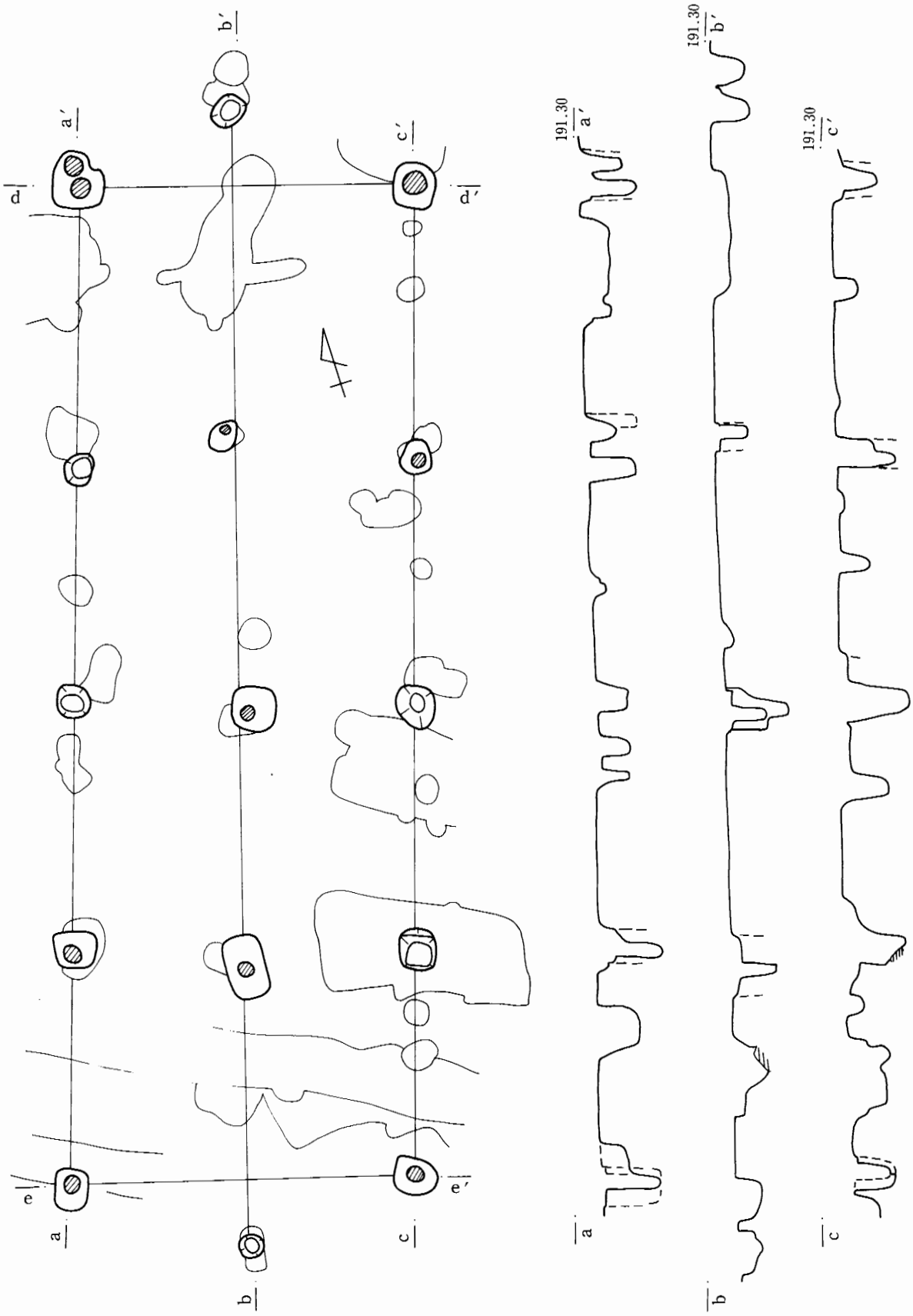
第65図　中近世遺構配置図



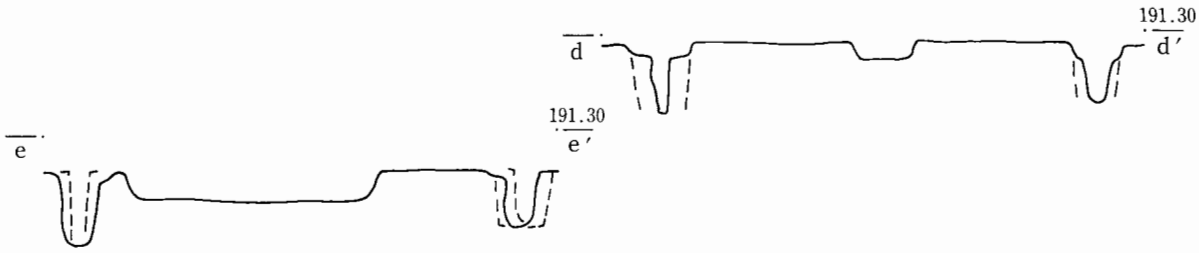
第66図　中近世遺構枢要部



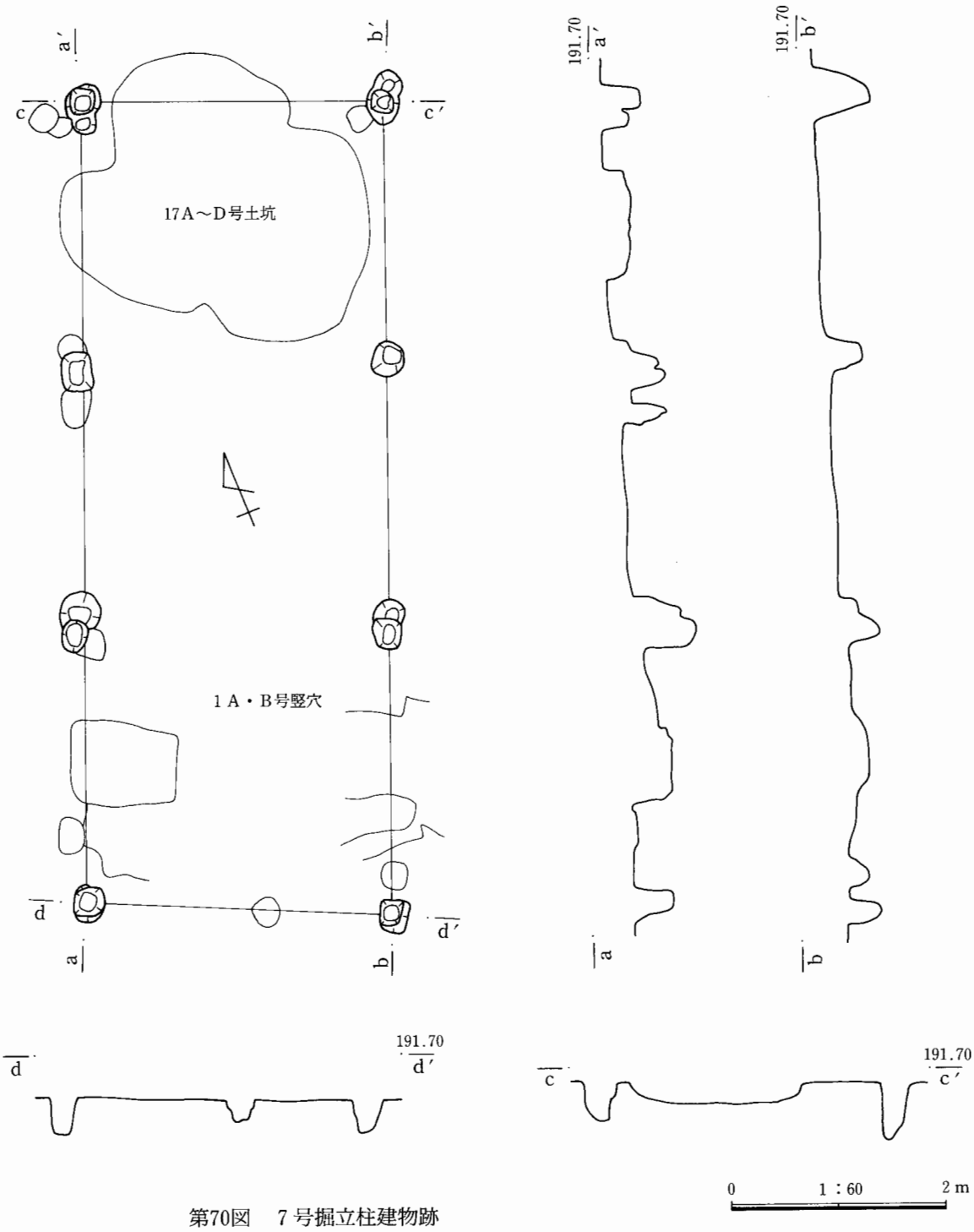
第67図　掘立柱建物跡・柱穴配置図



第68図　6号掘立柱建物跡(1)



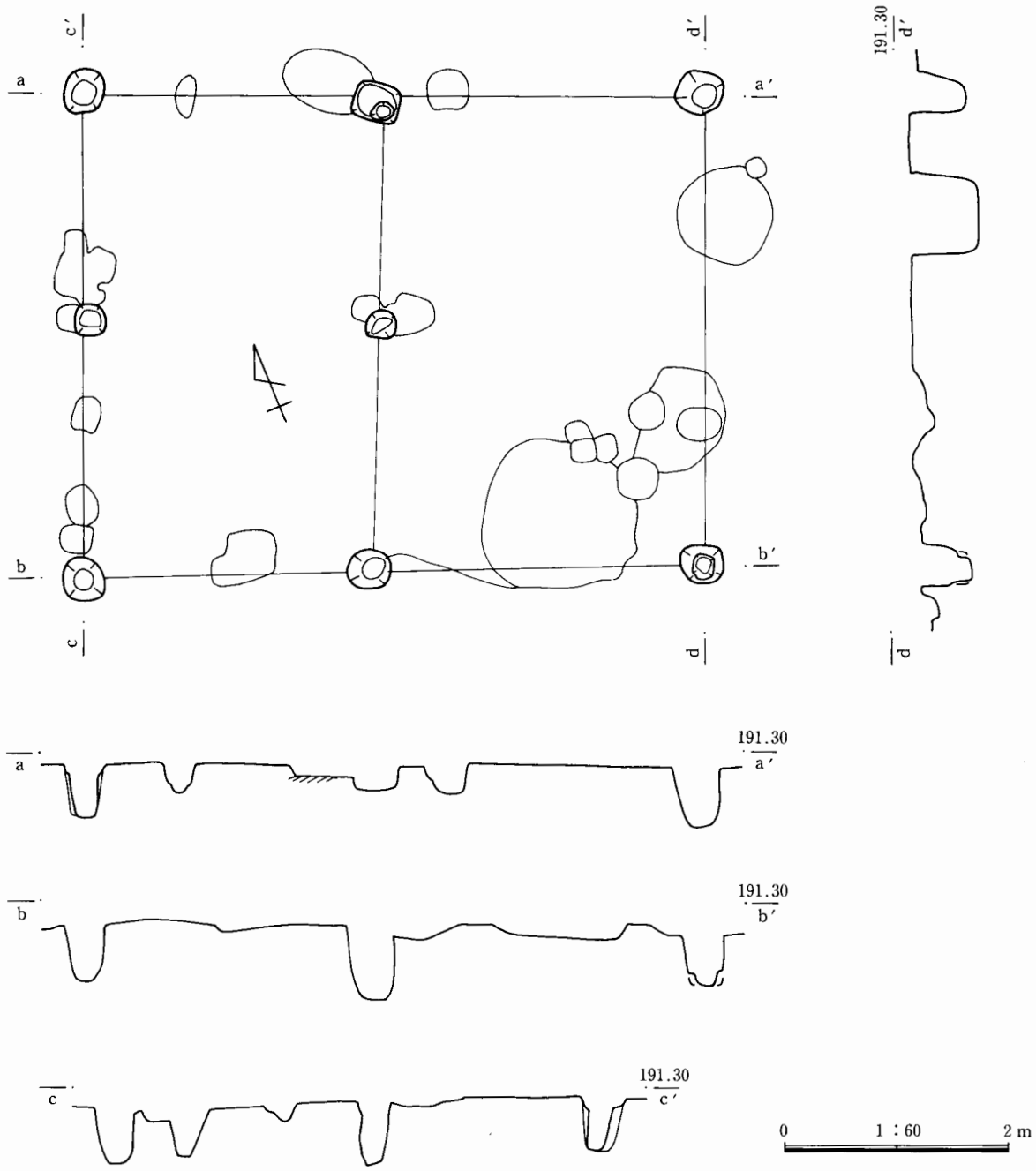
第69図　6号掘立柱建物跡(2)



第70図　7号掘立柱建物跡

8号掘立柱建物跡（遺構第71図、ＰＬ11）

15―13グリッドに位置する。６・12・14～16号掘立、30・34～37号土坑と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は２間×２間で、総柱の可能性があるが、東辺の間柱が検出されておらず、さらに東方に伸びる可能性もある。調査範囲内での規模は東西5.6m、南北4.3mを測る。長軸の方位はＮ―69°―Ｗである。柱間は桁行が2.6～2.94m、梁間が西辺で2.0～2.3mを測る。柱穴の形状は方形と円形が混在する。柱穴の規模は径（一辺）40cm前後を測り、深さは45～60cmである。



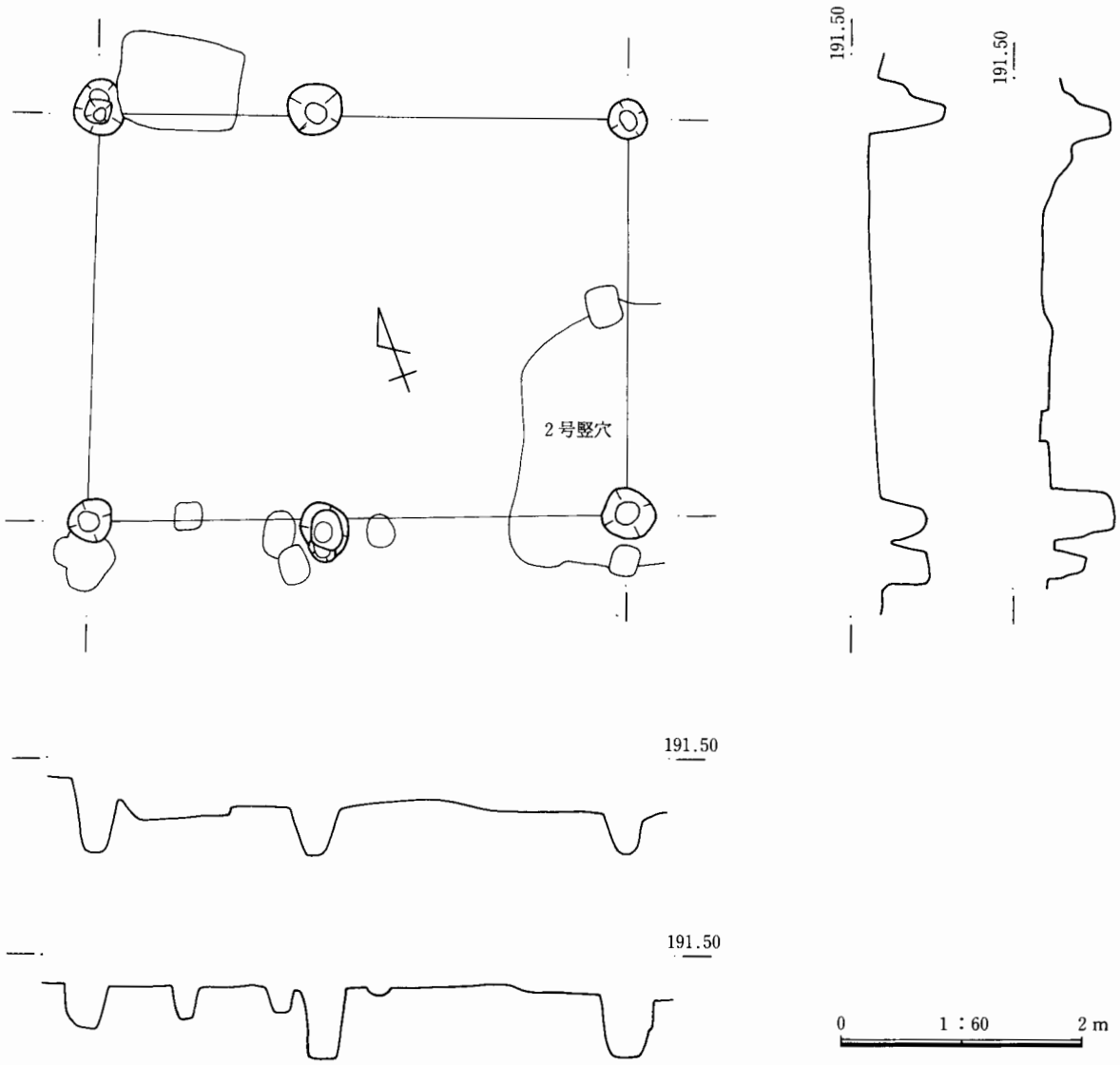
第71図　８号掘立柱建物跡

9号掘立柱建物跡（遺構第72図ＰＬ11）

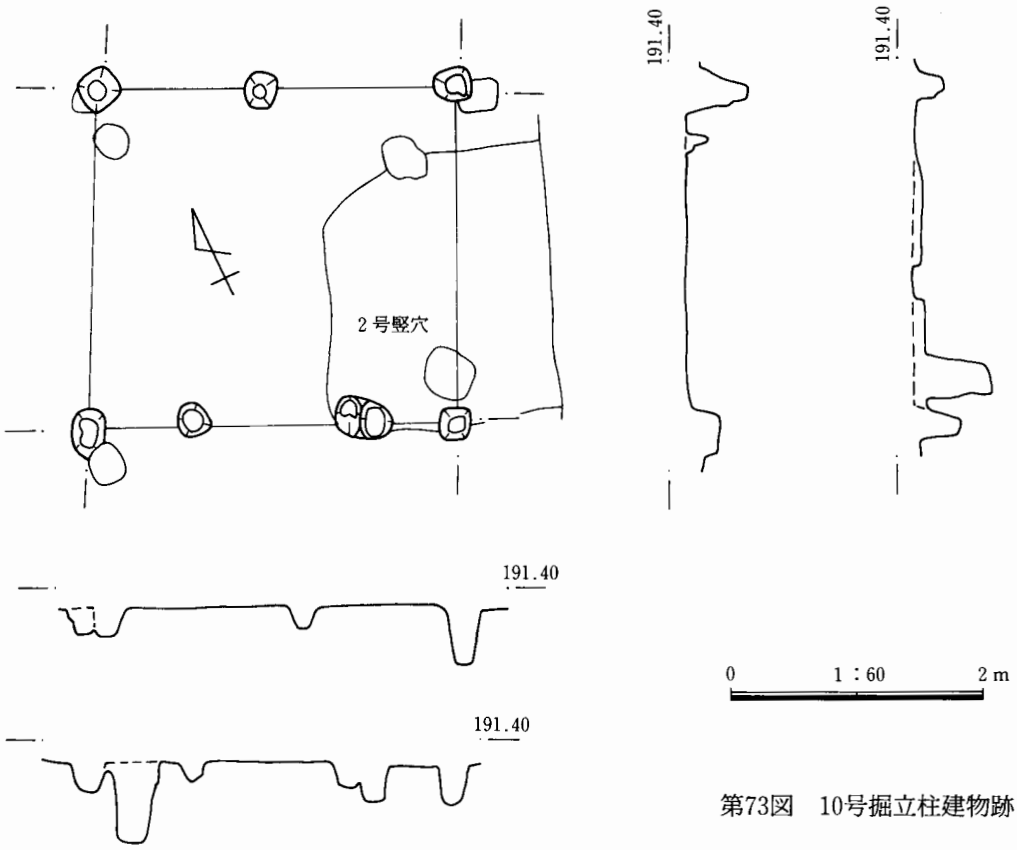
16―14グリッドに位置する。７・10・14号掘立、１ｂ・２号竪穴、32号土坑、２号溝と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は２間×１間であるが、東方へ伸びる可能性もある。規模は東西約4.5m、南北3.3mを測る。長軸の方位はＮ―70°―Ｗである。桁行柱間は北辺で西側が1.8m、東側が2.6mを測り、西側に偏している。柱穴の形状は円形基調である。規模は径30～45cm、深さ50～60cmのものが多い。

10号掘立柱建物跡（遺構第73図）

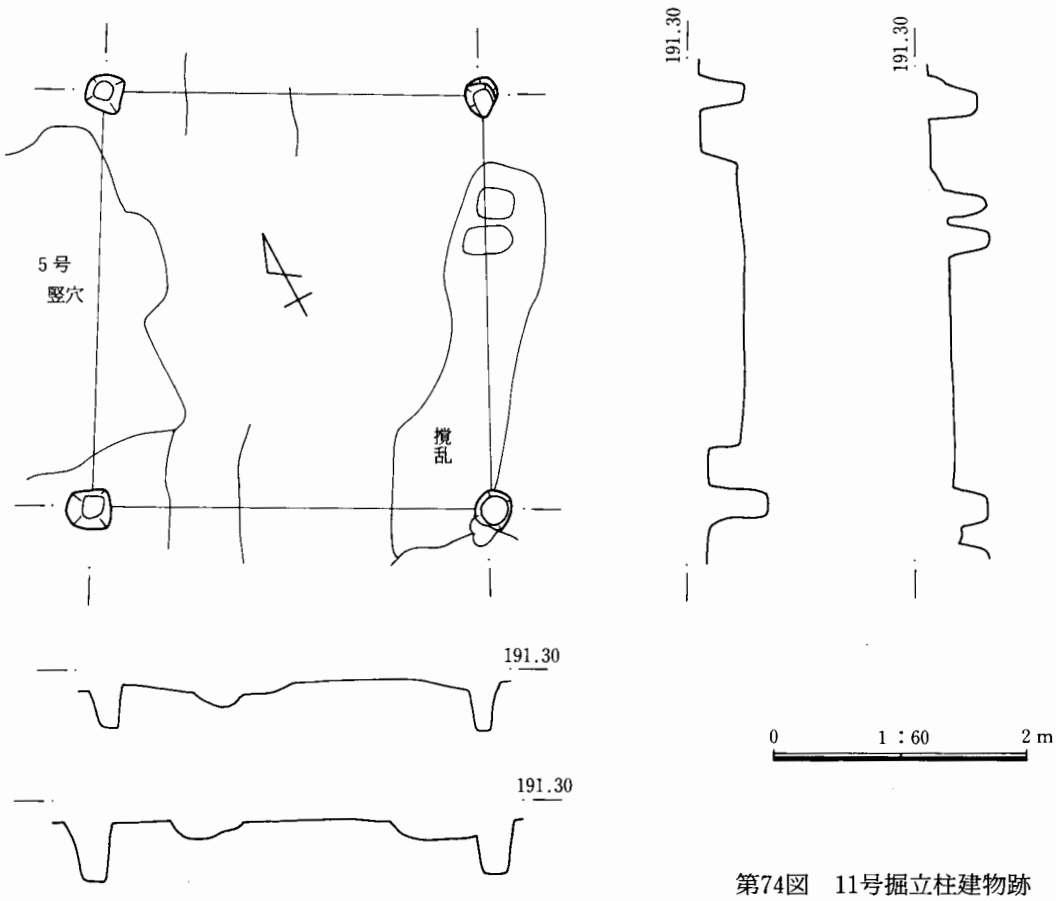
16―14グリッドに位置する。７・９・14号掘立、１ｂ・２号竪穴、32号土坑と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は南北１間で、東西は北辺２間、南辺３間の変則である。規模は東西2.9m、南北約2.7mを測る。長軸の方位はＮ―65°―Ｗである。柱間は北辺が1.3―1.5m、南辺は中央が約1.2m、両側が約0.85mを測る。柱穴の形状は方形が主である。柱穴の規模は一辺約24～40cm、深さは20cm前後のものが多いが、北西隅柱は45cmである。



第72図　９号掘立柱建物跡



第73図　10号掘立柱建物跡



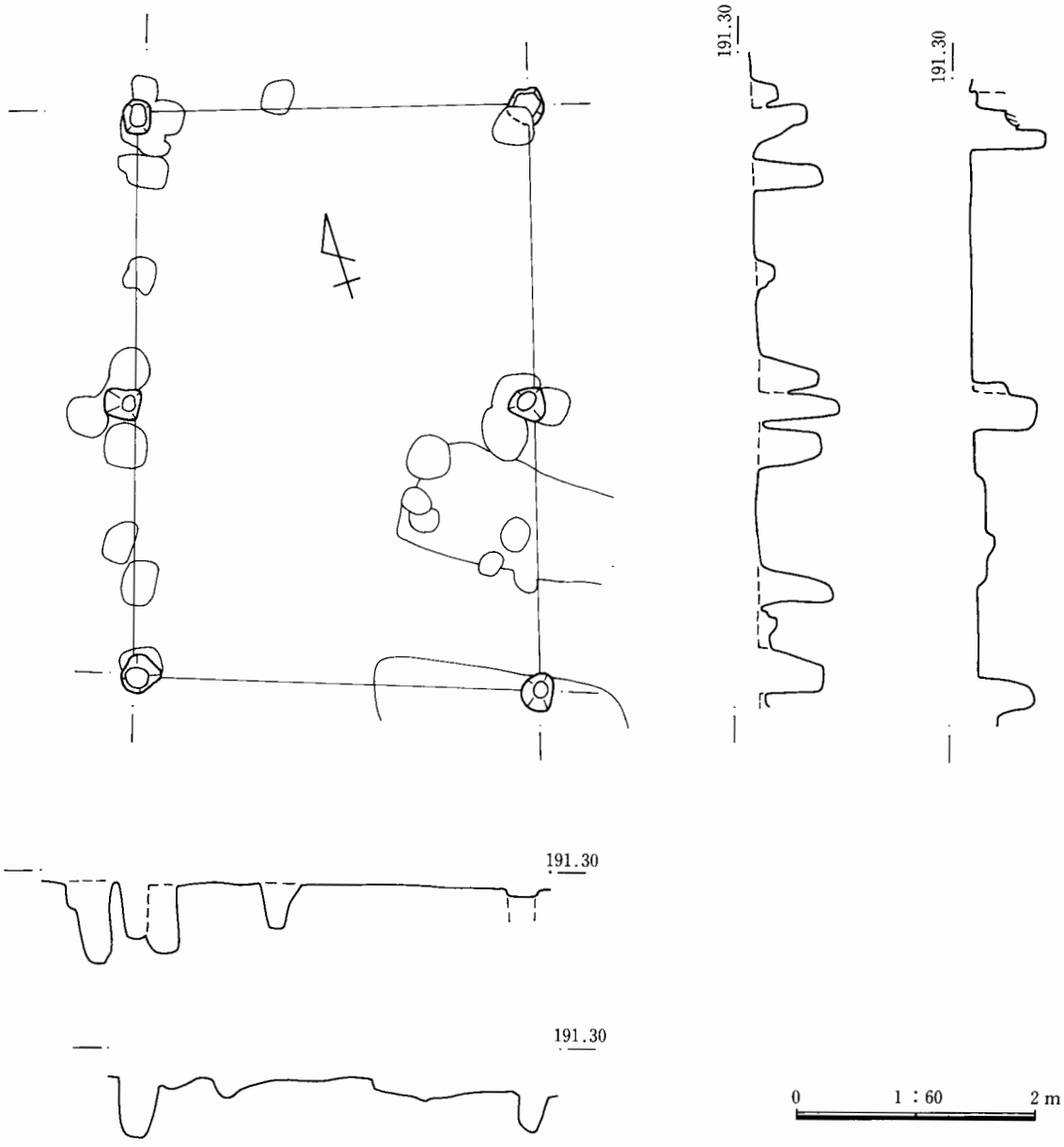
第74図　11号掘立柱建物跡

11号掘立柱建物跡（遺構第74図）

15—12グリッドに位置する。13号掘立、５号竪穴、29・45号土坑、３号溝と重複するが、新旧関係は不明である。柱の配置は１間×１間で、規模は東西3.15m、南北約3.3mを測る。長軸の方位はN—27°—Eである。柱穴の形状は方形が主である。規模は一辺（径）30cm前後、深さ30～50cmを測る。

12号掘立柱建物跡（遺構第75図）

15—13グリッドに位置する。６号掘立の中央部分の柱列のわずか東方にずれた位置に重複する。さらに８・15・16号掘立とも重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は１間×２間で、規模は東西3.4m、南北4.9mを測る。長軸の方位はN—15°—Eである。桁行の柱間は2.3～2.5mで比較的一定している。柱穴の形状は方形と円形が混在する。規模は一辺（径）30cm前後で、ほぼ一定している。



第75図　12号掘立柱建物跡

13号掘立柱建物跡（遺構第76図）

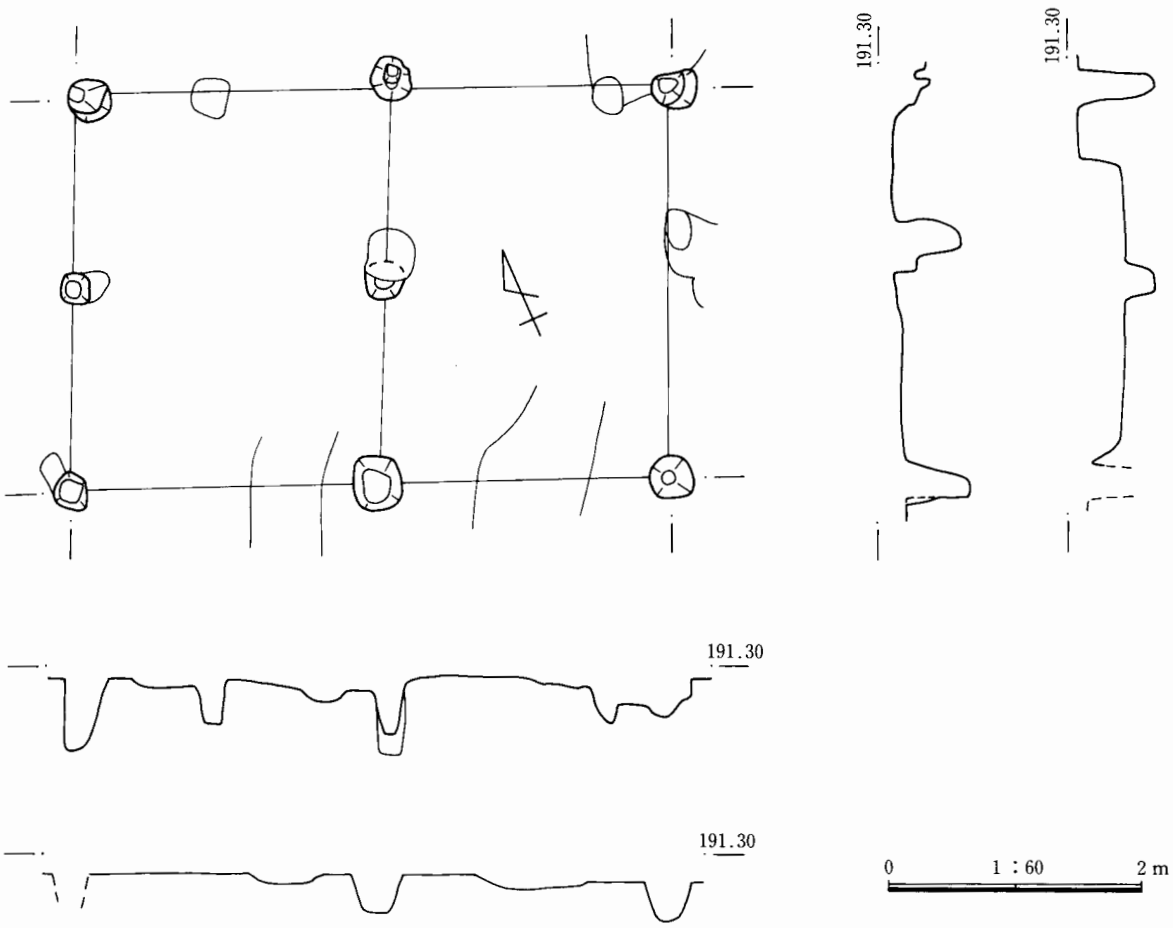
15―12グリッドに位置する。6・11号掘立、29・45号土坑、3号溝と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は2間×2間の総柱建物と思われるが、東辺の間柱は検出されていない。規模は東西約4.7m、南北3.1mを測る。長軸の方位はN―69°―Wである。柱間は西辺はほぼ等間であるが、桁行は2.16～2.52mと一定しておらず、東に寄っている。柱穴の形状は方形が主である。規模は一辺（径）約24～40cm、深さ30～60cmと一定していない。

14号掘立柱建物跡（遺構第77図）

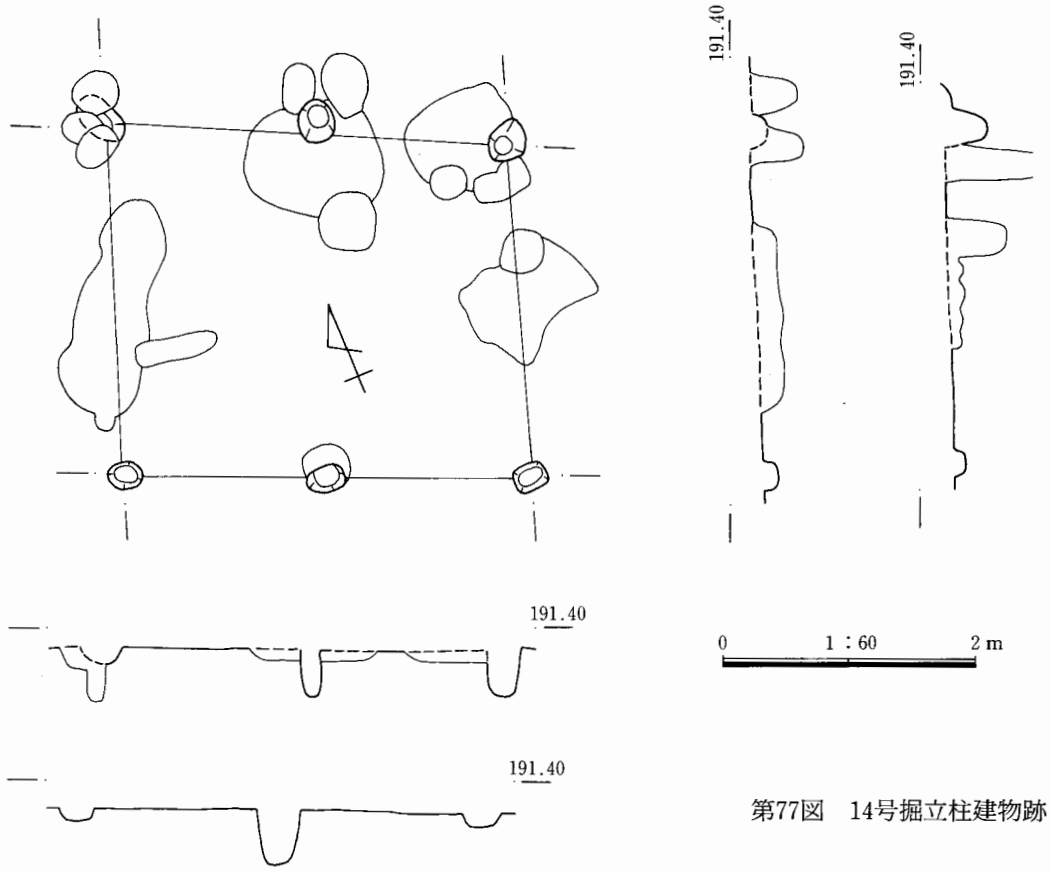
15―12グリッドを中心に位置する。6・8～10・15号掘立、土坑等と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は2間×1間で、規模は東西約3.2m、南北約2.8mを測る。平面形は菱形状にかなり歪んでいる。長軸の方位はN―74°―Wである。桁行の柱間は南側はほぼ等間であるが、北側は約1.5～1.7mと一定しない。柱穴の形状は円形と方形が混在する。規模は一辺（径）約20～32cm、深さ10～44cmと一定していない。

15号掘立柱建物跡（遺構第78図）

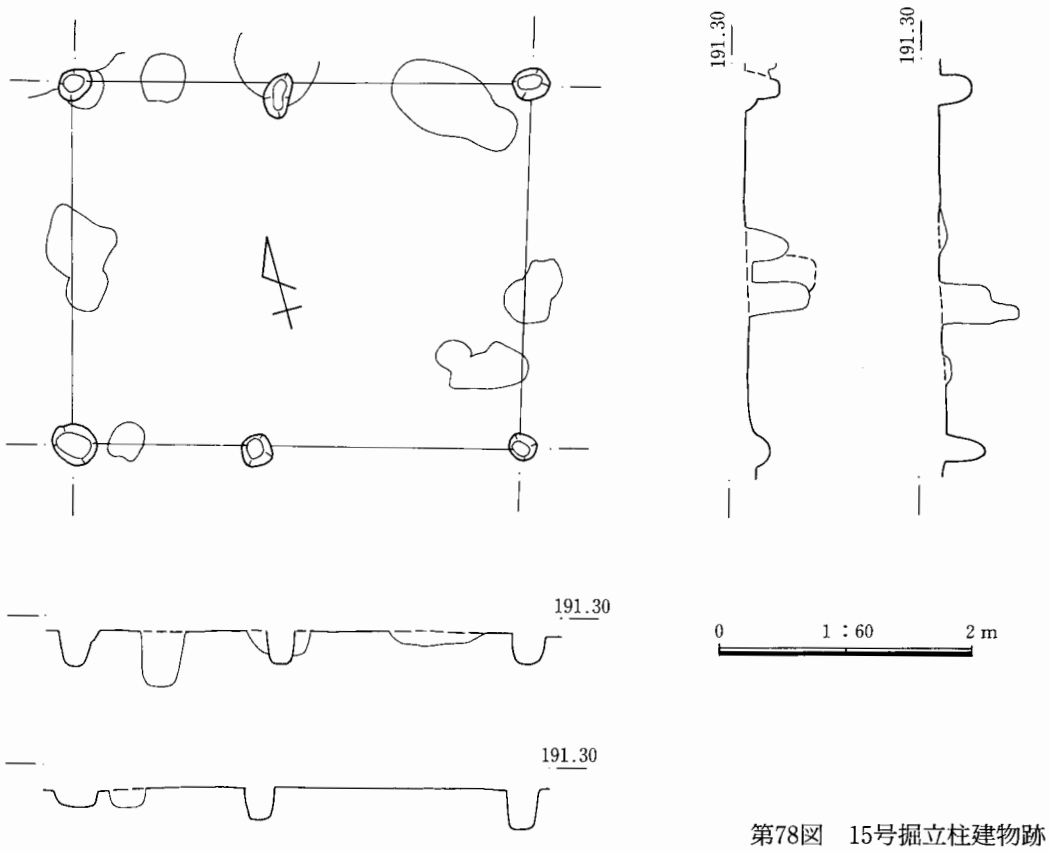
15―13グリッドに位置する。6号掘立の北半部にほぼ重なり合うように重複する。さらに8・12・13・14号掘立とも重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は2間×1間で、規模は東西約3.6m、南北2.9mを



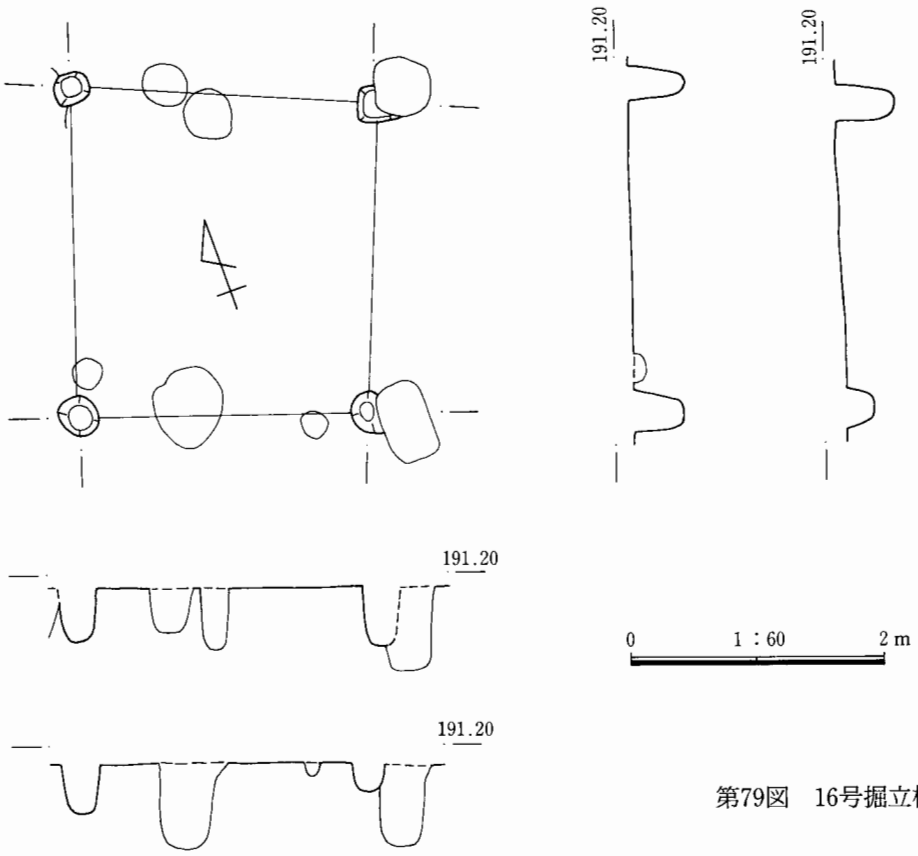
第76図　13号掘立柱建物跡



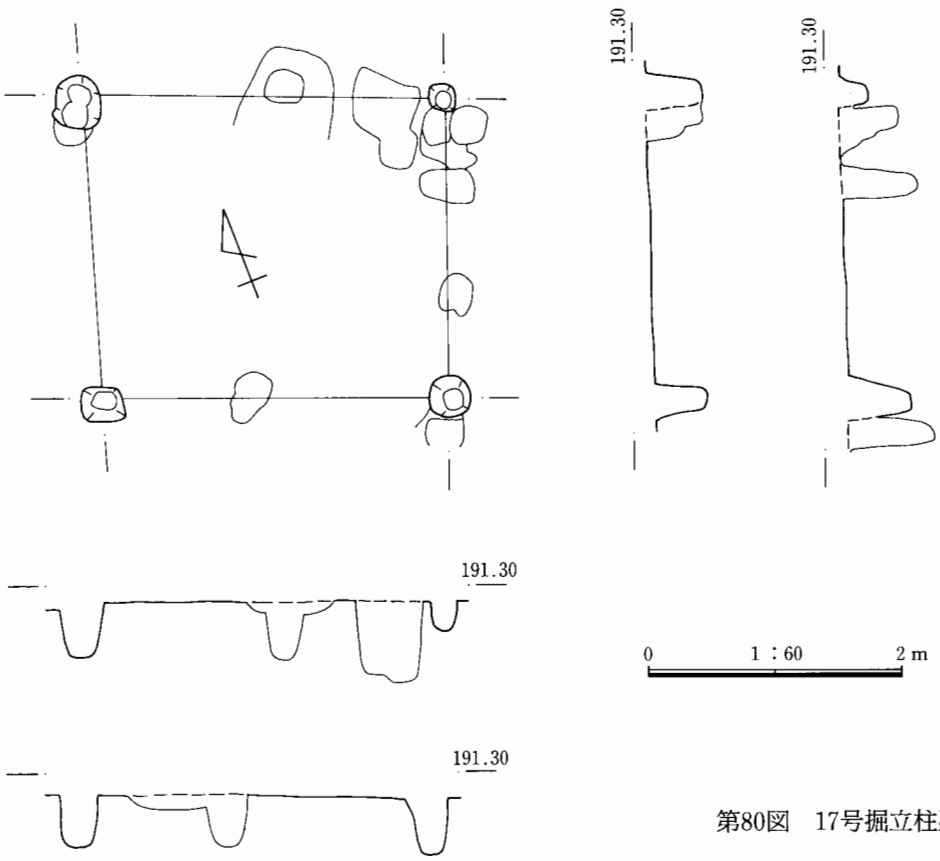
第77図　14号掘立柱建物跡



第78図　15号掘立柱建物跡



第79図　16号掘立柱建物跡



第80図　17号掘立柱建物跡

測る。長軸の方位はN—75°—Wである。桁行の柱間は北側が1.6—2.0m、南側は1.45—2.1mで間柱が西側に寄っている。柱穴の形状は円形基調である。規模は径（一辺）20～36cm前後で、深さは南西隅柱が12cmと浅いだけで、他は24～31cmと比較的揃っている。

16号掘立柱建物跡（遺構第79図）

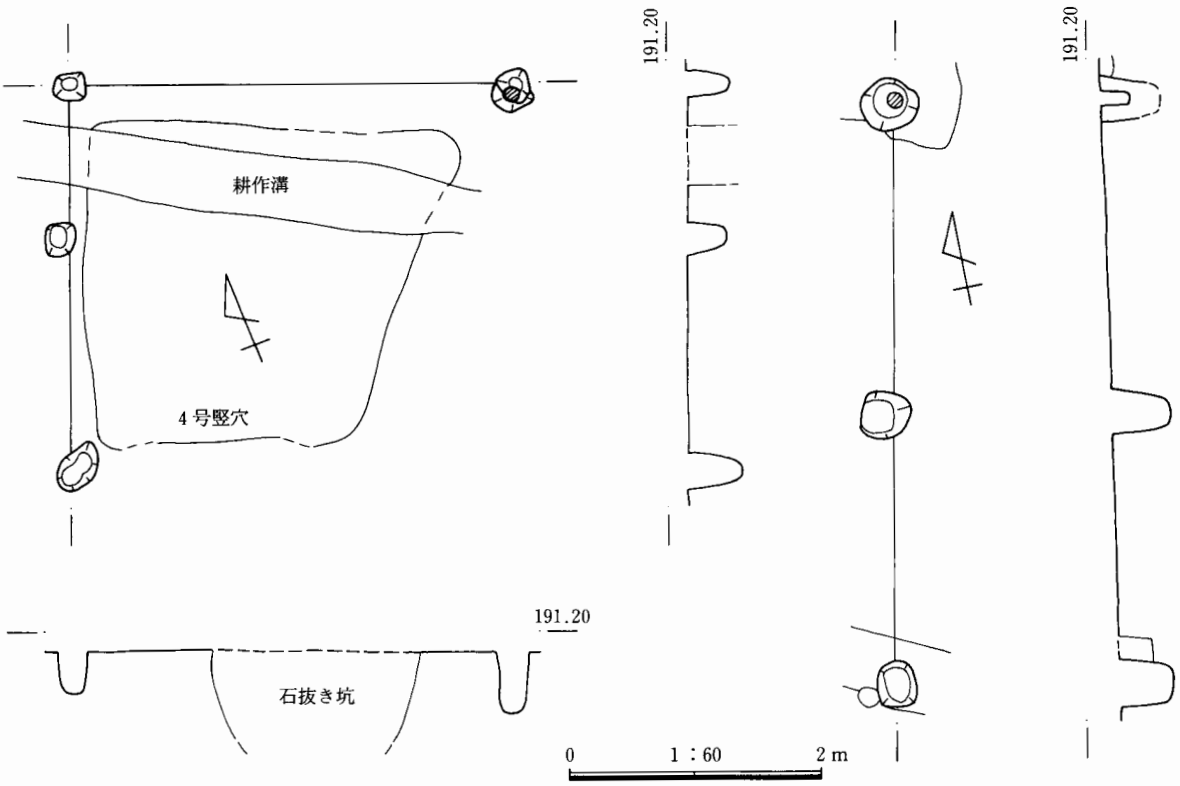
14—13グリッドを中心に位置する。6・12号掘立と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は1間×1間で、規模は東西2.4m、南北2.6mを測る。長軸の方位はN—19°—Eである。柱間は北辺から時計回りで2.4—2.4—2.25—2.6mである。柱穴の形状は方形と円形が混在する。規模は一辺（径）24～36cmで、深さは22～46cmを測る。

17号掘立柱建物跡（遺構第80図）

15—12・13グリッドに位置する。6・11・12・13・15号掘立等と重複するが新旧関係は不明である。柱の配置は桁行の間柱が重複により確定できないため1間×1間としたが、2間×1間の可能性もある。規模は東西2.85m、南北2.4mを測る。長軸の方位はN—69°—Wである。柱穴の形状は方形と円形が混在する。規模は北東隅柱は平面規模、深さとも20cm程度であるが、他は一辺（径）30cm前後で、深さは38～50cmとしっかり掘り込まれている。

18号掘立柱建物跡（遺構第82図）

15—13グリッドに位置する。西辺と北辺だけが検出され、南東に柱穴が検出されない。西辺2間で北辺も



第81図　18号掘立柱建物跡　　第82図　19号掘立柱建物跡

2間の可能性があるが、石抜き穴の重複により不詳である。4号竪穴状遺構と重複し、伴う可能性がある。規模は東西3.75m、南北4.05mを測る。西辺の方位はN—22°—Eである。西辺の柱間は1.2—1.9mで間柱が北に寄っている。柱穴の形状は方形と円形が混在する。規模は一辺（径）24～32cmで、深さは30～48cmを測る。

19号掘立柱建物跡（遺構第81図）

13・14—13グリッドに位置する。西辺が検出されただけで、東側は調査区域外である。柱の配置は南北2間で規模は4.6mを測る。西辺の方位はN—11°—Eである。柱間は2.15～2.45mである。柱穴の形状は円形と方形が混在する。規模は一辺（径）30～45cmで、深さは45cm前後を測る。南端柱穴には柱痕が残存し、径11cm、深さ22cmを測る。

(3) 竪穴状遺構（遺構第84図、ＰＬ12）

1Ａ・Ｂ号竪穴状遺構

16-14～17-14グリッドを中心に位置する。1Ｂ号竪穴が1Ａ号竪穴の南側に重複するような状況で検出されているが、新旧関係は不明である。2・3号溝と重複しており、1Ａ・Ｂ号竪穴ともに古い。7号掘立とも重複するが新旧関係は不明である。

1Ａ号竪穴は南側が削平されており、北端だけが残存する。東西5.4m×南北2m以上を測り、東側の調査区域外へと続いている。深さは10cm未満である。北壁の方位はN—68°—Wである。底面は平坦であるが、あまり踏み固められていない。北壁に沿って浅い溝が検出されている。傾斜地の削平面の可能性もある。

1Ｂ号竪穴は南北3.9m、東西は北辺2.4m、南辺3.1mを測り、隅丸台形状を呈する。深さは1Ａ号竪穴の底面から10cm程度である。長軸の方位はN—15°—Eである。床面は平坦で比較的よく踏み固められている。7号掘立の南半部にちょうど重なり合うことから伴う可能性もある。

2号竪穴状遺構

1Ｂ号竪穴の約1.3m南に位置する。9・10号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

南北2.1m、東西1.8m以上を測り、東側調査区外へと続いている。方位は東西でN—72°—Wである。床面は平坦で比較的よく踏み固められている。壁面はなだらかに立ち上がる。

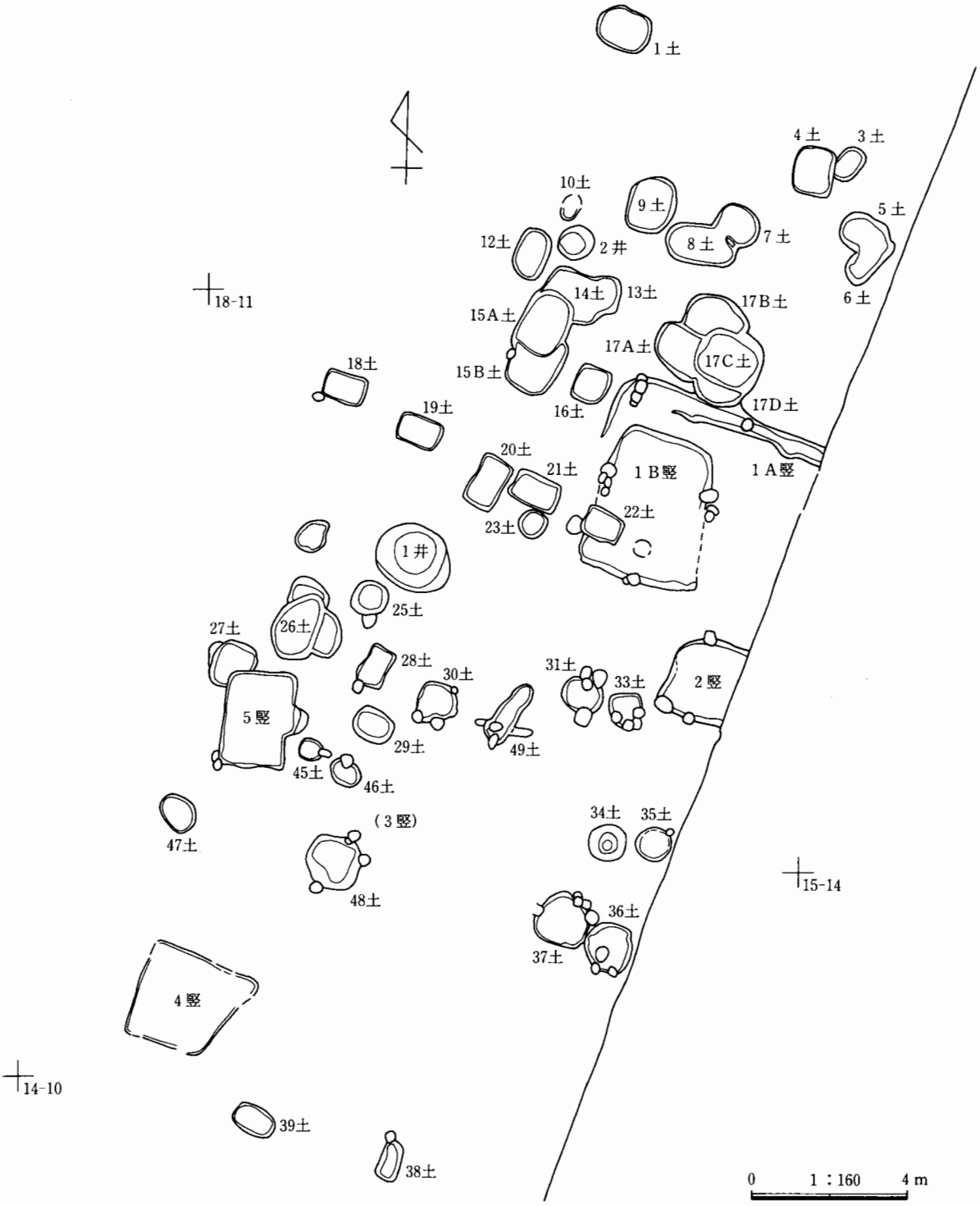
3号竪穴状遺構（実測漏れにより実測図版不掲載）

15—12杭を中心に検出された。掘り込みが浅く部分的に床面が検出されただけである。東西、南北ともに4m以上の規模を測る。床面は比較的良く踏み固められている。

4号竪穴状遺構

14—11グリッドを中心に位置する。6号掘立が東方2.5mに近接する。西壁の外側に3基、さらに北東隅に近接して1基の柱穴が検出されており、覆屋の可能性もある（19号掘立柱建物跡）。

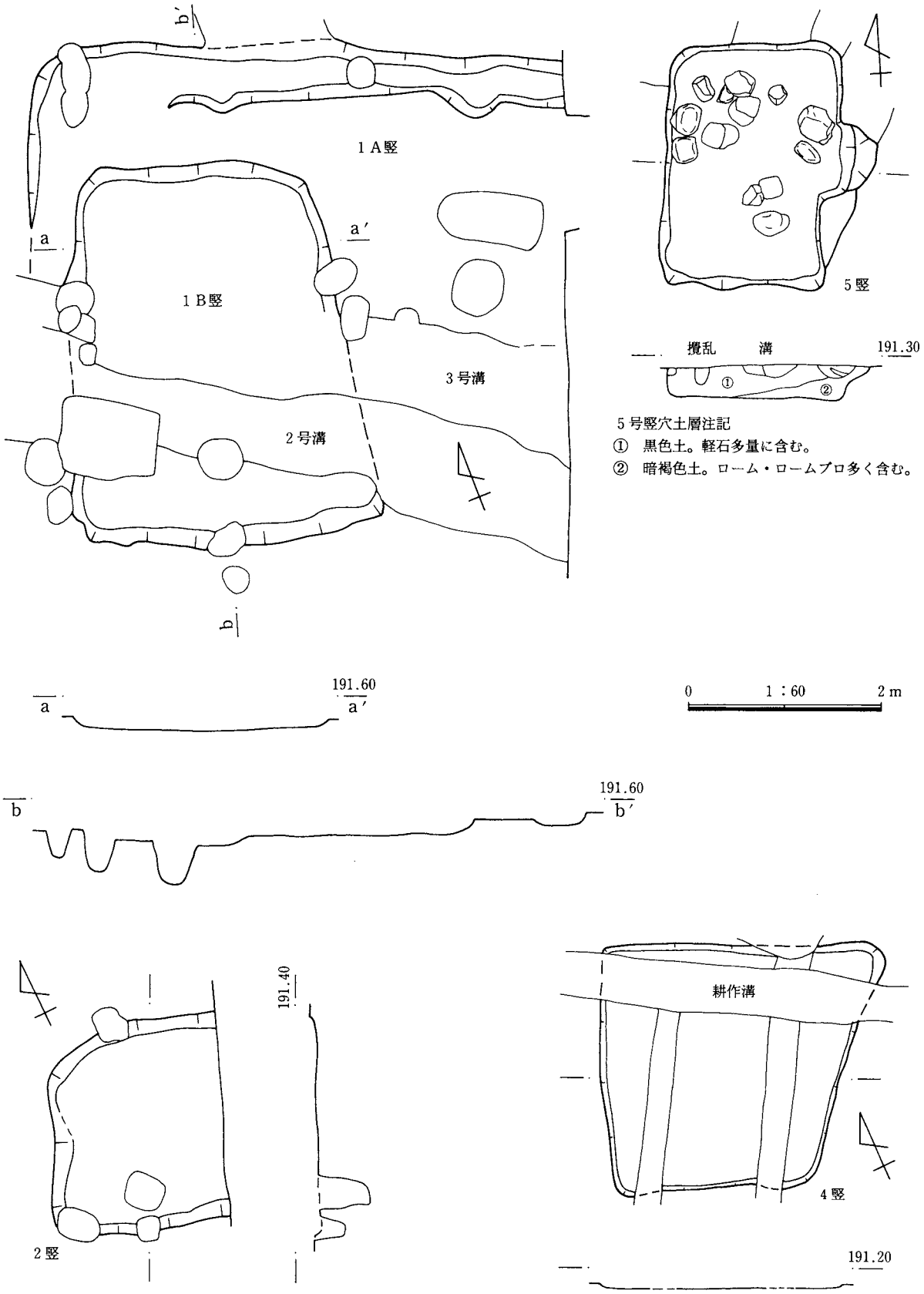
南北2.1m、東西1.8m、深さ5cmを測り、歪んだ方形を呈する。方位は西壁でN—20°—Eである。床面は平坦で比較的よく踏み固められている。



第83図　竪穴状遺構・土坑・井戸配置図

17A・B・C号土坑土層注記
① 暗褐色土ににぶい褐色土。黄褐色ローム少量含む。
② 暗褐色土。
③ ①に類似する。黒色土少量含む。

26A・B号土坑土層注記
① 暗褐色土。ローム少量含む。
② 黒色土主体。パミス多量に含む。
③ 暗褐色土にローム・パミス少量含む。
④ 暗褐色土軽石少ない。
⑤ 黒色土主体。ローム小ブロ含む。


1A竪
1B竪
3号溝
2号溝
5竪
攪乱
溝
191.30
①
②
5号竪穴土層注記
① 黒色土。軽石多量に含む。
② 暗褐色土。ローム・ロームブロ多く含む。
191.60
0
1：60
2m
191.40
耕作溝
4竪
2竪
191.20

第84図　竪穴状遺構

5号竪穴状遺構

15—12グリッドを中心に位置する。11・13号掘立と重複するが、新旧関係は不明である。

南北2.1m、東西1.8mを測り、南北に長い隅丸長方形を呈するが、東壁の中央に半円形の張出し部がある。方位は東西軸でN—72°—Wである。床面は平坦で比較的よく踏み固められている。壁面は直に立ち上がる。多数の礫が出土している。

(4)　土　　坑（一覧表参照、遺構第85～88図、ＰＬ12～14）

18～22、28号土坑はごく最近のいわゆるカマボリであり、実測図は掲載していない。

土坑の大半は中世の掘立柱建物跡群と重複・近接した位置に集中して検出されており、占地状況から大半は中世城館跡に伴うと思われるものの、平安時代集落に伴うものがある可能性は否定できない。

土坑の掘り込みは大半が浅く、壁はなだらかに立ち上がる。平面形状は隅丸方形・長方形、円形である。掘立柱建物跡や溝跡と、あるいは土坑どうしで重複するものも多く、城館の機能した期間がある程度長かったことが伺われるものの、用途などは不明である。

(5)　井　　戸（遺構第89図、ＰＬ14）

土坑群中に位置する。調査時点では１号井戸は24号土坑、２号井戸は11号土坑として調査を行った。

１号井戸には３号溝が重複する。壁面は一旦開いた後で直に立ち上がるが、崩落のためにかオーバーハングする部分もある。中段からまた大きく開く。下層からは自然石が多量に出土し、１点だけ石製品（五輪塔の一部）が出土したが、現在行方不明のため資料提示ができない。

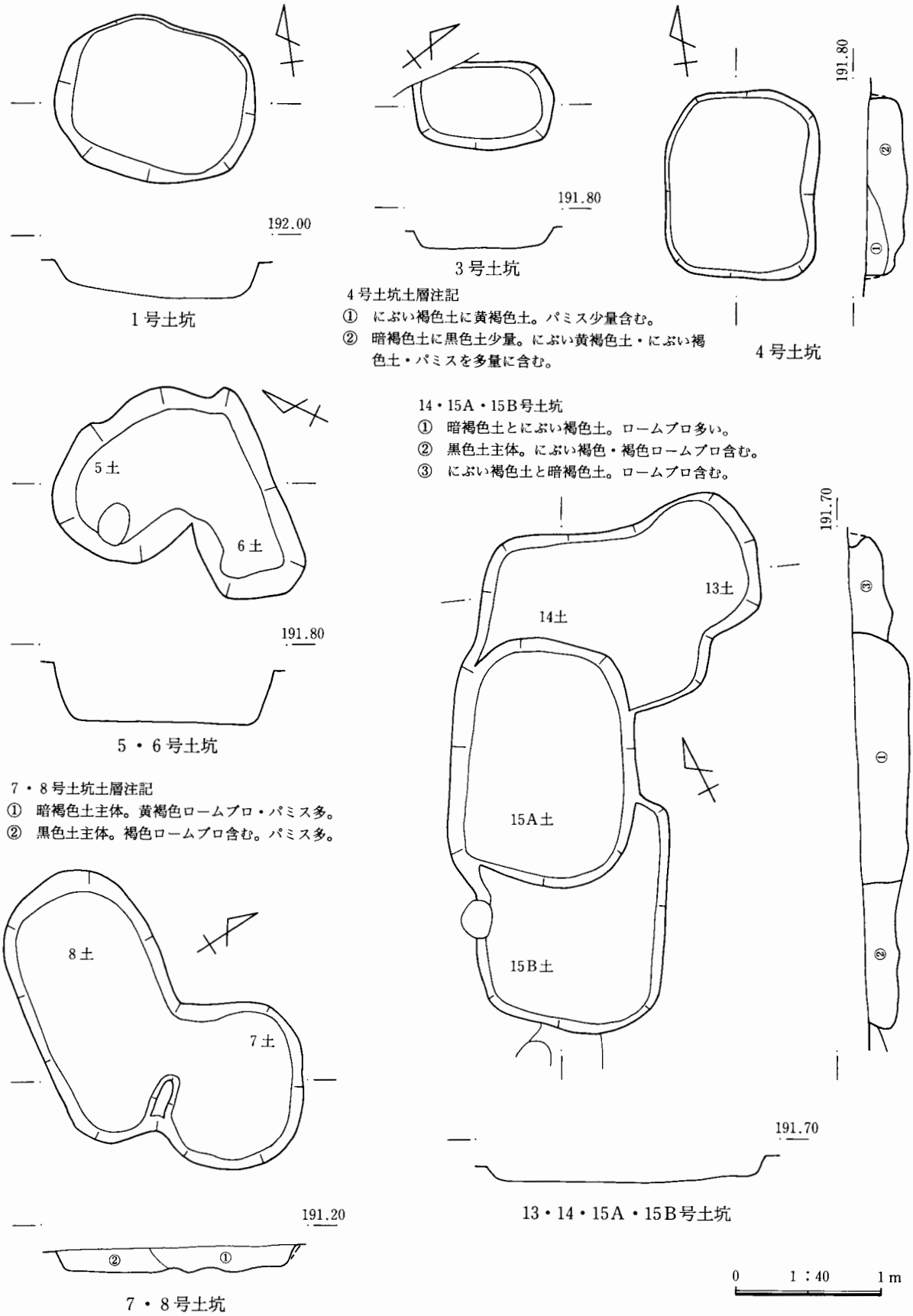
２号井戸は口径に比較して掘り込みが深く、底面近くを掘り切れなかったため、深さだけ確認した。

第21表　上百駄山遺跡　中近世土坑一覧表　　（単位：cm）

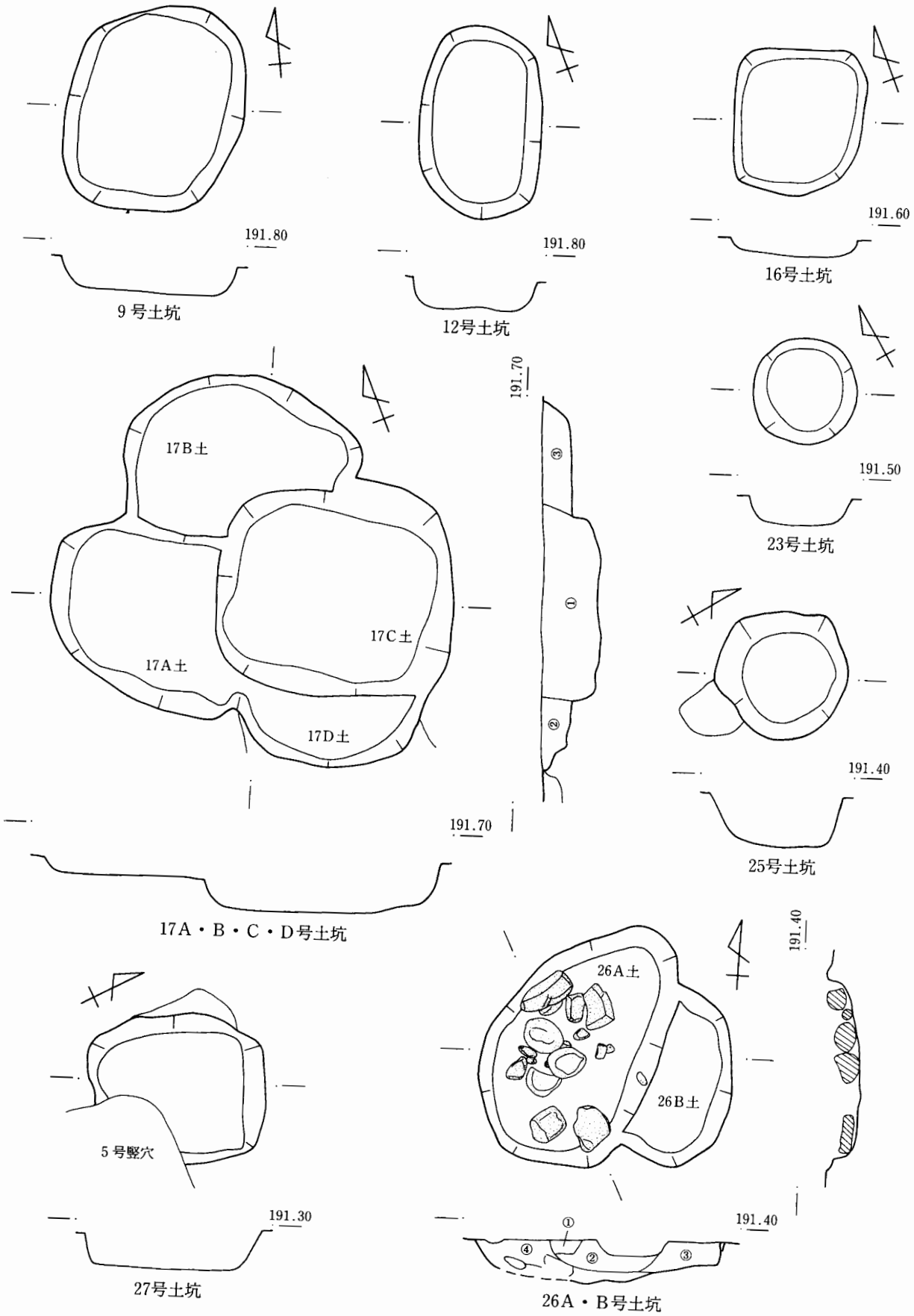
番号	位　置	長軸×短軸	深　さ	長軸方位	平面形状	備考（重複、新旧など）
1	19—14G	140×110	26	N—66°—W	隅丸長方形	
2	19—15G	170× 65	15	N—24°—E	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
3	18—15G	96× 60	12	N—38°—E	隅丸長方形	┐
4	18—15G	130×108	28	N— 8°—E	隅丸長方形	┘
5	18—15G	140× 92	40	N—71°—E	楕　円　形	┐
6	18—15G	144× 68	40	N—44°—E	隅丸長方形	┘
7	18—14G	120× 90	16	N—50°—W	楕　円　形	┐
8	18—14G	188×100	16	N—81°—W	隅丸長方形	┘
9	18—14G	148×125	24	N—22°—E	隅丸長方形	
10	18—13G	(60)× 45	10		楕　円　形	実測図未掲載
11	18—13G	90× 85	170		円　　形	改称→２号井戸
12	18—13G	130× 88	24	N—23°—E	隅丸長方形	

番号	位　置	長軸×短軸	深　さ	長軸方位	平面形状	備考（重複、新旧など）
13	18—13杭	90×(60)	14	N—27°—E	隅丸長方形	
14	17—13G	160×124	24	(N—66°—W)	長　方　形	
15A	17—13G	168×128	36	N—28°—E	隅丸長方形	
15B	17—13G	168×132	24	(N—22°—E)	長　方　形	
16	17—13G	102× 92	12		隅丸方形	
17A	17—14G	(150)×124	12		不　正　形	7号掘立と重複
17B	17—14G	168×(120)	20		不　正　形	7号掘立と重複
17C	17—14G	168×156	36	N—63°—W	隅丸長方形	7号掘立と重複
17D	17—14G	径130以上	20		円　　形？	7号掘立と重複
18	17—12G	115× 60	44	N—72°—W	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
19	17—13G	120× 75	38	N—70°—W	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
20	17—13G	132× 84	47	N—30°—W	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
21	16—13G	126× 80	38	N—63°—W	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
22	16—14G	134× 80	34	N—61°—W	長　方　形	実測図未掲載、耕作坑？
23	16—13G	76× 72	20		円　　形	
24	16—13G	180×168	192		円　　形	改称→1号井戸
25	16—12G	径約 90	36		円　　形	
26A	16—12G	188×120	30	N—34°—E	不正楕円形	
26B	16—12G	118×(60)	20	(N—11°—W)	円　　形？	
27	16—12G	124×106	30	N—20°—E	隅丸長方形	5号竪穴と重複
28	15—12G	104× 74		N—28°—E	長　方　形	耕作坑？　3号溝重複
29	15—12G	106× 84	8	N—60°—W	楕　円　形	11・13号掘立と重複
30	15—13G	径約100	28		不正円形	6・13・15号掘立と重複
31	15—13G					実測図未掲載、柱穴
32	15—13G	108× 94	14	N—60°—W	楕　円　形	14号掘立と重複
33	15—14G	88×(78)	12		隅丸方形？	
34	15—14G	径約105	72		円　　形	8号掘立と重複
35	15—14G	径約 90	62		円　　形	8号掘立と重複
36	14—14G	120×110	10		円　　形？	8号掘立と重複
37	14—13G	136×136	16		隅丸方形	8号掘立と重複
38	13—12G	108× 54	20	N—19°—E	隅丸長方形	
39	13—12G	108× 68	16	N—58°—W	隅丸長方形	
40	11—11G	径約 78	5		円　　形	
41	11—11G	径約 88	8		円　　形	
42	11—11G	110× 86	20		楕　円　形	
43	10—9G	100× 92	16		円　　形	
44	10—9G	100×100	16		隅丸方形	
45	15—12G	径約 60	30		円　　形	3溝、11・13号掘立と重複
46	15—12G	88× 68	12	N—56°—W	楕　円　形	掘立と重複、実測図未掲載
47	15—11G	106× 84	12	N—43°—W	楕　円　形	
48	15—12G	径約100	70		不正円形	11・16号掘立と重複
49	15—13G	172× 66	24	N—38°—E	溝　　状	6・8・14・15号掘立と重複
50	19—14G	70× 60	5		不正方形	

注：□は重複関係を表す

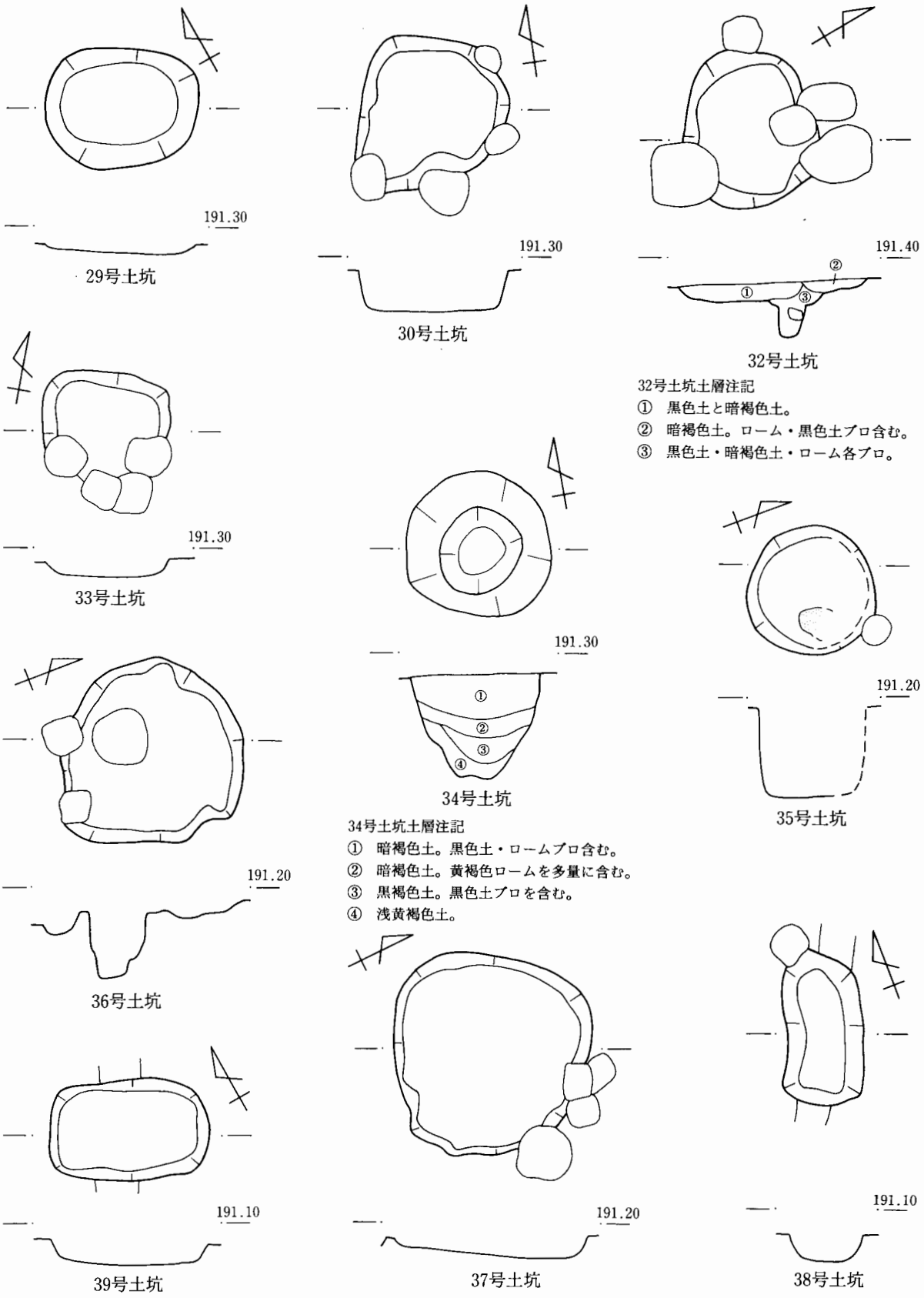

192.00
1号土坑
191.80
3号土坑
191.80
②
①
4号土坑
4号土坑土層注記
① にぶい褐色土に黄褐色土。パミス少量含む。
② 暗褐色土に黒色土少量。にぶい黄褐色土・にぶい褐色土・パミスを多量に含む。
5土
6土
191.80
5・6号土坑
14・15A・15B号土坑
① 暗褐色土とにぶい褐色土。ロームブロ多い。
② 黒色土主体。にぶい褐色・褐色ロームブロ含む。
③ にぶい褐色土と暗褐色土。ロームブロ含む。
191.70
③
①
②
13土
14土
15A土
15B土
191.70
13・14・15A・15B号土坑
7・8号土坑土層注記
① 暗褐色土主体。黄褐色ロームブロ・パミス多。
② 黒色土主体。褐色ロームブロ含む。パミス多。
8土
7土
191.20
②
①
7・8号土坑
0　1：40　1m

第85図　土坑(1)

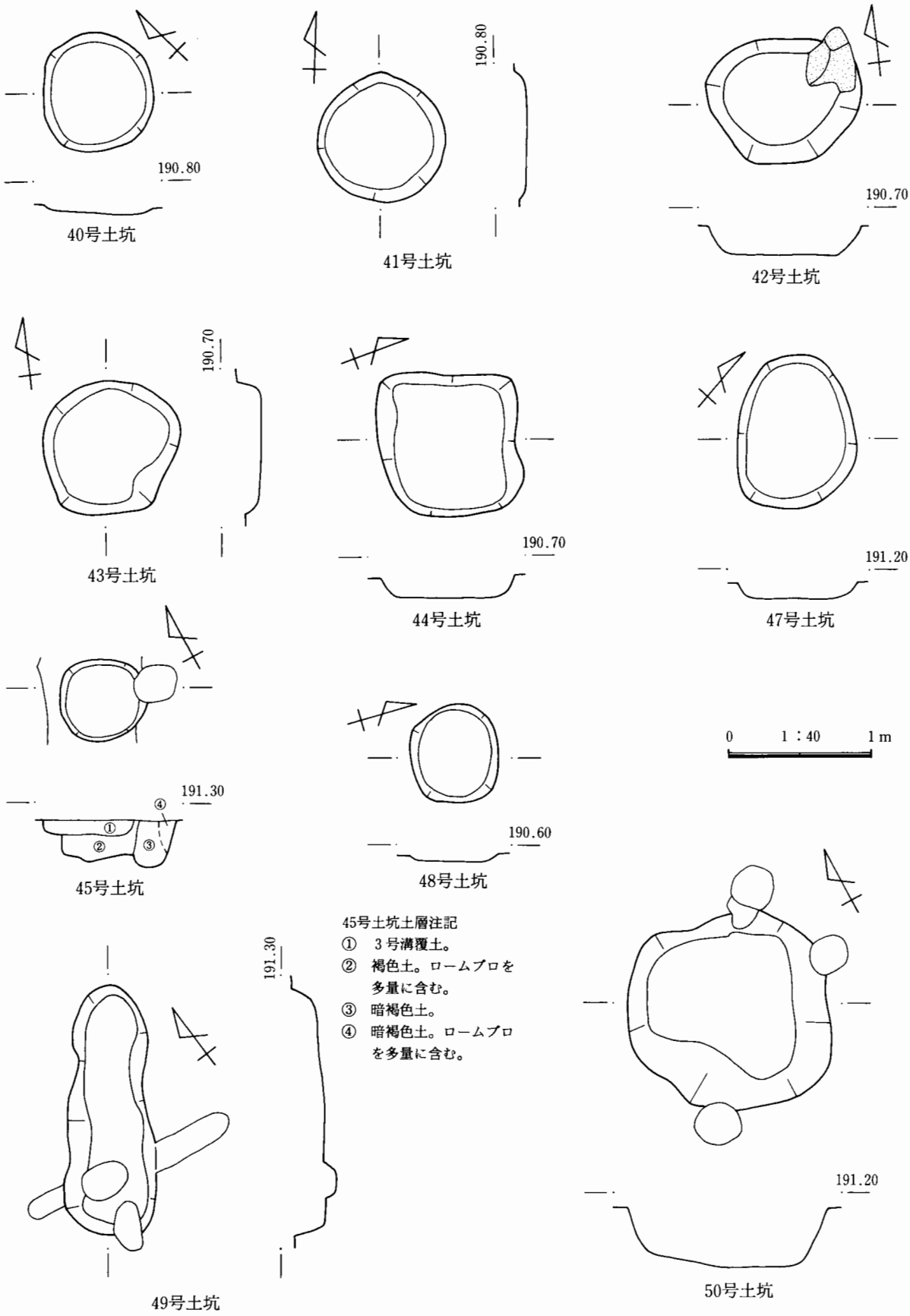


第86図　土坑(2)

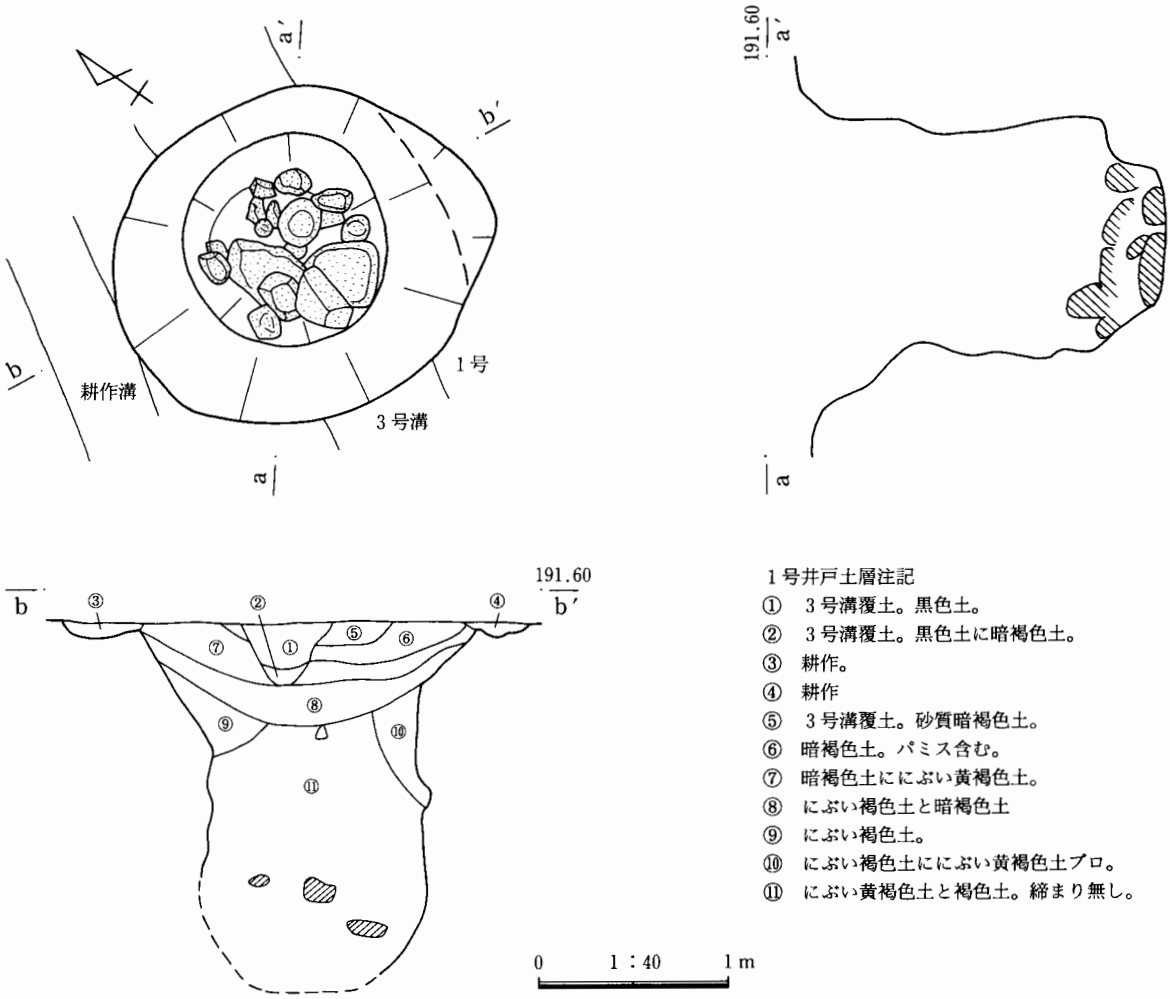
0　1：40　1 m


191.30
29号土坑
191.30
30号土坑
191.40
①
②
③
32号土坑
32号土坑土層注記
① 黒色土と暗褐色土。
② 暗褐色土。ローム・黒色土ブロ含む。
③ 黒色土・暗褐色土・ローム各ブロ。
191.30
33号土坑
191.30
①
②
③
④
34号土坑
34号土坑土層注記
① 暗褐色土。黒色土・ロームブロ含む。
② 暗褐色土。黄褐色ロームを多量に含む。
③ 黒褐色土。黒色土ブロを含む。
④ 浅黄褐色土。
191.20
35号土坑
191.20
36号土坑
191.10
39号土坑
191.20
37号土坑
191.10
38号土坑
0　1：40　1 m

第87図　土坑(3)

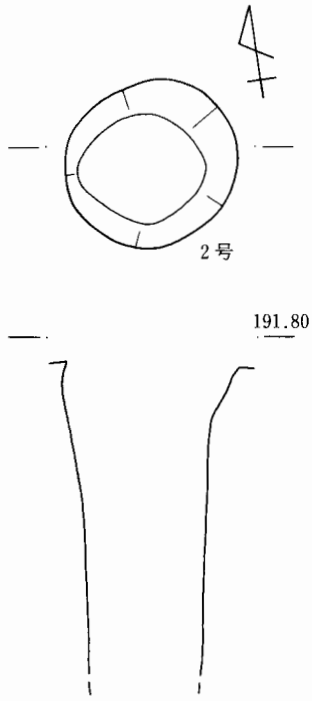

190.80
40号土坑
190.80
41号土坑
190.70
42号土坑
190.70
43号土坑
190.70
44号土坑
191.20
47号土坑
191.30
①
②
③
④
45号土坑
190.60
48号土坑
0　1：40　1m
45号土坑土層注記
① 3号溝覆土。
② 褐色土。ロームブロを多量に含む。
③ 暗褐色土。
④ 暗褐色土。ロームブロを多量に含む。
191.30
49号土坑
191.20
50号土坑

第88図　土坑(4)



1号井戸土層注記
① 3号溝覆土。黒色土。
② 3号溝覆土。黒色土に暗褐色土。
③ 耕作。
④ 耕作
⑤ 3号溝覆土。砂質暗褐色土。
⑥ 暗褐色土。パミス含む。
⑦ 暗褐色土ににぶい黄褐色土。
⑧ にぶい褐色土と暗褐色土
⑨ にぶい褐色土。
⑩ にぶい褐色土ににぶい黄褐色土ブロ。
⑪ にぶい黄褐色土と褐色土。締まり無し。

第89図　井戸跡



(6) 溝　　跡

1号溝（遺構第90図、ＰＬ15）

20—16グリッドから16—９グリッドに位置する。20—16グリッドからＮ—80°—Ｗで西方に向かい、１号住居跡の南で屈曲し、ほぼ真西に向かい、20—12グリッドで大きく南方に屈折し、２号住居跡、Ｊ３号住居跡と重複し、Ｊ３号住居跡の中で西方に曲がり、さらにすぐ南西に曲がり、16—９グリッドで収束する。

20—16グリッドから20—12グリッドの屈折部までが約20m、20—12グリッドから18—11グリッドの屈折部までが約14m、18—11グリッドから18—10グリッドの屈折部までが約３m、18—10グリッドから南端の収束部までが11.5mを測る。上幅最大で40cm、深さ最大で30cm程度である。断面形状は壁面が崩れてＵ字状を呈する部分もあるが、大半

はV字状を呈する。南端部では、上幅は15cm前後でほぼ一定し、深さは20～1cmと南に行くに従い漸減するため、原状も収束しているかどうか不明である。

2号～4号溝（遺構第90図、ＰＬ15）

ほぼN－30°－ＥとN－60°－Wの直線的な走向の溝がそれぞれT字状、L字状に組み合った溝であり、1号溝も含め方形の区画を形成している。

2号溝は18－13グリッドから16－14グリッドに位置する。3号溝と重複しており、3号溝が新しい。1A・B号竪穴とも重複し、本跡が新しい。L字状にほぼ直角に屈折し、南辺は西辺を越えて若干西方に伸びている。19－15グリッドに位置する2B号溝と一連で方形に囲繞する可能性がある。長さは西辺が8m強、南辺が13.6mで西辺からの出が約2.1m、2B号溝が約3mを測る。上幅は最大約1mで、深さは10～30cmを測る。断面形は浅い皿状を呈する。

3号溝は耕作溝等の重複により激しく攪乱されている部分があるため、不確実であるが、16－14グリッドから14－8、13－7グリッド付近までに位置する。1A・B号竪穴、1号井戸と重複し、本跡が新しい。

北端の東西辺は2A号溝の北側にほぼ平行して位置する。17－13グリッドで直角に屈折するが、東西辺は屈折部を越えてさらに西方に伸びている。東西辺から南方に屈折した溝は15－12グリッドでまた西方に屈折し、さらに15－9グリッドで南方に屈折するが、石抜痕や耕作溝によりこの部分の大半が攪乱されている。15－9グリッドで南方に屈折した溝はX＝14ラインに至りT字状に分枝して収束する。長さは南端の東西が約6.6m、T字の柄の部分が約12m、15－9グリッドから15－12グリッドの東西が約14m、17－13グリッドまでの南北が15m前後、北端の東西が約12mを測る。屈折部からの出は約2.7mである。上幅は60cm前後、深さは20～30cmの部分が多いが、15－9グリッドから15－12グリッドでは東から西への掘り変えが行われており、幅が広がっている。

4A号溝は東西辺が12－12グリッドから13－9グリッドに位置し、13－9グリッドでほぼ直角に南方に屈折し8－6グリッドに至る。東西辺は若干湾曲するが、南北辺はほぼ直線的に掘削されている。長さは東西辺が約15.5m、南北辺が約25mを測る。上幅は最大で約1m、深さは30cm前後で推移する。表土剝ぎ(耕作)の深さの関係で削平されているとも考えられ、さらに東方、南方に伸びる可能性がある。

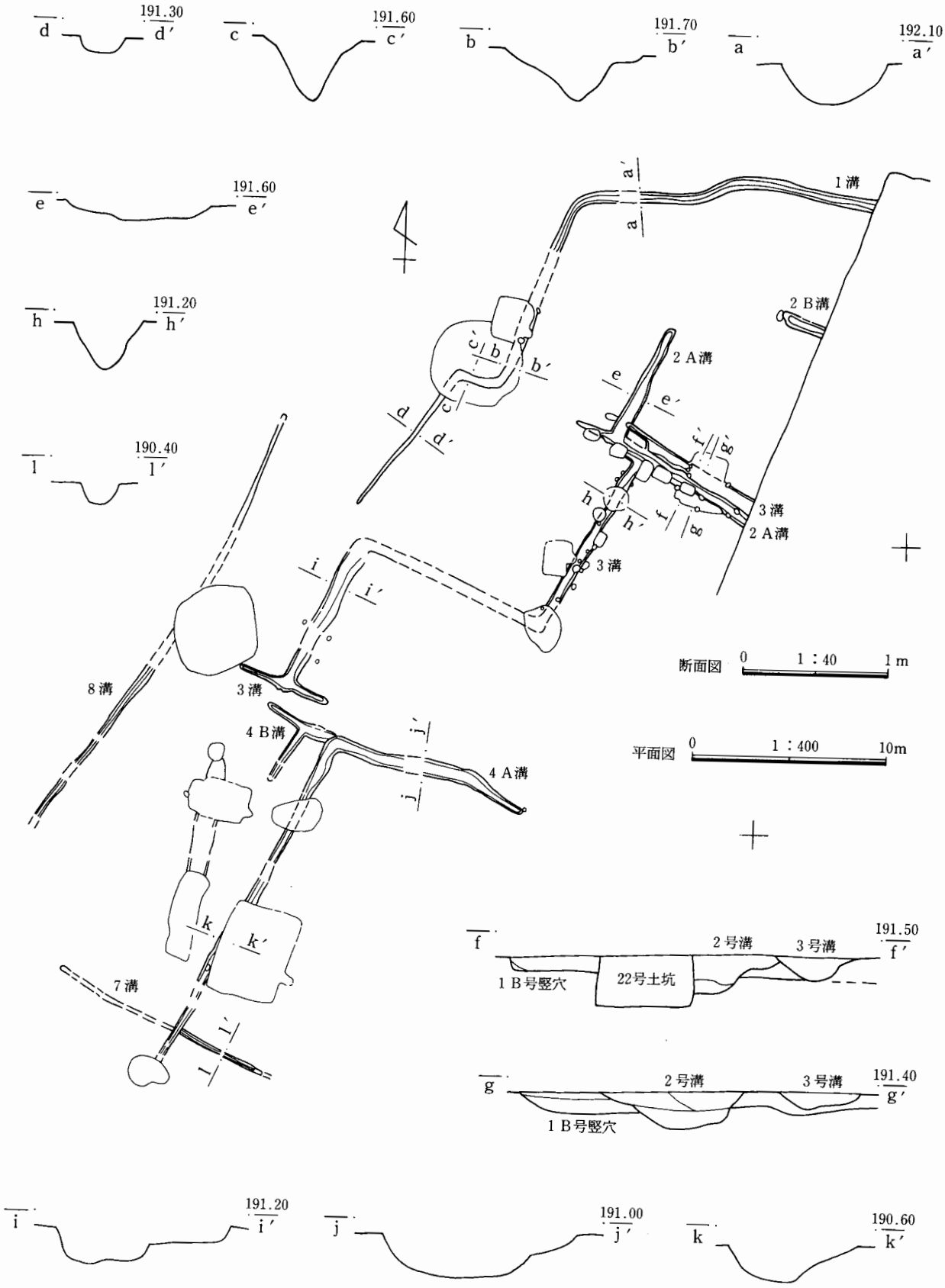
4B号溝は4A号溝の屈折部から東西辺の延長上に位置し、T字状に南方に分枝する。4A号溝の北壁に重複が認められており、4B号溝から4A号溝への掘り替えを行ったものと思われる。東西辺の長さは約5.2m、分枝した南北辺の長さは4m強である。上幅は最大で約80cm、深さ10cm前後である。

5号溝（遺構第91図、ＰＬ16）

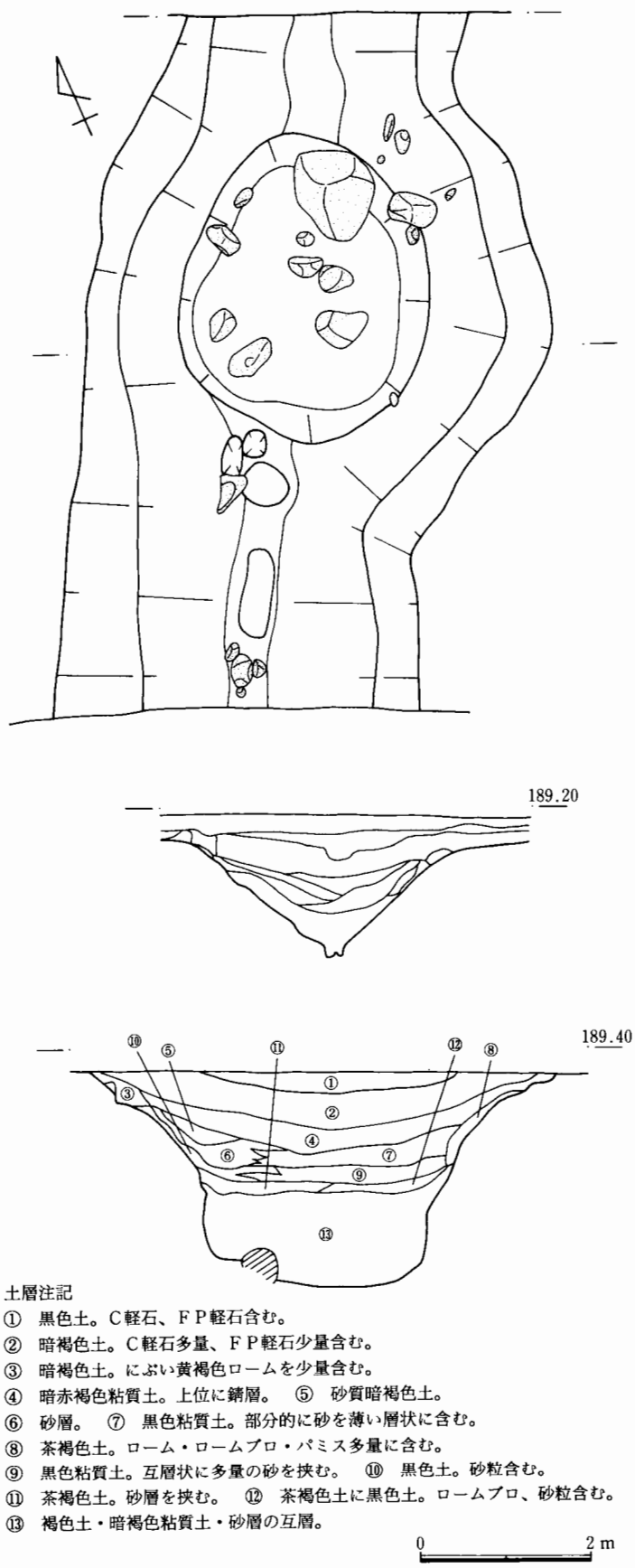
本調査区南端部東寄り、3－11グリッドを中心に位置する。すぐ東側に近接して平安時代の6号溝が平行している。調査区の北端の試掘トレンチにも検出されており、北々東－南々西の走向で直線的に掘削されているようにみえるが、この間で屈曲或いは張り出す可能性もある。

本調査部分では道路幅約8mだけの調査であるが、直線的な溝状の部分の中央に井戸状の掘り込みを敷設している。溝部分の上幅は3.2～4.4m、深さ1.1～1.3mを測り、断面形は薬研状である。走向はN－31°－Eである。幅約40cmの狭い底面には激しく流水痕が穿たれている。

井戸状の部分は径約5.4mの円形を呈する。東西方向の断面は、上段は溝と同様に開くが、中段以下は広い底部から直或いは若干壁面を掘り込んで立ち上がる。壁面には自然礫が露出する。深さは約2.5mを測る。



第90図　1～4号、7・8号溝



第91図　5号溝

7号溝（遺構第90図、PL16）

10－5グリッドから8－8グリッドに位置する。1号掘立と重複し本跡が新しい。また、4A号溝、4号掘立とも重複するが、新旧関係は確認できていない。

東西約16mの長さを調査したが、さらに東側へ伸びる様相が伺われる。上幅25cm前後、深さ10cm前後を測り、断面形はU字状を呈する。走向は概ねN－66°－Wを測る。

8号溝（遺構第90図）

17－8グリッドから7－3グリッドにかけて台地の縁辺に沿って検出されている。12－5グリッドから13－6グリッド付近が最も深く、端部に向かい深さが漸減するため、原状ではさらに南北に伸びていた可能性がある。

南北約56mの長さを調査した。中央部では上幅50～60cm、下幅40cm前後、深さ50cm前後を測り、断面形はU字状を呈する。12－5グリッド付近での走向はN－36°－Eを測る。

(7)　1号遺構

12－7グリッドから10－7グリッドに位置する。当初、形状などから比較的最近の耕作に伴う掘り込みと考えたが、覆土や溝との位置関係からすれば城館跡と一連の遺構の可能性が強い。平面的には溝状を呈するが、短軸断面は長方形状を呈し、平坦な底面から壁がほぼ直立しており、長大な土坑とでも表現したほうが適当と思われる。

長さ約8m、幅約1.5mの掘り込みの南側長軸上に長さ約6m、幅約2mの掘り込みが重複するが、南端は掘り残してしまった。

III　寺間遺跡

1．概　　要

調査区は南北道路予定地とその北端の遊水池拡幅部、南半の切り土拡幅部と東西道路予定地である。さらに遺跡内と推定される区域で切り土の予想される地点で比較的密な試掘調査を行ったが、遺構密度が薄いこともあり、東西道路東端の南側に検出された井戸１基だけを部分的に調査するに留まった。

縄文時代の遺構は切り土拡幅部南端から東西道路にかけて検出されている。住居跡は台地の西端と中央部に、土坑は西端と東半部に散在して検出された。このほか明確な時期は不明であるが、小ピット群が切り土拡幅部から検出されている。遺物は遺構内と周辺から前期中葉、前期後半のものが少量出土している。又、遊水池拡幅部の攪乱土中から中期の土器破片が出土した。

平安時代の遺構は住居跡１軒、掘立柱建物跡２棟、溝２条で、すべて南北道路と遊水池拡幅部で検出された。また、平安時代以前に機能していたと思われる河川跡（３号溝）が、南北道路と切り土拡幅部の境に検出され、少量の遺物が出土している。

時期不明の遺構は土坑と井戸、溝跡で、多くは中近世に帰属すると考えられる。土坑は切り土拡幅部の台地縁辺を中心に占地している。遺物は井戸から五輪塔の火輪が出土しただけである。

発掘調査によって出土した遺物ではないが、調査区内の台地西端には調査前に六地蔵が置かれていた。

2．縄文時代の遺構と遺物

(1)　竪穴住居跡

Ｊ１号住居跡（遺構第92図、遺物第96図、ＰＬ31）

１－３～２－３グリッドにかけて位置する。東～北方向に土坑群が近接する。時期不明の１号土坑が覆土中の南半部に重複する。

規模は東西3.4m、南北4.4m、深さ30～50cmを測り、隅丸長方形を呈する。壁面は比較的急角度で立ち上がる。床面はあまり踏み固められておらず軟弱である。西壁際を中心に数基の小ピットが検出されたが、主柱穴と思われるものは検出されなかった。炉も不明である。

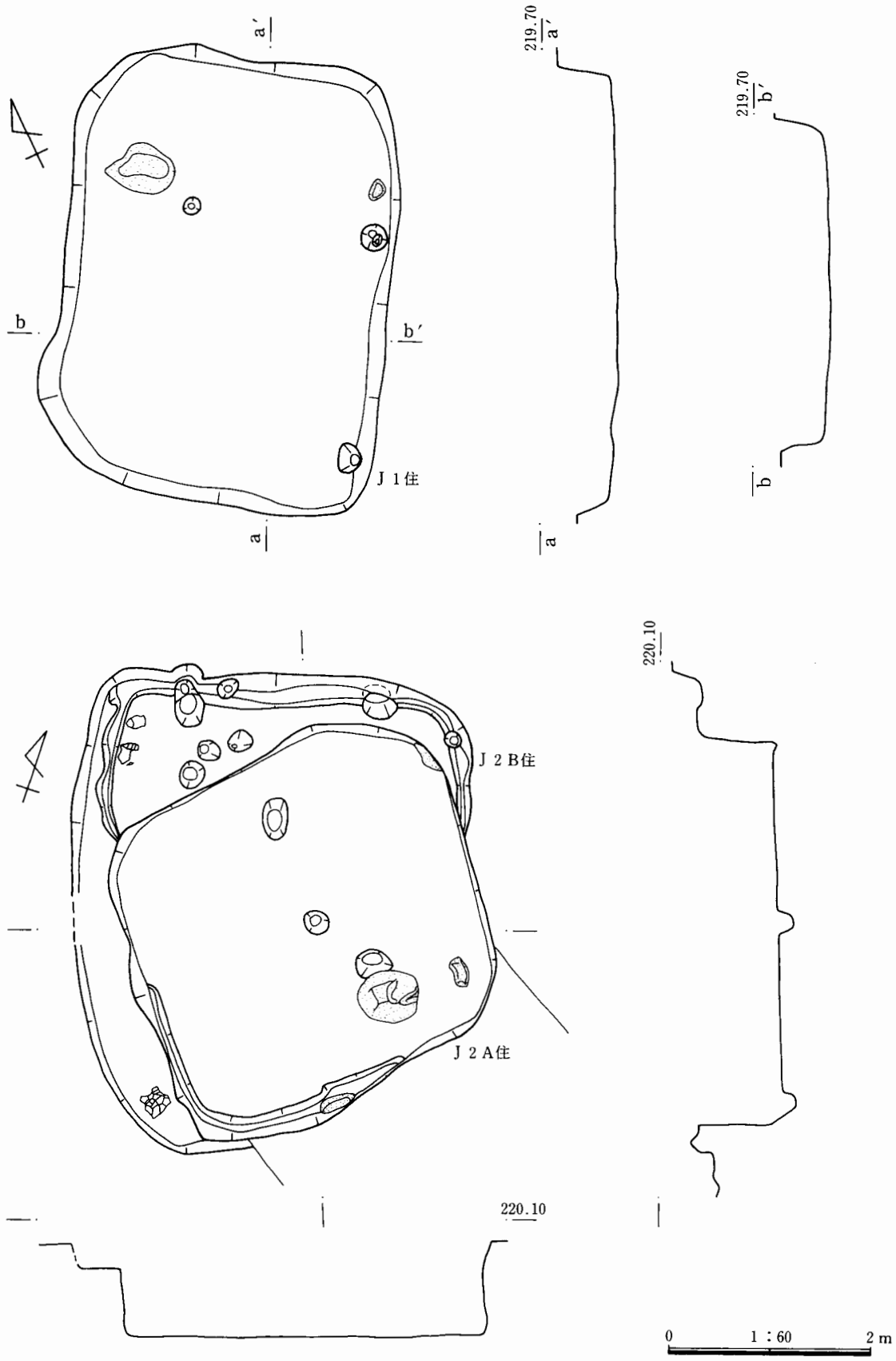
遺物は覆土中から少量の土器破片が出土しただけである。遺構の時期は不明確ではあるが、縄文時代前期中葉と思われる。

Ｊ２Ａ・Ｂ号住居跡（遺構第92図、遺物第96図、ＰＬ31）

８－４グリッドを中心に位置する。Ｊ10号土坑が南に近接する。２軒の住居が重複しており、Ａ号住居跡がＢ号住居跡よりも新しい。Ａ号住居跡は一辺約3.4m、深さ70～90cmを測り、菱形状を呈する隅丸方形住居である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はあまり踏み固められておらず軟弱である。柱穴は中央部と南壁際の２ケ所に検出されている。炉は不明である。

遺物は少量の土器破片と石器が出土しただけである。遺構の時期は不明確であるが、縄文時代前期後半と思われる。

Ｂ号住居跡は歪んだ隅丸方形状を呈する住居跡で東西4.8m、南北4.0mを測る。検出面からの掘り込みが浅いうえに耕作溝による攪乱も受けており、さらにＡ号住居跡によって過半部を削平されているため遺構の



第92図　J 1・J 2号住居跡

詳細は不明である。床面は比較的よく踏み固められており、浅い周溝が部分的に巡る。北壁には2基の壁柱穴が検出されている。また、他にも数基の柱穴が認められるがいずれも浅い。

遺物はA号住居跡の床面直上から深鉢等が出土しているが、全体的に量は少ない。遺構の時期は出土遺物から縄文時代前期後半、諸磯a式期と思われる。

(2) 土　　坑（第22表参照）（遺構第93・94図、遺物第97図、ＰＬ31・32）

該期の土坑はＪ１号住居跡の東方に比較的集中して検出されているが、全体的には調査区域の南寄りの区域に散在した占地状況を呈する。

平面形状は円形を呈するものが多い。また、断面がいわゆる袋状を呈する貯蔵穴と思われるものもある。平面形状が隅丸方形で比較的深い掘り込みをもつ、いわゆる陥し穴と推測されるものもある。

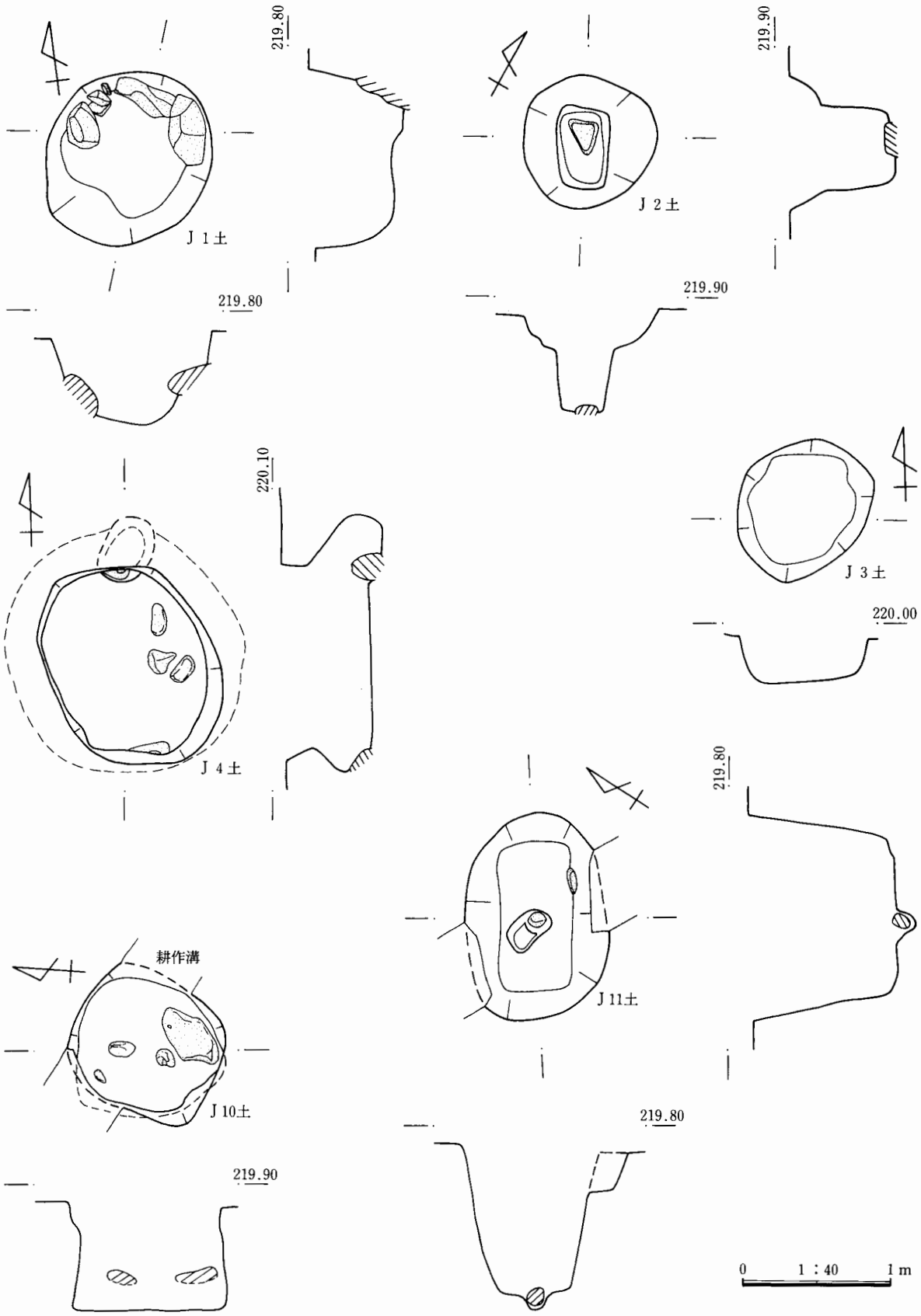
各土坑ともほとんど遺物が出土しておらず、数基から少量の土器破片、石器が出土しただけであり、大半は明確な帰属時期が不明である。

(3) ピット群（遺構第95図、ＰＬ32）

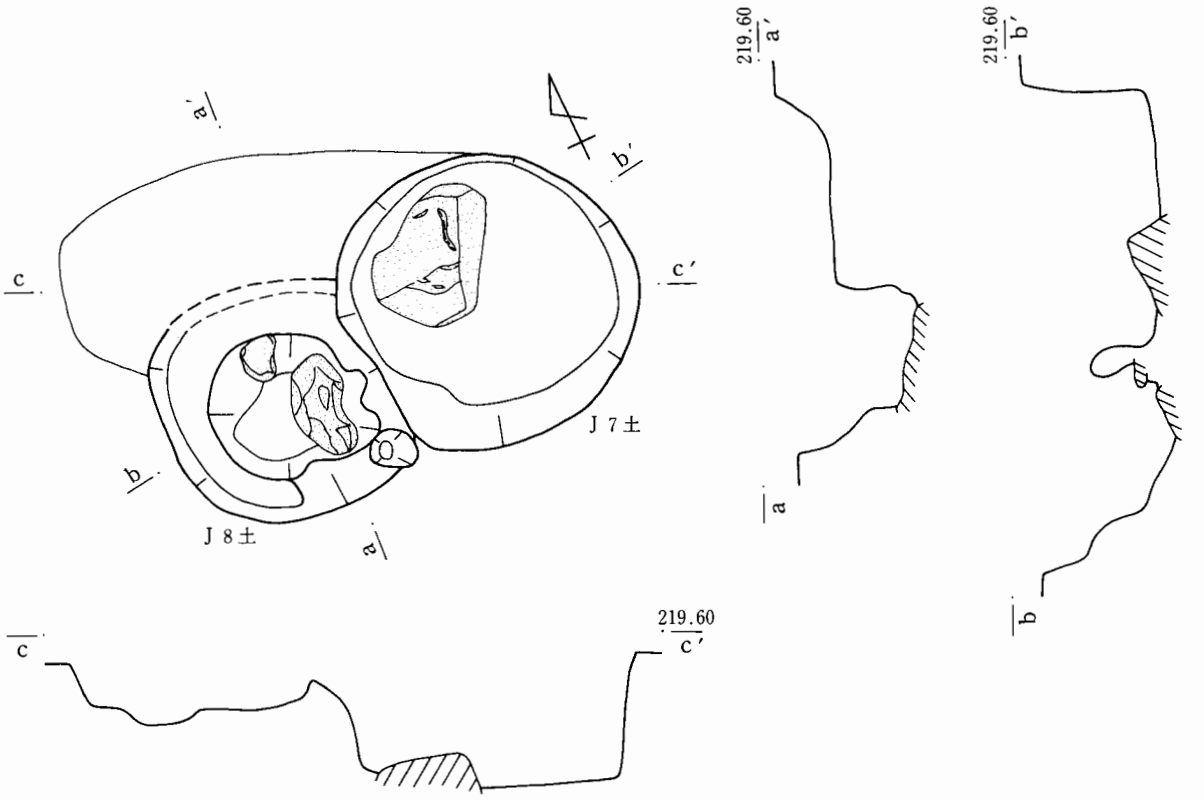
覆土の状況から該期に属すると思われる小ピットが4－5グリッドから6－7グリッドにかけて検出されている。径・深さともに10～30cmと一定していない。部分的に直線的に並ぶものもあるが、特に規則的な配列を看取することはできなかった。遺物はまったく出土していないため明確な時代・時期は不明である。覆土はＣ軽石、ＦＰ軽石を含まない比較的しまりのある暗褐色土である。

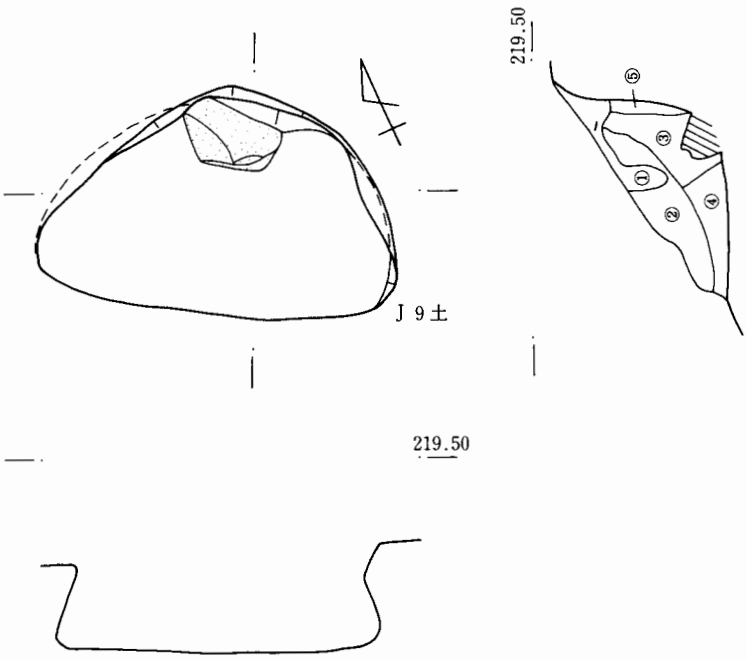
第22表　縄文土坑一覧表　（単位：cm）

番号	位　置	長軸×短軸	深　さ	長軸方位	平面形状	備考（重複、新旧など）
Ｊ1	2－4Ｇ	150×110	50		楕　円　形	
Ｊ2	2－5Ｇ	上端　径90 中段　60×35	70		円　　形 隅丸長方形	陥し穴？
Ｊ3	3－5Ｇ	100×85	30		不整円形	
Ｊ4	3－6Ｇ	上端 150×110 中段 170×160	60		楕　円　形 円　　形	袋状、貯蔵穴 底面北端にピット
Ｊ5						欠番
Ｊ6	4－6Ｇ	径約90	20		円　　形	実測図未掲載
Ｊ7	1－3Ｇ	径160	70		円　　形	Ｊ8と重複
Ｊ8	1－4Ｇ	径140	70		円　　形	Ｊ7と重複
Ｊ9	1－3Ｇ	(径190)	100		(円　　形)	袋状、南半部削平
Ｊ10	3－15Ｇ	100×90	80		円　　形	袋状、貯蔵穴
Ｊ11	2－22Ｇ	140×100	100	N－58°－E	楕　円　形	陥し穴？、ピット1
Ｊ12	3－25Ｇ	径約130	70		円　　形	

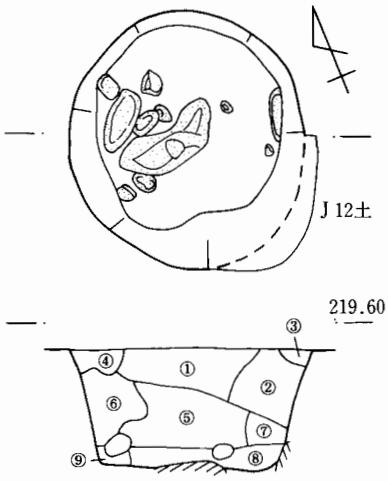

219.80
J 1土
219.80
219.90
J 2土
219.90
220.10
J 4土
J 3土
220.00
219.80
J 11土
耕作溝
J 10土
219.90
219.80
0　1：40　1 m

第93図　縄文土坑(1)





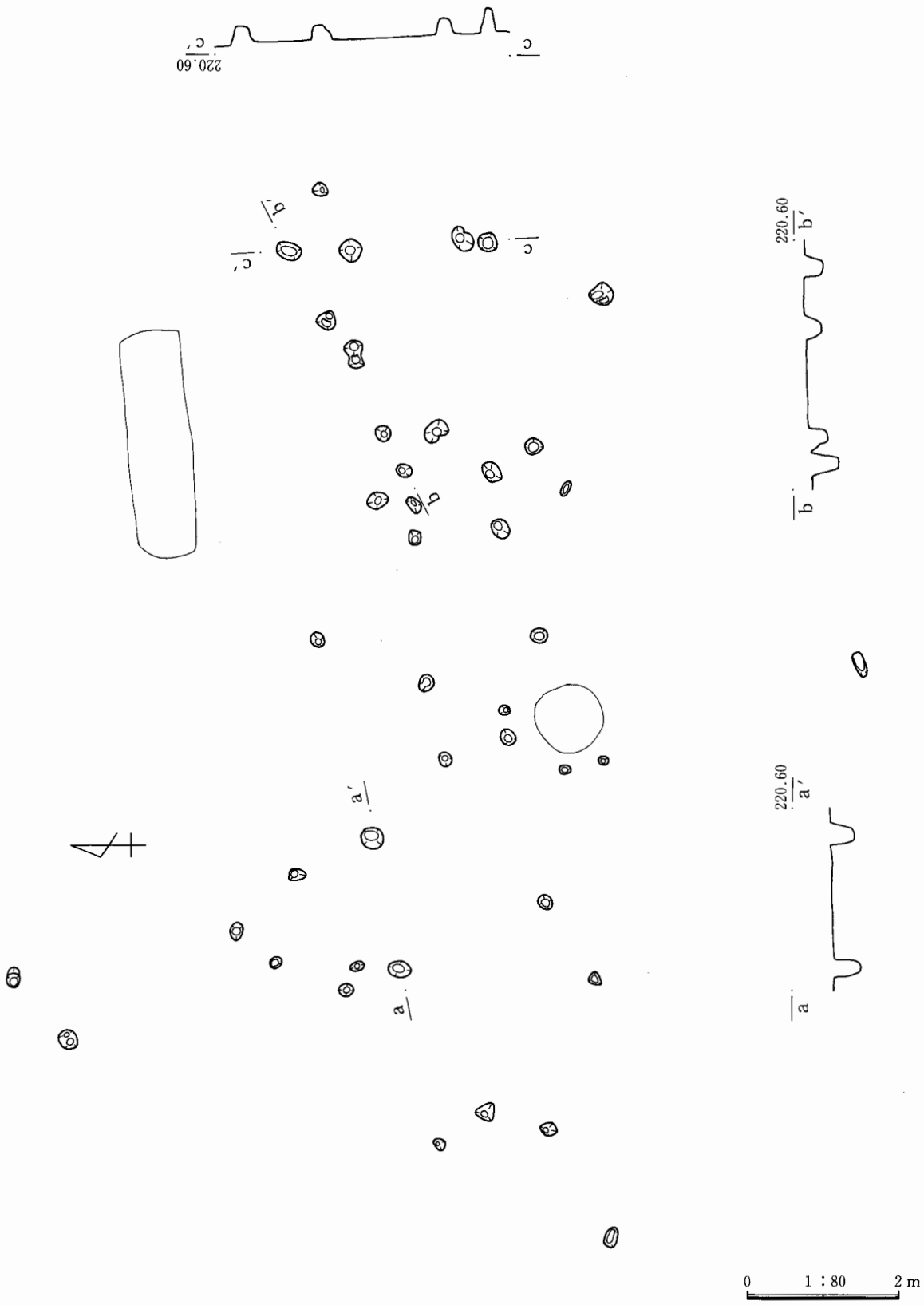
J 9号土坑土層注記
① 攪乱
② 黒褐色土。
③ にぶい褐色土とにぶい黄褐色土。
④ にぶい褐色土。
⑤ 黄褐色土主体。



J 12号土坑土層注記
① 灰褐色土ににぶい黄褐色土。パミス多量。
② にぶい黄褐色土に灰褐色土。
③ にぶい黄褐色土。≒④
⑤ 灰褐色土ににぶい黄褐色土。≒⑥
⑦ ≒②
⑧ 灰褐色土。パミス少量含む。
⑨ 黄褐色土。ホリスギ？

第94図　縄文土坑(2)

0　1：40　1 m



第95図　小ピット群

(4) 出土遺物

土器

Ｊ１号住居跡出土土器（第96図、観察表第23表、ＰＬ37）

１・２は縄文施文土器、３・４は無文土器である。前期中葉と思われる。

Ｊ２号住居跡出土土器（第96図、観察表第24表、ＰＬ37）

１は２Ｂ号住居跡の床面密着で出土した。口径22.2cm、残存高22.5cmを計る。２・３は平行沈線文土器である。４～19は縄文施文土器である。６・７、８・12・13・16・17はそれぞれ同一個体と思われる。20・21は含繊維土器である。１～19は前期後半、20・21は前期中葉と思われる。

土坑出土土器（第97図、観察表第25～27表、ＰＬ37）

Ｊ２号土坑１・２は含繊維の縄文施文土器である。Ｊ５号土坑１・２も含繊維の縄文施文土器である。Ｊ10号土坑１は含繊維の縄文施文土器、２～４は無繊維で、２は平行沈線文、３は縄文、４は無文である。

遺構外出土土器（第97図、観察表第28表、ＰＬ37）

１～５は含繊維の縄文施文土器である。１は歪みが大きいため復元図の口縁部の開きが大きすぎる可能性もある。現状で口径約30cm、残存高も約30cmを計る。１～５は前期中葉と思われる。６以下は無繊維で、６～８は爪形文、９は浮線上に縄文施文する浮線文土器、10～14は縄文施文土器で、12は円形刺突文を付す。６～14は前期後半と思われる。15は縄文地文上に太沈線で施文する。16は口縁部に隆帯で区画し、太沈線で横矢羽状文を充填する。15は後期、16は中期後半と思われる。

石器（写真図版だけ掲載）

Ｊ２号住居跡からは石匙・石鏃等が出土している。Ｊ８号土坑からはスクレイパーが出土した。

遺構外からは打製石斧・磨石・石鏃等が出土した。21－６グリッドからはまとまって打製石斧・石鏃・剝片が出土している。

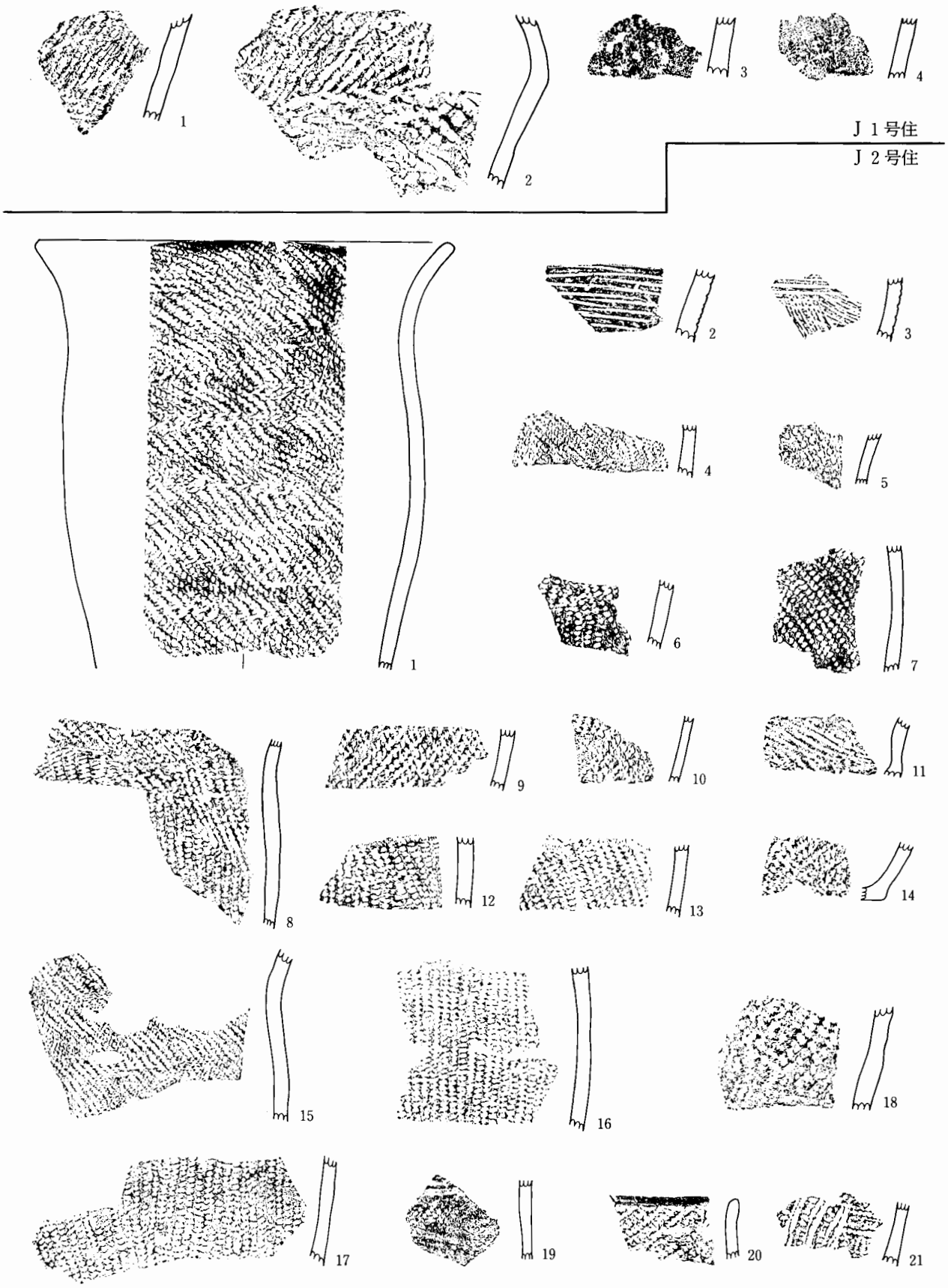
３－７グリッドの遺物包含層からは線刻礫が遺構外出土土器１などとともに刻面を上に据えられた状態で出土しており、土坑等の遺構の存在を伺わせるが、壁面・底面は明瞭に検出されなかった。

第23表　Ｊ１号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部	L	繊維	にぶい橙色～暗褐色
2	胴部	L－R	繊維、砂粒	橙色～にぶい橙色
3	胴部、無文		白・赤色粒、砂粒	にぶい黄橙色
4	胴部、無文		白色粒、砂粒	にぶい橙色

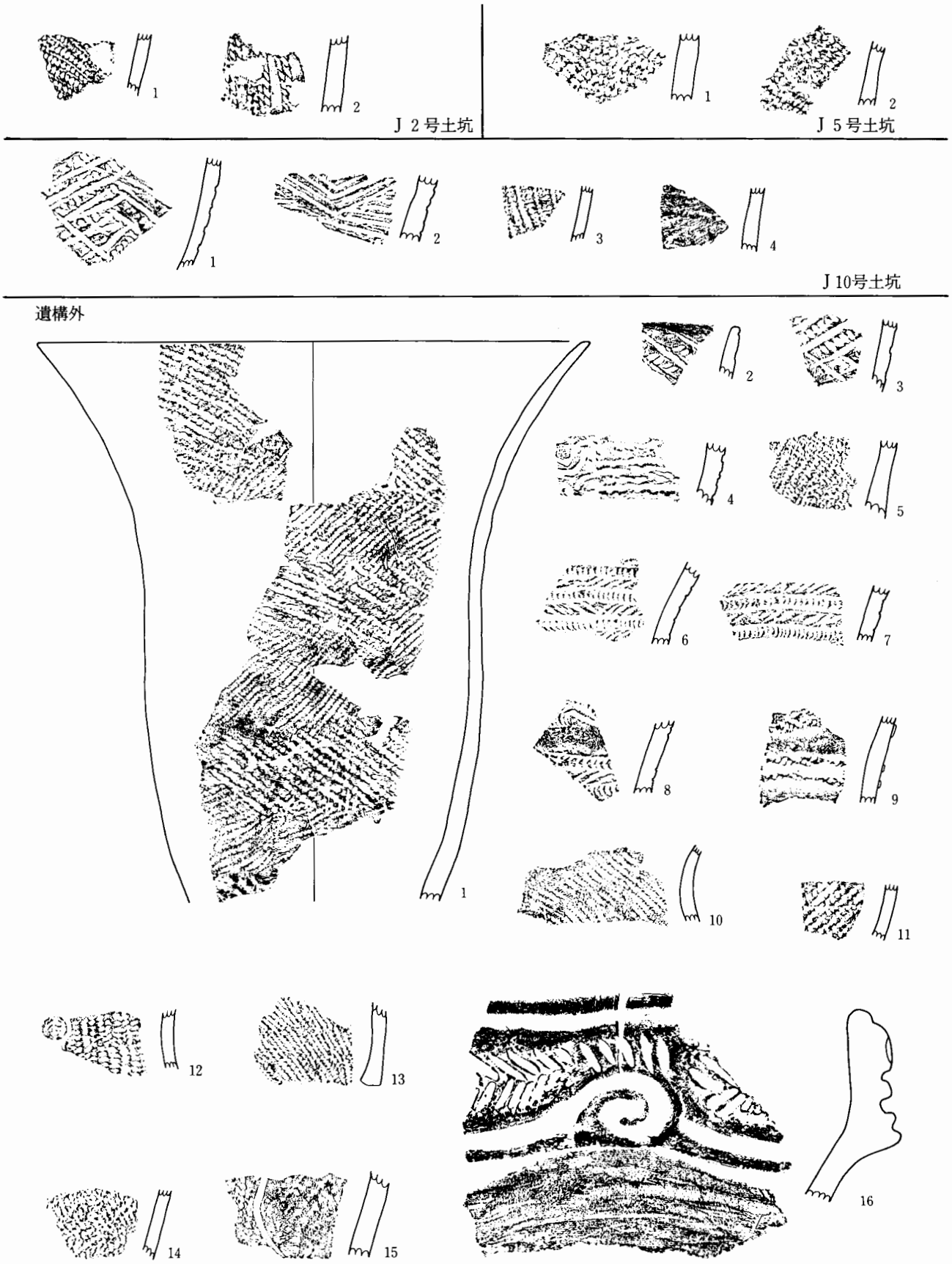
第24表　Ｊ２号住居跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	平口縁	RL	砂粒	にぶい赤褐色～灰褐色
2	胴部、連続沈線５㎜		砂粒	黒色



第96図　Ｊ１・Ｊ２号住居跡出土土器

0　1：3　10cm



第97図　縄文土坑・遺構外出土土器

0　1：3　10cm

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
3	胴部、集合沈線３㎜		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
4	胴部	ＲＬ	細砂	にぶい橙色
5	胴部	ＲＬ	砂粒	赤褐色
6	胴部	ＲＬ	砂粒	明赤褐色
7	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい褐色
8	胴部	ＲＬ	砂粒	赤色～にぶい赤褐色
9	胴部	ＬＲ	砂粒	にぶい褐色～暗赤褐色
10	胴部	ＬＲ	細砂	淡黄色～褐灰色
11	胴部	ＲＬ	砂粒	黒褐色
12	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
13	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
14	底部	ＬＲ	砂粒	にぶい橙色
15	胴部	ＲＬ	細砂	にぶい橙色～黒褐色
16	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい赤褐色
17	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
18	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒	にぶい黄橙色～にぶい褐色
19	胴部、単沈線？	ＬＲ	砂粒、白色粒	赤褐色
20	平口縁	ＬＲ	繊維、白色粒、砂粒	にぶい褐色
21	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい黄橙色

第25表　Ｊ１号土坑出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい橙色
2	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい橙色

第26表　Ｊ５号土坑出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部	ＲＬ－ＬＲ	砂粒、繊維	黒色土
2	胴部	ＲＬ－ＬＲ	砂粒、繊維	浅黄橙色～黒色

第27表　Ｊ10号土坑出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部	附加条	砂粒、繊維	にぶい橙色
2	胴部、連続沈線（深―浅）4.5㎜		白色粒、砂粒	にぶい橙色～黒色
3	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい褐色
4	胴部、無文		砂粒	にぶい赤褐色

第28表　遺構外出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	平口縁	ＲＬ－ＬＲ	繊維	にぶい橙色～褐灰色
2	平口縁	附加条	砂粒、繊維	褐灰色
3	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい橙色
4	胴部、平行沈線、コンパス文、波状		繊維、砂粒	にぶい橙色
5	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒	橙色
6	胴部、爪形文間にキザミ		粗砂	橙色
7	胴部、爪形文間にキザミ		粗砂	橙色～褐色
8	胴部、爪形文間にキザミ		砂粒	にぶい橙色
9	胴部、浮線文上に縄文施文	ＲＬ	粗砂	にぶい黄橙色
10	胴部	ＲＬ	細砂	にぶい褐色～黒褐色
11	胴部	ＬＲ	砂粒	明赤褐色
12	胴部、円形刺突文	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色
13	胴部	ＲＬ	砂粒	にぶい橙色～橙色
14	胴部	ＬＲ	砂粒	にぶい赤褐色
15	胴部、太沈線	ＲＬ	白色粒、砂粒	灰白色～褐灰色
16	平口縁、隆帯で区画文・渦巻文、太沈線で矢羽根状文		白色粒、砂粒	灰白色～褐灰色

3．平安時代の遺構と遺物

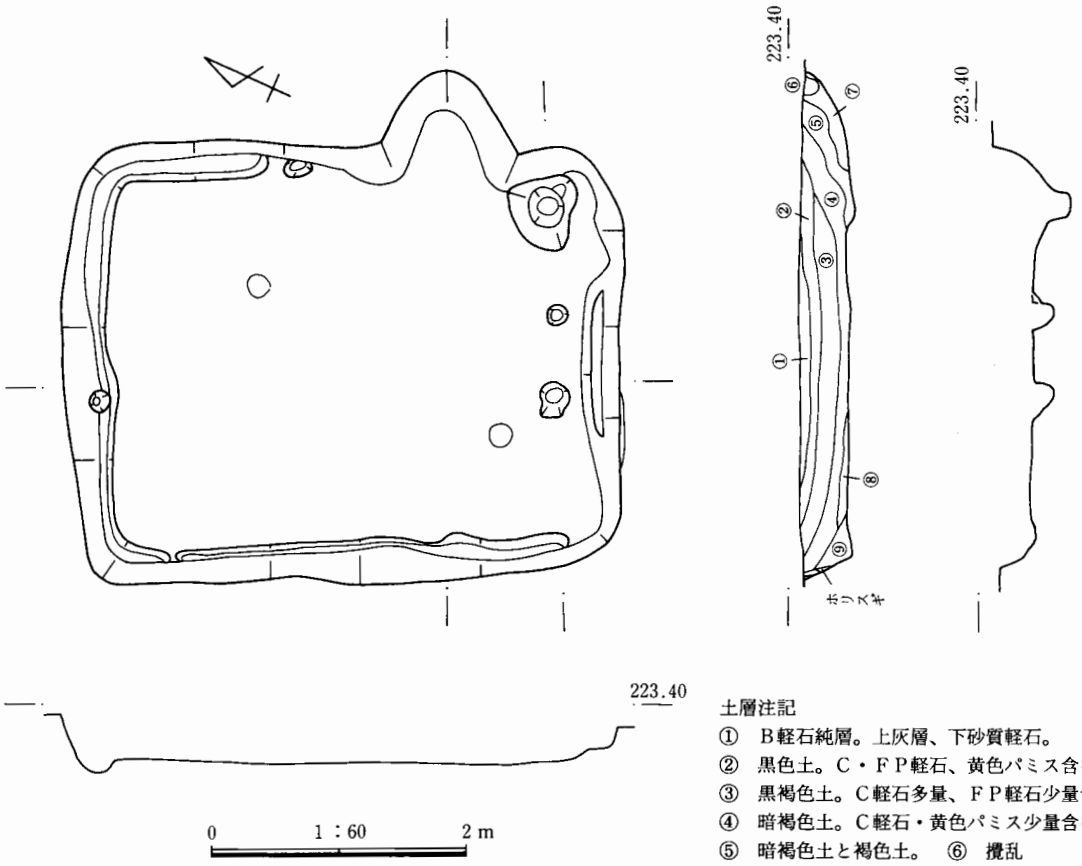
(1) 竪穴住居跡

1号住居跡（遺構第98図、遺物第99図、ＰＬ33）

18－７グリッドを中心に位置する。１号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

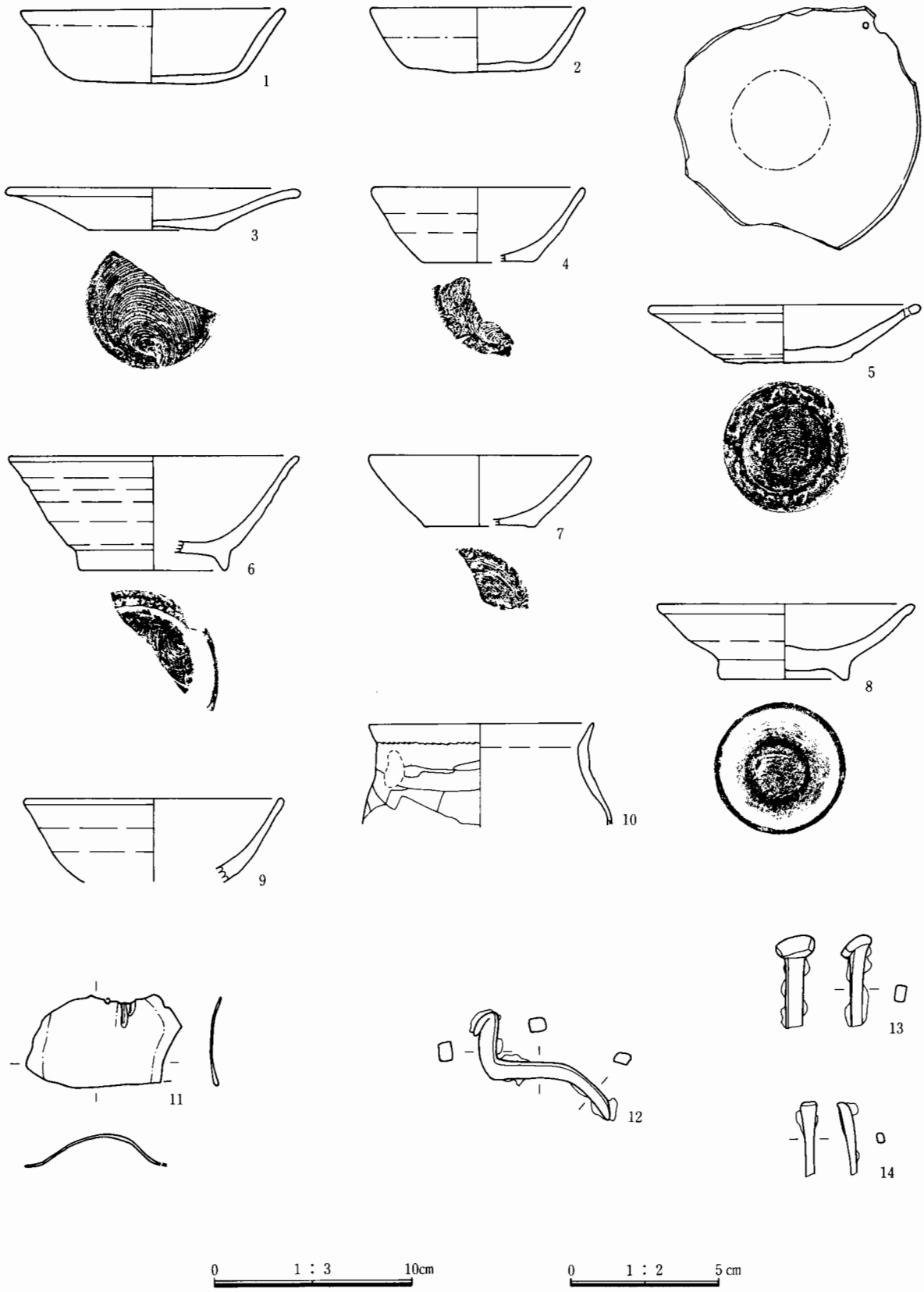
東西3.5m、南北4.4m、深さ40cmを測る。平面形状は隅丸方形を呈する。主軸の方位はＮ－５°－Ｗである。壁面は角度をもって立ち上がる。床面はカマド前面は比較的堅緻であるが、それ以外はあまり踏み固められていない。幅10cm、深さ５cm前後の壁周溝が南壁からカマド周辺にかけての範囲を除き巡る。東南隅に貯蔵穴が設けられている。径50cmほどの不整形な浅い掘り込みの中央に径30cm、深さ30cmの柱穴状の掘り込みが設けられている。南壁際中央部は床面より約５cm高くなっている。さらにその内側には小柱穴が壁と平行に２基掘り込まれており、入口施設の可能性がある。径20cm、深さ15cmを測る。カマドは東壁の南寄りに付設されている。燃焼部の大半が壁外に位置するタイプである。

遺物は土師器の坏・甕、須恵器の坏・椀・皿、銅製品、鉄釘などが出土している。



土層注記
① Ｂ軽石純層。上灰層、下砂質軽石。
② 黒色土。Ｃ・ＦＰ軽石、黄色パミス含む。
③ 黒褐色土。Ｃ軽石多量、ＦＰ軽石少量含む。
④ 暗褐色土。Ｃ軽石・黄色パミス少量含む。
⑤ 暗褐色土と褐色土。 ⑥ 攪乱
⑦ 褐色土に焼土・ローム各粒・ブロ、黒色土ブロ多量に含む。
⑧ 暗褐色土と褐色土。焼土粒含む。
⑨ 暗褐色土。ロームブロ・焼土粒含む。

第98図　１号住居跡

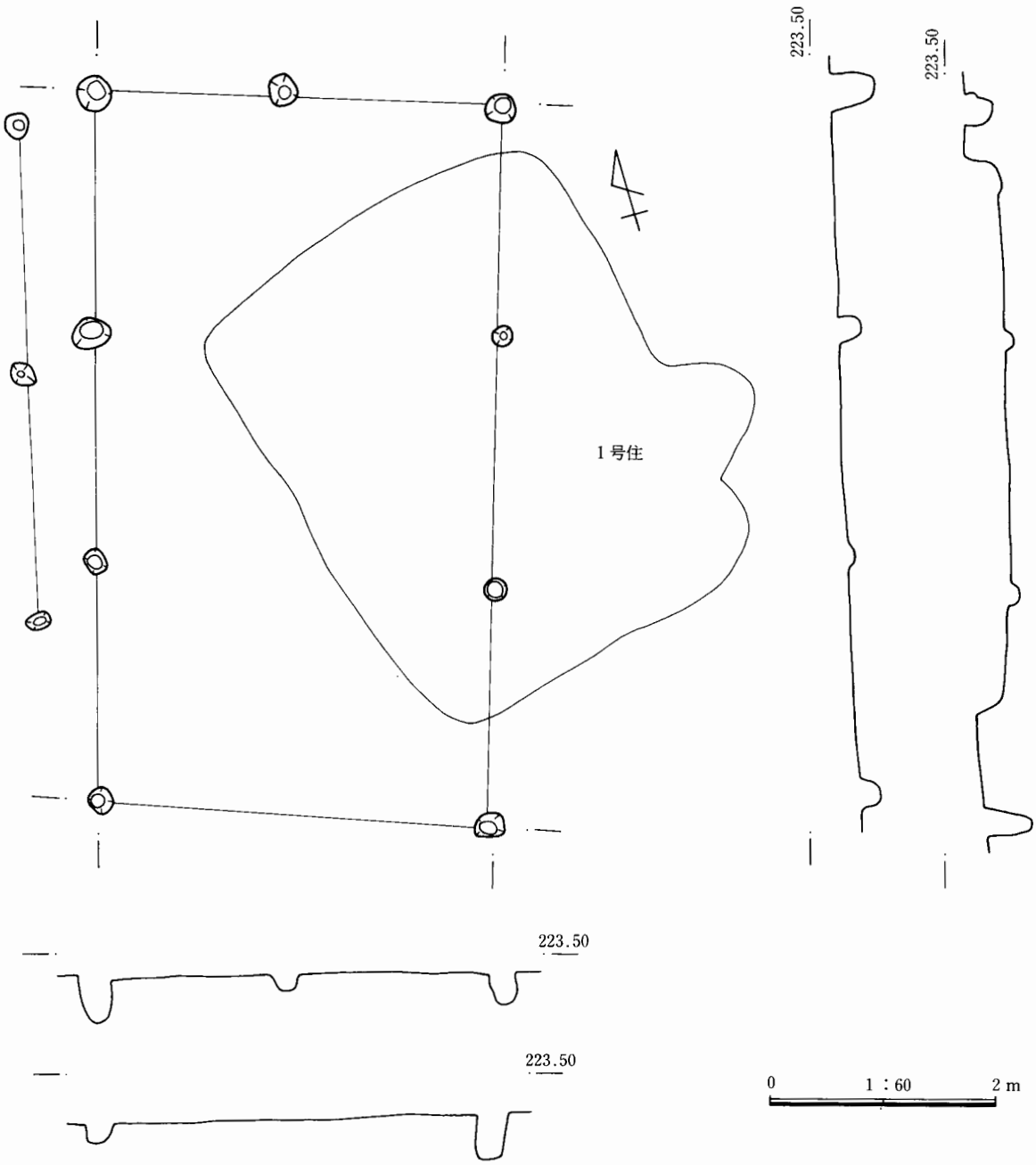


第99図　1号住居跡出土遺物

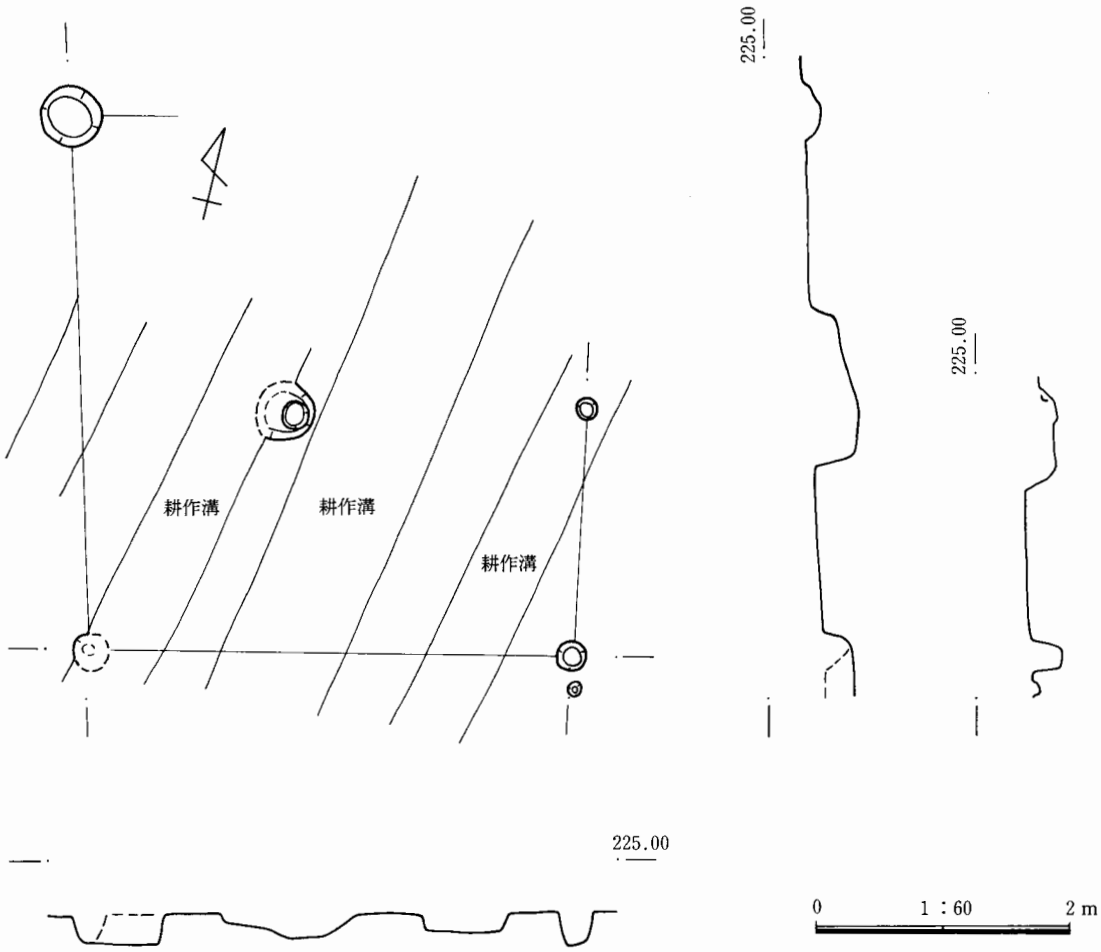
(2) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（遺構第100図、ＰＬ33）

18－６グリッドを中心に位置する。１号住居跡と重複する。東西２間×南北３間の建物構造であるが、南辺に棟持柱は検出されていない。規模は東西3.6m、南北6.4mを測る。主軸の方位はＮ－27°－Ｅである。柱穴の形状は円形である。規模は径20～30cm、深さ７～40cmと一定していない。西辺の柱穴に沿って位置と方位を若干違えて（Ｎ－24°－Ｅ）３基の柱穴が検出されているが、本建物との関係は不明である。遺物は出土していないが、建物構造、柱穴覆土などから該期の建物跡と判断した。



第100図　１号掘立柱建物跡



第101図　2号掘立柱建物跡

第29表　寺間遺跡1号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	出土位置	残存	口径	高さ	底径	胎土	色調／備考
1	土師器	坏	貯蔵穴	ほぼ完形	13.3	3.9	9.0	白・赤色粒	橙色
2	土師器	坏	竈、貯蔵穴	1/4	10.9	3.3	7.2	白・赤色粒	赤褐色
3	須恵器	皿	竈燃焼部	1/2	14.8	2.1	6.4	白色粒、砂粒	灰白色
4	須恵器	坏	覆土	破片	(10.7)	(3.8)	(5.6)	白色粒、砂粒	灰色～灰白色
5	須恵器	高台付椀	竈焚口左前面	高台欠2/3	13.6	2.9	(6.4)	白色粒、砂粒	灰白色～白色／円孔
6	須恵器	高台付椀	覆土	1/3	14.6	5.7	7.4	白色粒	灰色
7	須恵器	坏	覆土	破片	11.3	3.6	5.5	小礫、白色粒	灰白色
8	須恵器	高台付椀	西壁際中央北	3/4	12.9	3.8	6.3	白色粒、雲母	灰白色
9	須恵器	椀	竈、貯蔵穴	破片	13.1			小礫、金雲母 白・赤色粒	橙色
10	土師器	小型甕	竈、南壁際東	2/3	11.4			白・赤色粒	明赤褐色～暗赤褐色
11	銅製品	不明	竈左東壁際	縁辺欠損？	長さ3.2cm、幅5.4cm、厚さ2～1㎜／口部分（図下方）が肥厚する。				
12	鉄製品	折頭釘	竈左東壁際	ほぼ完存	長さ6cm				
13	鉄製品	折頭釘	覆土	先半部欠損	長さ3cm				
14	鉄製品	釘か鏃	覆土		長さ2.5cm				

2号掘立柱建物跡（遺構第101図、ＰＬ33）

25―６グリッドを中心に位置する。激しい攪乱溝によりほぼ半数の柱穴が削平されており、検出された柱穴も残存状態はよくない。

東西２間×南北２間の総柱建物と思われる。規模は東西3.9m、南北4.2mを測る。方位は西辺でN―15°―Wである。柱穴の形状は円形で、柱穴の規模は径15～45cm、深さ15～30cmと一定していない。

(3) 溝　　跡

１Ａ・Ｂ号溝（遺構第102図、ＰＬ36）

31―６グリッドから32―９グリッドにかけて検出されている。確認面が低いため、底面近くが残存するだけである。２本が重複して掘削されており、掘り替えと思われる。Ｂ号溝がＡ号溝よりも新しい。

東端部断面では、底面は平坦で緩やかに立ち上り、中段からさらに開く断面形状が観察されている。検出面で上幅40～50cm、底部幅30～40cm、深さ15cmほどの溝である。ほぼ東西に直線的に掘り込まれ、走向はN―71～80°―Wを前後する。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが、覆土の様相から平安時代の構築と思われる。

２号溝（遺構第102図、ＰＬ36）

29―６グリッドから27―７グリッドにかけて検出されている。残存部分においてはほぼ南北の走向であるが、29―６グリッド内で西方に走向を変えるようである。走向はN―６°―Wである。最も良好に残存する南端部で上幅1.6m、下幅0.4m、深さ67cmを測る。断面形状は１号溝と同様に底面平坦で緩やかに立ち上り、中段から大きく開く。北半部には流水痕が認められる。遺物は出土していないが、覆土の様相から平安時代と思われる。

３号溝（ＰＬ36）

東西の19ラインから22ラインを中心に位置する。調査区の台地を南と北に分断する河川跡である。覆土及び底面から摩滅した土師器破片が出土していることから、明確な時期は不明なものの、平安時代以前には機能していたものと思われる。底面には多量の自然礫が検出されている。

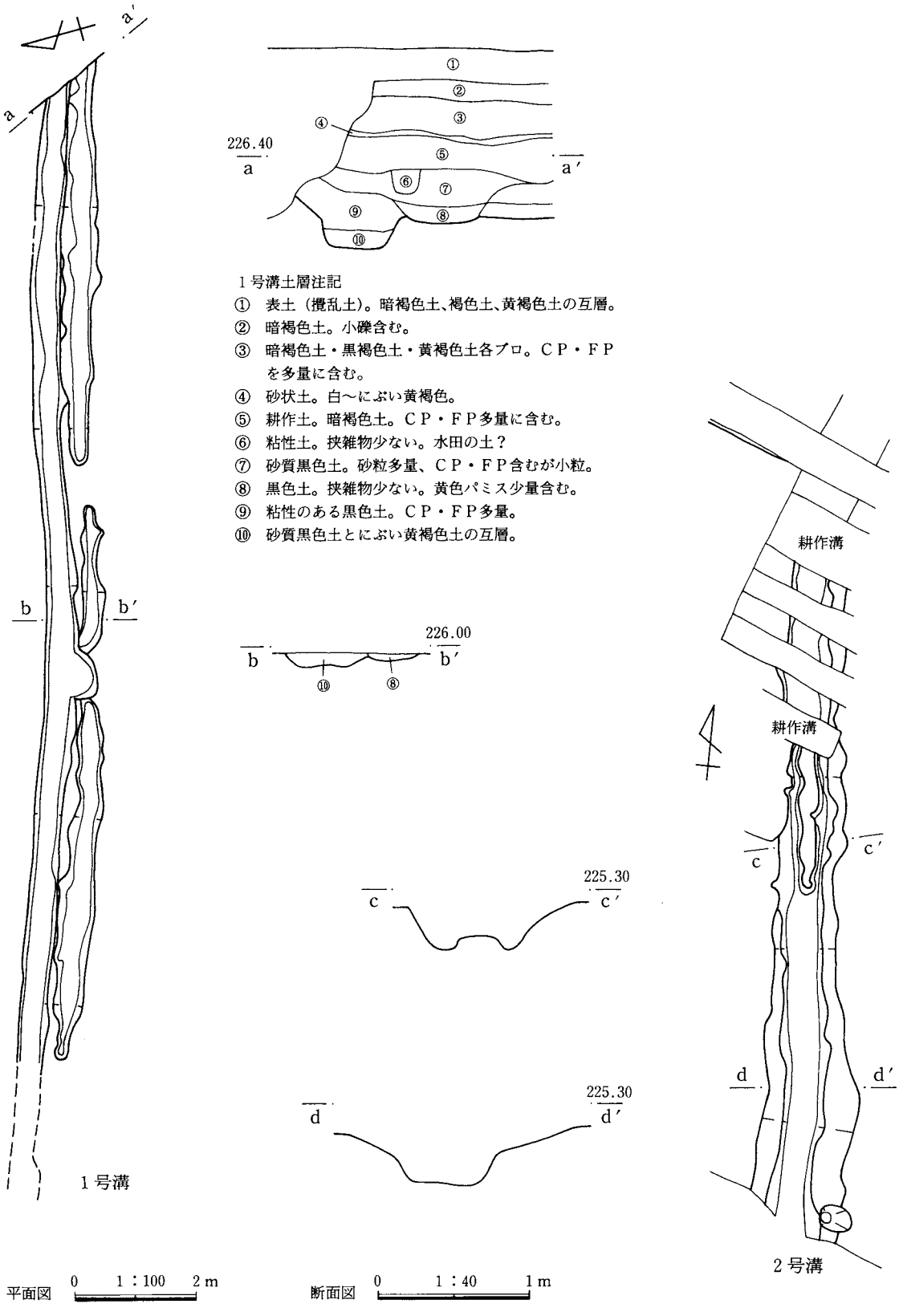
4．その他の時代の遺構と遺物

(1) 長方形土坑（第30表参照）（遺構第103～106図、ＰＬ34・35）

拡幅部の台地縁辺を中心に20基余が検出されている。この中には、比較的最近のいわゆるイモガマ等の耕作坑と思われるもの（１、２号土坑）もあるが、ほとんどは浅く長方形を呈する土坑である。覆土は余り締まりがない。遺物は全く出土していないため、明瞭な時期や遺構の性格は不明であるが、時期的には江戸時代頃の構築と考えている。

(2) 井 戸 跡（遺構第106図、ＰＬ34）

２―22グリッドに位置する。検出面での直径0.9m、底面での直径0.6m、深さ約1.4mの円形を呈する井戸である。覆土は暗褐色土主体で中～下層はあまり締まっていない。遺物は覆土上層から多数の自然礫と五輪塔の火輪が一点出土している。明確な時期は不明であるが中世と思われる。


a
a′
226.40
a
a′
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
1号溝土層注記
① 表土（攪乱土）。暗褐色土、褐色土、黄褐色土の互層。
② 暗褐色土。小礫含む。
③ 暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土各ブロ。ＣＰ・ＦＰを多量に含む。
④ 砂状土。白～にぶい黄褐色。
⑤ 耕作土。暗褐色土。ＣＰ・ＦＰ多量に含む。
⑥ 粘性土。挟雑物少ない。水田の土？
⑦ 砂質黒色土。砂粒多量、ＣＰ・ＦＰ含むが小粒。
⑧ 黒色土。挟雑物少ない。黄色パミス少量含む。
⑨ 粘性のある黒色土。ＣＰ・ＦＰ多量。
⑩ 砂質黒色土とにぶい黄褐色土の互層。
b
b′
226.00
b
b′
⑩
⑧
c
c′
225.30
c
c′
d
d′
225.30
d
d′
1号溝
耕作溝
耕作溝
c
c′
d
d′
2号溝
平面図
0
1：100
2 m
断面図
0
1：40
1 m

第102図　1・2号溝

(3) 溝　　跡

4A・B号溝（遺構第107図、ＰＬ36）

4－4グリッドから11－9グリッドにかけて検出されている。調査拡幅部の台地東側を流れる現状の小河川から、西側の水田と推定される部分へ水を引くための用水路跡と思われる。

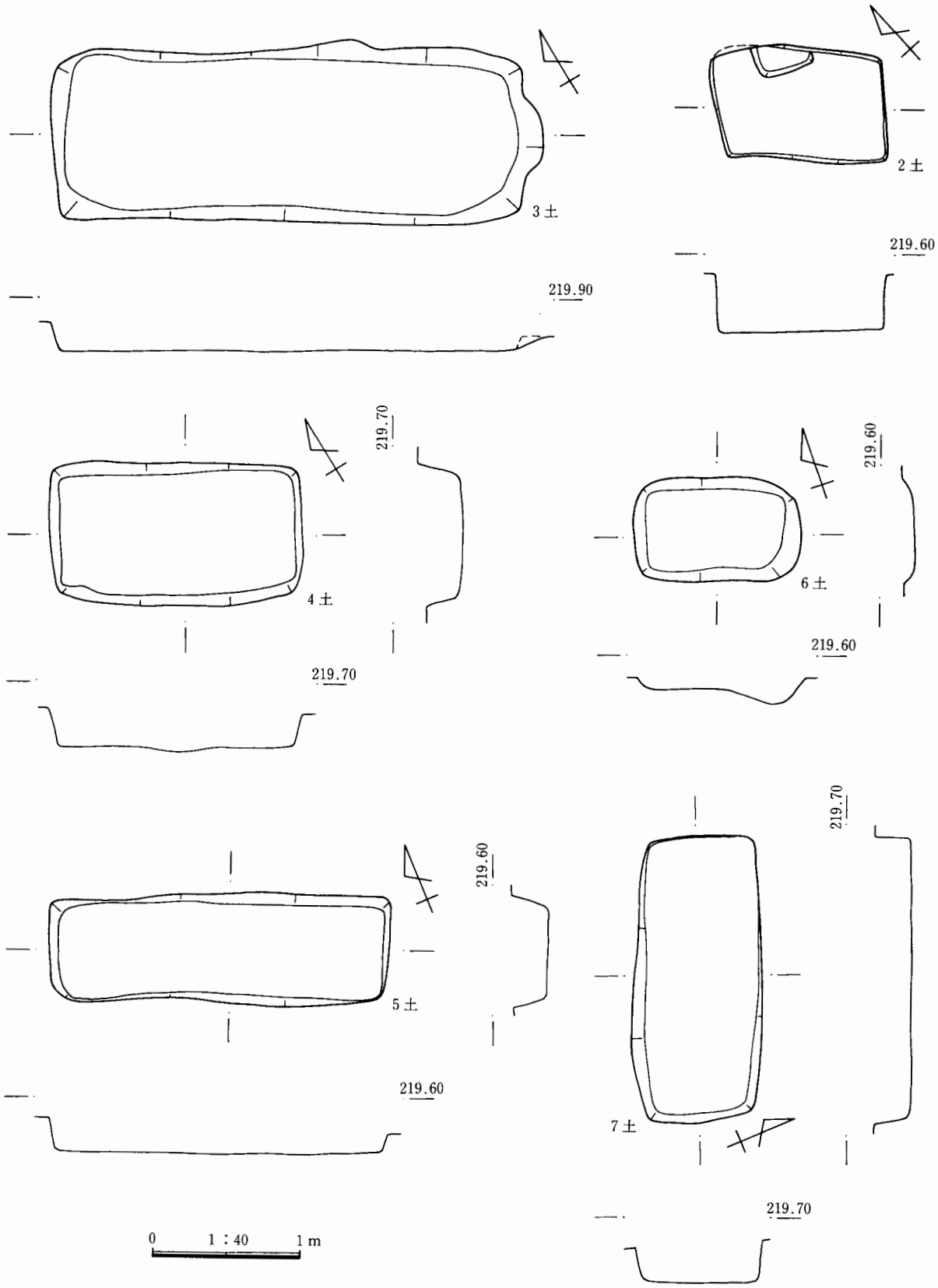
上幅40cm前後、深さ最大60cm程度で、南西に下るに従い深さが漸減する。7－6グリッド付近から南方（B号溝）へ分枝し、それぞれに別の重複も認められることから、複数期にわたり掘り替え、掘り直しが行われたものと思われる。A号溝の先端の段下には2基の土坑状の掘り込みが検出されている。

(4) そ の 他

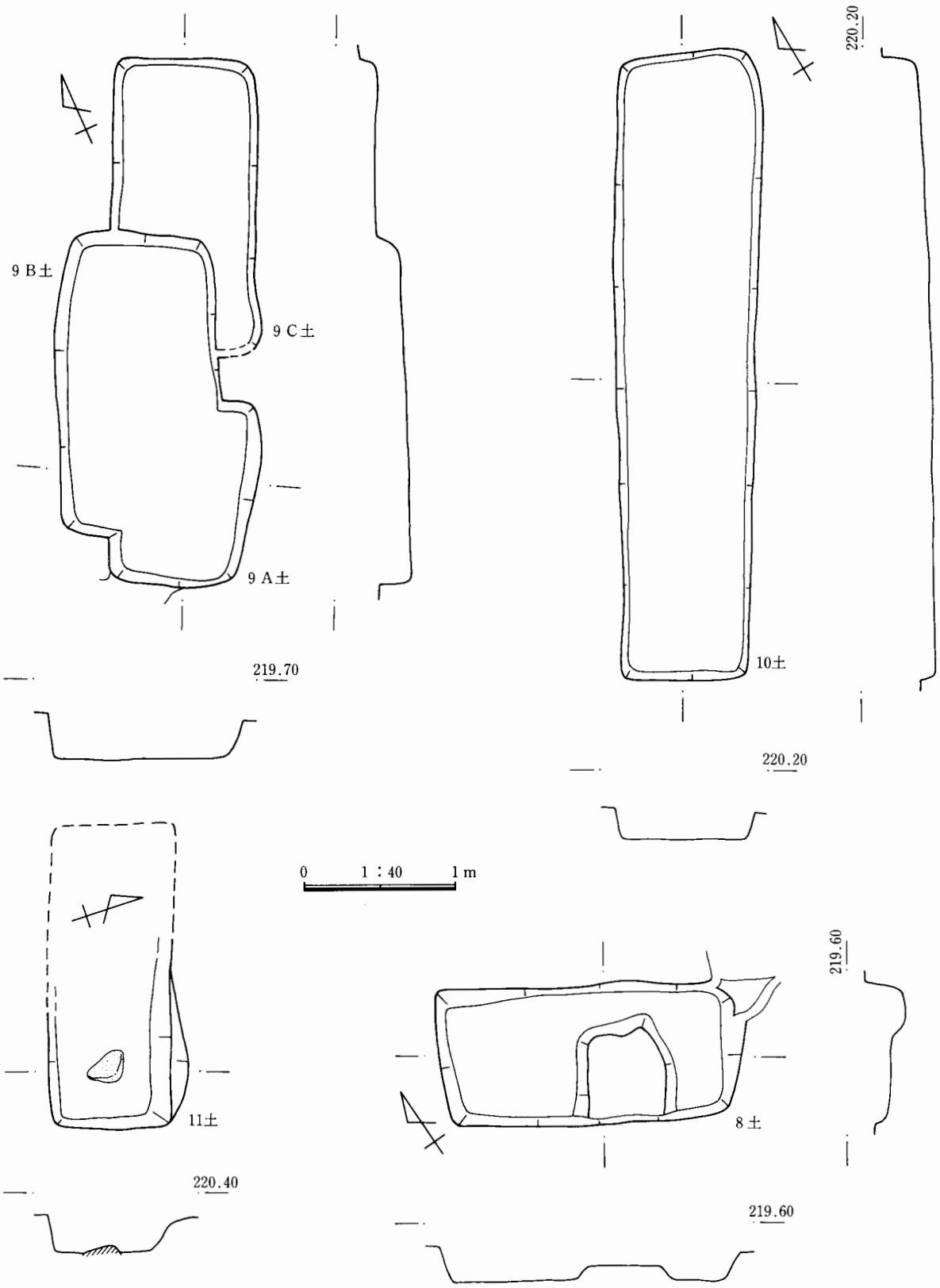
3号溝の延長上、拡幅調査区の西端に位置する。台地からの比高差は少ないが谷地部を水田として利用したものと思われる。但し、軽石や明瞭な洪水層の堆積もないため、部分的に溝状や不定形の掘り込みが検出されただけで、畦畔・耕作面等を確認することはできなかった。

第30表　長方形土坑一覧表　　（単位：cm）

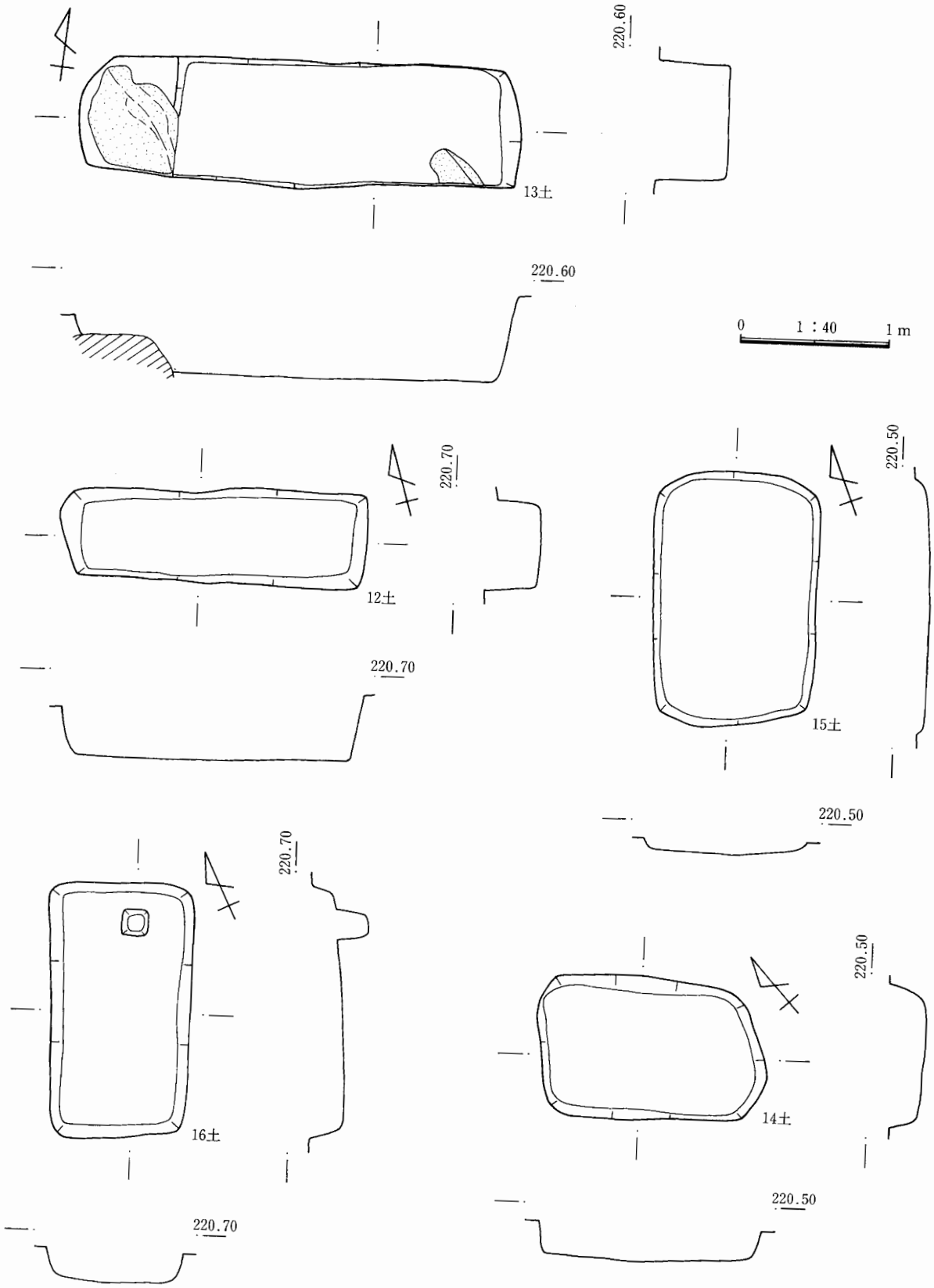
番号	位　置	長軸×短軸	深　さ	長軸方位	平面形状	備考（重複、新旧など）
1	1－3G				長　方　形	実測漏れ、2号と類似
2	1－3G	120× 70	40	N－48°－W	不整長方形	北壁中央部に方形のピット（40×20×6）
3	1－6G	320×120	20	N－57°－W	隅丸長方形	東端に突出部、出は15
4	1－5G	175×100	30	N－62°－W	長　方　形	
5	1－6G	230 ×80	20	N－70°－W	長　方　形	
6	1－7G	115× 70	10～20	N－70°－W	隅丸長方形	東半部落ち込む
7	1－8G	195× 90	20～30	N－67°－W	長　方　形	
8	1－9G	210× 90	20～30	N－58°－W	長　方　形	中央部に掘り残し
9A	1－9G	130× 90	25	(N－31°－E)	長　方　形	
9B	1－9G	205×110	20～30	N－26°－E	長　方　形	
9C	1－9G	200×100	15	N－25°－E	長　方　形	南端に歪みあり
10	3－10G	420× 95	20～30	N－30°－E	長　方　形	
11	6－5G	205× 85	25	N－73°－W	長　方　形	底面に礫露出、未完掘
12	6－6G	210× 65	30～45	N－74°－W	長　方　形	
13	5－6G	230(300)× 80	60	N－85°－E	長　方　形	西端・東端部に礫露出
14	5－8G	150×100	25	N－46°－W	隅丸長方形	
15	6－9G	175×110	10	N－22°－E	隅丸長方形	
16	6－11G	175×100	20	N－25°－E	長　方　形	長軸上にピット（径16×深22）
17	7－7G					4～5基の重複
(A)		(120×90)	30	N－34°－E	長　方　形	推定
(B)		(130×75)	35	N－49°－E	隅丸長方形	推定
(C)		(90×60以上)	30		不　　明	
(D)		(210×70)	28	(N－46°－E)	長　方　形	推定
18	3－4G	125×100	40	N－58°－W	長　方　形	
19	7－11G	305× 95	45	N－70°－W	長　方　形	


3土
219.90
2土
219.60
4土
219.70
219.70
6土
219.60
219.60
5土
219.60
219.70
7土
219.70
0
1：40
1m

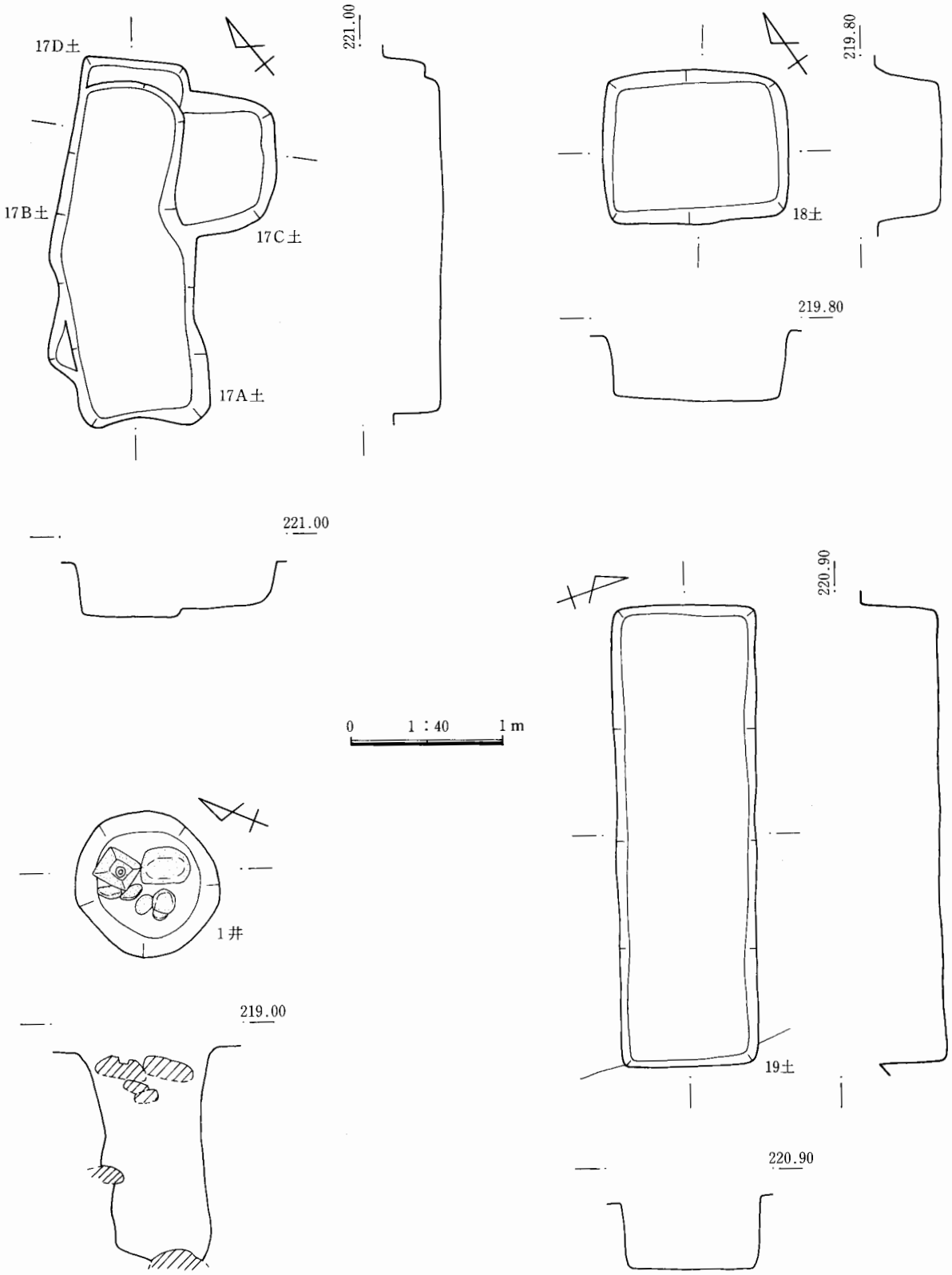
第103図　土坑(1)


9 B土
9 C土
9 A土
219.70
220.20
10土
220.20
0
1：40
1 m
219.60
11土
220.40
8 土
219.60

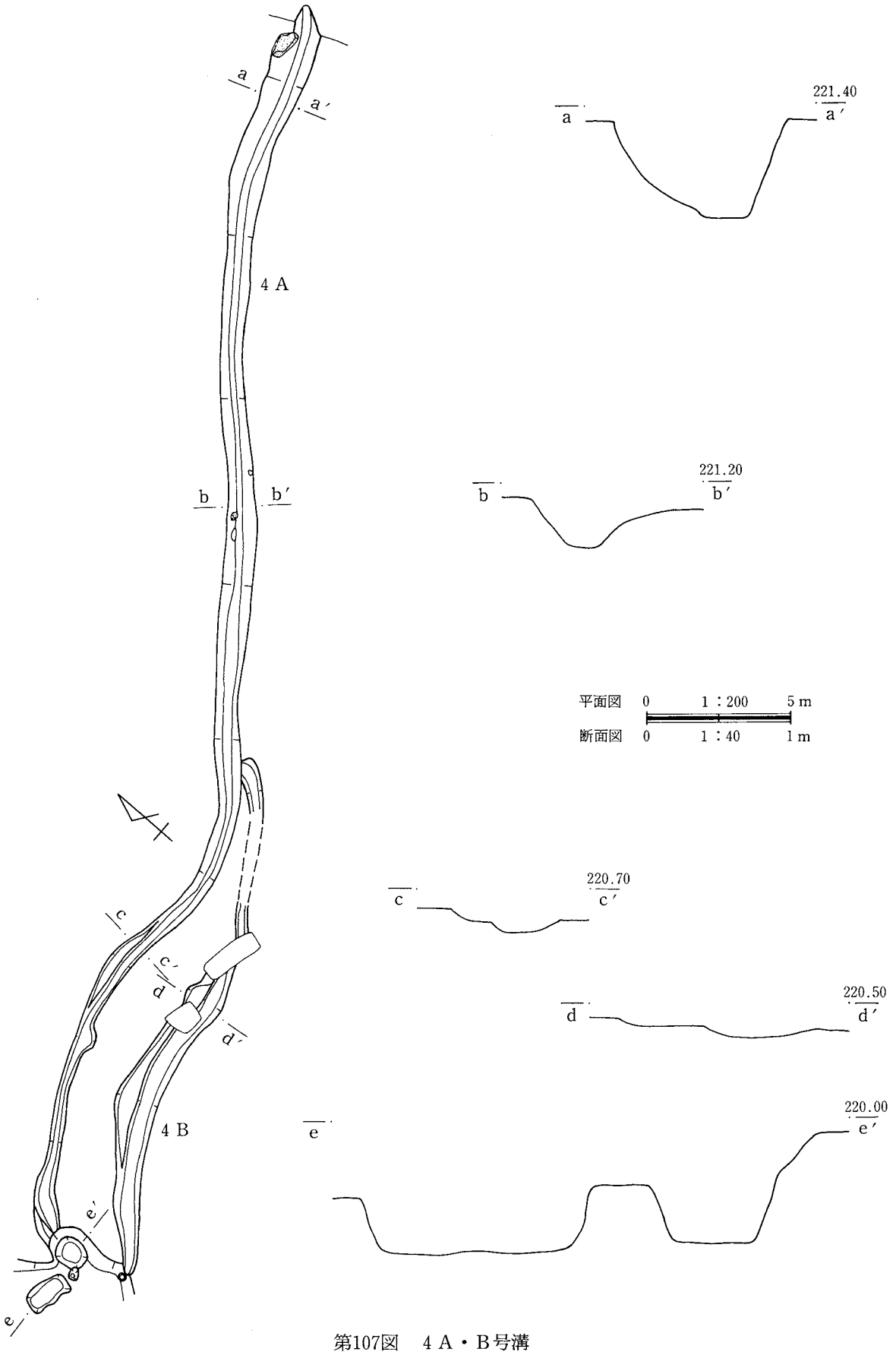
第104図　土坑(2)


220.60
13土
220.60
0
1：40
1 m
220.70
12土
220.70
220.50
15土
220.50
220.70
16土
220.70
220.50
14土
220.50

第105図　土坑(3)


17D土
221.00
17B土
17C土
17A土
221.00
219.80
18土
219.80
220.90
0
1：40
1m
1井
219.00
19土
220.90

第106図　土坑(4)、井戸


a
a′
4 A
b
b′
c
c′
d
d′
4 B
e
e′
221.40
221.20
220.70
220.50
220.00
平面図　0　1：200　5 m
断面図　0　1：40　1 m

第107図　4 A・B号溝

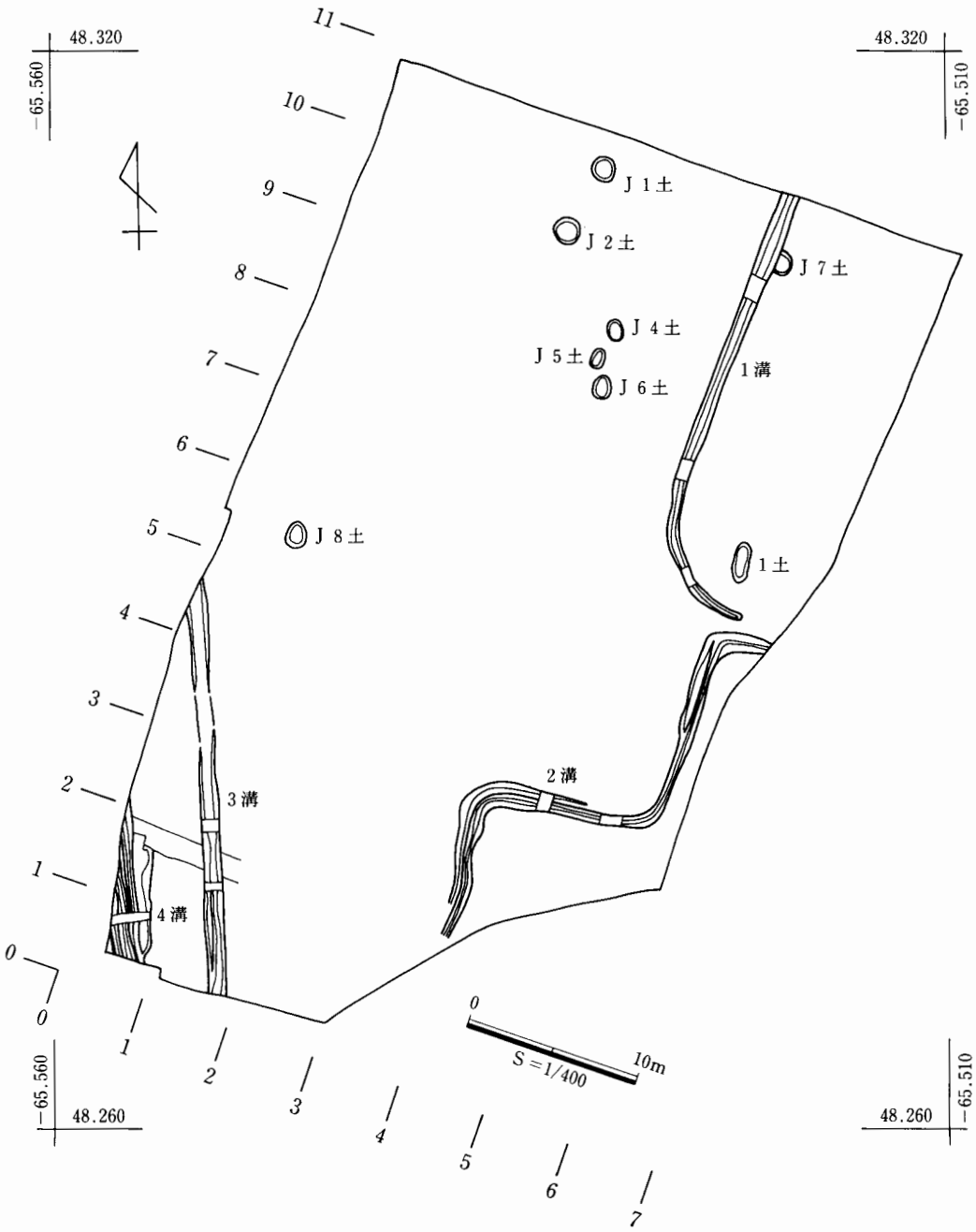
IV　孫田遺跡

1．概　　要

縄文時代の土坑は調査区の北半部に6基が集中し、中央部西端寄りの1基と合わせ計7基検出された。遺物は土坑の1基から玦状耳飾りが出土しただけで、土器・石器のほとんどは遺構外からの出土である。土器の時期はすべて前期で、諸磯b～c式が大半を占めている。

平安時代の遺構は道路跡1条で調査区の南西端に検出されている。

時期不明の遺構は溝跡3条と溝状の土坑である。遺物は出土していない。

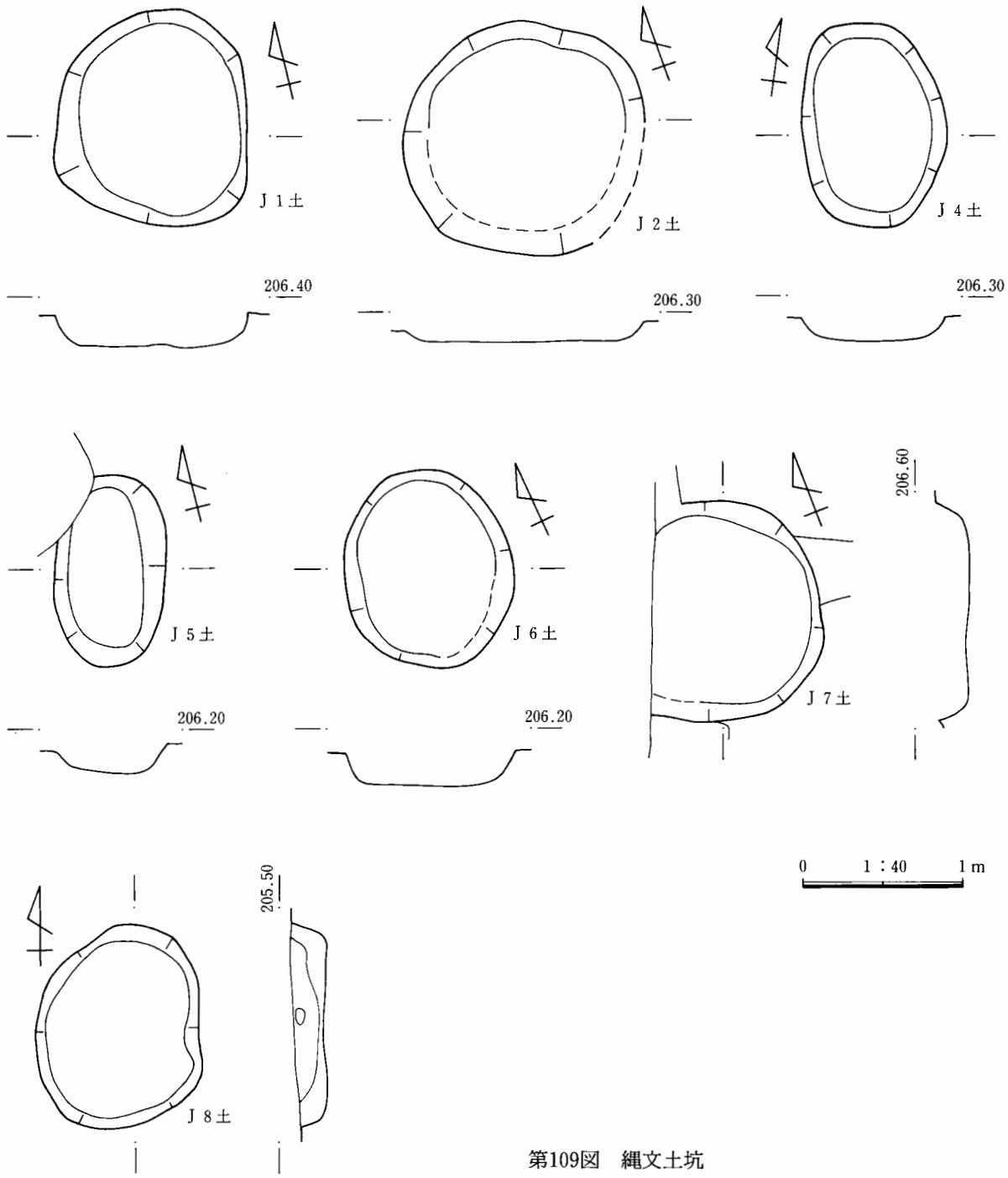


第108図　孫田遺跡全体図

2．縄文時代の遺構と遺物

(1)　土　　坑（遺構第109図、遺物第110図、ＰＬ40）

調査区の北半部に６基が集中し、中央部西寄りの１基と合わせ合計７基が検出された（Ｊ３号土坑は欠番）。形状は円形若しくは楕円形である。規模は径（長径）1.2～1.5m、深さはローム層上面を検出面としたため浅く、10～20cmである。土坑内から遺物はほとんど出土していないが、Ｊ４号土坑からメノウ製の玦状耳飾が出土している。



第109図　縄文土坑

(2) 出土遺物（第110図、ＰＬ41）

１～５は胎土に繊維を含む。６～８は口縁部で、６・８は集合沈線文土器で貼付文を付す。７は口縁部上端に凹凸文を連続させる。９～13は平行沈線による横帯文で、14～23は集合沈線で矢羽根状その他に施文する。19～21はボタン状貼付文を付す。24は刺突文、25・26は縄文地文のみである。27・28は底部で27は胎土に繊維を含む。28は無文である。１～５、27は前期中葉、他は前期後半諸磯ｂ～ｃ式期と思われる。

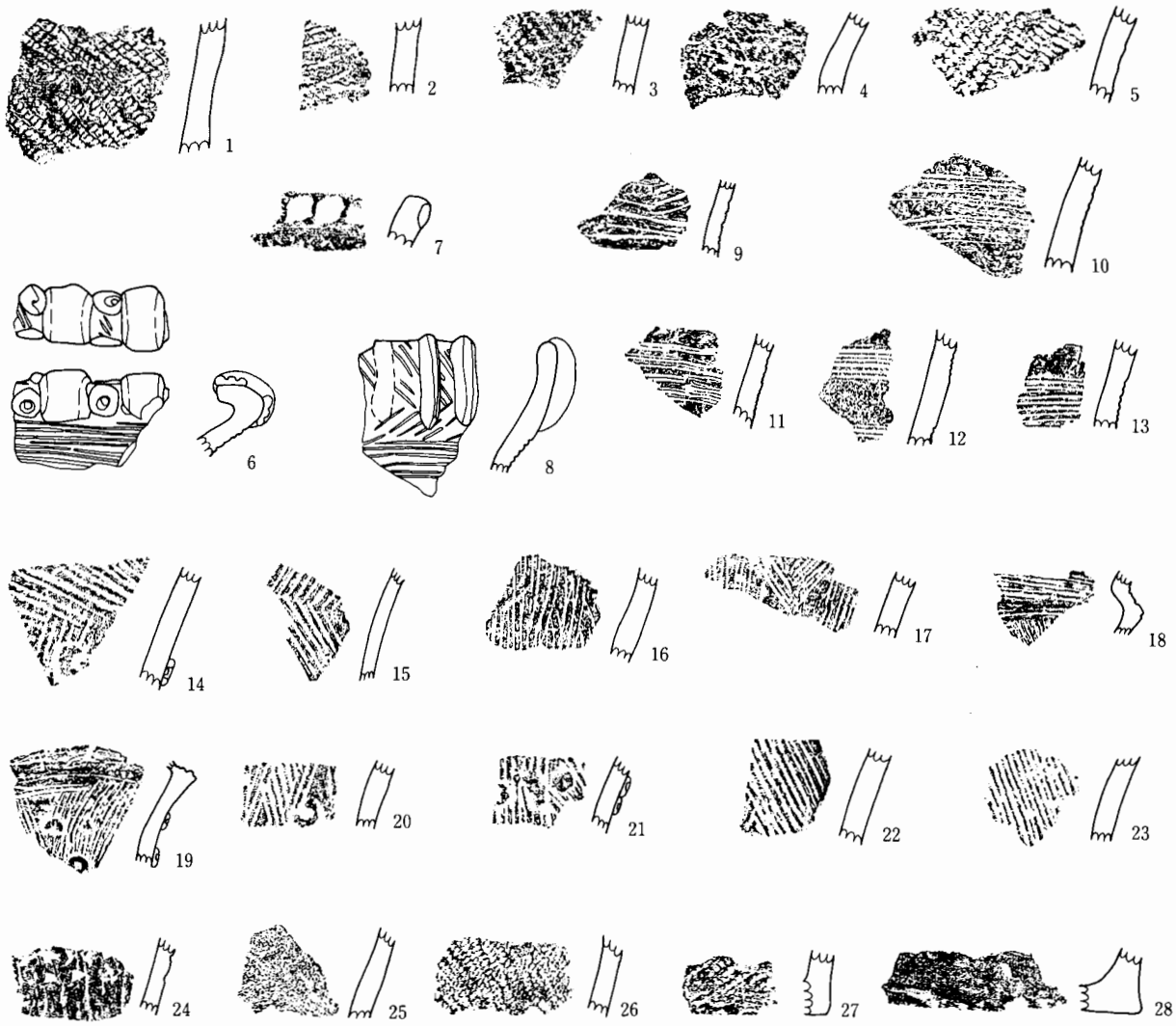
石器はＪ４号土坑の玦状耳飾の他は調査区の中央部を中心に打製石斧などが少数出土している。

第31表　縄文土坑一覧表　（単位：cm）

番号	位　置	長軸×短軸	深　さ	長軸方位	平面形状	備考（重複、新旧など）
1	10－３Ｇ	136×120	20	Ｎ－7°－Ｅ	楕　円　形	
2	９－３Ｇ	径約150	10	－	円　　形	
3						欠番
4	９－４Ｇ	130× 90	20	Ｎ－15°－Ｗ	長　円　形	玦状耳飾り出土
5	９－４Ｇ	120× 70	20	Ｎ－16°－Ｅ	長　円　形	
6	９－４Ｇ	120×105	20	Ｎ－16°－Ｅ	楕　円　形	
7	10－５杭	径約140	20	－	円　　形	
8	５－１Ｇ	130×100	20	Ｎ－21°－Ｅ	楕　円　形	

第32表　遺構外出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
1	胴部	ＲＬ	砂粒、繊維	橙色
2	胴部	附加条	繊維、砂粒	にぶい黄橙色
3	胴部	ＲＬ	繊維、砂粒	にぶい橙色
4	胴部	不明	繊維、砂粒	黄橙色
5	胴部	ＬＲ	繊維、砂粒	にぶい赤褐色
6	平口縁、貼付文、連続・集合沈線2.5mm		砂粒	にぶい黄橙色～橙色
7	平口縁　凹凸文		砂粒	にぶい黄橙色
8	平口縁　貼付文、集合・連続沈線2.5mm		赤色粒、粗砂	にぶい赤褐色
9	胴部、平行沈線５mm		砂粒	にぶい黄橙色～灰褐色
10	胴部、連続沈線2.5mm	ＲＬ？	白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
11	胴部、連続沈線２mm		白色粒、石英、砂粒	暗赤褐色
12	胴部、連続沈線２mm	ＲＬ	砂粒	浅黄橙色
13	胴部、連続沈線2.5mm		砂粒、白色粒	明赤褐色
14	胴部、貼付文、連続沈線3.5mm		赤色粒、砂粒	浅黄橙色
15	胴部、丁寧な集合沈線３mm		砂粒	にぶい橙色
16	胴部、連続沈線３mm		赤・白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
17	胴部、連続沈線2.5mm		砂粒	明赤褐色
18	胴部、連続沈線２mm　／19と同一個体		粗砂多量	にぶい黄橙色
19	胴部、貼付文、連続沈線２mm　／18と同一個体		粗砂多量	にぶい黄橙色
20	胴部、貼付文、集合沈線３mm		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色
21	胴部、貼付文、集合沈線3.5mm		砂粒	にぶい黄橙色
22	胴部、集合・連続沈線３mm　／貼付文剝落		白色粒、砂粒	灰白色
23	胴部、集合沈線2.5mm		粗砂	にぶい黄橙色
24	胴部、波状爪形文（貝殻文）		粗砂	橙色
25	胴部、無文		砂粒	にぶい橙色
26	胴部	多条ＲＬ	砂粒	にぶい黄橙色
27	底部	ＬＲ	砂粒、繊維	にぶい黄橙色
28	底部、無文（ミガキ）		砂粒	にぶい橙色～暗褐色



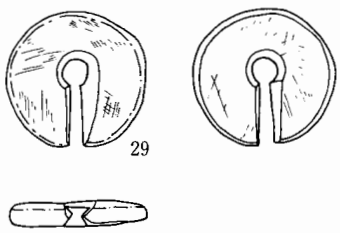
第110図　出土遺物

0　1：3　10cm

3．平安時代の遺構

3号溝（遺構第114図、ＰＬ41）

調査区の南西端部に位置する道路跡である。ほぼ南北（N－3°－W）に直線的な走向を示す。最も残りのよい部分で上幅76cm、下幅60cm、路面幅40cmを測る。深さは20cmである。路面は多少の凹凸があるものの比較的平坦である。覆土上層に浅間Ｂ軽石が純層で堆積する。



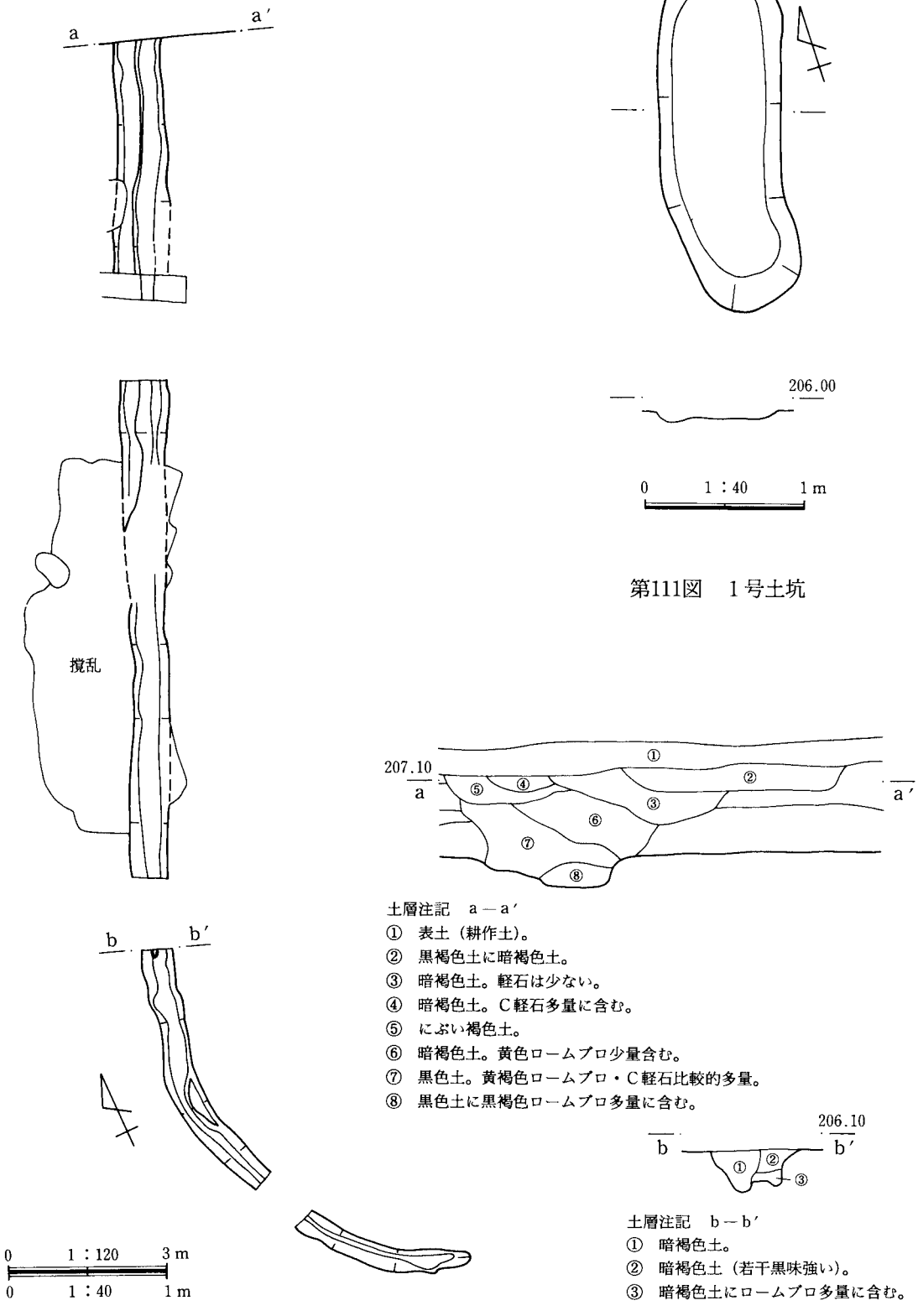
4．時期不明の遺構

(1)　溝　　跡

1号溝（遺構第112図、ＰＬ40）

調査区北半部東寄りに位置する。南北の５ラインに沿ってＳ－21°－Wの走向で直線的に南下し、７－５杭

第111図　1号土坑



土層注記　a－a′
① 表土（耕作土）。
② 黒褐色土に暗褐色土。
③ 暗褐色土。軽石は少ない。
④ 暗褐色土。C軽石多量に含む。
⑤ にぶい褐色土。
⑥ 暗褐色土。黄色ロームブロ少量含む。
⑦ 黒色土。黄褐色ロームブロ・C軽石比較的多量。
⑧ 黒色土に黒褐色ロームブロ多量に含む。

土層注記　b－b′
① 暗褐色土。
② 暗褐色土（若干黒味強い）。
③ 暗褐色土にロームブロ多量に含む。

第112図　1号溝

付近で逆Ｊ字状に東方へ弧を描いて曲がり、６－６杭の手前で収束する。８－５グリッド周辺は攪乱が激しい。検出面での上幅最大80cm、深さ30cmを測るが、土層断面には掘り替えの痕跡も認められる。底面に少量の砂礫が認められる。

遺物は出土しておらず、掘削の時期も不明であるが、覆土の状況や検出状況から江戸時代以降の耕作等に伴う区画溝と考えている。

２号溝（遺構第113図、ＰＬ41）

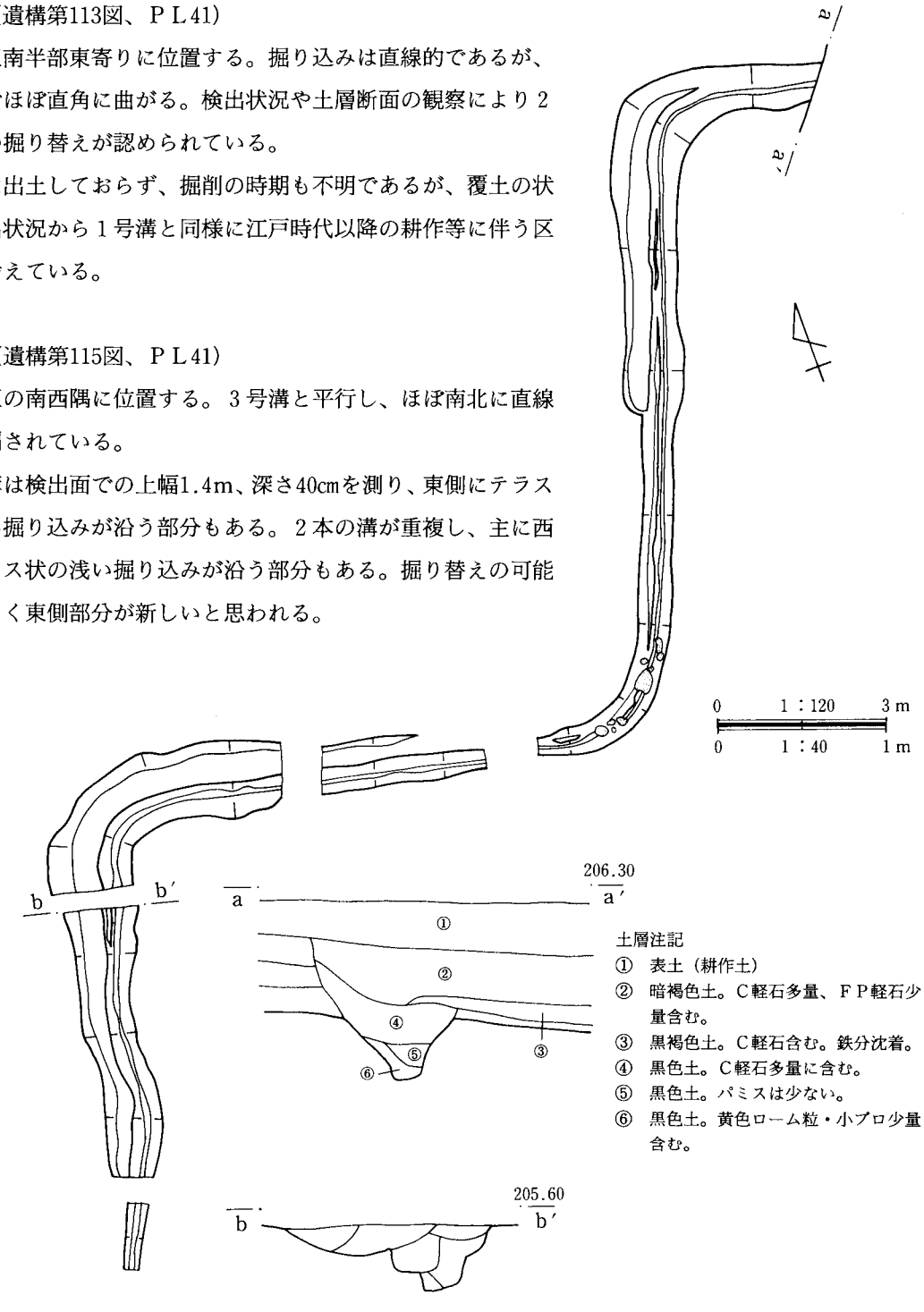
調査区南半部東寄りに位置する。掘り込みは直線的であるが、３ケ所でほぼ直角に曲がる。検出状況や土層断面の観察により２度以上の掘り替えが認められている。

遺物は出土しておらず、掘削の時期も不明であるが、覆土の状況や検出状況から１号溝と同様に江戸時代以降の耕作等に伴う区画溝と考えている。

４号溝（遺構第115図、ＰＬ41）

調査区の南西隅に位置する。３号溝と平行し、ほぼ南北に直線的に掘削されている。

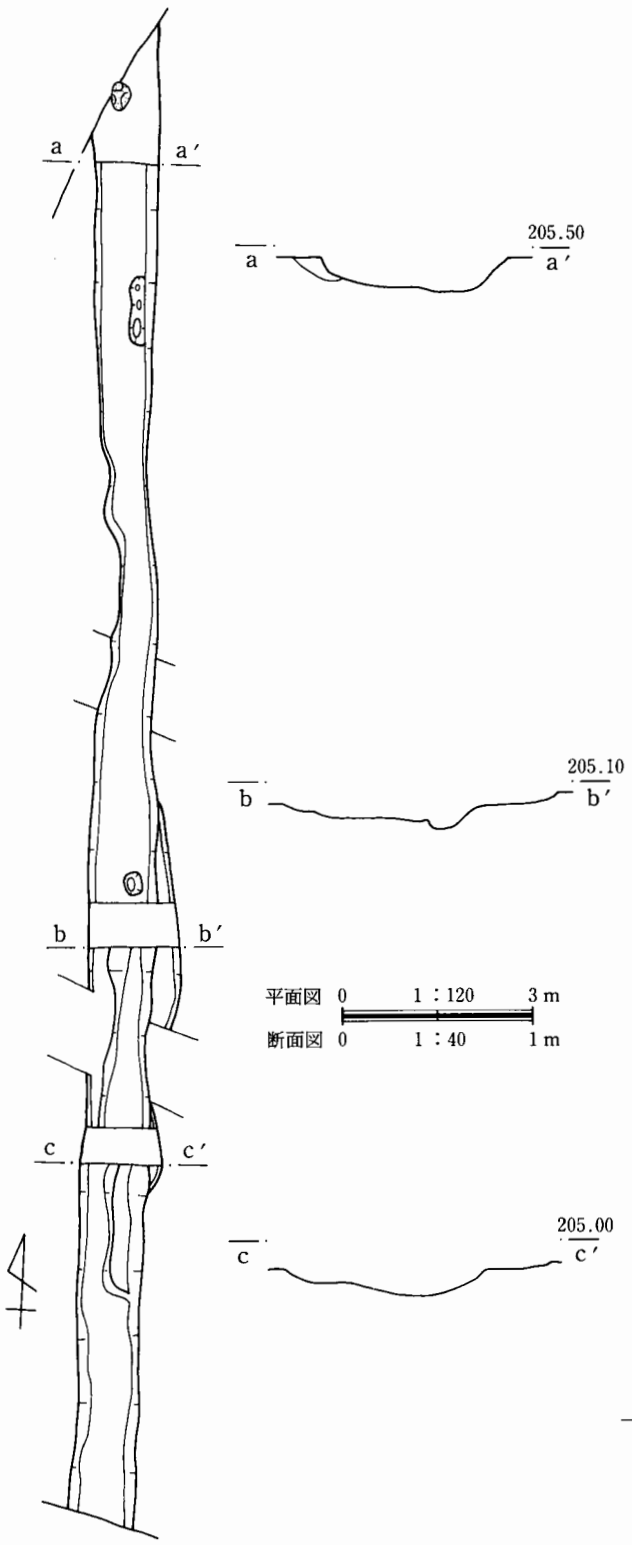
Ａ号溝は検出面での上幅1.4m、深さ40cmを測り、東側にテラス状の浅い掘り込みが沿う部分もある。２本の溝が重複し、主に西側にテラス状の浅い掘り込みが沿う部分もある。掘り替えの可能性が大きく東側部分が新しいと思われる。



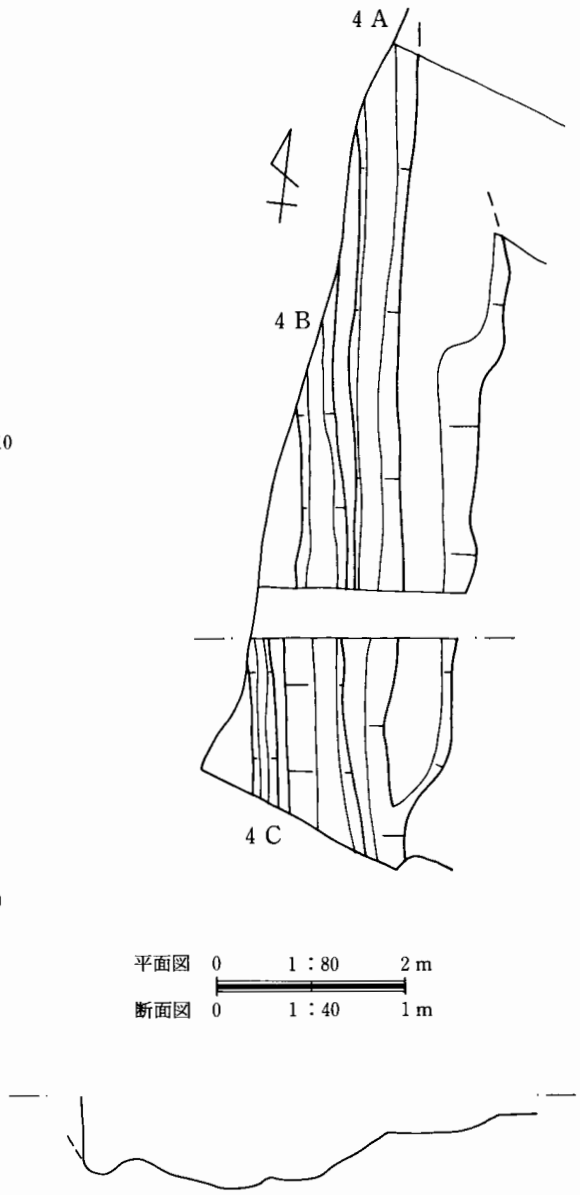
第113図　２号溝

(2)　1号土坑（遺構第111図）

6－6グリッドに位置する。土坑としたが溝状の細長い形状を呈する。長軸3.3m、短軸0.8mで、深さ8cmとごく浅い。覆土は軽石を比較的多く含む黒色土である。遺物は出土しておらず、帰属時期・性格とも不明であるが、覆土の状況からは縄文時代以降、中近世以前の遺構と思われる。



第114図　3号溝



第115図　4号溝

V　自然科学分析

寺間遺跡・孫田遺跡の自然科学分析

株式会社　古環境研究所

1．寺間遺跡・孫田遺跡の地質とテフラ

(1)　はじめに

赤城白川扇状地上に位置する寺間遺跡と孫田遺跡の発掘調査では、後期更新世後半に離水した扇状地を覆う火山灰土の良好な土層断面が作成された。また孫田遺跡では構築年代が不明な溝状遺構（３号溝）が検出された。そこで地質調査を行い土層の層序についての記載を行うとともに、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行って、土層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を収集することになった。土層観察およびテフラ分析の対象となった地点は、孫田遺跡８－４グリッド、寺間遺跡17－６グリッド、寺間遺跡３－８グリッド、孫田遺跡10－１グリッド、孫田遺跡３号溝の５地点である。

(2)　地質層序

①　孫田遺跡８－４グリッド

ここでは、淘汰のよい成層した黄灰色砂層（層厚48cm以上）の上位に、下位より灰色砂礫層（層厚５cm，礫の最大径48mm）、円磨された粗粒の黄色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚38cm，軽石の最大径520mm）、黄白色軽石混じり黄灰色砂質土（層厚18cm，軽石の最大径18mm）、成層した降下テフラ層、黄色土（層厚11cm）、灰色粗粒火山灰混じり暗灰色土（層厚25cm）の連続が認められる（図１）。

これらのうち成層したテフラ層は、下位より黄色軽石層（層厚７cm，軽石の最大径35mm，石質岩片の最大径２mm）、黄色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、灰白色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、桃色細粒火山灰層（層厚0.6cm）、細かく成層した黄桃色細粒火山灰層（層厚1.2cm）、白色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、結晶に富む黄色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、桃白色細粒火山灰層（層厚0.3cm）から構成される。

②　寺間遺跡17－６グリッド

本地点では、亜円礫混じり灰色砂層（層厚10cm以上，礫の最大径19mm）の上位に、下位より黄灰色土（層厚18cm）、黄白色軽石混じり黄灰色土（層厚19cm，軽石の最大径21mm）、黄灰色土（層厚25cm）、黄色軽石層（層厚７cm，軽石の最大径11mm，石質岩片の最大径２mm）、黄灰色土（層厚11cm）、暗灰色土（層厚58cm）が認められた（図２）。

③　寺間遺跡３－８グリッド

本地点では灰色砂層（層厚５m以上）の上位に、下位より灰色砂質土（層厚11cm）、褐色土（層厚25cm）、黄白色軽石混じり黄褐色土（層厚10cm，軽石の最大径３mm）、黄色軽石混じり黄灰色土（層厚19cm，軽石の最大径３mm）、黄色軽石層（層厚８cm，軽石の最大径11mm，石質岩片の最大径２mm）、褐色土（層厚16cm）、褐灰色土（層厚12cm）が認められた（図３）。

④　孫田遺跡10―1グリッド

ここでは、遺構確認面の上位に認められる本遺跡の表層部の土壌が認められた。
土壌は、下位より黄褐色土（層厚16cm，縄文時代前期遺物包含層）、黒褐色土（層厚28cm）、黄色軽石に富む黒褐色土（層厚13cm，軽石の最大径８㎜）、盛土（層厚24cm）から構成される（図４）。

⑤　孫田遺跡３号溝

孫田遺跡で検出された３号溝は、下位より灰色軽石混じり黒褐色土（層厚９cm）と黄褐色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）により覆われている（図５）。

(3)　テフラ検出分析

①　分析試料と分析方法

土層の堆積年代や遺構の構築年代に関する資料を得るために、示標テフラの降灰層準を求めるテフラ検出分析を行うことにした。分析の対象とした試料は、合計６点の試料である。分析は次の手順で行われた。

１）試料10ｇを秤量。
２）超音波洗浄装置により泥分を除去。
３）80℃で恒温乾燥。
４）実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

②　分析結果

テフラ検出分析の結果を表１に示す。寺間遺跡17―６グリッド試料番号１には、スポンジ状にとくによく発泡した黄色軽石（最大径6.9㎜）が多く含まれている。軽石の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。また寺間遺跡３―８グリッドの試料番号１にもスポンジ状にとくによく発泡した黄色軽石（最大径6.3㎜）が多く含まれている。軽石の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。軽石の特徴からこれらの軽石は、同一テフラに由来していると考えられる。

孫田遺跡10―１グリッドの試料番号１には、スポンジ状によく発泡した灰色軽石（最大径3.8㎜）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、その特徴から４世紀中葉に浅間火山から噴出した浅間Ｃ軽石（As―C，新井，1979）に由来するものと考えられる。

また孫田遺跡３号溝の試料番号２や３には、スポンジ状によく発泡した灰色軽石（最大径6.2㎜）が比較的多く含まれている。軽石の斑晶としては、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石もその特徴からAs―Cに由来するものと考えられる。またあまり発泡のよくない白色軽石（最大径3.7㎜）もごく少量認められる。この軽石の斑晶には、角閃石が認められる。この軽石は、その特徴から６世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr―FA，新井，1979，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）、または６世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr―FP，新井，1962，坂口，1986，早田，1989，町田・新井，1992）に由来するものと考えられる。

さらに３号溝試料番号１には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径3.3㎜）が多く含まれている。軽石の斑晶には斜方輝石が認められる。これらの特徴からこの軽石は1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Ｂテフラ（As―B，新井，1979）に由来すると考えられる。

(4) 屈折率測定

① 測定試料と測定方法

起源が不明ないわゆるローム層中の軽石層（孫田遺跡８－４グリッドの試料番号１）と、その下位にある粗粒の軽石粒子（孫田遺跡８－４グリッドの試料番号２）について、示標テフラとの同定の精度を向上させるために、位相差法（新井，1972）により屈折率測定を行うことになった。

② 測定結果

測定結果を表２に示す。孫田遺跡８－４グリッドの試料番号１に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は1.707—1.711、また孫田遺跡８－４グリッドの試料番号２に含まれる斜方輝石の屈折率（γ）は1.706—1.711であった。

(5) 考　　察

孫田遺跡８－４グリッドの試料番号１の軽石層は、上部に成層した火山灰層が認められること、斜方輝石や単斜輝石が斑晶に認められること、さらに斜方輝石の屈折率（γ）は1.707—1.711であることなどから、約1.3—1.4万年前に浅間火山から噴出した浅間—板鼻黄色軽石（As—YP，新井，1962，町田ほか，1984）に同定される。寺間遺跡17－６グリッドおよび３－８グリッドで認められた黄色軽石層も、層相や軽石の岩相からこの軽石層に対比される。

このAs—YPとの層位関係と岩相から、その下位の黄灰色砂質土中に混在する軽石は、約1.8万年前に浅間火山から噴出したと考えられる浅間—白糸軽石（As—SP，町田ほか，1984）、または約1.7万年前に浅間火山から噴出した浅間—大窪沢第１軽石（As—OP_1，中沢ほか，1984）に由来する可能性が大きいと考えられる。さらに両遺跡において、約1.8—2.1万年前に浅間火山から噴出した浅間—板鼻褐色軽石群（As—BP Group，新井，1962）が認められないことも合わせて考えると、赤城白川扇状地のうち少なくとも寺間遺跡や孫田遺跡の位置する部分の離水年代は、約1.8万年前以降で、約1.7万年前以前と推定される。

なお孫田遺跡８－４グリッドの試料番号２の円磨された粗粒の軽石は、斑晶に斜方輝石や単斜輝石が認められることや、斜方輝石の屈折率（γ）が1.706—1.711であることから、赤城火山南麓に広く分布している大胡火砕流堆積物（新井，1962）に由来するものと考えられる。

また孫田遺跡10－１グリッドでは、縄文時代前期の遺物包含層の上位にAs—Cの濃集層が検出された。このことは遺物包含層の堆積年代が４世紀中葉より古いことを示唆している。さらに孫田遺跡３号溝の覆土中にはAs—Bの堆積が認められた。このことから３号溝の年代は1108（天仁元）年を遡ると考えられる。覆土のうちAs—Bの下位の土壌中にはAs—Cの軽石が比較的多く認められたものの一次堆積層ではなく、さらにHr—FAまたはHr—FPに由来する軽石も認められた。したがって３号溝の年代は少なくとも４世紀中葉以降で、1108（天仁元）年以前と推定される。

(6) 小　　結

寺間遺跡および孫田遺跡において地質調査、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った。その結

果、下位より浅間—白糸軽石（As—SP，約1.8万年前）または浅間—大窪沢第1軽石（As—OP_1，約1.7万年前）、浅間—板鼻黄色軽石（As—YP，約1.3—1.4万年前）、浅間C軽石（As—C，4世紀中葉）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr—FA，6世紀初頭）または榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr—FP，6世紀中葉）、さらに浅間Bテフラ（As—B，1108年）の一次堆積層またはテフラ粒子が検出された。これらとの層位関係から、赤城白川扇状地のうち少なくとも寺間遺跡や孫田遺跡の位置する部分の離水年代は、約1.8万年前以降で約1.7万年前以前と推定された。また孫田10—1グリッドの遺物包含層の堆積年代は4世紀中葉より古いことが明らかになった。さらに3号溝の年代について、少なくとも4世紀中葉以降で、1108（天仁元）年以前と推定された。

文　献

新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年．群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.

新井房夫（1972）斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究—．第四紀研究，11，p.254-269.

新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層．考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.

町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ．古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」，p.865-928.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序．日本第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70.

表1　寺間遺跡・孫田遺跡のテフラ検出分析結果

遺跡	地　点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
寺間	17—6グリッド	1	＋＋＋	黄　色	6.9
寺間	3—8グリッド	1	＋＋＋	黄　色	6.3
孫田	10—1グリッド	1	＋＋	灰　色	3.8
孫田	3号溝	1	＋＋＋	淡褐色	3.3
		2	＋＋	灰色＞白色	6.2，3.1
		3	＋＋	灰色＞白色	4.8，3.7

＋＋＋＋：とくに多い，＋＋＋：多い，＋＋：中程度，＋：少ない，—：認められない．最大径の単位は，mm.

表2　寺間遺跡・孫田遺跡の屈折率測定結果

遺跡	地　点	試料	斜方輝石（γ）
孫田	8—4グリッド	1	1.707—1.711
孫田	8—4グリッド	2	1.706—1.711

測定は位相差法（新井，1972）による．

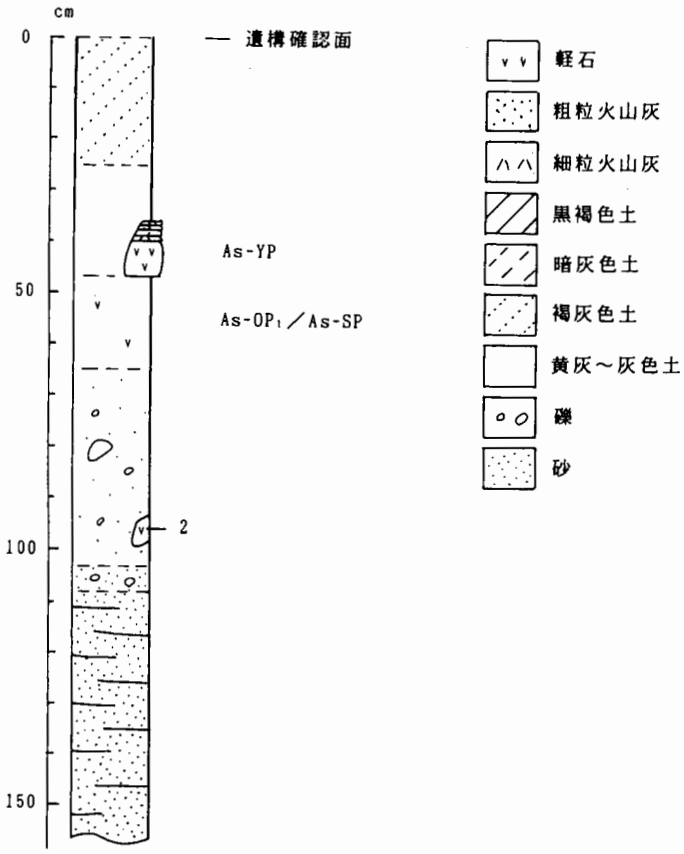


図1　孫田遺跡8－4グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

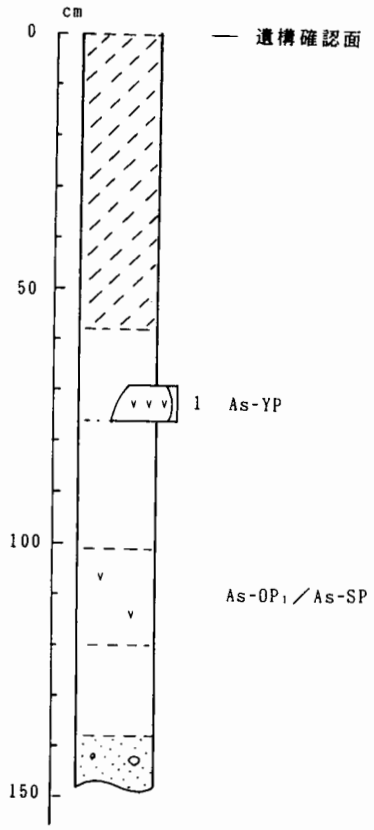


図2　寺間遺跡17－6グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

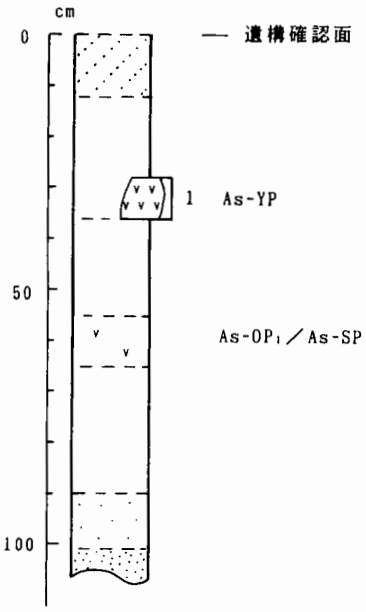


図3　寺間遺跡3－8グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

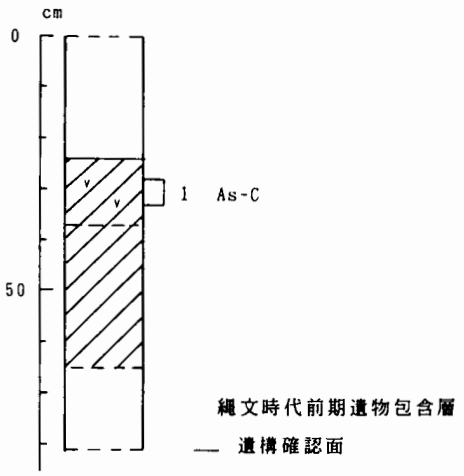


図4　孫田遺跡10－1グリッドの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

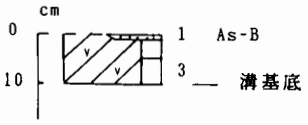


図5　孫田遺跡3号溝覆土の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2．寺間遺跡・孫田遺跡の植物珪酸体分析

(1)　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。この微化石は大きさや形態が植物群により固有であることから、土壌中から検出してその組成や量を明らかにすることで過去の植生（おもにイネ科）を復元することができる（杉山，1987）。

ここでは、寺間遺跡・孫田遺跡の試料について植物珪酸体分析を行い、イネ科栽培植物の検討および遺跡周辺の古植生・古環境の推定を試みた。

(2)　試　　料

試料は、孫田遺跡８－４グリッドから５点、寺間遺跡17－６グリッドから１点、寺間遺跡３－８グリッドから１点、孫田遺跡10－１グリッドから４点の計11点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

(3)　分 析 法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24時間）

２）試料約１ｇを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02ｇ）

　※電子分析天秤により１万分の１ｇの精度で秤量

３）電気炉灰化法による脱有機物処理

４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）

５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥

６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10－５ｇ）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキの値を用いた。その値は8.40、6.31、1.24である。タケ亜科については数種の平均値を用いた。ネザサ節の値は0.48、クマザサ属は0.75である。

(4) 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、表2および図1～図4に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：キビ族（ヒエ属など）、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属やチガヤ属など）、シバ属、キビ族型、ウシクサ族型、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（おもにクマザサ属）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、タケ亜科（未分類等）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類等

〔樹木〕

はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）

(5) 考　　察

① イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネをはじめオオムギ族（ムギ類が含まれる）やキビ族（ヒエやアワ、キビなどが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属、トウモロコシ属などがある。このうち、本遺跡の試料からはキビ族が検出された。

キビ族は孫田遺跡10－1グリッドのAs—C混層（試料1）で検出された。キビ族にはヒエやアワ、キビなどの栽培種が含まれるが、現時点ではこれらの栽培種とイヌビエやエノコログサなどの野・雑草とを完全に識別するには至っていない(杉山ほか，1988)。また、密度も1,000個/g未満と低い値であることから、ここでヒエなどのキビ族植物が栽培されていた可能性は考えられるものの、イヌビエなどの野・雑草に由来するものである可能性も否定できない。

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、未分類等としたものの中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

② 植生および環境の推定

孫田遺跡8－4グリッドでは浅間—白糸軽石（As—SP，約1.8万年前）または浅間—大窪沢第1軽石（As—OP_1，約1.7万年前）の直下層から遺構確認面直下までの層準について、寺間遺跡17－6グリッドと寺間遺跡3－8グリッドでは浅間—板鼻黄色軽石(As—YP，約1.3—1.4万年前)直下層について、孫田遺跡10－1グリッドでは縄文時代前期遺物包含層から浅間C軽石(As—C，4世紀中葉)混層までの層準について分析を行った。

その結果、As—SPまたはAs—OP_1の直下層からAs—YP直上層にかけてのいわゆるローム層では、クマザサ属型が比較的多く検出され、部分的にウシクサ族型なども少量見られた。遺構確認面の直下層（褐灰色土）でもクマザサ属型が多く検出されたが、植物珪酸体総数がしだいに増加しており、ウシクサ族型やネザサ節型なども見られた。その後、縄文時代前期遺物包含層ではクマザサ属型が急激に減少しており、黒褐色

土層（黒ボク土）下部ではこれに代わってネザサ節型が急激に増加している。これらの層準ではウシクサ族（ススキ属など）やヨシ属なども検出され、As－C直下層ではシバ属やマダケ属型も少量検出された。As－C混層でもほぼ同様の結果であるが、ウシクサ族（ススキ属など）が増加傾向を示しており、また前述のようにキビ族も検出された。

おもな分類群の植物体量の推定値（表２）によると、縄文時代前期遺物包含層より下位ではクマザサ属型が卓越しているが、同包含層より上位ではネザサ節型が卓越してことが分かる。

以上の結果から、寺間遺跡・孫田遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

As—YP（約1.3—1.4万年前）直上層よりも下位のローム層の堆積当時は、クマザサ属を主体とするイネ科植生であり、何らかの原因でそれ以外のイネ科植物の生育には適さない環境であったものと推定される。遺構確認面直下層の時期もほぼ同様のイネ科植生が継続されていたと考えられるが、縄文時代前期頃に比較的大きな植生変化が見られ、黒褐色土（黒ボク土）下部の時期にはネザサ節を主体としてススキ属なども見られるイネ科植生に移行したものと推定される。

クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ネザサ節やススキ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。また、ネザサ節は森林群落が何らかの原因で破壊された結果、侵入・拡大したとされている（室井，1960）。これらのことから、縄文時代前期以降の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく比較的開かれた環境であったものと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標となっている。このことから、縄文時代前期頃を境に寒冷から温暖への環境変化があった可能性が考えられる。

(6)　ま と め

以上のように、As—YP（約1.3—1.4万年前）前後のローム層の堆積当時はクマザサ属を主体とするイネ科植生が継続されたものと考えられるが、ローム層と黒ボク土層との境で比較的大きな植生変化が認められ、黒ボク土層ではネザサ節を主体としススキ属なども見られる草原植生に移行したものと推定される。

このように植生が大きく変化した原因として、１）この時期に寒冷から温暖への気候変化があったこと、２）この時期に森林植生が破壊されネザサ節やススキ属などを主体とした草原植生が成立したことなどが考えられる。

関東周辺では、一般にローム層と黒ボク土との境（およそ１万年前）に大きな植生変化が認められ、この時期を境にクマザサ属主体のイネ科植生からネザサ節・ススキ属を主体とする草原植生に移行していることが知られている（佐瀬ほか，1987，杉山ほか，1992）。今回の結果もこれと対応しているものと考えられ、このような植生・環境変化がかなり広範囲に及んでいることを示すものとして注目される。

ススキ属やタケ亜科などのイネ科植物は、その有用性から燃料や道具、住居の屋根材や建築材、敷物などとして盛んに利用されていたものと考えられ、特に笹類は鹿などの草食動物の食料としても重要であったものと考えられる。

参考文献

佐瀬　隆・細野　衛・宇津川徹・加藤定男・駒村正治（1987）武蔵野台地成増における関東ローム層の植物珪酸体分析．第四紀研究，26：p.1-11.

杉山真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究，第2号：p.27-37.

杉山真二（1987）タケ亜科植物の機動細胞珪酸体．富士竹類植物園報告，第31号：p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志（1988）機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用―古代農耕追究のための基礎資料として―．考古学と自然科学，20：p.81-92.

杉山真二・前原　豊・大工原豊（1992）植物珪酸体（プラント・オパール）分析による遺跡周辺の古環境推定．日本文化財科学会第9回大会研究発表要旨集，p.14-15.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―．考古学と自然科学，9：p.15-29.

藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定―．考古学と自然科学，12：p.29-41.

近藤錬三・ピアスン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）―双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について―．帯広畜産大学研究報，12：p.217-229.

室井　綽．1960．竹笹の生態を中心とした分布．富士竹類植物園報告，5：103-121.

表1　寺間遺跡・孫田遺跡の植物珪酸体分析結果

（単位：×100個/g）

分類群＼試料	孫田遺跡									寺間遺跡	
	8－4グリッド					10―1グリッド				17―6	3－8
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	1
イネ科											
キビ族（ヒエ属など）						7					
ヨシ属							6	7	7		
ウシクサ族（ススキ属など）						79	23	7	15		
シバ属							6				
キビ族型						26	6				
ウシクサ族型	44	43				275	161	180	179	14	
タケ亜科											
ネザサ節型	22					321	695	433	97	7	
クマザサ属型	292	107	168	142	66	92	138	108	82	229	261
マダケ属型							6				
未分類等	88	50	37	30	7	275	322	281	60	100	75
その他のイネ科											
表皮毛起源	22	50	19	7	7	39	6	36	7	21	7
棒状珪酸体	321	143	112	15	15	420	379	563	179	107	22
茎部起源			6		7	7	6	7		14	
地下茎部起源					7						
未分類等	555	399	317	30	29	820	706	678	567	458	97
樹木起源											
多角形板状（コナラ属など）				7							
はめ絵パズル状（ブナ属など）						7					
植物珪酸体総数	1343	792	659	231	140	2368	2458	2301	1194	951	462

表2　主な分類群の植物体量の推定値

（単位：kg/m²・cm）

分類群＼試料	孫田遺跡									寺間遺跡	
	8－4グリッド					10－1グリッド				17－6	3－8
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	1	1
イネ科											
キビ族（ヒエ属など）						0.55					
ヨシ属							0.36	0.46	0.47		
ウシクサ族（ススキ属など）						0.98	0.28	0.09	0.19		
タケ亜科											
ネザサ節	0.11					1.54	3.33	2.08	0.47	0.03	
クマザサ属	2.19	0.80	1.26	1.06	0.50	0.69	1.03	0.81	0.62	1.72	1.96

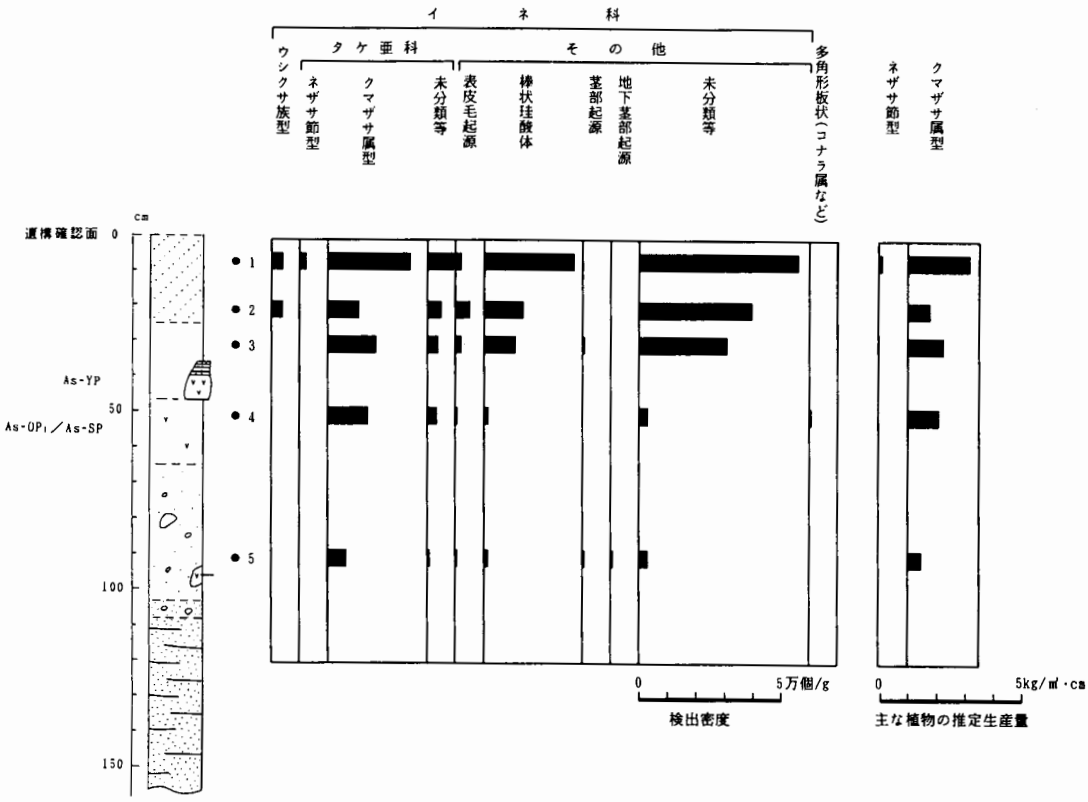


図1　孫田遺跡8－4グリッドの植物珪酸体分析結果

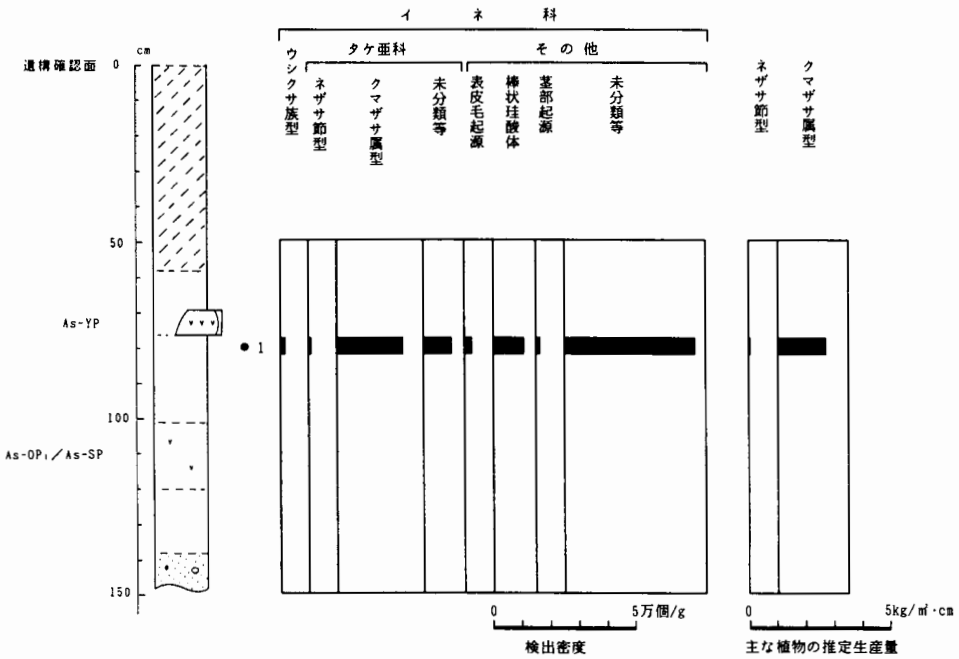


図２　寺間遺跡17－６グリッドの植物珪酸体分析結果

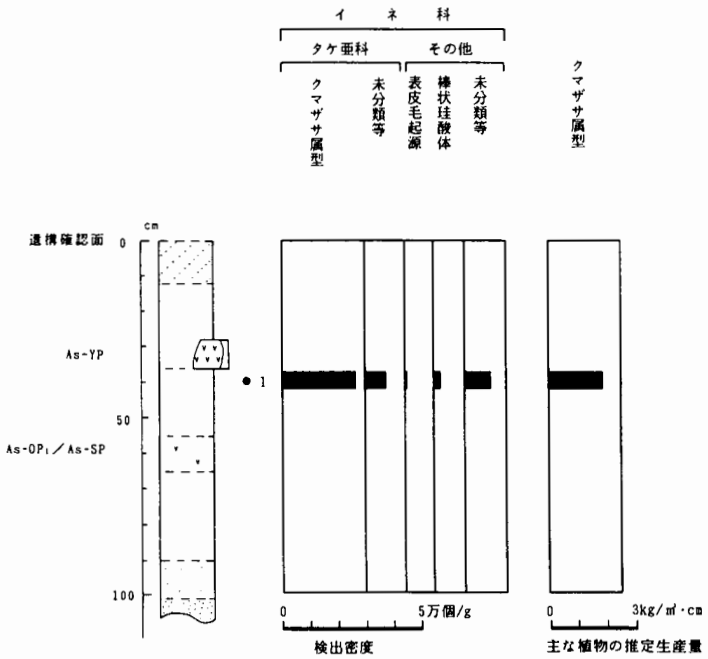


図３　寺間遺跡３－８グリッドの植物珪酸体分析結果

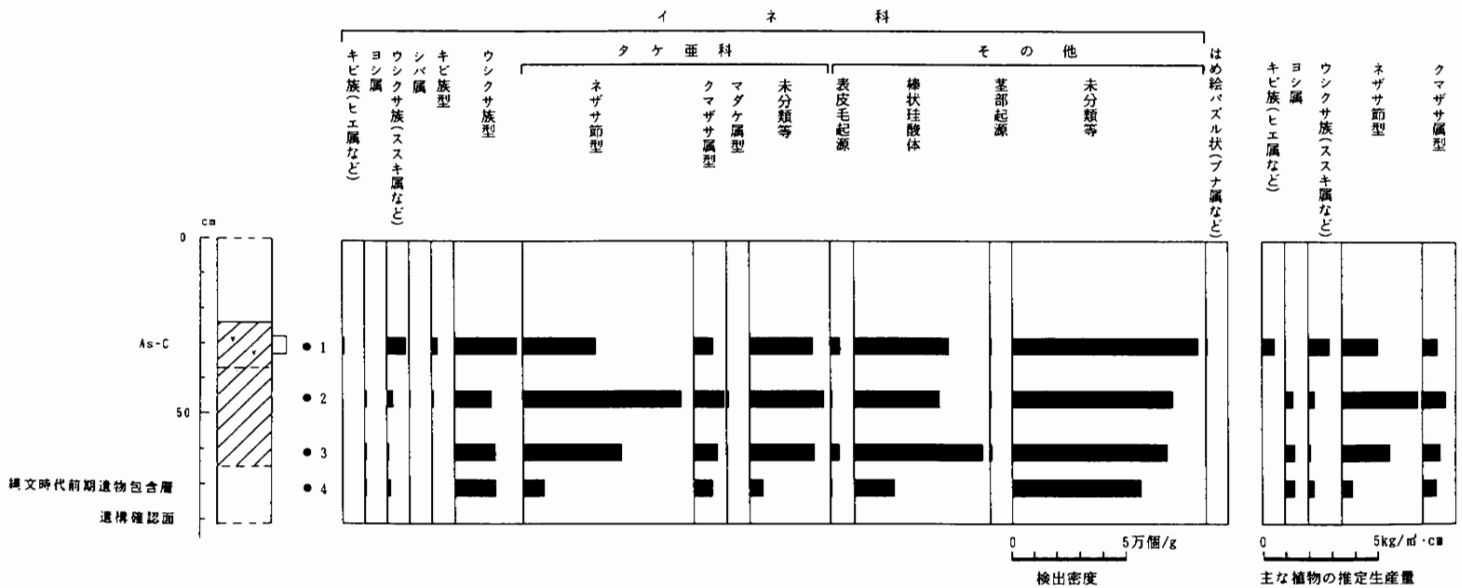
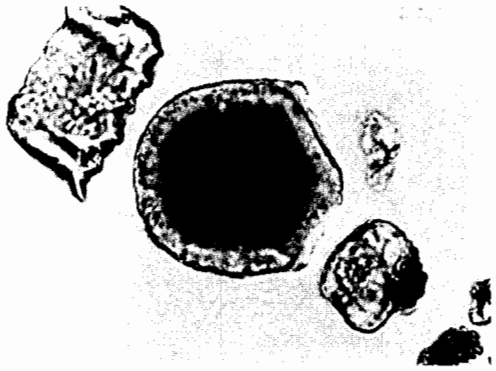
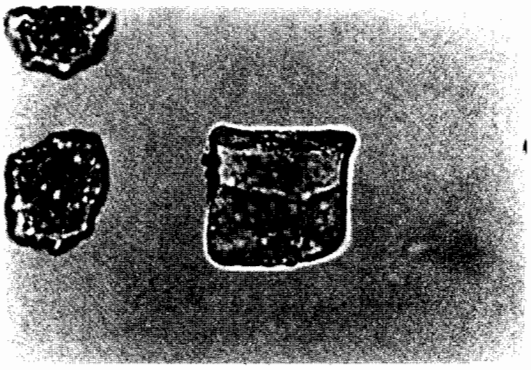


図4　孫田遺跡10―1グリッドの植物珪酸体分析結果

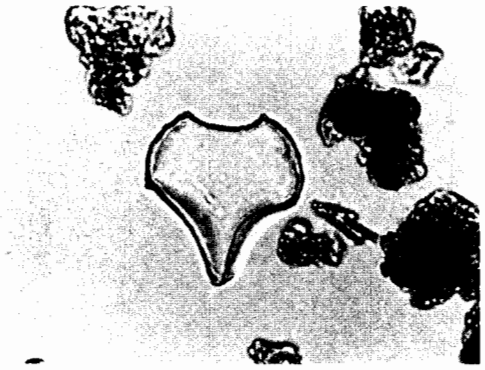
1．キ　ビ　族（ヒエ属など）
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1



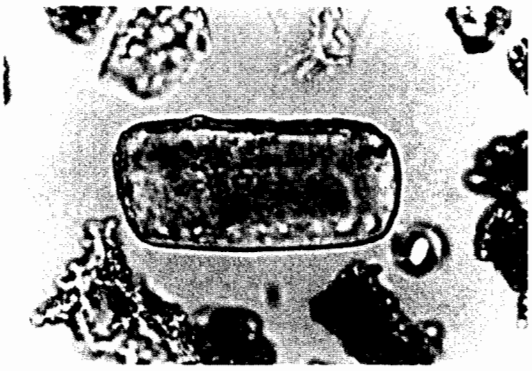
2．ヨ　シ　属
孫田遺跡　10―1グリッド　試料2



3．ウシクサ族（ススキ属など）
孫田遺跡　10―1グリッド　試料4

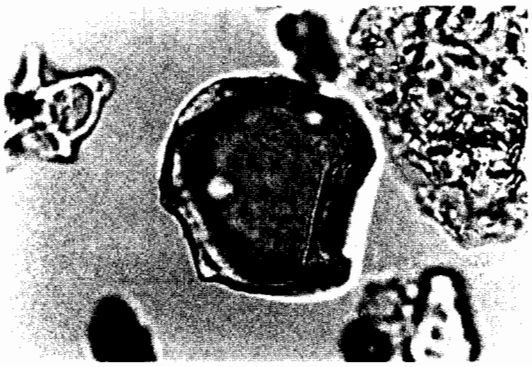


4．シ　バ　属？
孫田遺跡　10―1グリッド　試料2

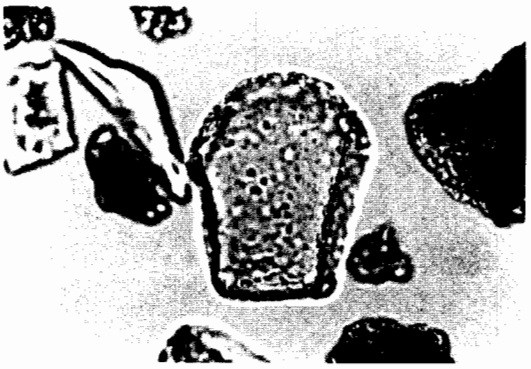


5．キ ビ 族 型
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1

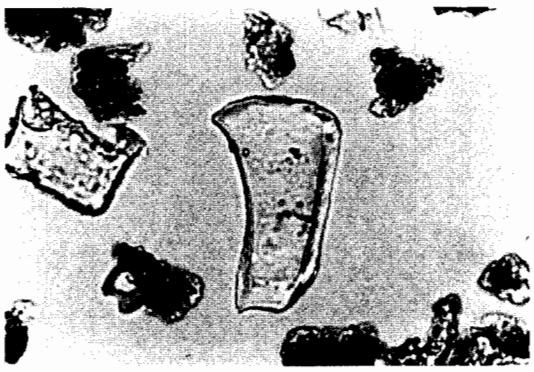
6．ウシクサ族型
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1



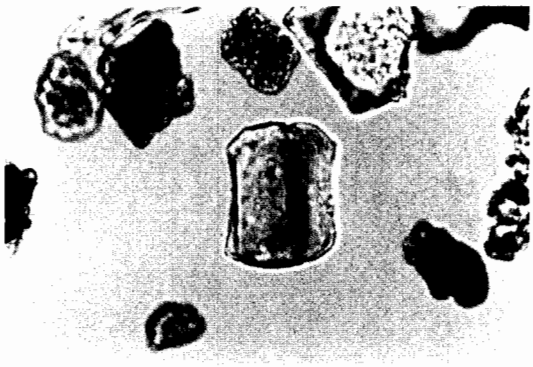
7．不　　明
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1



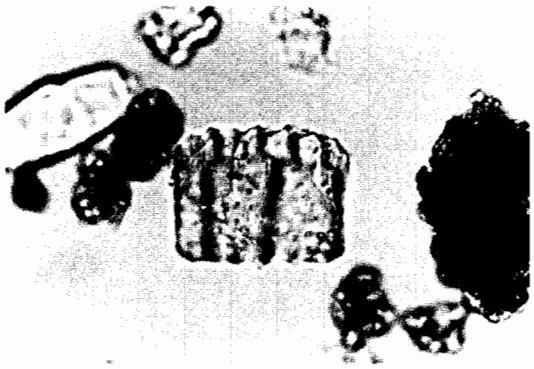
8．不　　明
孫田遺跡　10―1グリッド　試料3



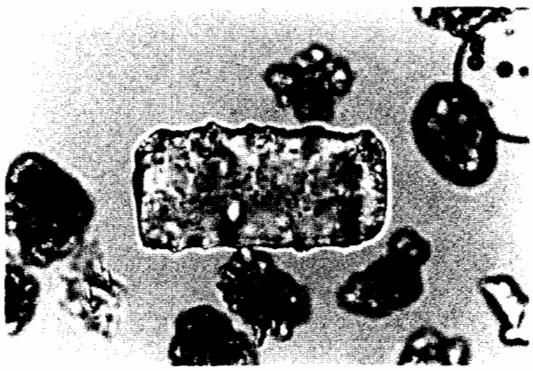
9．不　　明
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1



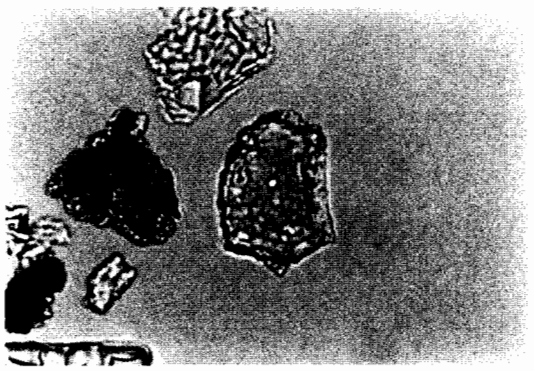
10．不　　明
孫田遺跡　10―1グリッド　試料1



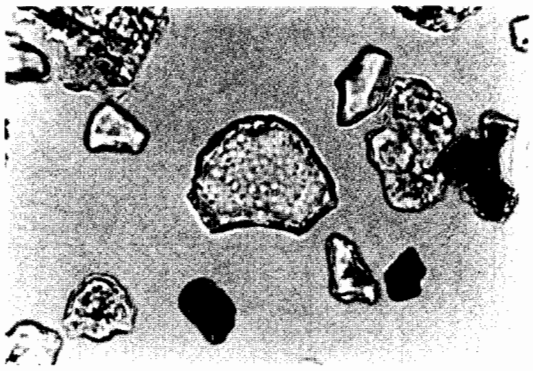
11．ネザサ節型
孫田遺跡　10―1グリッド　試料2



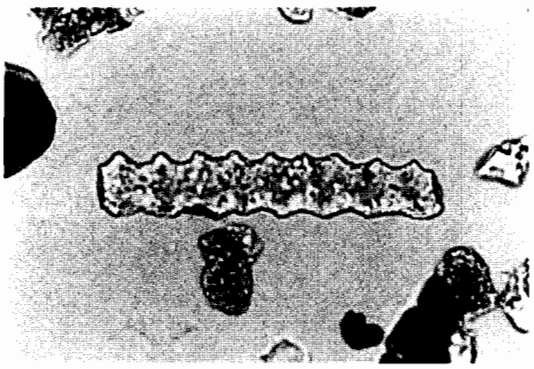
12．ネザサ節型
孫田遺跡　10―1グリッド　試料2



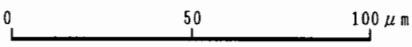
13．クマザサ属型
孫田遺跡　10―1グリッド　試料2



14．クマザサ属型
寺間遺跡　3―8グリッド　試料1



15．棒状珪酸体
孫田遺跡　8―4グリッド　試料1



Ⅵ　発掘調査の成果と課題

目　　次

1．縄文時代の成果と課題

(1)　上百駄山遺跡の諸磯ｂ～ｃ式期集落の変遷

(2)　富士見村における諸磯ｃ式期の土器の変遷について

(3)　富士見村の諸磯式期の遺跡分布

参考資料１．陣場遺跡出土諸磯ｃ式期土器資料

参考資料２．時沢庚東遺跡出土土器

参考資料３．陣場遺跡・上庄司原東遺跡から出土した前期小型石棒

(4)　寺間遺跡出土線刻礫について

2．平安時代の成果と課題

(1)　竪穴住居跡について

①　竪穴住居の建て替えについて

②　竪穴住居跡の施設について

③　若干の考察

3．中近世の成果と課題

(1)　上百駄山遺跡の中世城館跡について

(2)　富士見村の既調査中世城館跡集成

(3)　富士見村と周辺の中世城館跡の分布

1．縄文時代の成果と課題

(1) 上百駄山遺跡の諸磯ｂ～ｃ式期集落の変遷

① はじめに

上百駄山遺跡からは諸磯ｂ～ｃ式期の集落が検出された。各遺構から出土した土器は質的・量的には必ずしも充実しているとは言い難いが、当地域の該期の歴史を解明するための基礎作業として、土器の分析を行い本集落の変遷について考えてみたい。

筆者は昨年度刊行した『広面遺跡』において、出土土器のおおまかな変遷を検討し、当地の諸磯ｃ式土器の型式細分に向けての基礎作業を行った。しかし、課題とした土器観察のやり直しや周辺・他地域出土資料との比較検討も現時点では行っていないため、作業的には『広面遺跡』からほとんど進んでいない。また、『広面遺跡』の段階設定では破片資料から時期判断を行うことが困難な段階（広面５段階）もあり、段階設定自体の見直しが必要とも考えているが、とりあえず本項では、広面遺跡で行った段階設定を基本として上百駄山遺跡の変遷を考えることにする。

② 住居跡と出土土器の関係について

竪穴住居跡からは様々な時期の土器が出土する。可能性としてはア―住居構築以前、イ―居住期間内、ウ―住居廃絶後のすべての段階の土器が考えられる。

アには住居跡の埋没過程で土砂の流入に伴って周辺に散布していたものが流れ込むと考えられるが、住居が前代までの遺構と重複して構築されている場合には、ある程度まとまった数量が流れ込む可能性がある。

イには居住期間中に使用して壊れた土器を住居周辺に廃棄したものが①と同様に住居廃絶後に流入した場合と、住居廃絶に伴って不要な土器を廃棄していったものなどが考えられる。

ウには住居廃絶後の居住活動によって当該住居跡がゴミ捨て場として利用されたことが考えられる。この場合には所謂吹上パターンのように多量の土器が一括して廃棄される場合もある。さらに、現実的には覆土中などに重複する遺構を見逃した場合が考えられる。

一方、当地の諸磯式期の住居跡の特徴として建て替え、拡幅、重複が他の時代よりも多い（居住活動が活発？）ことがあげられ、さらに、近接した時期の住居や土坑が重複することも多い。上百駄山遺跡でもＪ１・Ｊ３・Ｊ４号住居跡は建て替えが推定され、Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡は重複している。また、Ｊ２・Ｊ５号住居跡でも土坑の重複が確認・推定されている。

このような状況の中で住居跡の検出状況と土器の出土状況から個々の出土土器について住居跡との関係を判断していかなくてはならないが、調査にかけられる時間や技術的な問題もあり、土器の帰属を判別することが困難な場合も多い。

③ 住居跡（出土土器）の段階判断

様々な制約はあるが、基本的に広面遺跡と同様の視点から住居跡（出土土器）の段階を判断したい。尚、広面遺跡の段階設定の目安は、広面３段階がｂ式末葉で横構成の平行沈線文が一般的な意味で集合化の進んだ段階、広面４段階は平行沈線文が縦構成となり、貼付文が４単位で波状口縁の残る段階、広面５段階は基本的に波状口縁が消滅し、口縁部に貼付文が密に付される段階、広面６段階は胴部にも貼付文が付される段

階である。ただし、前述のとおり小破片から段階判断することは困難な場合が多いため広面2段階と3段階は一括し、広面5段階は適宜判断したい。

Ｊ１号住居跡

遺構の検出状況―別遺構の重複は認められない。柱穴には重複が認められており、建て替えが行われている。ウメガメ（炉）から石組炉への作り替えも行われており、一応、前者が構築当初、後者が建て替え後の住居跡に伴うものと考えたい。

土器の出土状況―床直と覆土中～上層に概ね分けられるものの層位ごとの時期差は明瞭とはいえない。

土器と住居跡の時期判断―草創期と早期の土器破片は流れ込みと判断できる。出土土器の大半は諸磯ｂ～ｃ式期である。

５のウメガメは広面２・３段階である。この段階の土器には１があるが、明瞭にこの時期と判断できるものは多くない。主体は２・13～16など広面４段階のものであり、構築後の住居がこの段階に含まれる可能性が強い。広面６段階は明確には57の１点だけで、３もこの段階に含まれると思われるが、住居廃絶がこの段階になるのか、それとも住居廃絶後に廃棄されたのかは明瞭ではないが、一応後者と考えたい。

Ｊ２号住居跡

遺構の検出状況―別遺構の重複は明瞭ではないが覆土中層から焼土が径１ｍ程の範囲に検出されており、土坑等が重複していた可能性がある。建て替えは行われていない。

土器の出土状況―覆土中～上層から散在して出土している。数量的には少ない。

土器と住居跡の時期判断―明瞭な広面４段階の土器は２点で、大半は広面２・３段階である。１の復元個体は過渡的な様相を示すが、広面４段階と考える。広面４段階が重複する別遺構に伴う可能性は否定できないものの、構築～居住時期の大半が広面２・３段階で、廃絶が広面４段階にかかる可能性があると考える。

Ｊ３号住居跡

遺構の検出状況―拡幅の状況は不明瞭であるが、柱穴の検出状況、ウメガメの出土状況から建て替えが行われたことは明瞭である。他の遺構の重複は認められない。

土器の出土状況―ウメガメ以外は覆土中からごく僅か出土しただけである。

土器と住居跡の時期判断―１のウメガメは広面２・３段階であるが、残存部下端に縦のレンズ状文があり、広面４段階（諸磯ｃ式）への萌芽を認められる。２は広面４段階である。

覆土から出土した少量の土器の大半は広面２・３段階で、建て替え前の居住段階で住居周辺に廃棄したものと考えられる。明瞭に広面４段階と判断できるものは１点もない。広面１段階の遺物（浮線文）は構築以前に住居周辺に散布していたものが流れ込んだものと思われる。

以上、構築は広面２・３段階、建て替えは広面４段階で、広面４段階中の廃絶が考えられる。

Ｊ４号住居跡

遺構の検出状況―柱穴には重複が認められ、建て替え若しくは拡幅が予想される。また、平面形状からは重複の可能性もあるが、土層の堆積状況からは重複の状況は明瞭ではない。

土器の出土状況―覆土下層から復元個体が出土した他は、覆土全体に散在して少量出土しただけである。

土器と住居跡の時期判断―定型的な平行沈線文の土器が無いため、復元個体の中で明瞭に時期を判断できるものはない。2は内折波状口縁であり、広面3～4段階に比較的多い器形である。5は貼付文は広面5段階的であるが、平行沈線文が定型的でなく乱雑であり、時期を判別しにくい。破片は広面2・3段階が比較的多いが、これを、住居構築以前に存在した土器と捉えるか、或いは構築当初の住居に伴うと判断するか大きな問題であるが、この点を含めてＪ６Ａ・Ｂ号住居跡の項で改めて記述したい。

Ｊ５号住居跡

遺構の検出状況―住居跡の中央に土坑が重複する。

土器の出土状況―床直で1が出土した以外は覆土出土である。

土器と住居跡の時期判断―1は広面4段階である。破片は広面2・3段階を主体としており、これが住居跡に伴うとすれば構築時期は広面2・3段階、廃絶は広面4段階と考えられる。

Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡

遺構の検出状況―Ｊ６Ｂ号住居跡の北端にＪ６Ａ号住居跡が重複する。

遺物の出土状況―出土位置を特定できない遺物の帰属は不明である。Ｊ６Ｂ号住居跡の覆土下層から復元個体が出土している。Ｊ６Ａ号住居跡の南側壁外でＪ６Ｂ号住居跡の上層出土土器は接合関係からＪ６Ａ号住居跡に伴うと考えられる。さらに、この土器にはＪ４号住居跡との接合関係も認められており、Ｊ６Ａ号住居跡とＪ４号住居跡は同一時期に帰属する可能性がある。

土器と住居跡の時期判断―Ｊ６Ｂ号住居跡出土遺物は基本的に縄文施文土器であり、時期的な帰属は明瞭ではないが、3は器形・貼付文・凹凸文の全ての要素において広面4段階である。4の平行沈線によるレンズ状文は中途半端で、過渡的な様相と見ることもできるが、施文位置や大きさ、他の文様が施文されていないことを考慮すれば、これも広面4段階の可能性が強い。覆土中には広面2・3段階の遺物がある程度の数量含まれていることを考慮すると、6Ｂ号住居の構築時期は広面2・3段階、廃絶は広面4段階と考えられる。

Ｊ６Ａ号住居跡の復元個体は結節浮線文・平行沈線文・無文土器である。1の結節浮線文土器は従来諸磯ｃ式新段階とされていたが、現在では諸磯ｃ式土器における編年的位置付けは不確実とされている。2は平行沈線文と胴部に及ぶ貼付文であり、文様要素としては諸磯ｃ式的である。器形的には頸部から内湾して開く口縁部が諸磯ｃ式に類似するといえないこともないが、典型的ないわゆる古段階の器形とは言い難い。一方、文様は菱形文が基調となっていると思われ、諸磯ｃ式の典型的な文様とは異なる。いずれにしても2の位置付けがＡ号住居跡の時期判定に重要と思われる。ここでＪ６Ａ号住居跡の出土土器とＪ４号住居跡1が接合関係にあることに着目し、合わせて比較してみると、Ｊ４号住居跡1も平行沈線で菱形文を施文した土器である。この土器は第II章第1節(5)で説明したように胎土・器形的には興津式に類似しており、文様は興津式の菱形文を平行沈線に置換したとも考えられるものである。また、Ｊ４号住居跡3も乱雑な菱形文と見えなくもない。いずれにしても諸磯ｃ式古段階的な要素を持ち、なおかつ広面4～6段階ではない土器ということで、住居跡の重複状況からもここでは広面6段階以降の諸磯ｃ式土器と想定し、Ｊ６Ａ号住居跡をこの段階におきたい。

ここで改めてＪ４号住居跡の時期を推定してみると、1を代表とする土器群はＪ６Ａ号住居跡と同じ段階である。また、広面2・3段階の土器も比較的多く出土しており、両者には段階差があることからすれば、建て替えというよりも両段階の住居跡の重複とするほうが妥当と考える。

④　集落の変遷

以上により上百駄山遺跡の住居跡の変遷は建て替えの前後と重複の前後関係でそれぞれ古・新とすれば、上百駄山１段階（広面２・３段階）：Ｊ３古・Ｊ２・Ｊ１古・Ｊ４古→上百駄山２段階（広面４段階）：Ｊ３新・Ｊ１新・Ｊ５・Ｊ６Ｂ→上百駄山３段階：Ｊ４新・Ｊ６Ａの３段階が考えられる。

(2)　富士見村における諸磯ｃ式期の土器の変遷について（第116・117図、第33表）

前項において上百駄山遺跡Ｊ６Ａ号住居跡２は諸磯ｃ式土器に帰属すると推定されたものの、直接的に系譜を辿れる土器は確認されていない。後掲する参考資料の陣場遺跡Ｊ９号住居跡２のような存在を見ると、突然変異的に出現した可能性も考えられる。

ここで改めて周辺地域を含めて諸磯式期の土器群をみると、諸要素が諸磯ｃ式土器的（縦構成の平行沈線文と貼付文）で広面６段階までに帰属させられない土器が存在する。それは、口縁部（文様帯）が拡大し、縦位の長棒状貼付文が付される土器である。この資料は富士見村では田中遺跡と陣場遺跡（参考資料１のＪ17号住居跡出土土器）から出土しているだけであるが、当地に隣接する前橋市の芳賀北曲遺跡からまとまった資料が出土しており、大胡町の上大屋遺跡からも多数出土している。個別の出土状況は検討していないが、周辺地域も含めて当地からまとまった資料が出土しており、当地で最も大規模な該期の遺跡と推定される広面遺跡からこの種の資料が１点も出土していないことは、この資料が広面６段階までに属する客体的な土器ではなく、広面６段階以降に継続する諸磯ｃ式土器である可能性が強い。器形的にも広面６段階の２段口縁の深鉢の口縁部が拡大し、貼付文が長棒状に変化したと考えれば無理が無く、広面６段階に後続する段階の土器と考えられる。

次に、上百駄山遺跡Ｊ６号住居跡２について改めて考えてみたい。本資料は前項で平行沈線文の文様が興津式の影響下にある可能性を指摘した。ここで平行沈線文の文様に注目すると、本資料は乱雑な菱形文、或いはこれに区画帯を施した三角状の文様である。前述した（広面６段階に後続する）土器の文様に区画帯が無く、縦長の菱形状を呈することからすれば、これから変化したとも考えられる。さらに器形的には長棒状貼付文を付した口縁部上段を省略したとも考えられることから、前述の土器に後続する可能性が高い。但し、土器変遷の段階、或いは型式細分の一段階として成立するためには更なる資料の増加を待たねばならず、ほかの資料による検証を経ていない現時点では、あくまでも仮の段階として設定したい。

以上のように、広面遺跡で設定した段階の後に２段階の変遷が想定できた。しかし、全段階が存在する遺跡はなく、遺跡ごとに段階設定していたのでは不便である。そこで富士見村全体に適用できるように改めて段階名を付し、変遷図を作成した（第116・117図）。各遺跡との対応関係は第34表に記す。

各段階のおおまかな各要素の目安は以下のとおりである。

富士見村ｃ古１―貼付文は口縁部の４ケ所に付される。器形的には波状口縁が残る。平行沈線文は縦に区画し、レンズ状文を施文する。レンズ状文内を横区画するものがある。

富士見村ｃ古２―貼付文は口縁部に密に付され、胴部には付されない。器形的には波状口縁が消滅する。平行沈線文も多少の変化があると思われるが、現時点では検証していない。

富士見村ｃ古３―貼付文は胴部を含めて付される段階。２段の屈曲口縁が出現する。平行沈線文はこの段階中にレンズ状文が縦長の菱形状に変化する。

富士見村ｃ古４―２段口縁の口縁部が拡大し、長棒状貼付文が付される。平行沈線文は胴部の縦区画が消

滅する。口縁部は地文化傾向にある。また平行沈線文が粗雑化する。

富士見村ｃ古５―貼付文は全体に疎らに付される。器形的には２段口縁の上段が省略される。縦長の菱形文が横方向に伸び方形化する。また、区画線により乱雑な三角状も呈する。

この段階でいわゆる諸磯ｃ式古段階土器は終息すると思われる。

最後に本段階設定の問題と型式細分の見通しについて若干記しておきたい。

①ｃ古２段階は現段階では胴部だけではｃ古１段階と区別できず、口縁部だけではｃ古３段階と区別できない。つまり、土器の変遷の段階としては存在しても、貼付文の疎密という要素だけでは型式の細分の段階としては成立し得ず、ほかの要素による補強が必要である。

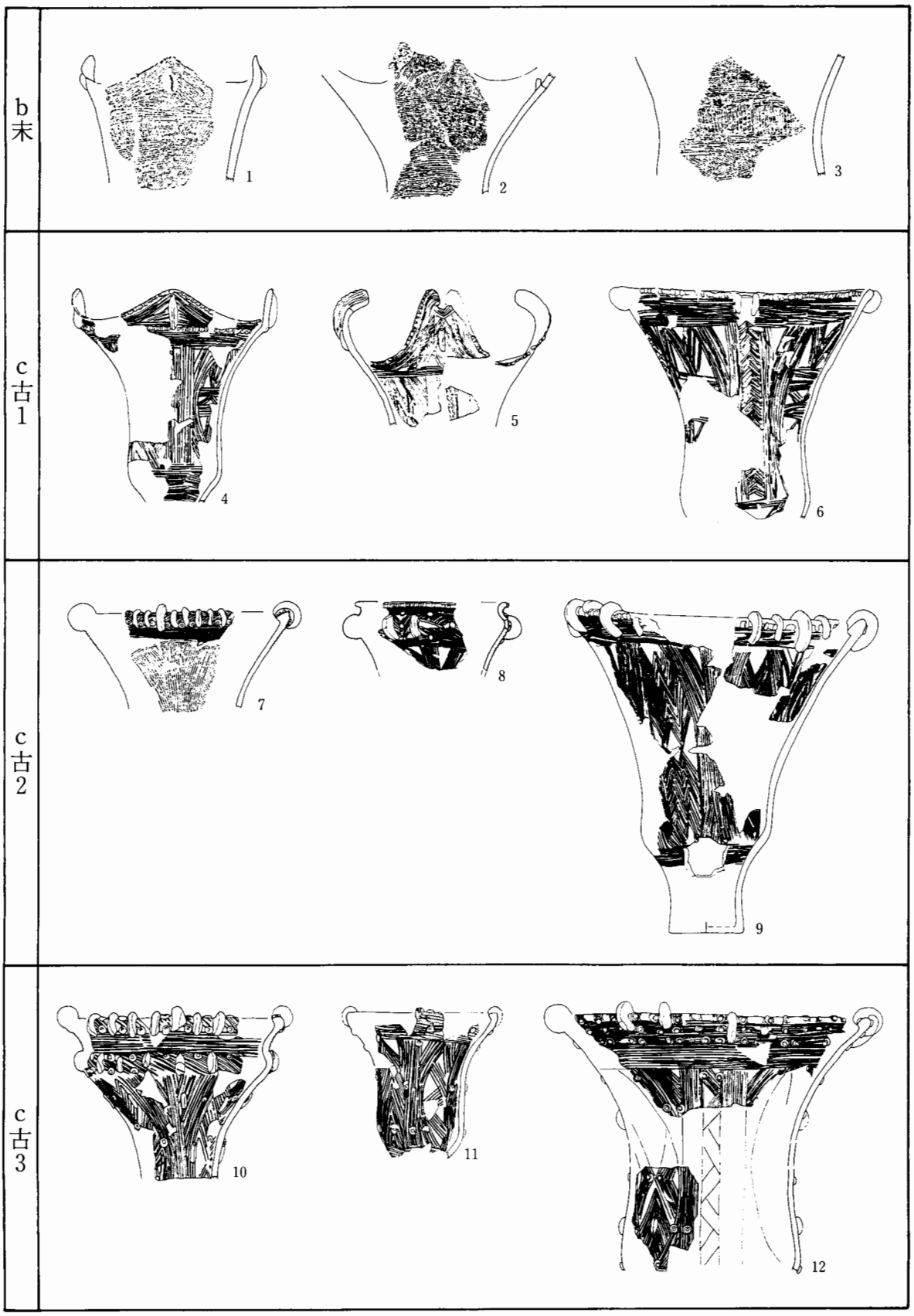
②広面遺跡ではｃ古３段階の貝殻状貼付文がほとんど出土していないが、胴部の平行沈線文が本段階中で変化することとも合わせてさらに細分できる可能性がある。

③ｃ古４段階のより大型の器種が出土していないため、大型の器種を欠くのか、存在するのかが不明であるが、存在するとすれば胴部の縦区画線が消滅するかどうか不明である。

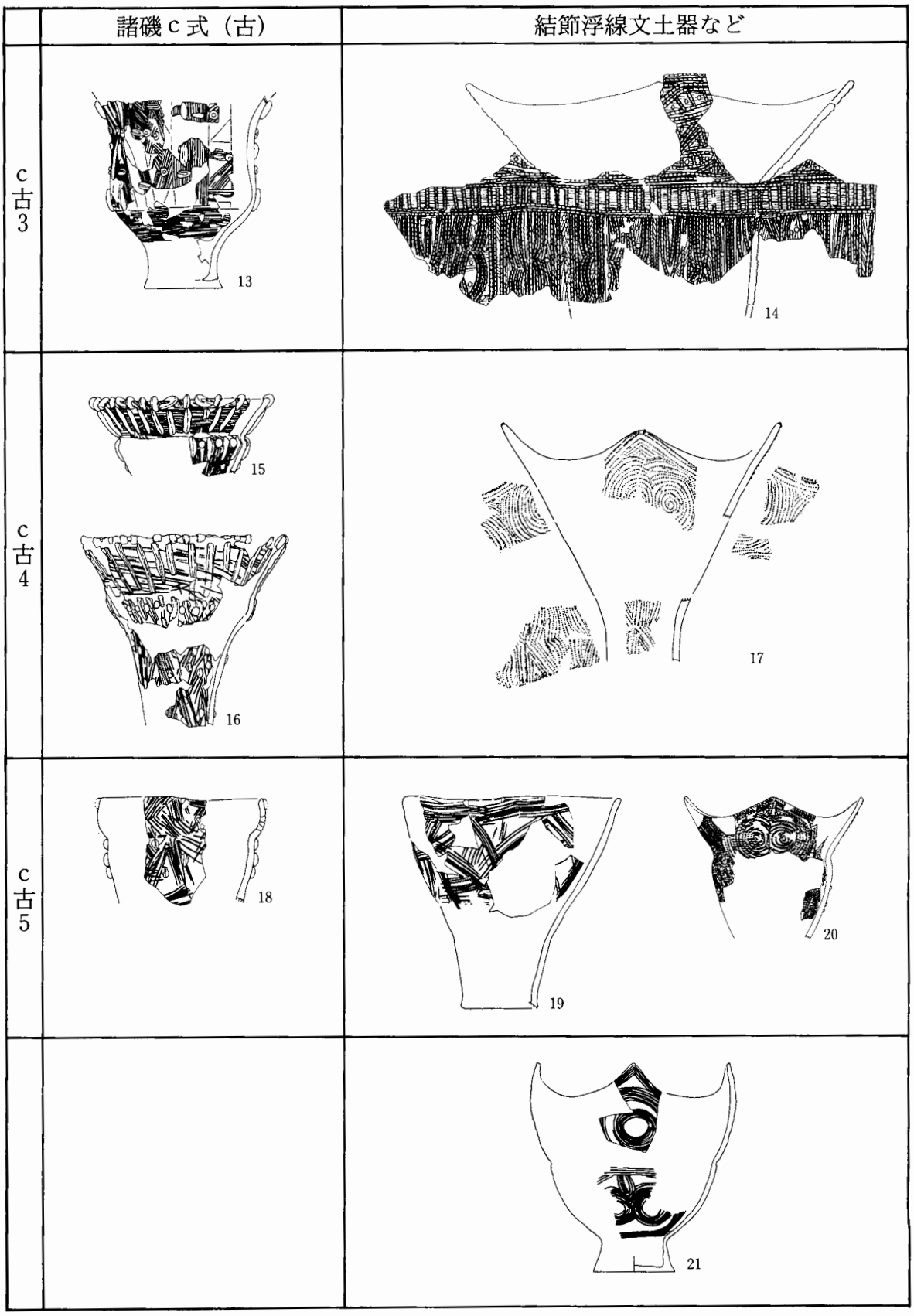
第33表　富士見村の諸磯ｃ式期の土器変遷表

富士見村の段階	愛宕山遺跡		広面遺跡		上百駄山遺跡		陣場遺跡	その他の遺跡の遺構
	段階設定	富士見村の遺構	段階設定	遺構名	段階設定	遺構名		
b未	仮１段階	広面３住 向吹張Ｊ１住	広面３段階	Ｊ３住古、ＤＪ19土	上百駄山１段階	Ｊ１住古 Ｊ２住 Ｊ３住古 Ｊ４住古		
ｃ古１	仮２段階	広面１住 愛宕山１住 向吹張Ｊ10住	広面４段階	Ｊ１Ａ住、Ｊ３住新、 Ｊ５住古、Ｊ８住中 ＢＪ３土	上百駄山２段階	Ｊ１住新 Ｊ３住新 Ｊ５住 Ｊ６Ｂ住		
ｃ古２			広面５段階	Ｊ１Ｂ住、Ｊ４住、 Ｊ５住中、ＡＪ１土			Ｊ１住	
ｃ古３	仮３段階	広面５・７住	広面６段階	Ｊ２住、Ｊ５住新、 Ｊ６Ａ住新、Ｊ６Ｃ住、 Ｊ７住、（Ｊ８住新） ＡＪ７土、ＡＪ８土			Ｊ９住	坂上Ｆ８土
ｃ古４							Ｊ17住	田中２住
ｃ古５					上百駄山３段階	Ｊ４住新 Ｊ６Ａ住	Ｊ２住	
								庚東１竪
十三菩提								米野田Ｊ１Ａ・Ｂ住

※注：愛宕山遺跡報告書の記載では広面遺跡の住居番号の頭にＪが抜けている。



第116図　富士見村の諸磯ｃ式土器変遷図(1)



第117図　富士見村の諸磯ｃ式土器変遷図(2)

④ｃ古５段階は18の存在のみから想定した段階なので、段階として成立するかどうか判然としない。資料の増加が待たれるが、消滅直前の段階という想定が確かならば、あまり多く存在することは思えない。

以上のように、上百駄山遺跡の整理作業、陣場遺跡出土土器の資料化により、当地の諸磯ｃ式土器についてはおおまかな段階分けの見通しが付いたが、さらに細分される可能性も残している。今後は限られた器種だけでなく、当地の諸磯ｃ式土器の観察を広くより細密に行い、さらに周辺・他地域資料との比較検討を経て、器種組成や土器の諸要素の変化を段階ごとに規定していくことで型式の細分にまで深化させたい。

変遷図の説明

第116・117図は富士見村から出土した土器資料により、土器の変遷図を作製したものである。

第116図はすべて広面遺跡出土資料である。ｂ末段階の１～３はＪ３号住居跡、ｃ古１段階の４～６はＪ１Ａ号住居跡出土資料で、同種器形間の文様の変化が分かるように配列した。ｃ古２段階の７～８はＪ５号住居跡、９はＡＪ１号土坑出土資料である。ｃ古３段階の10はＪ７号住居跡、11はＢ区遺物包含層、12はＪ６Ａ号住居跡出土資料で、12は貼付文がほとんど剝落しており、実測図が不明瞭であるが、口縁部にも密に付されている。尚、３・６・９・12は法量・器形的に近似するものを縦に配列している。

第117図は左欄に諸磯ｃ式古段階資料を変遷順に配し、右欄には基本的に共伴関係にある結節浮線文土器などを掲載したものである。すべて広面遺跡以外の遺跡から出土した資料である。13・14は坂上遺跡出土資料で、13はＦ区18号土坑、14はＦ区８号土坑から出土し、共伴資料ではないが、14に破片資料ではあるが本段階の資料が伴出しており、参考までに掲載したものである。15～17は陣場Ｊ17号住居跡出土資料、18～20は上百駄山Ｊ６(４)号住居跡出土資料である。21は時沢庚東遺跡出土資料で、時期判断可能な遺物が共伴していないために仮に入れただけで、段階的な位置を意味しない。また本村内で系譜を辿れない。

結節浮線文土器は器形・法量が異なり直接的には変遷を辿れないが、地文の観点からみれば１の胴部は平行沈線で文様が描かれる（口縁部は横方向で地文化している）のに対して、２は無文、３は横方向の平行沈線文で地文化しており、２・３の先後関係は不明であるものの、１に古相が伺われる。

(3)　富士見村の諸磯式期の遺跡分布（第118図、第34表）

前項の段階設定を基にして前後の時期を含めて富士見村の諸磯式期の遺跡を段階ごとに一覧表にしてみたのが第34表である。富士見村ではこれまで37の遺跡で調査を行っているが、その内の24遺跡から諸磯式土器が出土している。これは全時代を通してみても最も多い平安時代の25遺跡とほぼ同数である。一方、諸磯式期の中でみると、ａ式期が10遺跡、ｂ式期が17遺跡、ｃ式期が18遺跡とａ・ｂ両式期の遺跡がほぼ同数である。さらに、調査範囲の関係で同列には扱えないが、遺跡の内容も加味して各期をみてみたい。

ａ式期は10遺跡中４遺跡で住居跡が検出されているものの、すべて１～２軒程度であり、集落としての広がりが認められない程度の遺跡である。

ｂ式期の遺跡では愛宕山遺跡が質・量ともに最も充実した遺跡であり、現時点では愛宕山遺跡無しに富士見村の古～中段階は語れないが、ほぼ全域に近い範囲を調査したにもかかわらず、検出された住居跡は12軒だけで、１時期にすればやはり１～２軒程度であり、集落とはいえない規模の遺跡である。本報告書の上百駄山遺跡も該期の集落部分は全掘したと思われるが、２時期に渡る可能性を含めて４軒である。ｂ式期の住居跡が検出された６遺跡の内では向吹張遺跡と広面遺跡、さらに不確実ではあるが上庄司原東遺跡を加えた

第34表　富士見村の諸磯式期の遺跡一覧表

◎住居跡　○土坑・竪穴状遺構　◇遺物だけ

遺跡名＼時期	黒浜・有尾	諸磯a式期	諸磯b式期 古	諸磯b式期 中	諸磯b式期 新	諸磯c式期 古1	諸磯c式期 古2	諸磯c式期 古3	諸磯c式期 古4	諸磯c式期 古5	諸磯c式期 新	十三菩提式期	発掘調査年度	整理作業	報告書	備考	図番号
田中田			◎	○									S58	未了	1986		1
見眼A								◇				◇	S58	未了	1986		2
向吹張				◎	◎	◎		◇	◇		◇	◇	S61	未了	1987		3
岩之下	◇	○	◇	◇		◇					◇	◇	S61	未了	1987		4
田中	◇					◇			◎		◇		S61		1987		5
寄居	◇	◇		◇									S61		1987		6
白川	◇	◎						◇					S62		1989		7
由森	◎			◇		◇							S62		1989		8
久保田	◇			◇	◇	◇		◇				◇	S62		1989		9
東上原		◇	◇	○	◇	◇						◇	S63	未了	1990		10
米野田				○	◇	◇					◇	◎	S63	未了	1990		11
陣場	◎	◇	◇	◇	◇		◎	◎	◎	◎	◇		H1	未整理	未刊	古墳編刊行	12
下庄司原西		◎											H1	未整理	未刊	〃	13
下庄司原東		◎											H1	未整理	未刊	〃	14
上庄司原東	◎				◎								H1	未整理	未刊	〃	15
広面	○	◇	◇	○	◎	◎	◎	◎			◇		H2		1992		16
愛宕山	◎		◎	◎	◎	◎							H2		1994		17
東紺屋谷戸	◇					◇							H3		1992		18
長泉寺	◎	◇		◇	◇	◇		◇					H3		1993		19
坂上	◇				◇	○	○	○			◇	◇	H3～4		1994		20
上百駄山	◇		◇	◇	◎	◎		◇		◎	◇		H5		1995	本報告書	21
寺間	◎	◎	◇	◇									H5		1996	本報告書	22
孫田	◇					◇		(○)					H5		1995	本報告書	23
時沢庚東											○		H6		未刊		24
参考																	
芳賀東部工業団地	◎	◎	○	◇	◎	◎		◎			◇					前橋市	25
芳賀北曲	◇			◇	◎	◇		◎	◎							前橋市	26
芝山	◎	◎	◎	◎	◎	◎		◇								北橘村	27

注：整理作業の項目中、未了は報告書が刊行されていても概要報告書であったり、本報告書の場合でも遺構外遺物の報告（整理）を行っていないものであり、未整理はもちろん未了のものについては遺構外出土土器の時期的な内容は不明瞭である。また、本表に記載のない遺跡の場合でも遺構外から出土している可能性はある。あくまで本報告書作製時点で確認できた範囲で記載したものである。

：本表は基本的に調査順に記載している。

：住居跡と土坑がある場合は住居跡だけを記載する。

：諸磯b式期の古段階は爪形文、中段階は浮線文の存在、新段階は平行沈線文のみの組成と平行沈線の集合化をおおまかな目安とした。

：諸磯c式期の古1～古5はそれぞれ富士見村c古1～C古5である。新段階は結節浮線文、結節沈線文等である。

第118図　富士見村の諸磯式土器出土遺跡分布図

3遺跡がある程度大規模（集落規模の）な遺跡の可能性がある。

c式期でも住居跡の検出された遺跡は6遺跡である。このうちb新式期から継続する向吹張遺跡と広面遺跡に陣場遺跡を加えた3遺跡がある程度大規模な遺跡と推定され、名実ともに集落といえそうである。

以上のように富士見村の縄文時代の中では最も居住活動が活発と思われた諸磯式期の全期間を通じても集落の数はたったの4遺跡である。もちろん、現段階では既調査遺跡よりも未調査遺跡のほうが多く、また、土地改良事業の行われた限られた区域内での調査であること、さらに、詳細散布調査も行っていない現状で断定することはできないが、富士見村でも比較的密な遺跡地帯で土地改良事業が行われたことを考慮すれば、遺跡数・集落数ともに大幅に増大する可能性は少ないと思われる。

次に諸磯式期の遺跡分布を見てみたい。赤城白川流域を挟んで大きく2ケ所に別れて分布するがこれはまさしく土地改良事業を主とする開発事業の行われた範囲である。位置的に離れている坂上遺跡は工業団地造成により、時沢庚東遺跡と東紺屋谷戸遺跡は民間開発に伴って調査を行ったものである。赤城白川の流域は現状では空白地帯となっており、遺跡が存在しないともいわれている。しかし、時代は異なるが赤城白川の左岸には時沢古墳群が存在しており、包蔵地も数ケ所が知られている。密度的には少ないかもしれないが、河川氾濫物に被われて未周知の遺跡が存在する可能性は大きい。但し、その場合でも諸磯式期について言えば余り大きな遺跡は存在しないと考えられる。さらに高標高地帯にも遺跡分布が認められないが、これも、調査が行われていないだけで、赤城白川流域と同様に密度が薄いだけで遺跡の存在する可能性は高い。

参考資料1．陣場遺跡出土諸磯c式期土器資料

陣場遺跡は富士見村の南西端に位置する。赤城山麓を流下する小河川である法華沢川右岸台地上に占地する。この周辺は富士見村でも最も濃密な遺跡地帯で、後述する上庄司原東遺跡等を含めて陣場・庄司原遺跡群と呼称している。

陣場遺跡は縄文時代前期前半～後半、中期後半～後期初頭の集落、古墳時代の後期古墳、平安時代の集落などが検出された複合遺跡で、遺構・遺物の内容や複合度からみて富士見村でも有数の大遺跡である。特に縄文時代中期後半の集落と平安時代の集落が傑出している。

Ｊ１号住居跡出土土器（第119図）

Ｊ１号住居跡は楕円形を呈し、長径約9.4m、深さ0.6mを測る大型住居跡であるが、東半部は削平されている。東西約5.2mほどが残存する。床面に中期後半などの4基の土坑が重複し、南壁寄りにウメガメが付設されている。

1は無文の小型深鉢で口唇部にキザミを付す。縦方向のケズリが顕著である。口径12.3cm、高さは現状で13.5cmを計る。

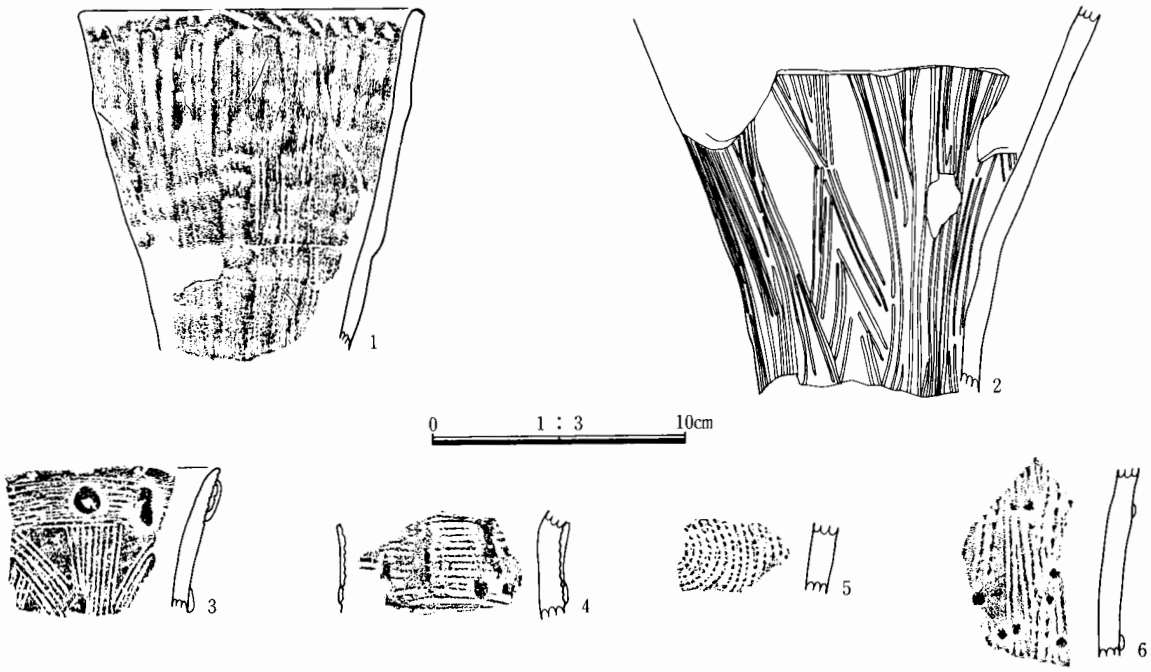
2はウメガメで南壁寄りから出土した。口縁部と底部を欠失する縦区画施文の平行沈線文土器である。

3は胴部にも貼付文を付す平口縁の平行沈線文土器である。

4は縦位の短棒状貼付文と2個一対の小ボタン状貼付文を付す胴部破片で、平行沈線は地文化している。

5は密に結節浮線文で渦巻文或いは円文を施文する。

6は縦位の平行沈線文上に2本一組の結節浮線文と2個一対の小ボタン状貼付文を比較的密に付す。



第119図　参考資料　陣場遺跡Ｊ１号住居跡出土土器

Ｊ２号住居跡出土土器（第120図）

Ｊ２号住居跡は径約8.8m、深さ0.6mを測る大型住居跡である。平面形状は歪んだ円形状を呈するが、直線的な掘り込み部分もあり、他の遺構が重複する可能性は否定できない。床面に浅い土坑が１基重複するほか、覆土中にも中期前半の集石土坑が重複する。

１は深鉢の底部で底径約７cm、高さ9.6cmを計る。底部文様は平行沈線で菱形文で区画し、内部にも施文する。小ボタン状貼付文を密に付す。胴部文様は横方向の平行沈線の地文上に結節浮線文を施文する。３本一組で底部との境に巡らし、胴部には縦位に３本一組で疎らに施す。

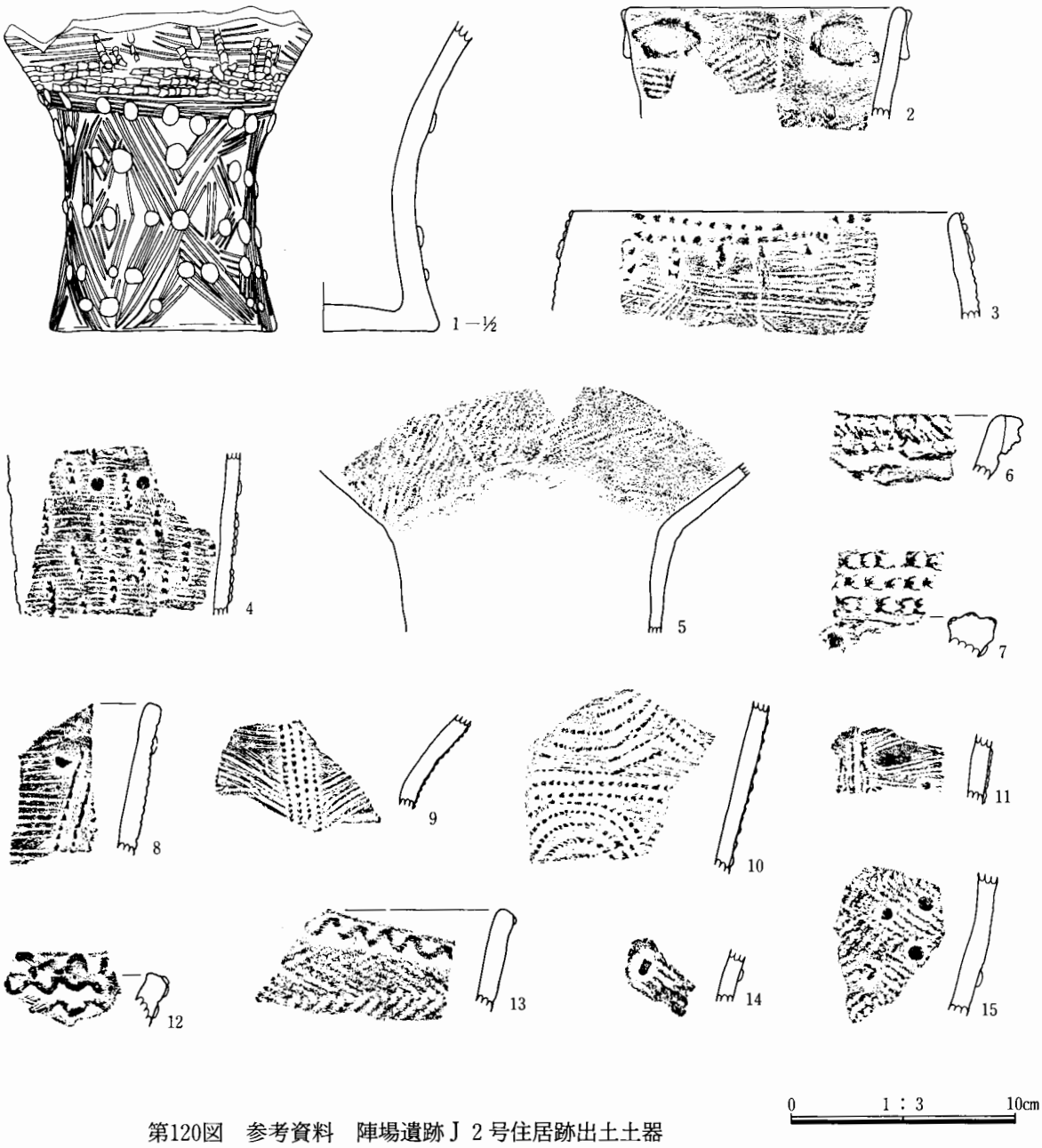
２は平口縁の縄文施文深鉢の口縁部で、口縁部に楕円形の貼付文を４単位付す。口径約13cmを計る。

３は平口縁の平行沈線文深鉢の口縁部である。口縁端に２本の太めの結節浮線文を巡らし、そこから短かい結節浮線文を間隔を開けて垂下する。口径は17.6cmを計る。

４は深鉢の胴部である。横方向の平行沈線地文上に短結節浮線文を縦位に付す。小ボタン状貼付文も疎らに付す。

５は円筒状の底部から大きく胴部が開く深鉢の下端部である。底部は無文、胴部には縄文が施文される。残存部が少なく不明瞭であるが大木式系統の金魚鉢型深鉢の可能性がある。

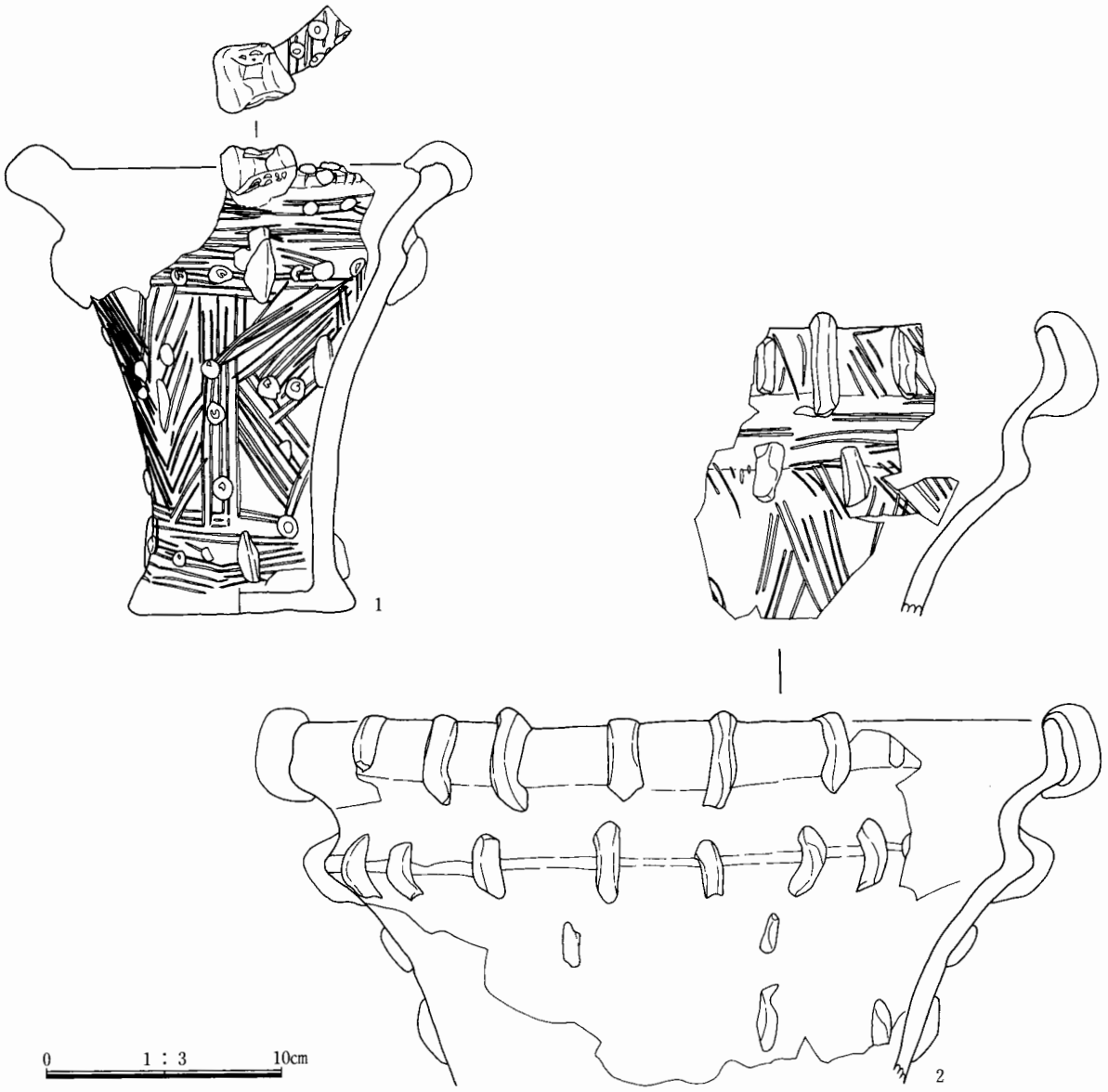
６は口縁端部に隆帯を付し、２段の刺突文を連続する。７は口唇部に３条のごく太い結節浮線文を付す。８は波状口縁で横方向の平行沈線地文上に３本一組の結節浮線文を縦位に付し、小ボタン状貼付文も付す。９は平行沈線文で施文し、文様の変換部に４本一組の結節浮線文を垂下する。10は横方向の平行沈線地文上に結節浮線文で双円文などを施文すると思われる。11は平行沈線で施文し、９と同様に文様の変換部に３本以上一組の結節浮線文を垂下する。小ボタン状貼付文も疎らに付す。12は口唇部と口縁部に波状浮線文を付す。地文は平行沈線文を矢羽根状？に付す。12は口縁端に波状浮線文を沿わせる。羽状縄文地文である。14は浮線を短く切り取ったような貼付文を付す縄文地文土器である。15は縄文地文上に小ボタン貼付文を比較



第120図　参考資料　陣場遺跡Ｊ２号住居跡出土土器

的密に付す。

資料提示した土器以外では、波状浮線を付す縄文施文土器16点、ボタン状貼付文を付す縄文施文土器は大小の貼付文を合わせて７点、ボタン状と棒状貼付文を付すもの１点である。結節浮線文土器は密に施文するものが11点、粗く施文するものが５点、縦位に３～４本組で付すもの４点である。平行沈線文に小ボタン状貼付文を付すものは２点、粗い結節浮線文と小ボタン状貼付文の組み合わせは１点、結節沈線文土器１点である。最も多いものは貼付を伴わない集合沈線文土器で、同一個体も含めて百数十点出土している。文様は粗く矢羽根状文を多段に施文するものが大半で、縦構成の平行沈線文土器はほとんど出土していない。このほかに縄文だけを施文する土器が数十点出土しているが、諸磯ａ式期の土器が十数点、諸磯ｂ式期の土器が十点ほど出土しているため、時期的な判別がつかない。また、覆土中からは阿玉台式土器が多量に出土しているが、これは覆土中に重複する集石土坑等に伴うものである。



第121図　参考資料　陣場遺跡Ｊ９号住居跡出土土器

Ｊ９号住居跡出土土器（第121図）

Ｊ９号住居跡は楕円形気味の隅丸長方形を呈し、長軸4.8m、短軸3.2m、深さ0.1m（台地東端部の段下に占地しており上部が耕作などにより削平されているため）を測る。長軸の両端の内外に土坑が重複する。

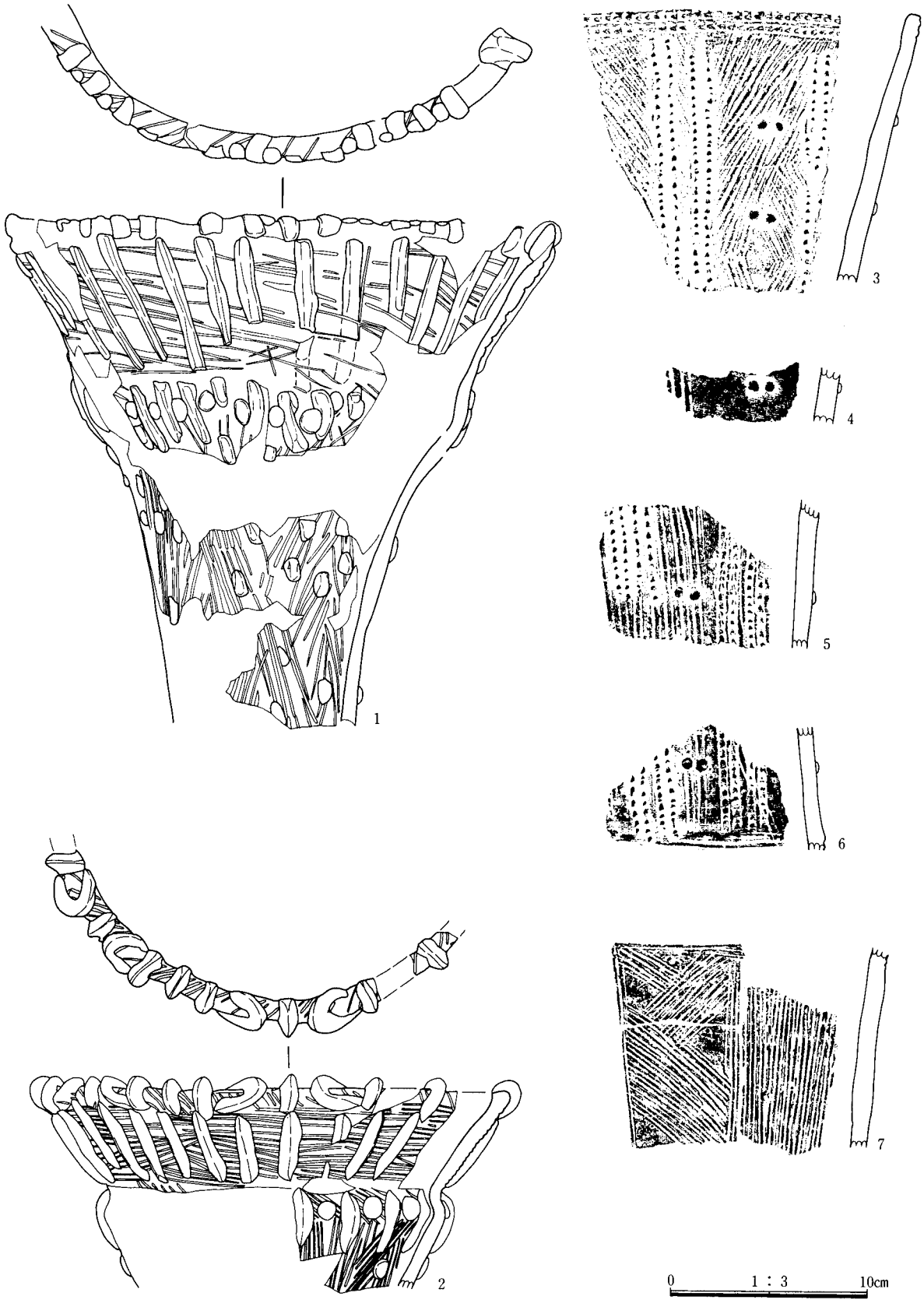
１は有段口縁の平行沈線文深鉢で、多種類の貼付文を密に付す。口縁部には大型の貼付文が４単位に付される。平行沈線文は懸垂帯で区画し、区画内に菱形文・矢羽根状文などを施文する。口径18.3cm（貼付文を除く）、底径8.4cm、高さ約20cm（貼付文を含む）を計る。

２も有段口縁深鉢である。大半の部分が地文無文であるが、ごく一部分だけに平行沈線で施文する。貼付文は雑であるが密に付す。口縁部の貼付文は概ね大小を交互に付す。口縁部最大径は約33cmを計る。

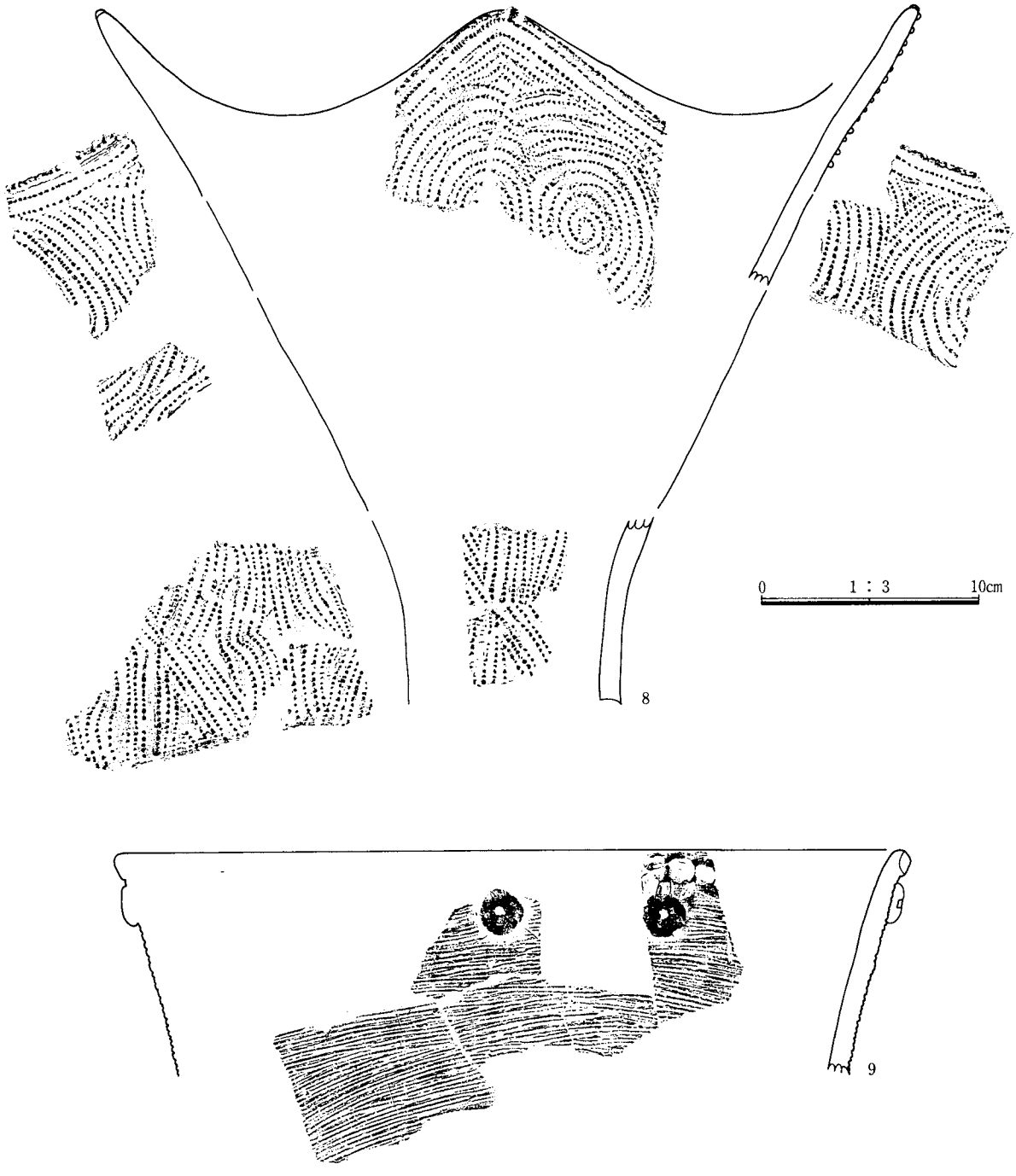
本跡からはこれ以外の土器はほとんど出土していない。

Ｊ17号住居跡出土土器（第122・123図）

Ｊ17号住居跡は概ね隅丸方形を呈するが土坑などの重複により不明瞭な点が多い。



第122図　参考資料　陣場遺跡Ｊ17号住居跡出土土器(1)



第123図　参考資料　陣場遺跡Ｊ17号住居跡出土土器(2)

１は有段口縁の深鉢であるが、口縁部は幅広く長棒状貼付文を付す。口縁端は折り返して肥厚する。口縁部外面端部から口縁部内面と段部には棒状貼付文とボタン状貼付文を交互に付す。胴部はボタン状貼付文を密に付す。平行沈線文は口縁部は斜め～横方向、胴部は菱形或いは矢羽根状に付すが、かなり粗雑で地文化の傾向にあると思える。口径約28cm、現状の高さ約26cmを計る。胎土に小礫・片岩を多量に含む。

２も有段口縁の深鉢で、１と同様に幅広の口縁部で長棒状貼付文を付す。口縁端～口唇部には長棒状貼付文を貝殻状貼付文状に付す。段部以下にも１と同様に貼付文を付すが、平行沈線文は１と異なり非常に丁寧に施文している。口径は約24cmを計る。

3～6は同一個体と思われる。口縁端部には2条の結節沈線文を巡らす。全体的に平行沈線で施文し、結節沈線文、結節浮線文を垂下する。また、2個一対の小ボタン状貼付文も疎らに付す。4のように平行沈線文を付さない区画もある。かなり大型の土器である。胴部下端で膨らみをもち、急速に窄まって小さな脚台形の底部が付く器形と思われる。

7は平行沈線文だけの深鉢胴部でかなり大型の土器である。

第35表　陣場遺跡出土土器観察表

番号	器種・器形・部位・文様要素など	地　文	胎　土	色　調
陣場遺跡Ｊ１号住居跡出土土器				
1	平口縁、口唇部斜めキザミ、縦ナデ		砂粒	にぶい橙色
2	胴部、集合・連続沈線		白色粒、砂粒	浅黄橙色～橙色
3	平口縁、貼付文、連続・集合沈線		赤・白色粒、砂粒	にぶい褐色
4	胴部、棒状貼付文（短浮線）、貼付文、集合沈線		白・赤色粒、砂粒	明赤褐色～橙色
5	胴部、結節浮線文、（集合）沈線		白色粒、砂粒	赤褐色
6	胴部、小ボタン状貼付文、結節浮線文、集合・連続沈線文		砂粒	黒褐色
陣場遺跡Ｊ２号住居跡出土土器				
1	底部、結節浮線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		砂粒	にぶい橙色
2	平口縁、楕円形貼付文	ＬＲ	砂粒、白色粒	褐色
3	平口縁、結節浮線文、短結節浮線文、集合・連続沈線		砂粒	浅黄橙色～黒褐色
4	胴部、短結節浮線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		砂粒	にぶい褐色～暗褐色土
5	胴部～底部、金魚鉢型深鉢？	ＬＲ	粗砂多量	橙色～浅黄橙色
6	平口縁、睡帯上に結節浮線文（太）		白色粒、砂粒	にぶい赤褐色土
7	平口縁、口唇都に３列の結節幹線文、小ボタン状貼付文		白色粒、砂粒	浅黄橙色～黒褐色
8	波状口縁、結節浮線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		砂粒	橙色
9	口辺部、結節浮線文、集合沈線		砂粒	にぶい黄橙色～暗褐色
10	胴部、結節浮線文、連続・集合沈線		砂粒	にぶい赤褐色
11	胴部、結節浮線文、小ボタン状貼付文		砂粒	暗褐色
12	平口縁、波状浮線文、矢羽根状平行沈線文		白色粒、砂粒	樫色～暗赤褐色
13	波状口縁、波状浮線文	ＬＲ－ＲＬ	砂粒、白色粒	にぶい褐色
14	胴部、貼付文	ＬＲ－ＲＬ	砂粒	明赤褐色
15	胴部、小ボタン状貼付文	ＬＲ－ＲＬ	白色粒、砂粒	暗赤褐色
陣場遺跡Ｊ９号住居跡出土土器				
1	平口縁、貼付文、連続沈線		砂粒、赤・白色粒	浅黄橙色
2	平口縁、貼付文、大半が無文で一部連続沈線		白・赤色粒、砂粒	橙色～極暗赤褐色
陣場遺跡Ｊ17号住居跡出土土器				
1	平口縁、長棒状・ボタン状貼付文、連続沈線（深浅）		片岩、白色粒、粗砂各極多量、小礫	浅黄橙色～暗赤褐色
2	平口縁、長短棒状・ボタン状貼付文、連続・集合沈線		赤色粒、砂粒	暗褐色
3	平口縁、結節浮線・沈線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		小礫、粗砂、片岩	橙色～暗赤褐色
4	胴部、小ボタン状貼付文、連続沈線		粗砂、片岩	橙色～暗赤褐色
5	胴都、結節沈線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		小礫、粗砂、片岩	橙色～黒褐色
6	胴都、結節沈線文、小ボタン状貼付文、連続沈線		粗砂、片岩、赤色粒	赤褐色～黒褐色
7	胴部、連続・集合沈線		白色粒、砂粒	にぶい黄橙色～暗褐色
8	波状口縁、結節浮線文、波頂部小貼付文		白色粒、砂粒	橙色～にぶい橙色
	平行沈線－縦・斜（口縁部）横（胴部）	←		
9	平口縁、ボタン状貼付文、凹凸文、連続・集合沈線		砂粒	にぶい黄橙色

8は4単位波状口縁の結節浮線文土器である。貼付文は波頂部に2個1単位で付される。口縁部径は約38cmを計る。胴部径は約10cmとごく細い。地文は付されない。

9は密に横方向の平行沈線文が付される土器である。口縁端には凹凸文を巡らし、直下に大型のボタン状貼付文を間隔を開けて付す。口径約37cmを計る。

資料提示した土器以外では、縄文施文上に鋸歯状貼付文を付すもの2点、ボタン状貼付文を付すもの5点、棒状貼付文を付すもの1点である。結節浮線文土器は3点で、この内2点は小ボタン状貼付文を付す。結節沈線文は1点、刺突を付す短浮線文土器が1点である。諸磯c式古段階的な平行（集合）沈線文土器は26点で、この内12点に貼付文が付される。この他に諸磯a式が2点、諸磯b式が5点、浮島・興津式が2点出土している。本跡は遺構の重複状況等が不明瞭であり、前期中葉・中期後半の土器も多量に出土している。

参考資料2．時沢庚東遺跡出土土器（第124図）

本資料は今年度、民間開発に伴い行った時沢庚東遺跡の試掘調査において出土したものである。

時沢庚東遺跡は上百駄山遺跡の北西約1kmに位置する。遺跡は低台地上の西端部に位置し、現状では小河川が遺跡の西側に近接して流下している。

本資料は竪穴状遺構から出土したものであるが、開発区域内からは他の遺構・遺物は検出されていない。

竪穴状遺構は円形を呈し、径約5m、深さ30cmの掘り込みを有するが、明瞭な床面や炉などの施設が検出されず、壁面の立ち上りも緩やかである。本資料は覆土中から数片の破片となって散在して出土した。伴出遺物は時期不詳の無文の土器小破片数点と、頁岩と黒曜石の剝片が十数点出土しただけである。

本資料は4単位の波状口縁深鉢で、脚台形の底部から胴部が内湾気味に開き、頸部を経てさらに口縁部が内湾気味に立ち上がるものである。文様は平行沈線で集合施文される。口縁部波頂下には風車状渦巻文・同心円文、波底部には渦巻文・レンズ状文などが施文される。頸部は無文で、胴部文様は風車状渦巻文・双円文を主文様として、余白部にレンズ状文などを施文する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土には砂粒、片岩を含む。口縁部最大径約28cm、底径9.6cm、高さ28.5cmを計る。

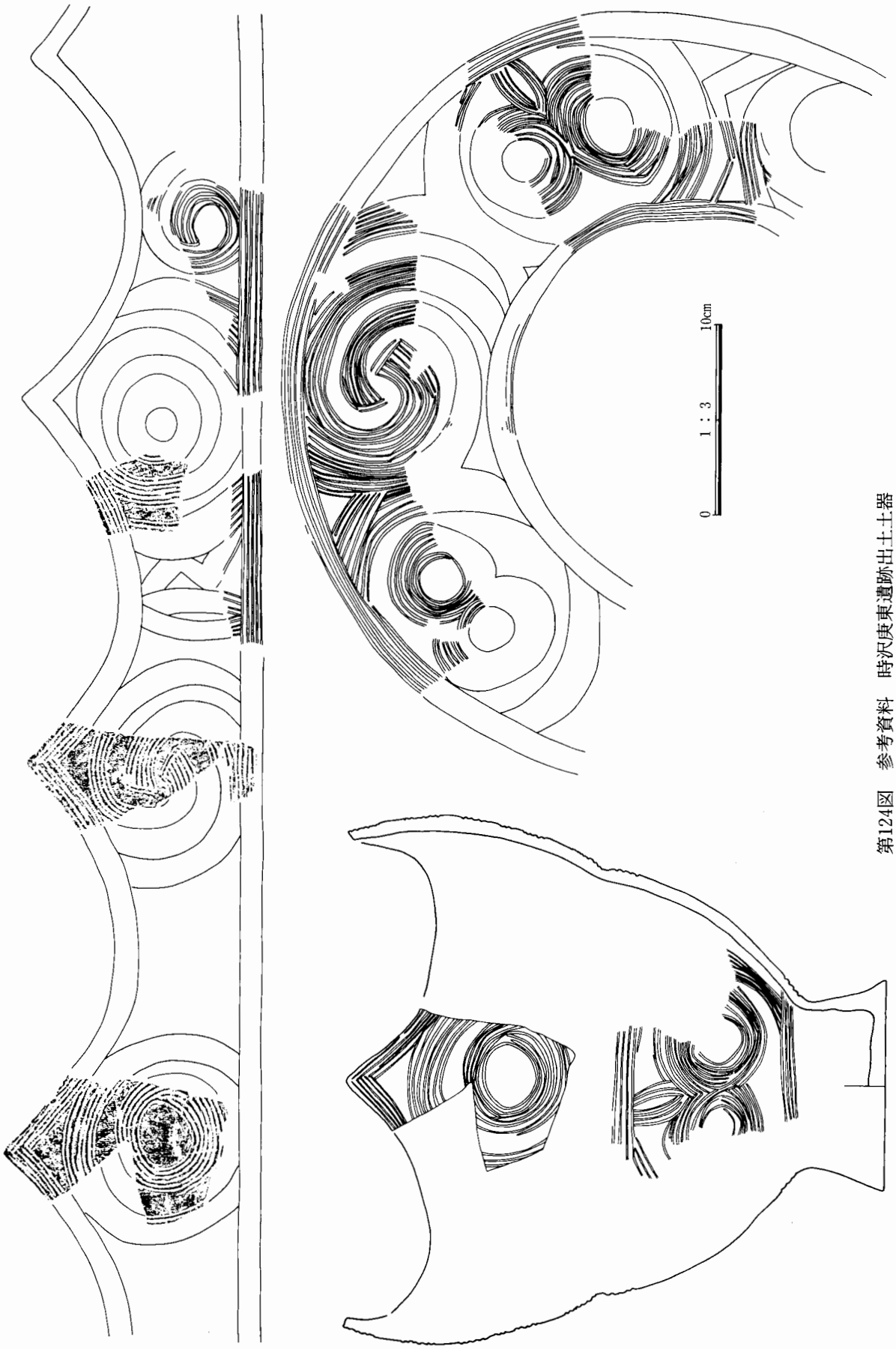
富士見村ではこれに類似した資料はほとんど出土しておらず、可能性のある破片資料もごく僅かである。

参考資料3．陣場遺跡・上庄司原東遺跡から出土した前期小型石棒（第125図）

1は前述した陣場遺跡Ｊ2号住居跡の中央部床面直上から出土した白色凝灰岩製の小型石棒である。本資料はすでに『群馬文化』第220号に藤巻幸男氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）とともに資料紹介したものであるが簡単に紹介したい。1の長さは11.2cm、最大径5.2cmを計る。頭部に2条の印刻溝を巡らし、周辺を研磨して突帯状に作り出す。側面には深浅の2孔が穿たれ、その下に縦位の刻線が付される。両性具有の石棒とされる。本資料は出土時には完形品であったが、極めて軟質な石材のため頭部の一部を欠失した。

2・3は上庄司原東遺跡から出土した。上庄司原東遺跡は陣場遺跡の北東約500mに位置する。複数の小支谷によってその間に微地形が形成されているが、陣場遺跡と一連の台地上に法華沢川に面して占地する。

2はＪ4Ｂ号住居跡から出土したものである。Ｊ4Ｂ号住居跡は諸磯式期のＪ4Ａ号住居跡によって大半が削平されており、西端のわずかな部分が遺存するだけである。本資料は西壁際の床面直上から出土しており帰属は明瞭であるものの、土器は前期中葉の小破片が数点出土しただけであり、住居跡の時期は明瞭ではない。2の長さは12cm、最大径約4cmを計る。頭部は刻線で位置決めし、上下を研磨して突帯状に作り出している。頭部から先端に向かって徐々に太くなり、先端は平坦に研磨している。横断面は正円というよりも



第124図　参考資料　時沢庚東遺跡出土土器

楕円形気味で、側面には部分的に平坦面も残り、やや多角形状を呈するケ所もある。実測図には表現していないが、長さ７cm程のごく細い刻線が縦位に認められるものの、製作時のキズであるか或いは意図的に刻んだものかの判別はできない。材質は火山礫凝灰岩？であり、１・３に比べると比較的堅く多孔質である。

３は諸磯ｂ式新段階のＪ２号住居跡の覆土中から出土したものである。Ｊ２号住居跡は楕円形を呈し、長径約9.5m、短径7.6m、深さ0.85mを測る。床面には６基の土坑が重複し、中央部には４基のウメガメが直線的に並んで付設されている。遺物の出土状況等からは覆土中にも土坑等の他の遺構が重複している状況が伺われ、本資料も土坑に伴う遺物の可能性は否定できない。ただし、遺物の整理作業はまだ行っていないものの、Ｊ２号住居跡出土土器の大半は覆土も含めて諸磯ｂ式新段階に収まるものであり、本資料も該期の可能性が高い。本資料は粉々になった状態で出土しており、材質の脆さもあって接合できない残片がかなりある。材質は１と同じ白色凝灰岩であるが多少緻密である。形状的にも類似するが、全体的には１よりも細身で若干長いようである。長さ11cm以上、最大径約4.6cmを計る。残存部には孔や縦の刻線は認められない。

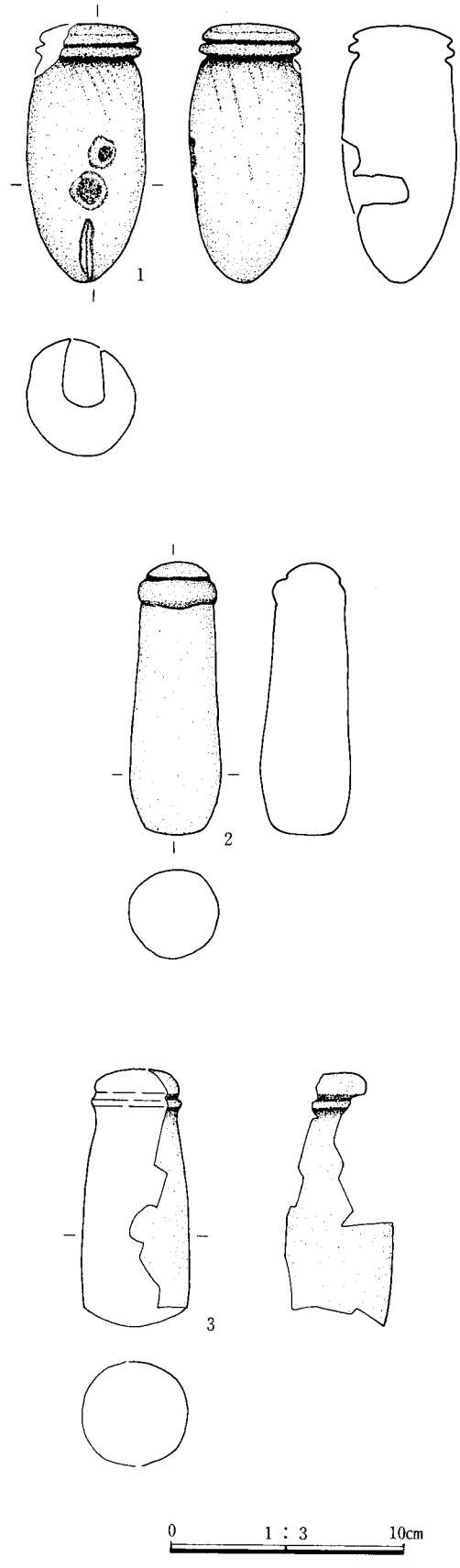
以上紹介した３点の前期石棒についてまとめてみたい。

①富士見村では前述のとおり多数の諸磯式期の遺跡を調査しているが、現時点ではこの３点以外に出土していない。近接した遺跡（陣場・庄司原遺跡群中）に集中している点は、石棒と出土遺跡の性格を考える上で重要と思われる。但し、大半の遺跡は部分的な調査であり、他の遺跡に無いと断定することはできない。

②上庄司原東遺跡Ｊ４Ｂ号住居跡の規模は不明瞭であるが、陣場遺跡Ｊ２号住居跡と上庄司原東遺跡Ｊ２号住居跡は大型の住居跡である。

③時期的には上庄司原東遺跡Ｊ４Ｂ号住居跡が不明瞭であるが、陣場遺跡Ｊ２号住居跡は諸磯ｃ式古段階末葉、上庄司原東遺跡Ｊ２号住居跡は諸磯ｂ式新段階である。

④２は材質と形状に多少の違いがあるものの、１・３は大半の要素が類似しており、少なくとも諸磯ｃ式の段階までにはかなり規格化され、普及したものと推測される。



第125図　参考資料
陣場・上庄司原東遺跡出土石棒

⑤石棒の材質はいずれも東北地方が原産地とされる凝灰岩系である。

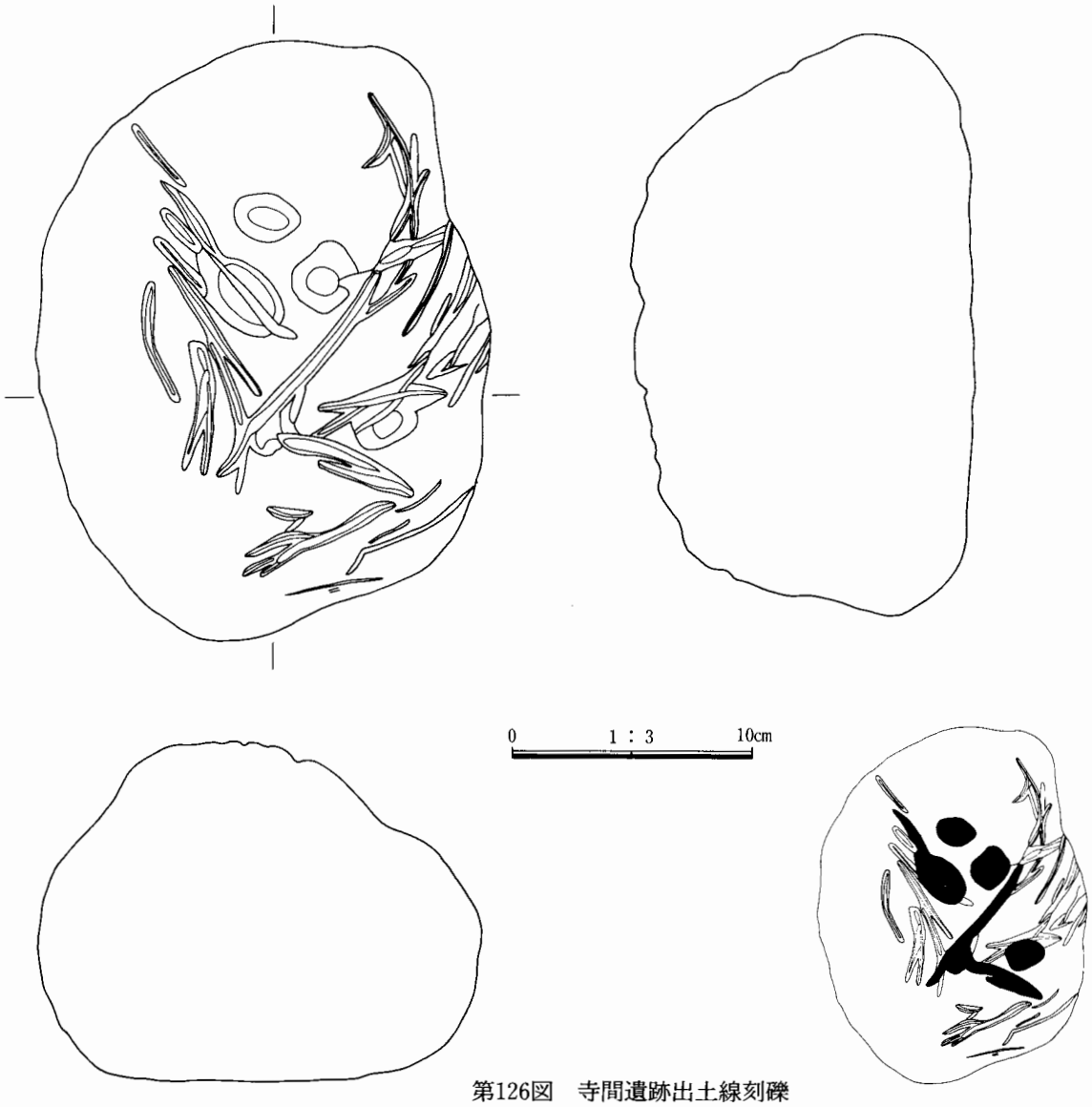
(4) 寺間遺跡出土線刻礫について（第126図）

本来ならば第Ⅳ章で報告するべきであるが都合により本章で報告する。

この線刻礫は3―7グリッドから出土したものである。調査当初は土坑として掘り下げを行ったものの、明確に壁の立ち上りを捉えられなかったため包含層出土としたが、実際にはやはり土坑等の遺構であった可能性が高い。長径で2m程度の楕円形の範囲である。伴出遺物としては遺構外1と数点の土器破片が出土しており、いずれも縄文時代前期中葉に属すため、本資料も該期の所産と思われる。

礫は赤城山の自然石で、周辺の地山中に含まれている。礫の表面には細かい凹凸がある。裏面は平坦であるが、他の面には丸みがある。但し、実測図の下面に小さな平坦面があり、右側面も比較的平坦である。大きさは長さ24cm、幅19cm、厚さ14.4cmを計る。

器面には多数の刻線と4（5）ケ所に円形の凹みが認められる。刻線は長さ・太さ・深さともに様々であ



第126図　寺間遺跡出土線刻礫

り、礫の表面にある小さな凹凸に紛れて範囲の不鮮明なものもある。円形の凹みは多孔石や凹石の窪みと比較すると形状が楕円形気味で、孔径は大きく、孔径のわりに浅めで、底は平坦である。

この礫の性格・用途については①多孔石や凹石に類似する用途、②砥石、③その他が考えられたが、①は上記のように円孔には叩打等の使用痕跡が認められない。②は基本的に自然礫であり、刻線が丸味のある部分にも認められ、方向も一定しないなど、①②のような実用器的な用途は考えにくい。

③その他の中には狩猟文、鮭石、ビーナスなど線刻画の施された呪術的な器物があるが、本資料の場合には、どの方向から観察してもその意味することを看取することができない。第126図右下は円形の凹みと特に太く深い刻線を塗りつぶしたものであるが同様である。

いずれにしても、堅い礫にわざわざ複数の円形の凹みと多数の刻線を刻むという行為には、この制作者の強い意志と何らかの意図が存在したことはいうまでもなく、ここでは、造形の対象は不明であるものの③の呪術的な性格を帯びた線刻礫の一種として報告したい。また、礫と土器の出土状態から遺構の性格として土坑墓の可能性を推定しておきたい。

2．平安時代の成果と課題

(1)　竪穴住居跡について

①　竪穴住居の建て替えについて

上百駄山遺跡の平安時代集落は9世紀後半代のごく短期間営まれた集落である。少なくとも、調査範囲内においては一般的な意味で重複する住居跡は検出されていない。すべて拡幅、若しくは建て替えである。

3Ａ・Ｂ号住居跡は縦長住居跡の東西方向を縮め、南北方向を拡大したものである。これに伴い床面を上げており、床面積自体はほとんど変わらない。3Ｂ号住居跡には居住痕跡がなく、中央部西寄りの底面から露出部分で径約60cmの礫が20cmほど突出していることから、この礫を避けるために主に南壁を崩して埋めて礫が隠れる程度に床面レベルを上げ、南北の拡幅により拡大した分東西を減らした可能性がある。但し、3Ｂ号住居跡覆土が人為的に埋められた痕跡は明瞭ではなく、時間的に隔たりがあるとも考えられることをどのように解釈すればいいのか疑問が残る。

6Ａ号住居跡は6Ｂ号住居を東方だけに約80cm拡幅したもので、これに伴い床面を10cmほど上げている。また、カマドも東方に移動したと考えられる。

7Ａ号住居跡は7Ｂ号住居を南方に移築したもので規模の異動は不明である。床面レベルは若干下がっている。カマドの位置はほとんど変わっていない。

13Ａ号住居跡は13Ｂ号住居を南方だけに約30cm拡幅している。床面は約10cm上げている。カマドの位置は変わっていない。

7Ａ・Ｂ号住居跡のように全体的に移動する形で建て替えた事例はこれまでにもあったが、6Ａ・Ｂ号住居跡と13Ａ・Ｂ号住居跡のように壁の一方向だけを広げ、床面を上げるという方法で拡幅した住居跡は、これまでの富士見村の調査では検出されていない。3Ａ・Ｂ号住居跡の場合には全体的に形状変更を行っており、まったく同じ手法ではないが、いずれにしても他に調査事例はない。これらの手法の系譜関係を究明することで竪穴住居跡の構築技術面から居住集団の動向が解明できる可能性があると思われるが、現時点では周辺地域や他地域の調査事例の収集が不十分で検討できておらず、今後の課題としたい。尚、次項の施設面の検討から緊密な関係が推測された芳賀東部団地遺跡では類例が検出されていない。

② 竪穴住居跡の施設について

富士見村ではこれまで古墳時代以降の竪穴住居跡を約450軒調査しているが、上百駄山遺跡の平安時代の竪穴住居跡にはこれまでの調査例には乏しい何点かの特徴ある施設・構造が認められた。

上百駄山遺跡の竪穴住居跡に全体的に認められた施設の特徴としては、小型住居の貯蔵穴が柱穴状の小規模なものであり、口径に比して掘り込みが深いことである。これまでの調査におけるこの時期の竪穴住居跡の貯蔵穴（実際の機能は不明である）の掘り込みはごく浅いものが多く、明瞭な差異が認められる。

これ以外の個別の施設・構造には棚状遺構や入口施設があるが、以下にまとめたい。

〈棚状遺構〉

4・6A・13B号住居跡の3軒から検出された。いずれも東壁の南端壁上―カマドの右側に付設されている。概ね半円形を呈しており、検出面からの掘り込みは浅い。掘り方の底面～壁面にローム粘土を張りつけている。この施設内からは遺物が出土していないが、6B号住居跡では平板な礫が置かれていた。13B号住居跡は検出面から床面までの深さが浅かったが、4・6A号住居跡は比較的深い住居跡である。棚状遺構の床面からの高さは一様ではないため、検出されなかった住居跡にも設けられていた可能性は否定できない。この施設の機能は施設の名称である棚の役割を考えるのが最も適当と思われるものの、カマドや入口部分を除く壁上の縁辺部すべてが多少の物を置くための棚としての機能を有することも考えられ、単純に物を置くだけとすればわざわざ特別な施設を設ける意味を見いだしがたい。

そこで、この施設の位置と構造に着目すれば、カマドに近接して設けられることから食に関係する物を置く場所の可能性が考えられ、さらにローム粘土を掘り込み全体に貼り付けていることから、土からの湿気を遮断する目的が考えられる。この場合、貯蔵穴でもこれだけの役割であれば粘土を張ることで同様な機能を果たすことも可能と思われるが、湿気の遮断の観点からは劣る。また、たとえ蓋のような被いを被せたとしても、活動面である床面から掘り込まれる貯蔵穴よりも壁の途中に設けられた棚状の遺構のほうがより衛生的に思われる。以上のことからすれば食物置場と考えておきたい。

〈壁面への粘土貼り付け〉

6A・7A号住居跡の2軒に検出されている。位置は棚状遺構と同様に東壁の南側―カマドの右側の壁面で、6A号住居跡の場合は南壁にもかかっている。6A号住居跡の場合は剝落している部分も多かったが、7A号住居跡の場合はしっかり残っていた。粘土の厚さはほぼ3cmほどである。この部分だけ壁面保護の木材を立て並べないで土面にしていたとも考えられるが、いずれにしてもその役割は不明である。

また、4・13B号住居跡には検出されていないが、6A号住居跡においてはカマドから壁面、さらに棚状遺構までローム粘土が連続的に検出されていることからすれば、棚状遺構と一連の構造とも思われ、7号住居跡にも棚状遺構が付設されていた可能性が高い。

〈入口施設〉

7A号住居跡の南壁際の中央部床面に2基の柱穴が検出された。12号住居跡では南壁の中央に接してローム粘土を台状に盛った施設が設けられており、いずれも入口施設と思われる。

12号住居跡の盛土状の遺構は富士見村で初めて検出された。南壁の中央部際に柱穴が検出された例は1本だけのものは数例あるが、2本が並ぶものは由森遺跡8号住居跡に可能性があるだけで、明確には本跡の7A号住居跡と寺間遺跡1号住居跡の2例だけである。

〈貯蔵穴を巡る小ピット〉

7A号住居跡の貯蔵穴の縁辺に4本の小ピットが検出された。富士見村のこれまでの調査例には無い施設

である。機能としては貯蔵穴の覆い、或いは棚状の施設が考えられるが、壁面レベルと同じかそれ以上の場合には4本の支えを必要としないため、壁面以下の高さに設けたと考えられる。

〈張り出し〉

4号住居跡の北壁と南壁の東半部に設けられている。富士見村では初めての調査例である。

③　若干の考察

上百駄山遺跡集落とほぼ同時期の住居跡も多数調査しているにもかかわらず、本遺跡の竪穴住居跡において特異な施設が検出された理由は、これまでの調査が主に本村の西半部において行われてきたことと無縁ではない。第Ⅰ章の周辺の遺跡の項で説明したとおり、本跡周辺ではこの時期の遺跡の調査をごくわずかしか行っておらず、上百駄山遺跡と同年度に調査を行った寺間遺跡からわずか1軒検出されたに過ぎないこの時期の住居跡からも入口施設と思われる柱穴が検出されていることは、これまでの調査例から見れば特異に見えたこれらの施設が決して特異な施設ではない可能性を示唆している。そこで前橋市域の遺跡を見ると、本跡から約1.5km南東に位置する芳賀東部団地遺跡では、奈良～平安時代の竪穴住居跡420軒以上の内で、棚状遺構を付設するものが10軒以上、入口施設と思われるピットを有するものが20軒以上、張り出しを付設するものが20軒以上検出されており、住居跡の構造上の観点からみれば上百駄山遺跡や寺間遺跡、さらにこの周辺の富士見村内の遺跡も含めて芳賀東部団地遺跡、或いは芳賀東部団地遺跡の北（本跡の東南東約1km）に位置する芳賀北部団地遺跡との関係が本村西半部の該期の遺跡よりも緊密なことは明白である。

前橋市の芳賀の地域は「和名類聚抄」の芳賀郷、藤沢郷の所在地と推定されている。それぞれの範囲は明瞭ではないが、芳賀北部団地遺跡の一部が所在する勝沢町周辺が藤沢郷の中心、芳賀東部団地遺跡の一部が所在する鳥取町から端気町にかけての地域が芳賀郷の中心との推測も成されている。

地理的にみればより芳賀北部団地遺跡との関係が深いと思われ、芳賀北部団地遺跡が藤沢郷の一部とすれば、上百駄山遺跡や寺間遺跡も藤沢郷に含まれる可能性があるが、上百駄山遺跡の属する現在の大字時沢の地名が由来する「和名類聚抄」の時沢郷の所在地がまったく不明な現状においては、帰属を確定することはできない。しかし、平安時代前半（9世紀後半）の段階における上百駄山遺跡や寺間遺跡が現在の富士見村西半部の地域とは別の行政区域に属していたことは確実である。

3．中近世の成果と課題

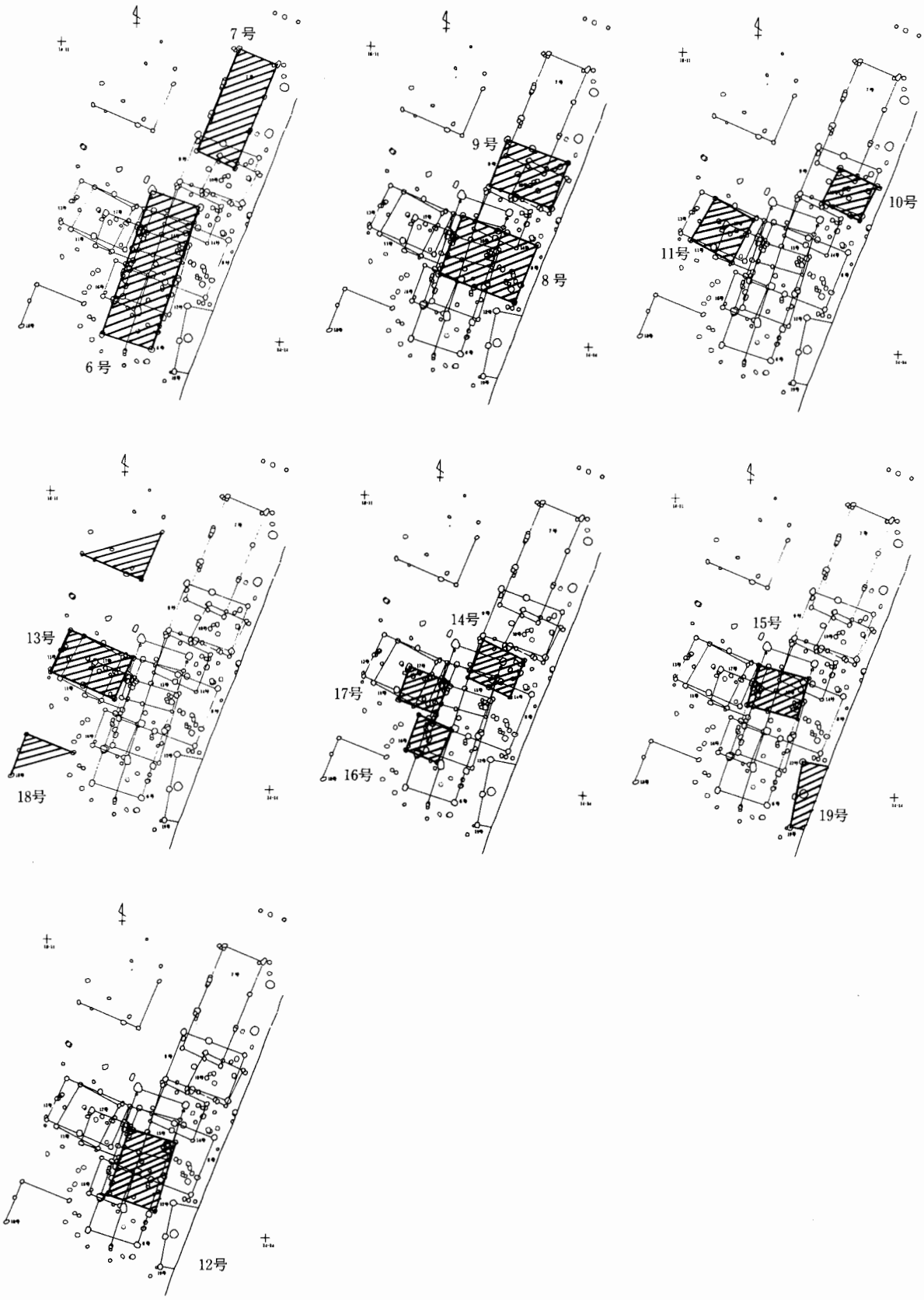
(1)　上百駄山遺跡の中世城館跡について

上百駄山遺跡から検出された遺構は掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・井戸・溝跡である。

5号溝跡は台地の中央部に南北に検出されており、城館跡の東限を区画すると思われる。位置は不明であるが、この溝は調査地の南でL字状に西方に折れ、南限も区画すると推測される。調査区内では溝の中途に巨大な井戸状の施設が検出されているが、富士見村では初出であり、性格・機能等は不明である。

小溝は調査範囲内に広く複数が検出されており小区画を形成しているが、2号溝と3号溝の重複や4号溝に作り替えが認められるように1時期に形成されたものではない。

掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・井戸は城館跡内の北寄りに集中して検出されている。各遺構、特に掘立柱建物跡や土坑には重複が認められており、比較的長期にわたって城館跡が維持されたものと思われるも



第127図　上百駄山遺跡掘立柱建物跡群別図

のの、遺物がまったく出土していないこともあり、その時期的な変遷は明瞭ではない。

ここでは、掘立柱建物跡の位置的な関係と建物の方位を基に、変遷の順序は不明であるが、同一時期の建物の組み合わせを推定してみたい。

①６号掘立柱建物跡と７号掘立柱建物跡―建物方位は若干異なるが、南北棟の組み合わせである。６号建物は１間×４間で独立棟持ち柱を有する。７号建物は１間×３間である。

②８号掘立柱建物跡と９号掘立柱建物跡―東西棟の組み合わせである。建物の東辺がほぼ揃っている。両者とも２間×１間の構造で、間柱が西側に偏している点も共通する。

③10号掘立柱建物跡と11号掘立柱建物跡―ほぼ正方形の建物の組み合わせである。構造的には10号建物が南側に入口柱が配置された２間×１間の建物で、11号掘立柱建物跡は１間×１間である。付言すれば、柱穴配置の対角線上にそれぞれの建物が位置する。

④13号掘立柱建物跡と18号掘立柱建物跡―これに13号建物の北方の柱穴群もその配列から同時期と考えられるが、建物であるか塀のような構造物であるかは不明である。18号建物も建物であるか明瞭ではないが、４号竪穴状遺構が同時期とすればその上屋の柱穴の可能性が強い。13号建物は東西棟で２間×２間で総柱の可能性がある。

⑤14号掘立柱建物跡と16号掘立柱建物跡若しくは17号掘立柱建物跡―14号建物は２間×１間の東西棟建物で歪みが大きい。16号建物は１間×１間で、程度はわずかであるが14号建物に類似した歪みがある。また、14号建物の西辺の柱筋上に16号建物の東辺が位置する。17号建物は１間×１間の東西棟である。14号建物と17号建物はそれぞれの柱配置の対角線上に位置する。距離的に16号建物と17号建物の同時存在は考えられず、当初は14号建物と16号建物を構築し、後に16号建物を17号建物に建て替えたものと推察する。

⑥15号掘立柱建物跡と19号掘立柱建物跡―15号建物は２間×１間の東西棟で、間柱は西方に偏している。19号建物は西辺だけの検出で詳細は不明である。

⑦12号掘立柱建物跡―南北棟で１間×２間である。調査区内に同時期の建物を検出できない。

補察１：方位や柱穴の配置状況からは６号建物と９号建物の組み合わせ、７号建物と８号建物の組み合わせも考えられた。６号建物と９号建物では９号建物の間柱の並びが６号建物東辺の柱筋上に位置しており、７号建物と８号建物は南北軸が完全に一致している。しかし、６号建物と９号建物が近接し過ぎている（６号建物の棟持柱は９号建物と重複する）点と、柱穴掘り方の形状が６・７号建物は方形、８・９号建物が円形を呈するという点に明瞭な時期差を認め、①②の組み合わせがより適当であると判断した。

補察２：④の組み合わせに加えた13号建物の北方の柱穴群の南辺は７号建物の南辺の柱筋上に位置することから①の組み合わせに伴うことも考えられる。

以上のように調査区内に検出された建物群には７つの組み合わせが考えられ、それぞれが建物群（城館）の変遷の段階を示すと思われるが、前述したようにその変遷順序や具体的な年代は不明である。

建物の構造や規模は段階により様々であり、その性格も不明である。しかし、調査範囲内では大半の段階において大小の建物が一組となって変遷していることから、城館の存続期間を通して同じ性格・機能の建物が建て替え続けられたものと思われるが、これだけ規模に差があって同様の性格・機能を果たし得るのかという疑問もないわけではない。また、これらの建物群は構造的に主屋とは考えられず、この東方に主屋が存在するものと思われるが、５号溝が南北に直線的に掘削されているとすると、城館の外部から主屋を含めた未調査区の建物群までの距離が近すぎるため、５号溝はこの建物群の東方で城館跡の外方にコ字状等に迂回

している可能性が考えられる。

(2) 富士見村の既調査中世城館跡集成

富士見村ではこれまで約10遺跡で中（近）世の城館跡を調査している。しかし、その大半がほ場整備事業の道路予定地であり、調査範囲が狭いこともあり、溝跡以外の遺構に乏しく、遺物がほとんど出土していないため、構造の詳細や時期の判明している遺跡はないと言ってもよい。

このような状況の中で、上百駄山遺跡において面的な調査ができ、城館跡の構造や内部の施設がある程度判明した意義は大きいが、上記のような理由により富士見村内の遺跡だけで比較検討できる事項は余りなく、他地域を含めた調査事例による検討が必要であるが、時間的な余裕がないため、今回はとりあえず富士見村の既調査遺跡の集成と周辺地域も含めた中世城館跡の分布図を作成することで今後の基礎作業としたい。

Aの上百駄山遺跡は伝承はあったものの、公的には未周知の遺跡である。内容は前項迄のとおりである。

Bの東紺屋谷戸遺跡では掘立柱建物跡が検出され、現段階では平安時代末～中世の神社跡と推定しているが、調査範囲がごく狭いため、館跡等の可能性が完全に否定できるわけではない。

Cの寄居遺跡は周知の遺跡であった。東方の細ケ沢川に面し「コ」字状或いは複数の郭に溝が巡るものと思われ、推定されていた南端の溝跡を調査したものと思われるが、さらに、この南側に近接して石組の小溝と素掘りの小溝が平行しており、寄居の範囲がさらに南方に伸びるのか、外部の施設なのか問題が残る。溝跡は北から南側へ堀り替えを行っており、上幅３m、深さ1.4mを測り、箱堀状を呈する。

Dの久保田遺跡は、北東から南西へと続く台地の旧河川に面した南東半部に「コ」字状に溝を配した館跡と思われ、その北西辺を調査した。上幅約３m、深さ0.8mほどの小規模な溝で箱堀状を呈する。浅く南辺が明確ではないが、ほぼ南西隅と思われる位置を通って台地の西崖端まで小溝がほぼ東西方向伸びている。位置的には北西に近接する田島城との関連が伺われる。

Eの日向遺跡自体は未周知であったが、この東方に近接してさらに東方に所在する森山（引田）城に関連するといわれる方形館跡が周知されていた。十二山の東斜面の山側を「コ」字状に区画すると思われ、この南西隅から南辺の一部を調査した。上幅４m前後、深さ２mほどの溝跡で、薬研堀状から箱堀状に掘り替えが行われている。溝の壁面や周辺に柱穴が認められ、柵列の可能性がある。

Fの新井遺跡（屋敷）は周知の遺跡で、台地の中央部に位置する方形館跡である。発掘調査は民間開発に

第36表　富士見村の既調査中世城館跡一覧表

番号	遺跡名	検出遺構	出土遺物	調査年	報告書	備考
A	上百駄山遺跡	掘立柱建物跡、竪穴状遺構、土坑、井戸	なし	H５	本報告書	
B	東紺屋谷戸遺跡	（掘立柱建物跡）	なし	H３	1992	神社跡と推定
C	寄居遺跡	溝跡	陶磁器・石臼・砥石	S61	1987	
D	久保田遺跡	溝跡	陶磁器・五輪塔	S62	1989	
E	日向遺跡	溝跡、柱穴	なし	H２	1994	
F	新井遺跡	溝跡、竪穴状遺構、土坑、柱穴	不明	H２・３	未整理	
G	上漆窪遺跡	溝跡、柵列	馬歯	H６	未整理	
H	米野田遺跡	溝跡、道路跡、柵列、土坑、土坑墓	陶磁器	S63	1990	概要報告
I	窪谷戸遺跡	溝跡、道路跡、竪穴状連携、土坑、柱穴	なし	S59	1986	
J	向吹張遺跡	溝跡	陶磁器・石臼	S61	1987	
K	見眼遺跡	溝跡、掘立柱建物跡	なし	S59	1986	
L	西上原遺跡	溝跡、柱穴	なし	S63	1990	概要報告

第128図　中世城館跡調査資料集成図(1)

H
K
I
J
丸山城

伴い３次にわたって小規模な範囲を行ったものであるが、第１次（Ａ区）は館の東側に巡る溝の一部とここから台地の東崖端までの区域、第２次（Ｂ区）は館内部の北端部、第３次は館外北側隣接地であり、ここからは館跡に関連する遺構・遺物は検出されていない。

館を巡る溝の規模は上幅８ｍ、深さ約３ｍで薬研堀状を呈し、想定されていた位置よりも内側に検出されている。館跡から台地東崖端まで小溝とほぼこれに重複する柵列が伸びている。台地の端部には東崖に平行する小溝も検出されている。館内部は溝からある程度の距離を置いた内側が造成（削平）されており、土塁が存在していたものと思われた。内部に検出された遺構は竪穴状遺構と土坑・柱穴で、主屋は南側未調査区域に存在すると思われる。

Ｇの上漆窪遺跡は未周知の遺跡であった。漆窪城の北西に近接しており、関連する館跡と思われる。谷頭の西側に「コ」字状に溝が巡ると思われ、その北西部を調査した。溝の上幅は約３ｍ、深さ約１ｍで、薬研堀状を呈する。館の内部には西溝に平行して柵列が検出された。溝跡の北西隅から小溝と柵列が西方に伸びており、台地の西崖端までを区画するものと思われる。尚、柵列の柱穴中から馬歯が出土している。

Ｈの米野田遺跡は調査地の西側が米野屋敷として『群馬県の中世城館跡』に記載されるものの未周知の遺跡であった。幅の広い台地から南方に枝尾根状に伸びる台地の付け根部分に位置する。米野屋敷とされる部分は溝で囲僥された２郭が東西に並ぶ。この東方に接して盛土による一郭があり、さらにこの東端から台地の東崖端までＬ字状の溝を配して郭とし、完全に台地を断ち切っている。東端の郭は腰郭状に北方に伸び、その先の地形の変換点は竪堀状に台地に切れ込んでいる。米野屋敷の北西方はＩの窪谷戸遺跡に続く枝尾根状台地の付け根部分を削りこんで崖面とし、斜面を断ち切っている。郭の東～南方には台地の縁辺に沿って道路が巡る。盛土による郭に接して南北方向に直線的に土塁様の高まりが残存し、郭の南方もさらに分画されていたものと思われる。城館跡内部の施設としては調査範囲の関係もあり、柵列・土坑墓・土坑・柱穴群だけで明瞭には建物跡は検出されていない。構造的には城跡というほうが適当と思われる。

Ｉの窪谷戸遺跡は該期としては未周知の遺跡であった。谷地に面した低台地に歪んだ「コ」字状或いは「Ｕ」字状に溝を配し、浅い谷側にも溝を掘削して基本的には方形館跡に類する館跡と思われる。溝跡は上幅４～５ｍ、深さ1.4ｍを測り、位置により箱堀状→箱堀状或は箱堀状→薬研堀状の掘り替えが認められる。溝跡の壁面には直線的に柱穴が穿たれ、溝跡との先後関係は不明瞭であるが、柵列が付設されていたものと思われる。南西部の溝の内側には道路が配置されている。また、館跡中央部は急斜面を造成した平坦面に竪穴状遺構や土坑、崖面には柱穴を施設しており、主屋は未調査区域に存在するものと思われる。館跡の東端から東西方向に浅い谷地を横断する溝も掘削している。

Ｊの向吹張遺跡は該期としては未周知であった。南北に伸びる舌状台地の中程の東半部に東側の谷地に面して「コ」字状に区画すると思われ、その西溝部分だけを調査した。溝は上幅約5.5ｍ、深さ約2.5ｍを測り、薬研堀状を呈する。館跡北側に接して近世の環濠屋敷の濠も検出されている。調査範囲が狭く不明瞭ではあったが、西溝の中央部から西方に伸びる小溝と館跡の南西外には造成（削平）されたような痕跡が認められており、台地の西半部にも何らかの施設が存在する可能性があるものの、詳細は不明である。

Ｋの見眼遺跡（Ｂ地区）では掘立柱建物跡と溝跡が検出された。掘立柱建物跡と溝跡は重複関係にあり同時期のものではないが、掘立柱建物跡の構造や柱穴の掘り方形状から該期の可能性は高い。掘立柱建物跡の内部は竪穴状に掘り込まれており、明瞭に土間床が残存する富士見村で唯一の事例である。溝跡は上幅２ｍ弱と小規模であり、建物跡と重複関係にもあることから館跡を巡る溝とは考えられず、また、調査区域外に建物を囲僥する溝が存在する保証はなく、現時点では城館跡外の関連施設と考えておきたい。

Ｌの西上原遺跡では直線的な溝跡と柱穴群が検出されただけであり、時期も不明瞭であるが、溝跡の形状や覆土の状況から該期の可能性は高い。溝跡は上幅３ｍ弱で薬研堀状を呈する。館跡を構成する溝であるかどうかは、調査範囲が狭いため判然としないが、現時点では見眼遺跡と同様に城館外の関連施設と考えておきたい。

若干の考察

富士見村でこれまで行った発掘調査の大半は県営ほ場整備事業に伴うものであり、道水路予定地などのごく狭い範囲を対象に行ったものである。上記したとおり検出された遺構は城館跡を囲繞する溝跡のごく一部分が大半であり、全体形状が判明した事例は一例もない。また、城館内部を調査できた事例は少なく、内部施設による検討も行えるような状況ではない。さらに、ほとんど遺物が出土していないため、時期的な比較検討も行えない。このような状況の中で多くの館跡に共通して認められた事項が一点ある。それは、館跡から台地の崖端に伸びる小溝或いは柵列の存在である。台地の東半部に位置する久保田遺跡・上漆窪遺跡・向吹張遺跡では西側に認められ、台地中央部に位置する新井遺跡の西側は不明であるが、東側に同様に認められた。窪谷戸遺跡の台地側は未調査で不明であるが、浅いとはいえ東側の谷までも溝で断ち切っていることから考えれば、防御的な意味での実効は不明であるが、これらの小溝や柵列が館跡と合わせて台地を断ち切る目的をもって配されたことは明らかであり、窪谷戸遺跡の館跡北西や上百駄山遺跡の東側、或いは寄居遺跡の西側にも同様に配されている可能性が高い。またこのような施設の存在からは、有事・平時を問わず館内外が有機的な関連をもって機能していたことが推察される。

(3)　富士見村と周辺の中世城館跡の分布（第130図）

中世城館跡の分布図を見る上でまず前提としなければいけないのは、これまでの発掘調査で明らかなように、未周知の（城）館跡が多数存在することである。大規模な城跡が現段階で周知されていない可能性はほとんどないと思われるが、少なくとも城跡の周辺にはある程度の数の館・寄居が配されていると考えなければばならない。分布図上で富士見村米野付近が密なのは調査によって新たな城館跡が加わったためであり、これを除けばそれ程密な分布状態であるとは言えない。しかし、それでも全体的に分布図を見た場合には何点かの大まかな分布の傾向を看取することができる。

①455―457―480―483を結んだほぼ東西ラインより北側にはまったく認められていない。

②北橋村下箱田―富士見村米野―富士見村石井のほぼ東西に帯状に分布する。

③②から空白地（帯）を挟み富士見村の原之郷―横室―田島に分布する。

④現在の赤城白川流域にはほとんど認められない。

⑤前橋市の芳賀の地域（分布図の南東部）に比較的密に分布する。

城館を構える場所の選定はいくつかの要件を加味してなされると思われるが、赤城白川の西側の城館跡については、当地が厩橋から沼田へ（さらには越後へ）と至る交通の要地であることが第一の要件であることは明らかである。

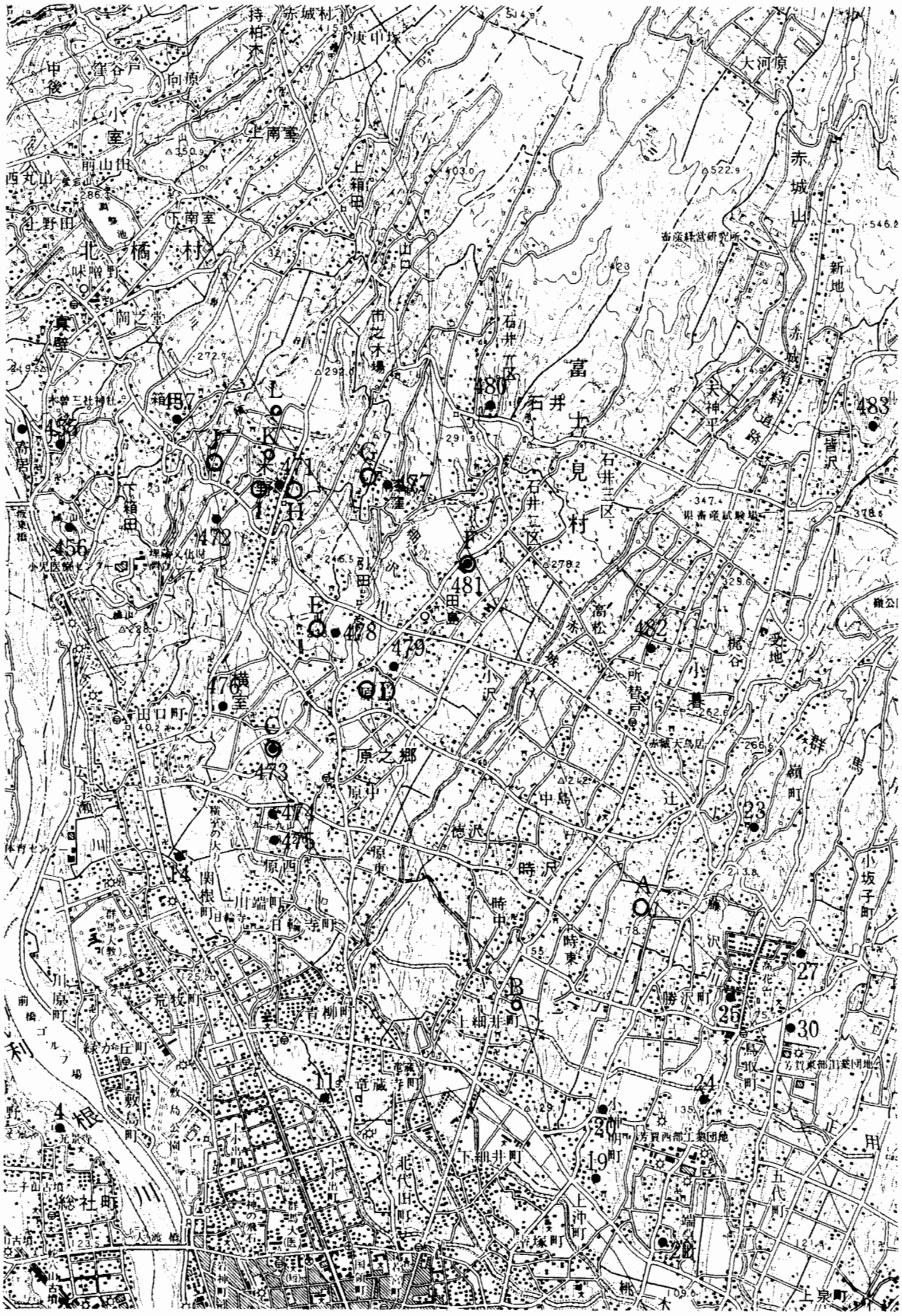
471は近世には沼田街道の米野宿の本陣・脇本陣となった所である。沼田街道は現在の前橋市関根町から前橋市田口町と富士見村横室の境を北上し、富士見村米野を経て、富士見村山口に至りここで橘川を渡り、北

橘村から赤城村、昭和村を経て沼田へと至るルートである。これを地形的にみれば、前橋市関根町・田口町から富士見村山口までは上り傾斜ではあるものの、起伏の少ない一連の台地が直線的に続く。台地斜面を登り上げた富士見村山口の渡河地点では橘川の川幅も比較的狭くなっているが、これより下流では幅広く、深くなっている。北橘村上箱田からは赤城山西麓のほぼ標高400m付近を北上することになるが、多少の起伏はあるもののこの付近が最も開折が進んでおらず、容易な行程をとれる。これ以下では開折谷が連続し、またこれ以上では山が深くなる。近世に限らず関東から越後方面へのルートとして重用されたであろうことは容易に想像が付く。赤城白川扇状地の南端は旧利根川によってえぐり取られ、比高差のある急崖となっており、これを越えることは容易ではなく、まずは、前橋市の田口町付近から丘陵部を目指すことになる。丘陵部は

第37表　周辺地域を含めた中世城館跡一覧表

県番号	名称	所在地	立地	存続期間	築・在城者	関連地名	遺構・遺物等
471	米野屋敷	勢多郡富士見村米野	平地	天正末期	栗原氏	字米野田	堀、土居、戸口
472	丸山城	米野	平地		蛭川新左衛門らか	字丸山	堀
473	横室寄居	横室	崖瑞			字寄居	土居
474	金山城	原之郷	平地	16世紀	高山山城守	字岡、金山、東城、中城、西城	堀、土居、戸口、櫓台、のろし台
475	九十九山の砦	原之郷	山	16世紀	九十九山	のろし台	
476	陣場	横室	平地	文明9年	太田道灌	字陣場	
477	漆窪城	漆窪	台地	16世紀	長尾大膳	字上城	堀、土居、戸口
478	森山城(引田城)	引田	丘、平地	16世紀	引田伊勢守	字日向、森山	堀、土居、戸口、腰郭、館
479	田島城	田島	台地	16世紀		字森山	堀、土居、戸口
480	岡城	石井	丘	16世紀		字城楽、岡	堀、戸口
481	新井館	田島	平地		新井氏	字新井	堀
482	茶釜屋敷	小暮	平地	14世紀	斎寺為時		堀
483	皆沢城	皆沢	丘	16世紀		城ノ堀、屋敷跡	堀、腰郭
455	真壁城	勢多郡北橘村真壁				字城	堀、土居、戸口
	同寄居					字寄居	堀、土居
456	箱田城	下箱田	丘		箱田地衆	字城山、下曲輪	堀、土居、戸口、櫓台
457	箱田屋敷	箱田	傾斜地			字西輪林	堀、土居
4	勝山城	前橋市総社町植野	崖瑞	16世紀	関口能亮	字勝山、堀の内、岡屋敷	堀
11	青柳の寄居	青柳町	平地	16世紀	荒蒔和泉入道 鈴木氏、長沼氏	字寄居、鋳物師	堀、土居、戸口
14	関根の寄居	関根町	平地	16世紀	河田重親	字寄居、寄赤城	堀、土居、戸口、井戸、五輪塔
19	小神明の寄居	小神明町	丘			字つつみ、寄居	
20	小神明の砦	小神明町	平地	16世紀	関口政次	字中、湯の気曲輪	堀、土居、井戸
22	滋野屋敷	端気町	平地	16世紀	滋野氏	字下曲輪、中曲輪	堀、土居
23	嶺城	嶺町	丘	16世紀	北条高広	字城岸(峯か)、東公田、西公田、前屋敷、止矢場	堀切、土居、堀、戸口、井戸、腰郭、帯郭
24	鳥取城	鳥取町	平地	15～16世紀	発智六郎右衛門ら越後勢	字内出、北口、東くるわ、荒川、鉄砲隊	堀
25	勝沢城	勝沢町	平地	16世紀		字番城	堀、帯郭
27	小坂子城	小坂子町	丘	16世紀		西新井、鍛冶谷戸(下中沢別郭)	堀切、土居、戸口、腰郭
30	鬼貝戸の砦	小坂子町	平地	16世紀		兎替戸、鍛冶谷戸	堀

注：『群馬県の中世城館跡』より抜粋。存続期間、築・在城者は推定・伝承である。



第130図　富士見村と周辺の中世城館跡分布図

主に北東から南西に向かう広狭の台地が連続するが、この台地にいったん取り付けば標高400m付近に至ることはさほど困難ではない。逆に、この台地の要所を押さえれば通行は不可能となる。城館跡個々の占地状況等の検討はここでは行わないが、②はまさしくこの目的をもって赤城山山岳部から利根川にまで配されたものと思われる。また、③は上記を迂回するものを阻止するためと思われる。この観点に立脚して改めて分布図を見ると城跡の周囲にある程度未周知の館跡や寄居が存在するとしても、備えの薄い場所が存在する。②では455―456と457―472の間で、さらに地形的な要件を検討しなければならないが、存在する可能性が高いと思われる。また、478―Eで充足しているのかもしれないが、471とGの間の狭長な台地にも存在するかもしれない。③では原之郷の原東と原中、石井の現在の集落中と、或いはその細ケ沢川対岸にも存在する可能性がある。480の東方にも城館地名が残っており、存在の可能性は高い。①の部分では富士見村山口或いは北橘村の上箱田の渡河地点付近にも欲しいところである。尚、①の東半部は山が深く存在する可能性は少ないが、西半部の北橘村には散在して多少は存在するものと思われる。

⑤は地理的な位置から考えて領地守護的な要件を主体に配されているものと思われる。当然未周知の城館跡の存在は想像されるものの、この場合は発掘調査による発見を待つしかない。

④はこの時代の遺跡に限ったことではなく、暴れ川である赤城白川により人々の活動が制約を受けていることは理解できる。しかし、現在の赤城白川の直近の両岸にも古墳が多数残存しており、また別の時代の包蔵地の存在も認められていることから、小規模な館跡が散在的に構築されている可能性は否定できない。

主要参考文献

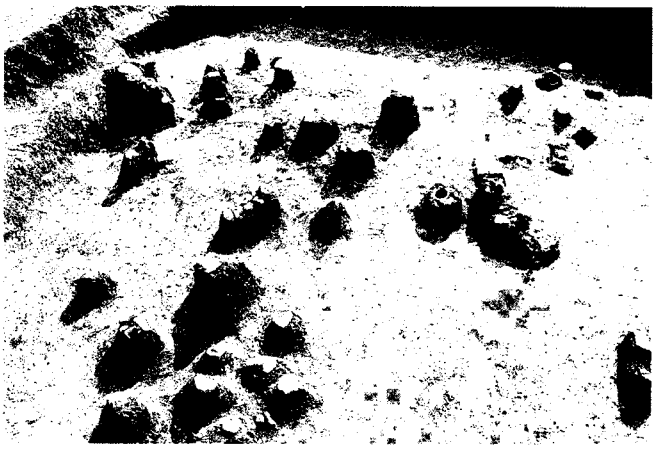
『群馬県の中世城館跡』　群馬県教育委員会　1988
『群馬県史』　通史編１　原始古代１　1990
『群馬県史』　通史編２　原始古代２　1991
『群馬県史』　通史編３　中世　1989
『富士見村誌』　富士見村役場　1954
『田中田・窪谷戸・見眼遺跡』　富士見村教育委員会　1986
『向吹張・岩之下・田中・寄居遺跡』　富士見村教育委員会　1987
『白川・由森・久保田遺跡』　富士見村教育委員会　1989
『西上原・東上原・米野田遺跡』　富士見村教育委員会　1990
『陣場・庄司原古墳群』　富士見村教育委員会　1991
『赤城・長泉寺遺跡』　富士見村教育委員会　1993
『東紺屋谷戸遺跡』　富士見村教育委員会　1993
『愛宕山遺跡・初室古墳・愛宕遺跡・日向遺跡』　富士見村教育委員会　1994
『広面遺跡』　富士見村教育委員会　1994
『坂上遺跡』　富士見村教育委員会　1994

写 真 図 版

１．上百駄山遺跡全景（北上空から）

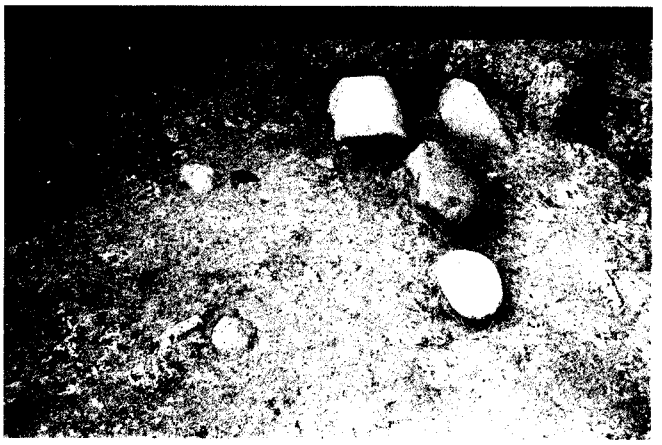
１．Ｊ１号住居跡全景（東から）

２．Ｊ１号住居跡遺物出土状態全景（西から）



３．Ｊ１号住居跡遺物出土状態（北から）

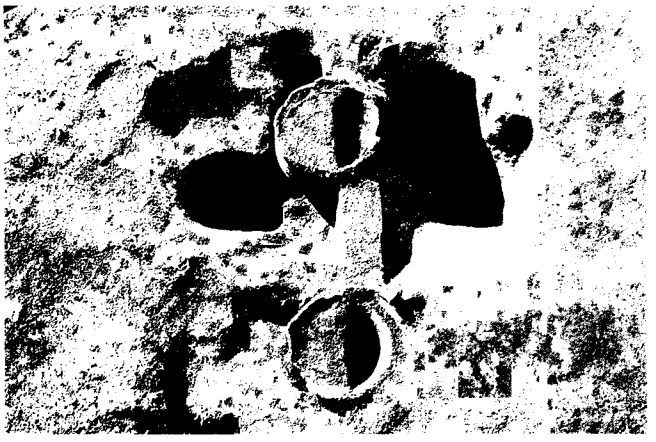
４．Ｊ２号住居跡全景（北から）



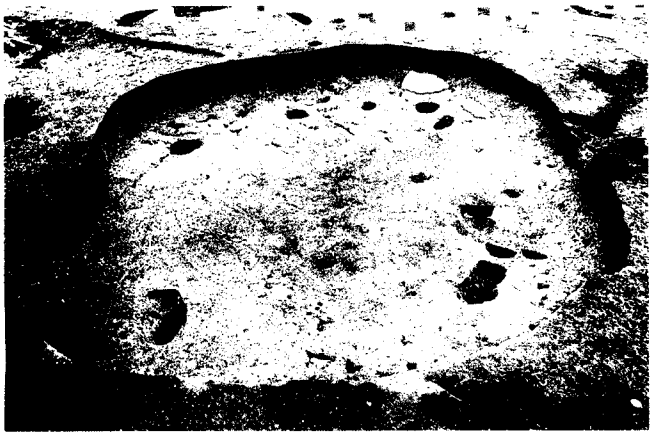
５．Ｊ２号住居跡遺物出土状態（東から）

１．Ｊ３号住居跡全景（北から）

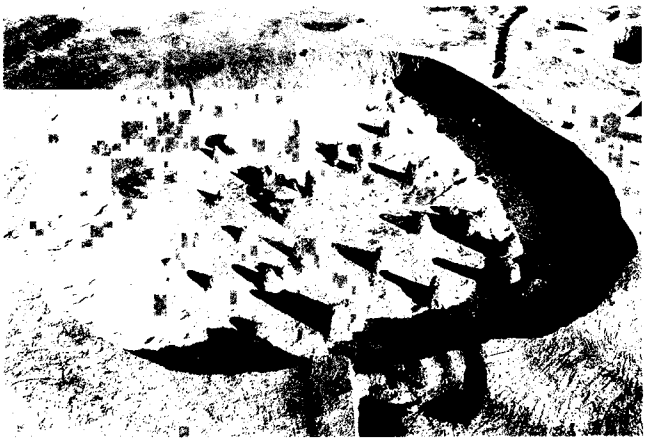
２．Ｊ３号住居跡埋甕（東から）



３．Ｊ３号住居跡埋甕（北から）

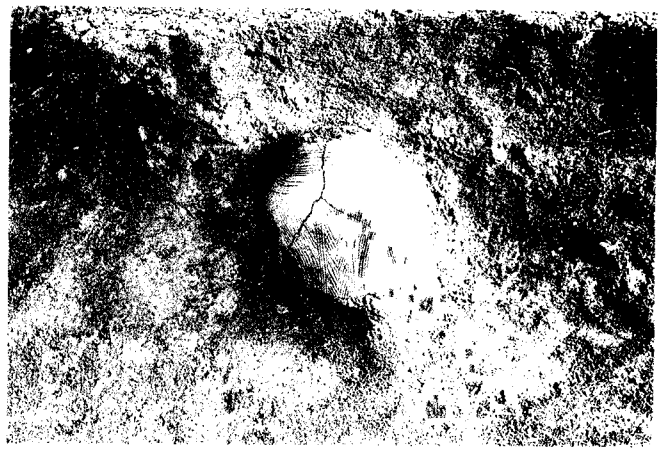


４．Ｊ４号住居跡全景（北から）



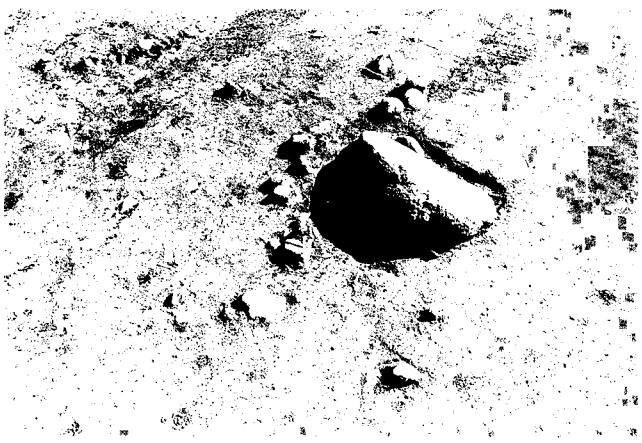
５．Ｊ４号住居跡遺物出土状態全景（西から）

１．Ｊ５号住居跡全景（東から）



２．Ｊ５号住居跡遺物出土状態近接（西から）

３．Ｊ６Ａ・Ｂ号住居跡全景（北から）



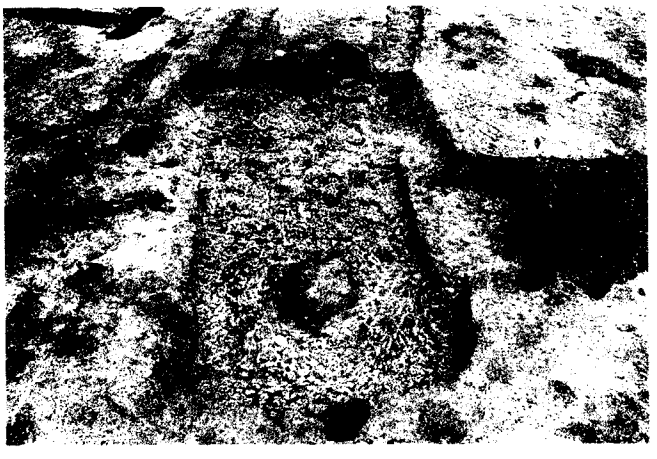
４．Ｊ６Ｂ号住居跡上層遺物出土状態（西から）

５．Ｊ６Ｂ号住居跡遺物出土状態近接（東から）

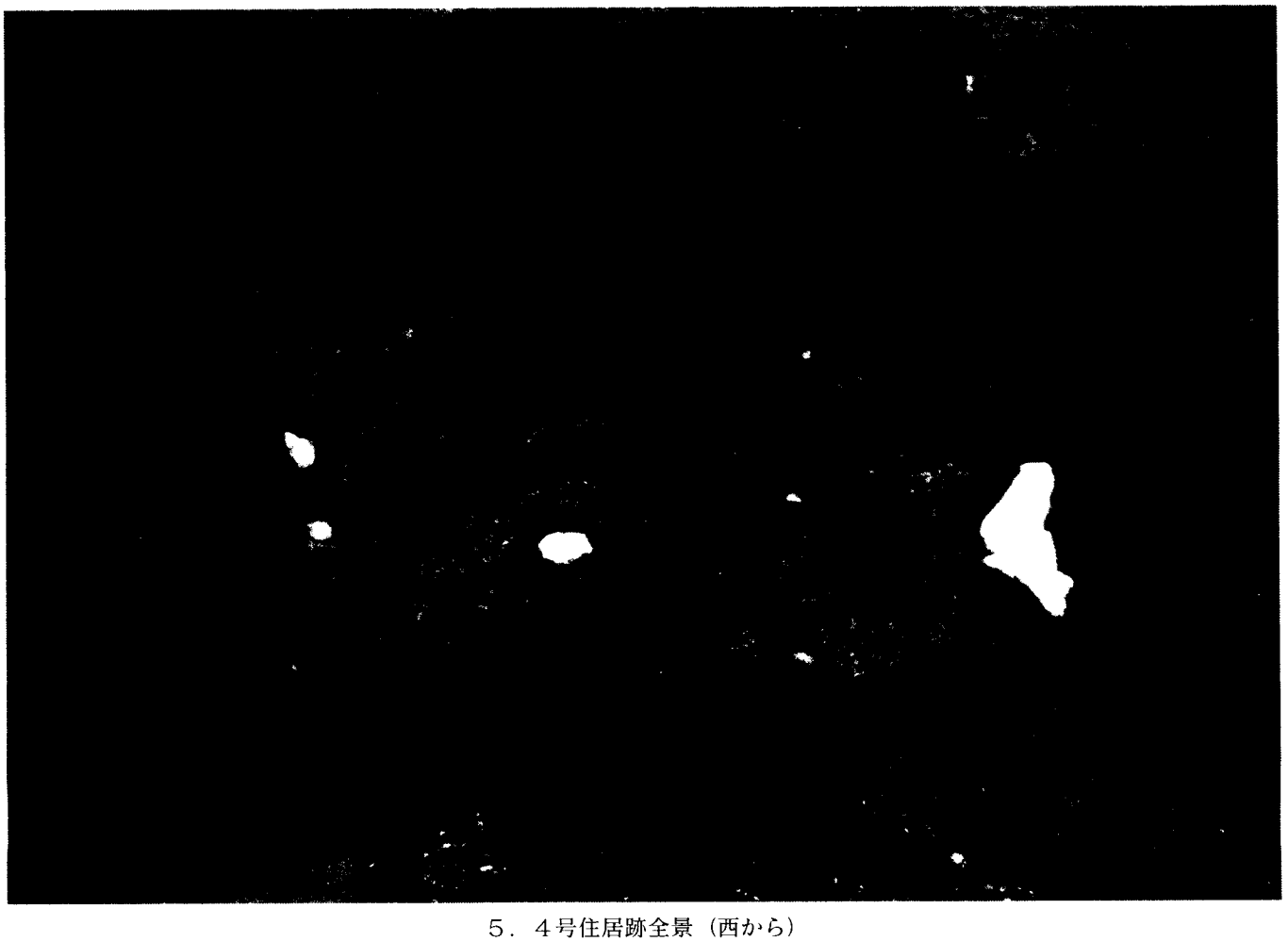
１．１号住居跡全景（西から）

２．２号住居跡全景（西から）

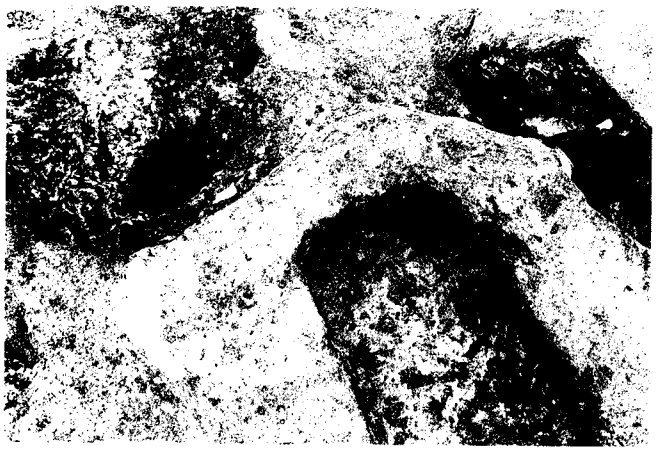
３．３Ａ号住居跡全景（西から）



４．３Ｂ号住居跡全景（西から）



５．４号住居跡全景（西から）

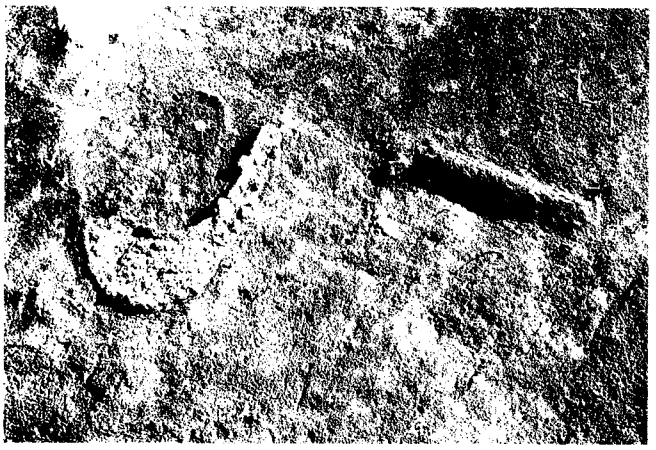


１．４号住居跡棚状遺構（南東から）

２．５号住居跡全景（北から）

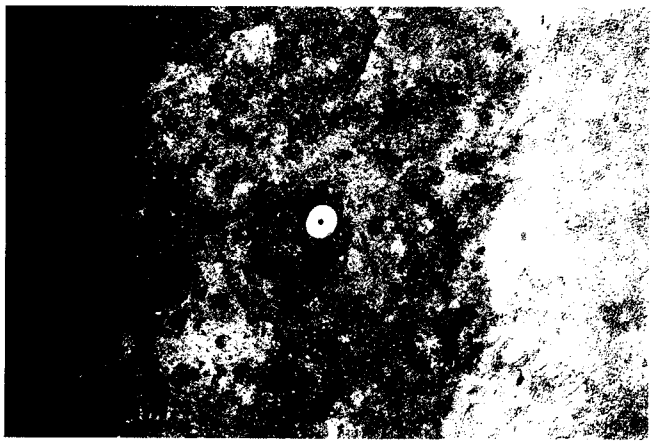
３．６Ａ号住居跡全景（西から）

４．６Ｂ号住居跡調査（西から）

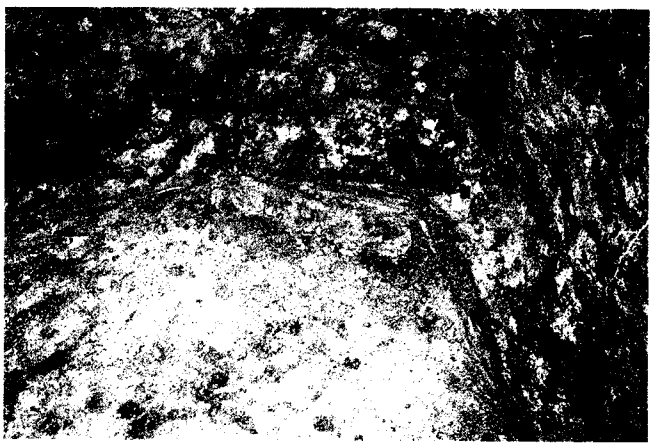


５．６Ａ号住居跡遺物出土状態（南西から）

６．６Ａ号住居跡床下土坑遺物出土状態（北から）



７．６Ａ号住居跡遺物出土状態（東から）

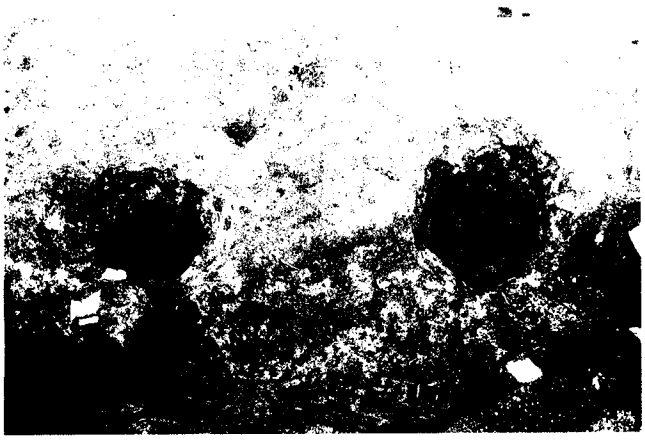


８．６Ａ号住居跡遺物出土状態（北から）

１．７Ａ号住居跡遺物出土状態全景（西から）

２．７Ａ号住居跡カマド（西から）

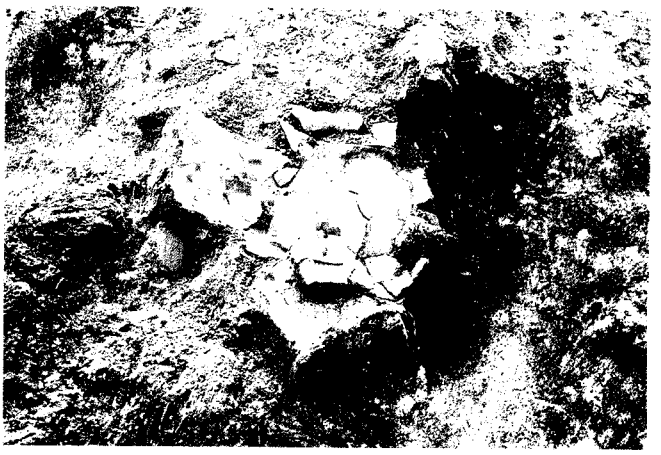
３．７Ａ号住居跡貯蔵穴（東から）



４．７Ａ号住居跡入口ピット（南から）

５．７Ａ・Ｂ号住居跡全景（北から）

１．８号住居跡全景（北から）



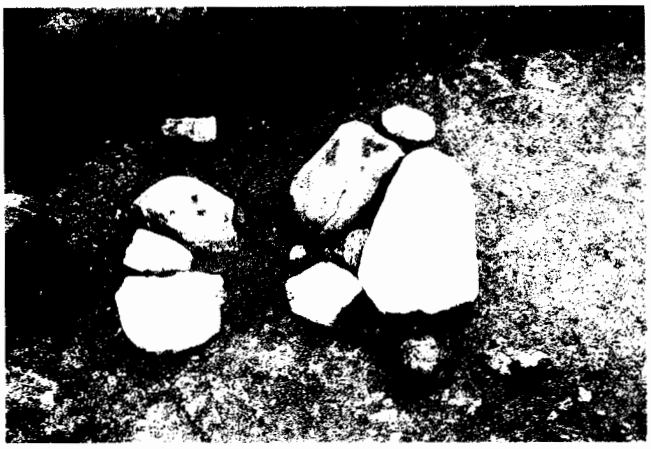
２．８号住居跡遺物出土状態近接（東から）

３．９号住居跡全景（西から）

４．９号住居跡遺物出土状態近接（西から）

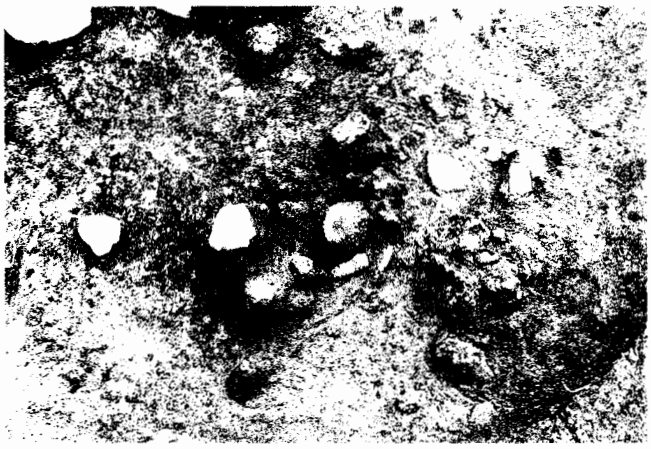
５．10号住居跡全景（西から）

1．10号住居跡東半部（ローム盛土遺構）（北から）



2．10号住居跡炉跡（北から）

3．10号住居跡鉄滓出土状態（西から）



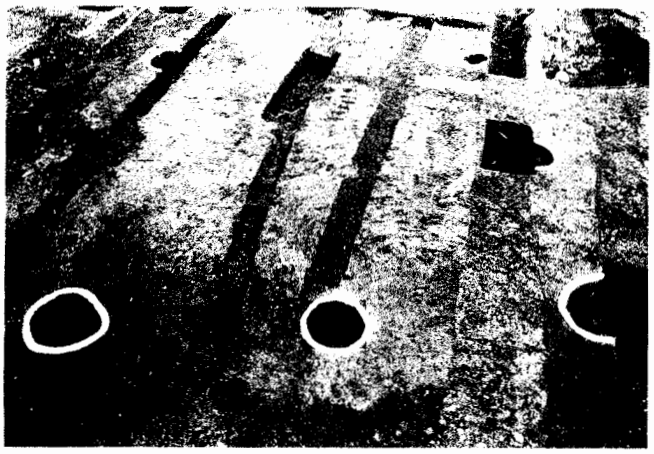
4．10号住居跡北西隅部遺物出土状態（北から）

5．11号住居跡（西から）

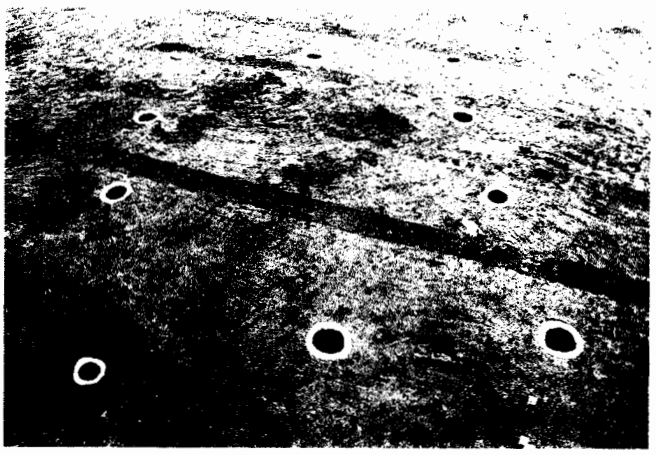
6．12号住居跡全景（西から）

7．13A号住居跡全景（西から）

8．13B号住居跡全景（西から）

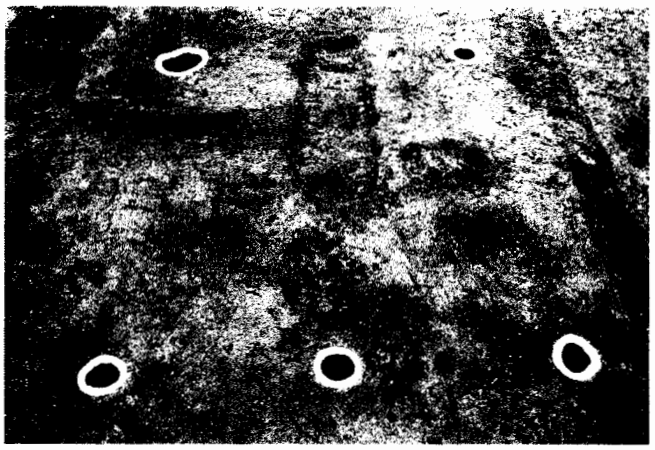


１．１号掘立柱建物跡全景（西から）



２．２号掘立柱建物跡全景（北から）

３．３号掘立柱建物跡全景（北から）

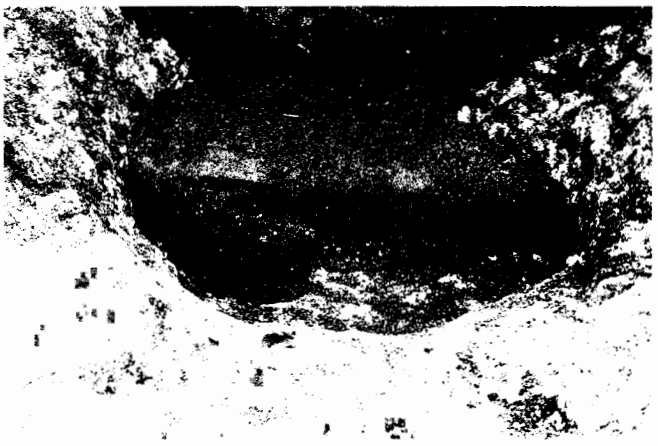


４．４号掘立柱建物跡全景（西から）

５．５号掘立柱建物跡全景（西から）

６．ピット群検出状況（東から）

７．６号溝（南から）

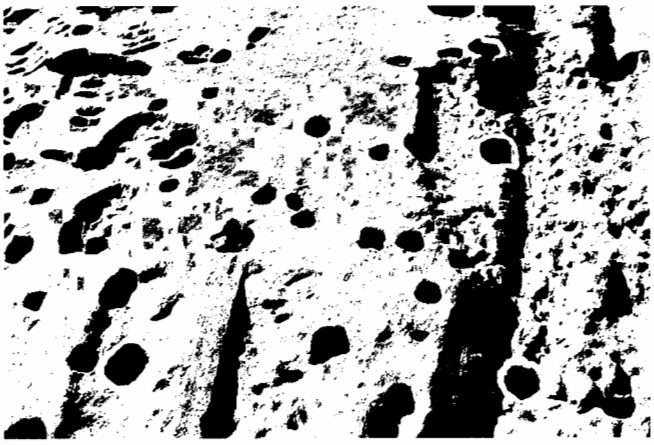


８．６号溝流水痕堆積土層（南から）

１．中世遺構群（北から）

２．６号掘立柱建物跡全景（北から）

３．７号掘立柱建物跡全景（北から）



４．８号掘立柱建物跡全景（東から）

５．９号掘立柱建物跡全景（東から）

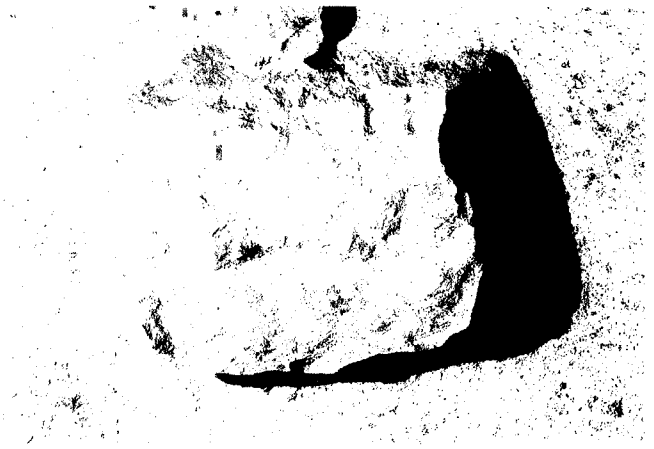
１．１Ａ・Ｂ号竪穴状遺構（北から）

２．１Ｂ号竪穴状遺構全景（東から）

３．２号竪穴状遺構（南から）

４．５号竪穴状遺構全景（西から）

５．３号土坑（東から）

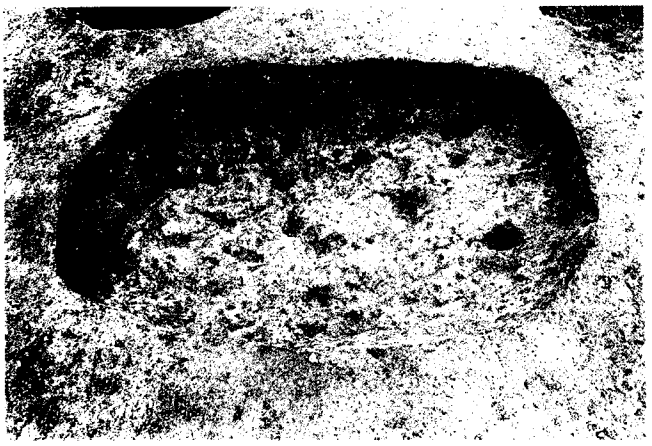


６．４号土坑（西から）

７．５・６号土坑（東から）

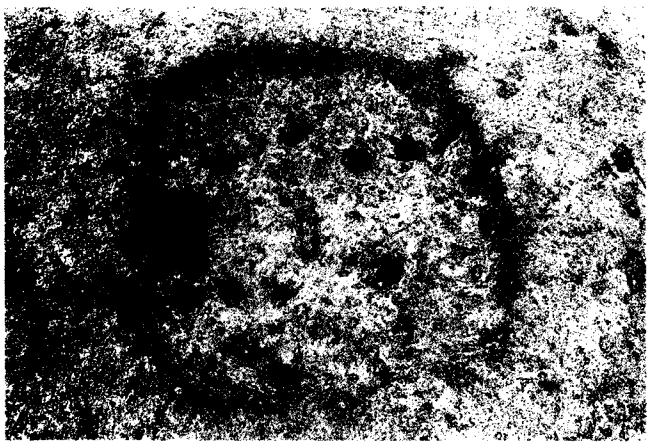
８．７・８号土坑（南から）

1．9号土坑（西から）



2．12号土坑（西から）

3．13号、14号、15A・B号土坑（西から）



4．16号土坑（西から）

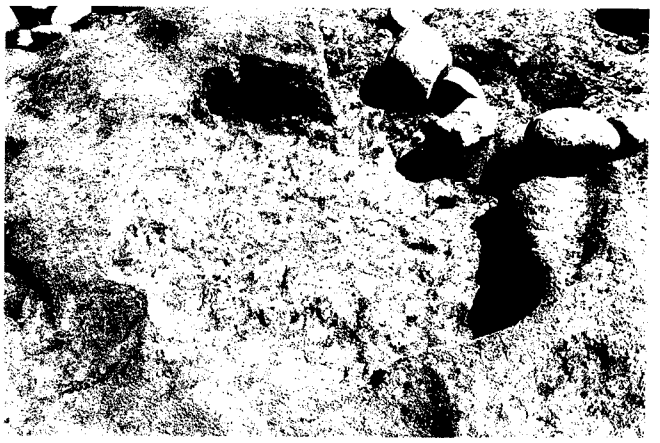
5．17A～D号土坑（北から）

6．23号土坑（西から）

7．18号土坑（北から）

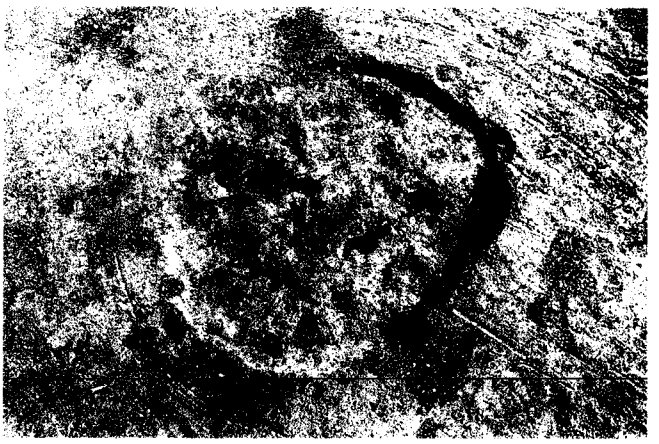
8．20号土坑（西から）

1．26号土坑（西から）

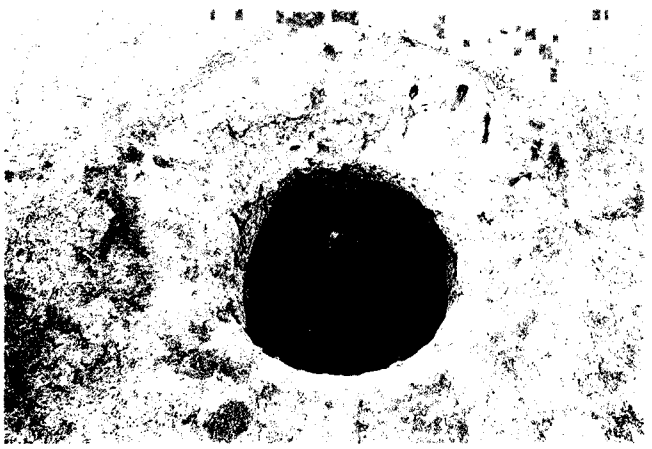


2．27号土坑（西から）

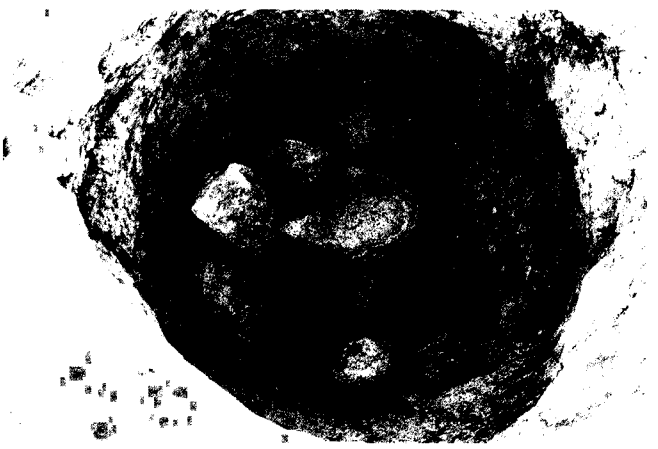
3．34号土坑（西から）



4．41号土坑（西から）



5．1号井戸（北から）



6．1号井戸礫出土状態（東から）

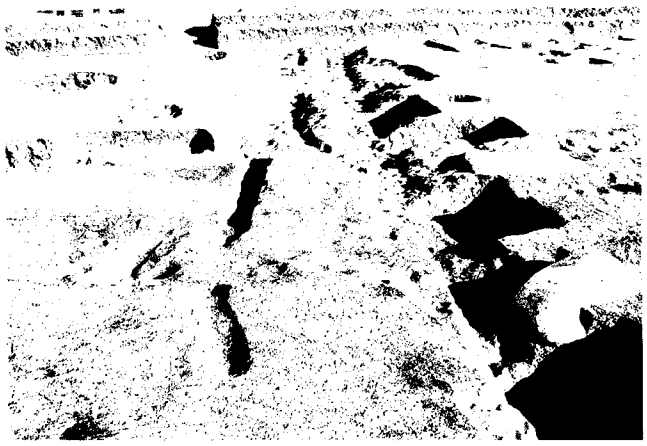
7．1号井戸土層断面（南から）

8．25号土坑及び周辺柱穴（北から）

１．１号溝（東から）

２．１号溝（南西から）

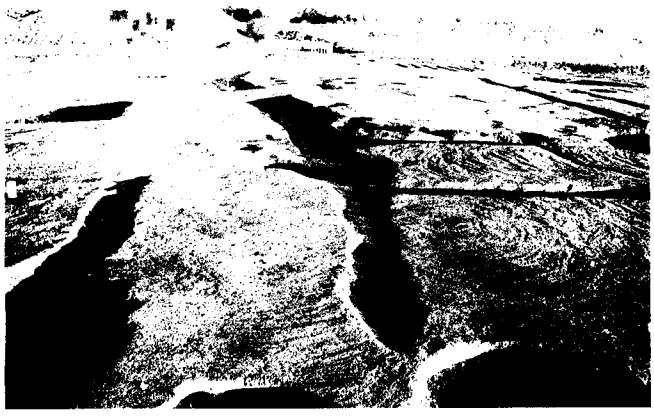
３．２号溝（北から）



４．２・３号溝（西から）

５．３号溝（南から）

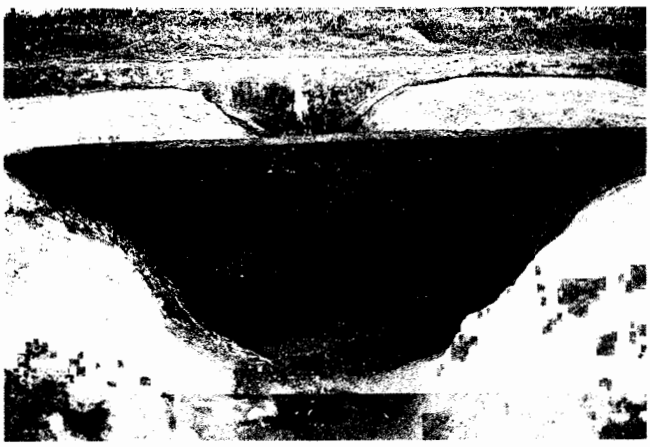
６．４号溝（東から）



７．４Ｂ号溝（西から）

８．４Ｂ号溝（北から）

１．５号溝（北から）



２．５号溝土層断面（南から）

３．５号溝北トレンチ内底面（北から）

４．７号溝（東から）

５．作業風景（北から）

Ｊ１住－１

Ｊ１住－２

Ｊ１住－３

Ｊ１住－４

Ｊ１住－６

Ｊ１住－５

Ｊ１住－８

Ｊ１住－７

Ｊ１住－10

Ｊ１住－９

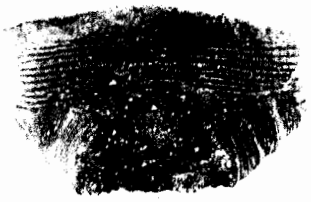
Ｊ１住－11

Ｊ１住－12

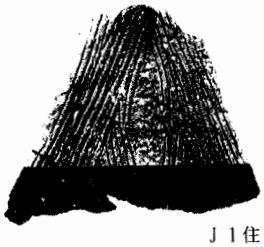
Ｊ１住－12

Ｊ１住－13

Ｊ１号住居跡出土土器



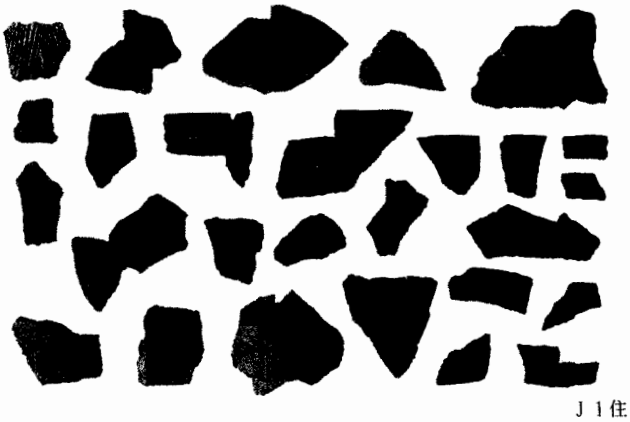
Ｊ１住－29



Ｊ１住－29

Ｊ１住

Ｊ１住



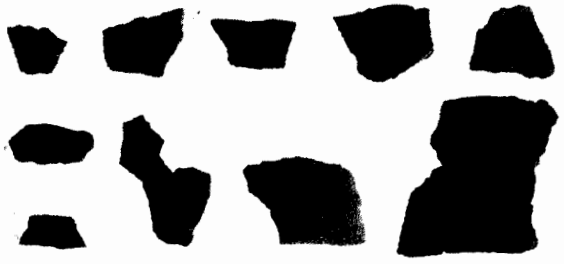
Ｊ１住

Ｊ２住－１

Ｊ２住－１

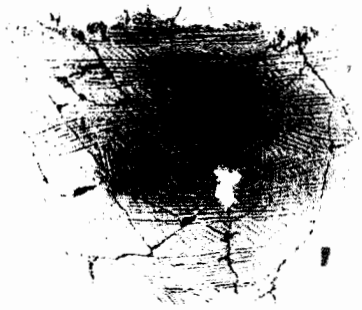
Ｊ２住

Ｊ２住－２



Ｊ２住

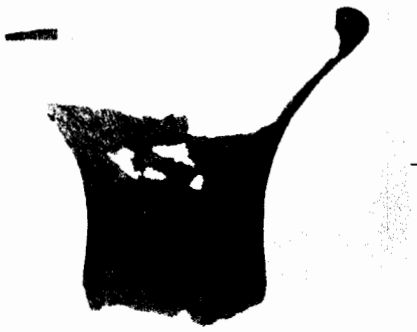
Ｊ１号・Ｊ２号住居跡出土土器



Ｊ３住－１

Ｊ３住－１

Ｊ３住－３



Ｊ３住－２

Ｊ３住－２

Ｊ４住－３

Ｊ３住

Ｊ４住－１

Ｊ４住－５・11

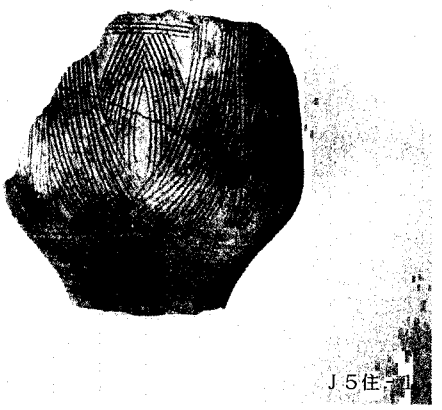
Ｊ４住－５・11

Ｊ４住－５・11

Ｊ４住－４

Ｊ３号・Ｊ４号住居跡出土土器

Ｊ４住

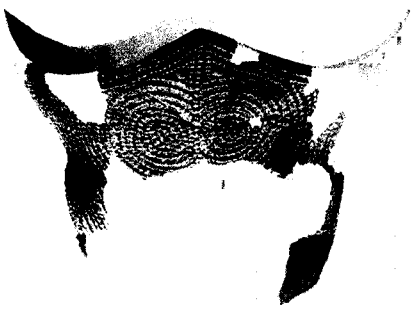


Ｊ５住－１

Ｊ６住－３

Ｊ６住－４

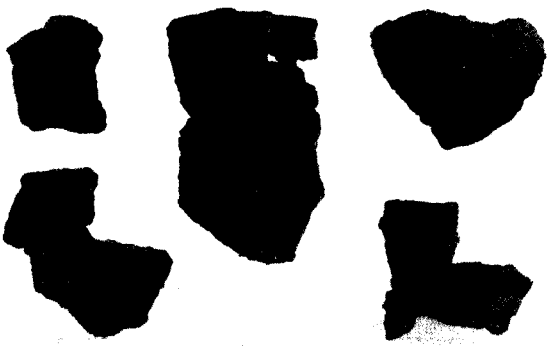
Ｊ５住



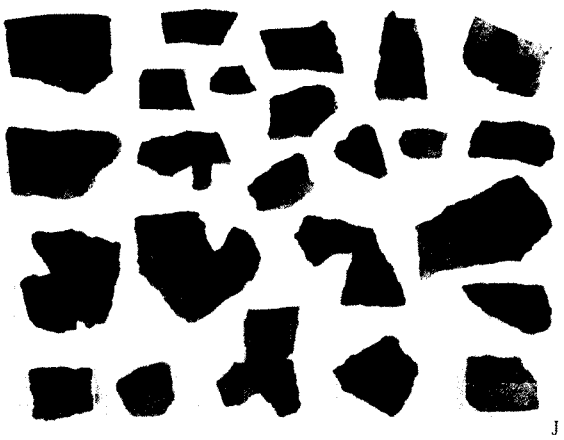
Ｊ６住－１

Ｊ６住－１

Ｊ６住－５



Ｊ６住－２



Ｊ６住

Ｊ４号・Ｊ５号・Ｊ６号住居跡出土土器

外１

外２

外４～７

外15～19

外８～10

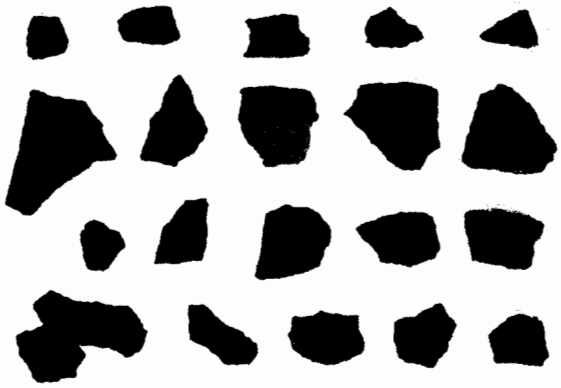
外22～33

外11～14

外20

外21

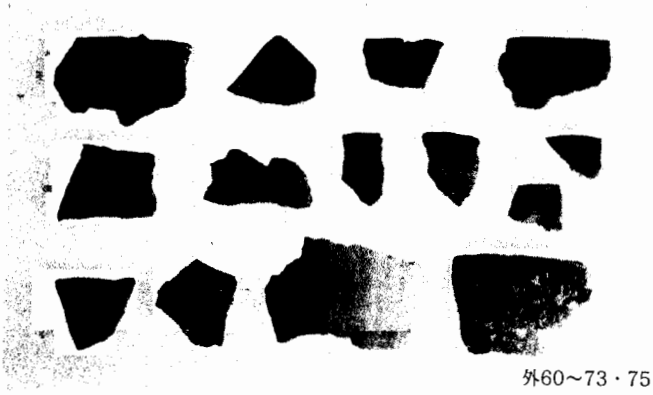
外55



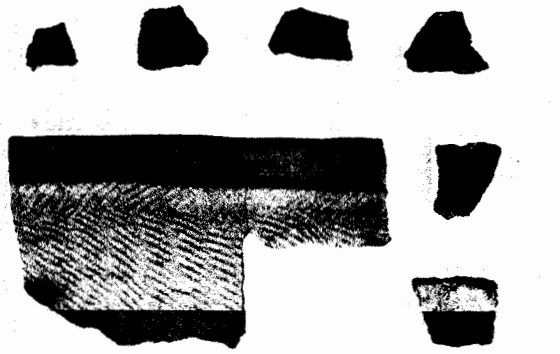
外34～51

外56～59

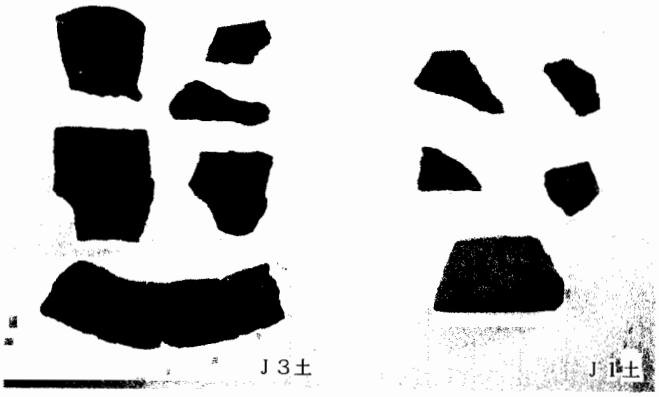
遺構外出土土器



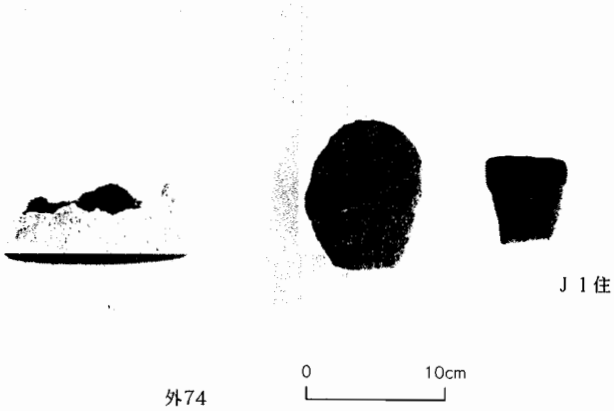
外60～73・75



外76～82



Ｊ３土　Ｊ１土

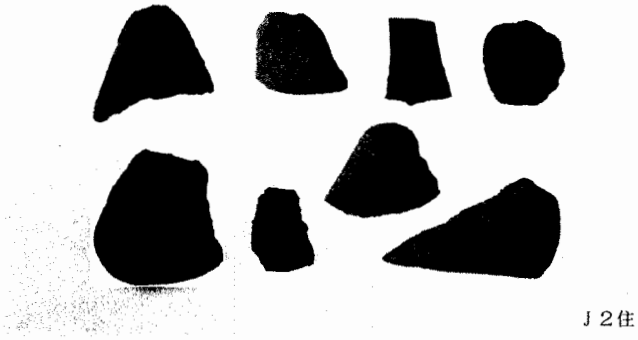


Ｊ１住

外74　0　10cm

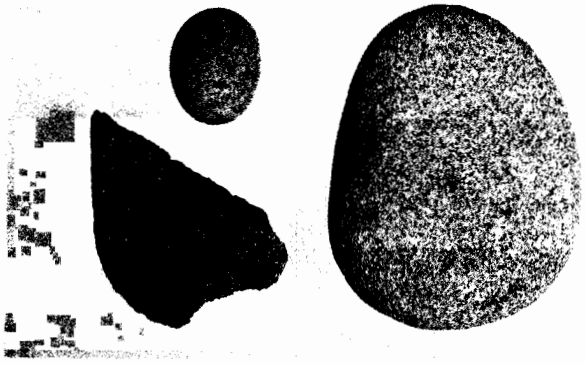
Ｊ１住

0　10cm



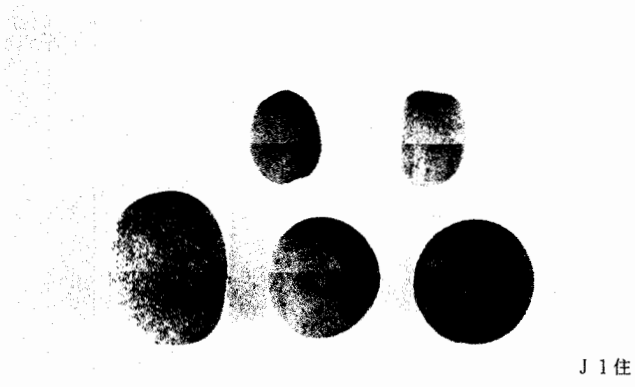
Ｊ２住

0　10cm



Ｊ２住

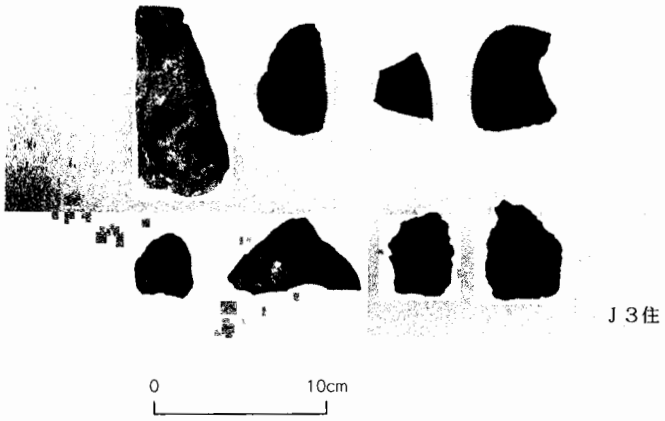
0　10cm

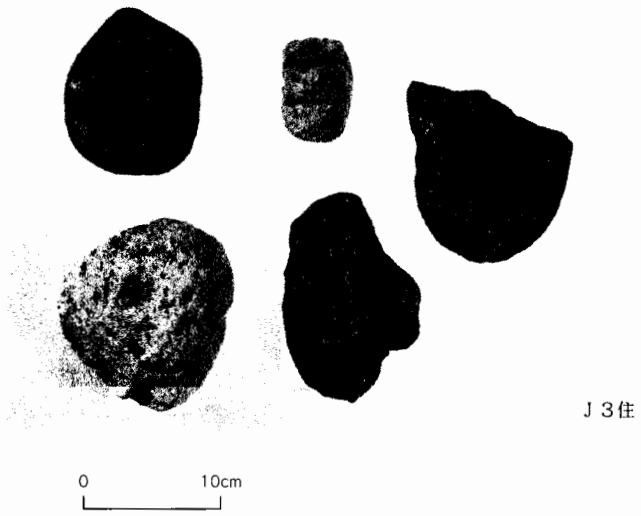


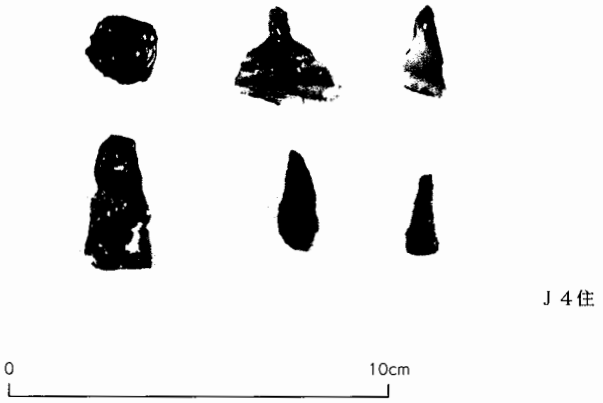
Ｊ１住

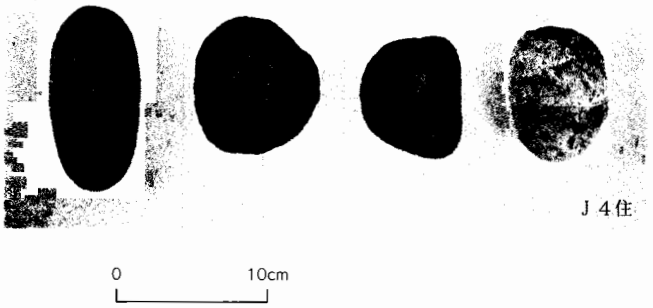
0　10cm

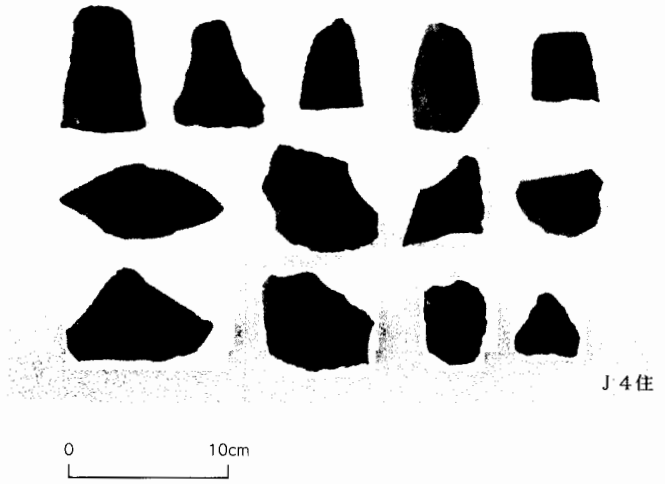
土坑・遺構外出土土器、Ｊ１号・Ｊ２号住居跡出土石器

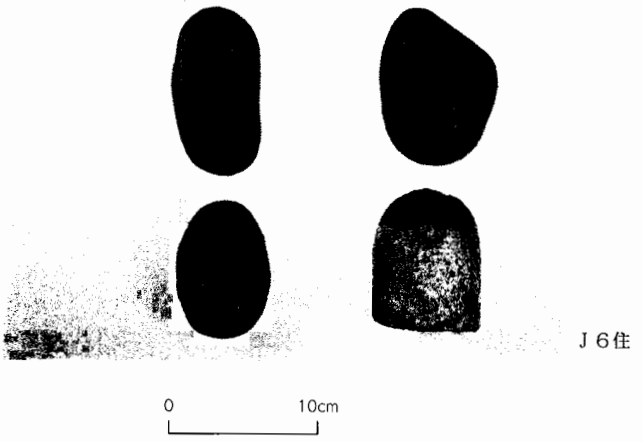


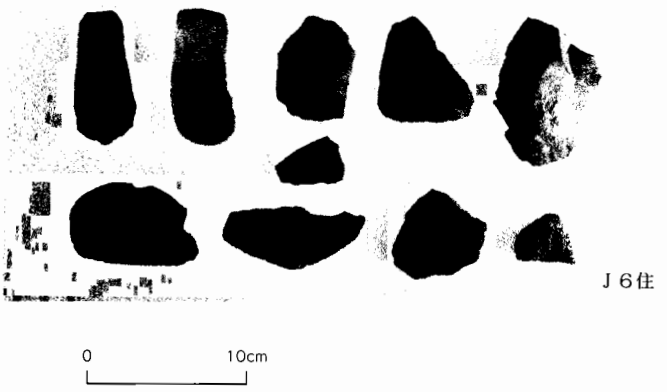


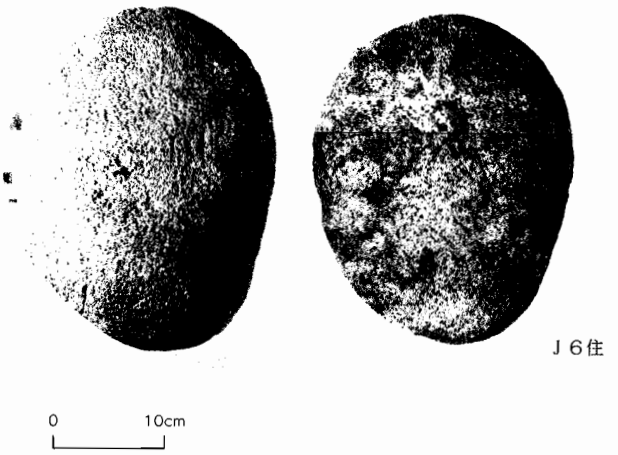




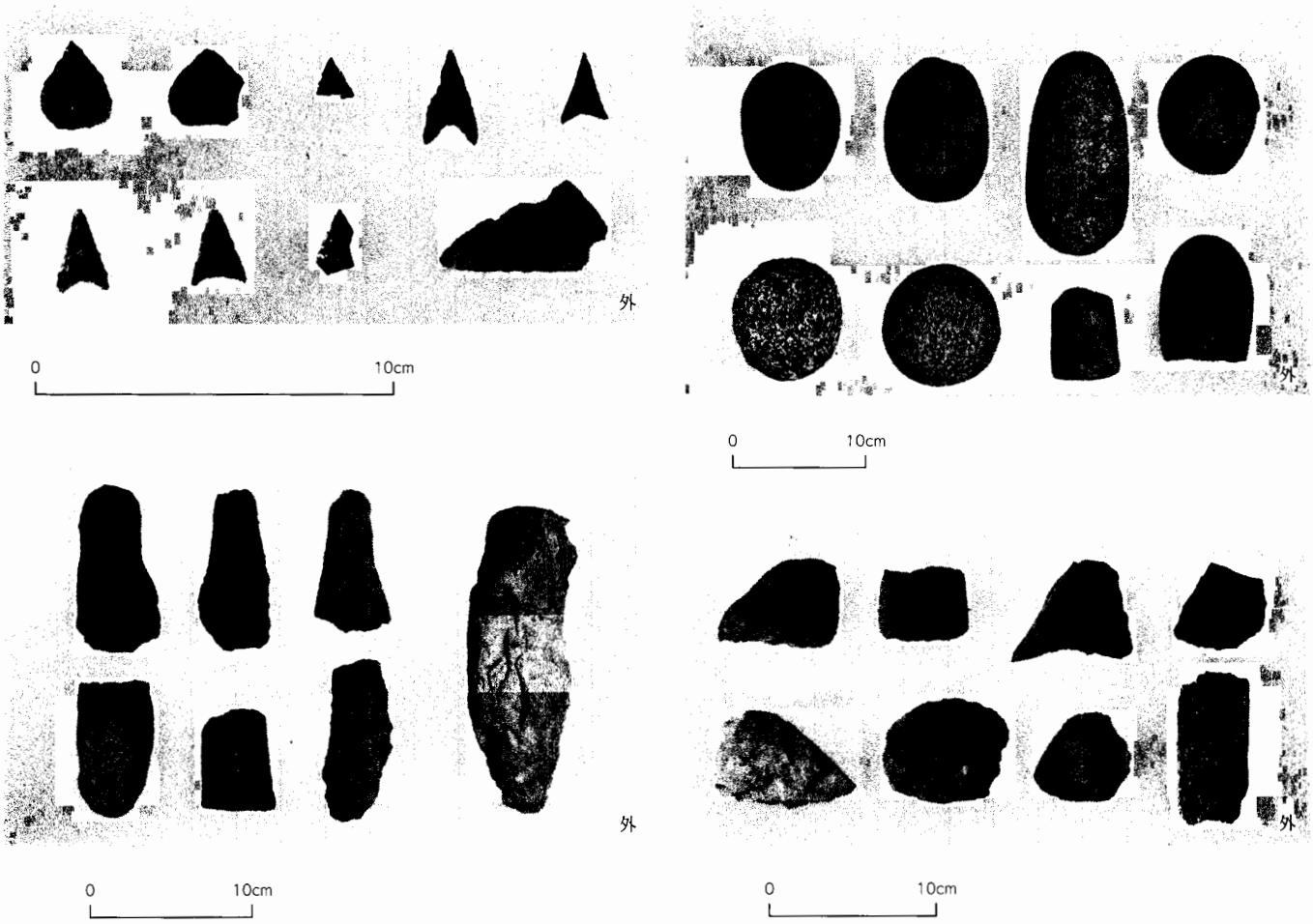








Ｊ３号・Ｊ４号・Ｊ６号住居跡出土石器



遺構外出土石器

1住－1

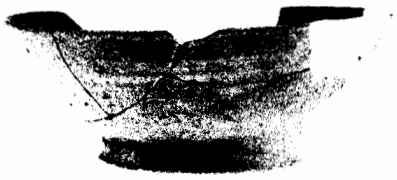
1住－2

1住－6

1住－5

1住－8

1住－6


3住－1

3住－4

3住－5

3住－3

4住－9

4住－8

4住－5

4住－11

4住－10

4住－13

4住－12

4住－14

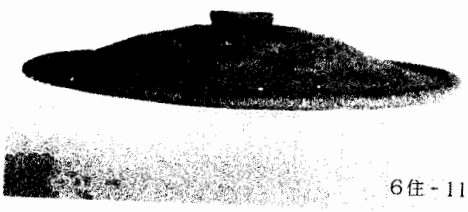
4住－15

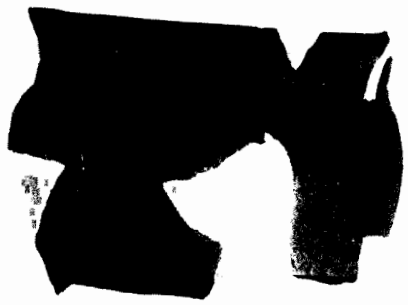
１号・３号・４号住居跡出土遺物

5住－1

6住－1

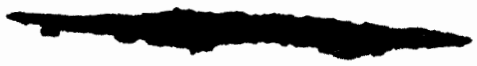
6住－4


6住－11


6住－15

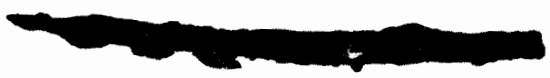
6住－18

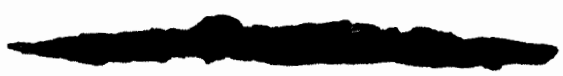
6住－19


6住－20

6住－21

6住－23


6住－22


6住－22

7住－5

7住－1

7住－11

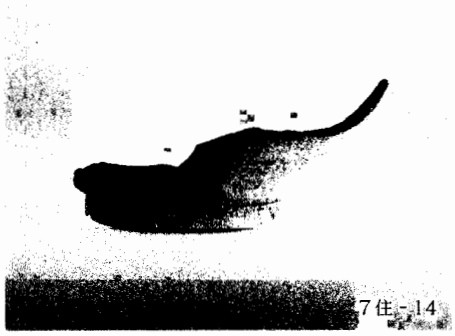
7住－6

7住－16

7住－12

5号・6号・7号住居跡出土遺物

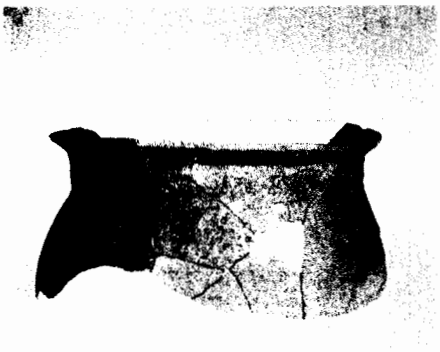
7住-13



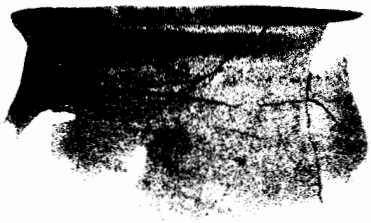
7住-14

7住-15

7住-15



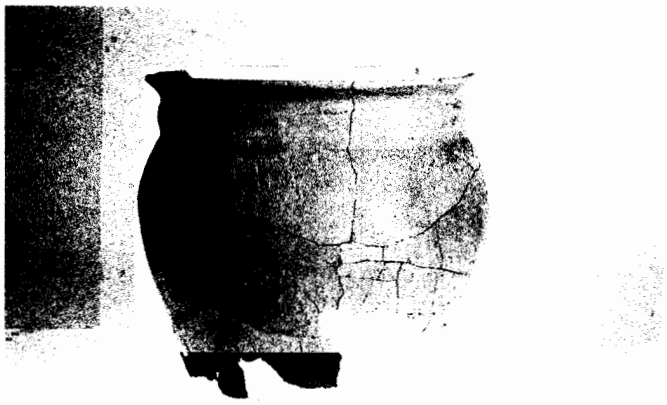
7住-18



7住-19

7住-22

7住-19



7住-20

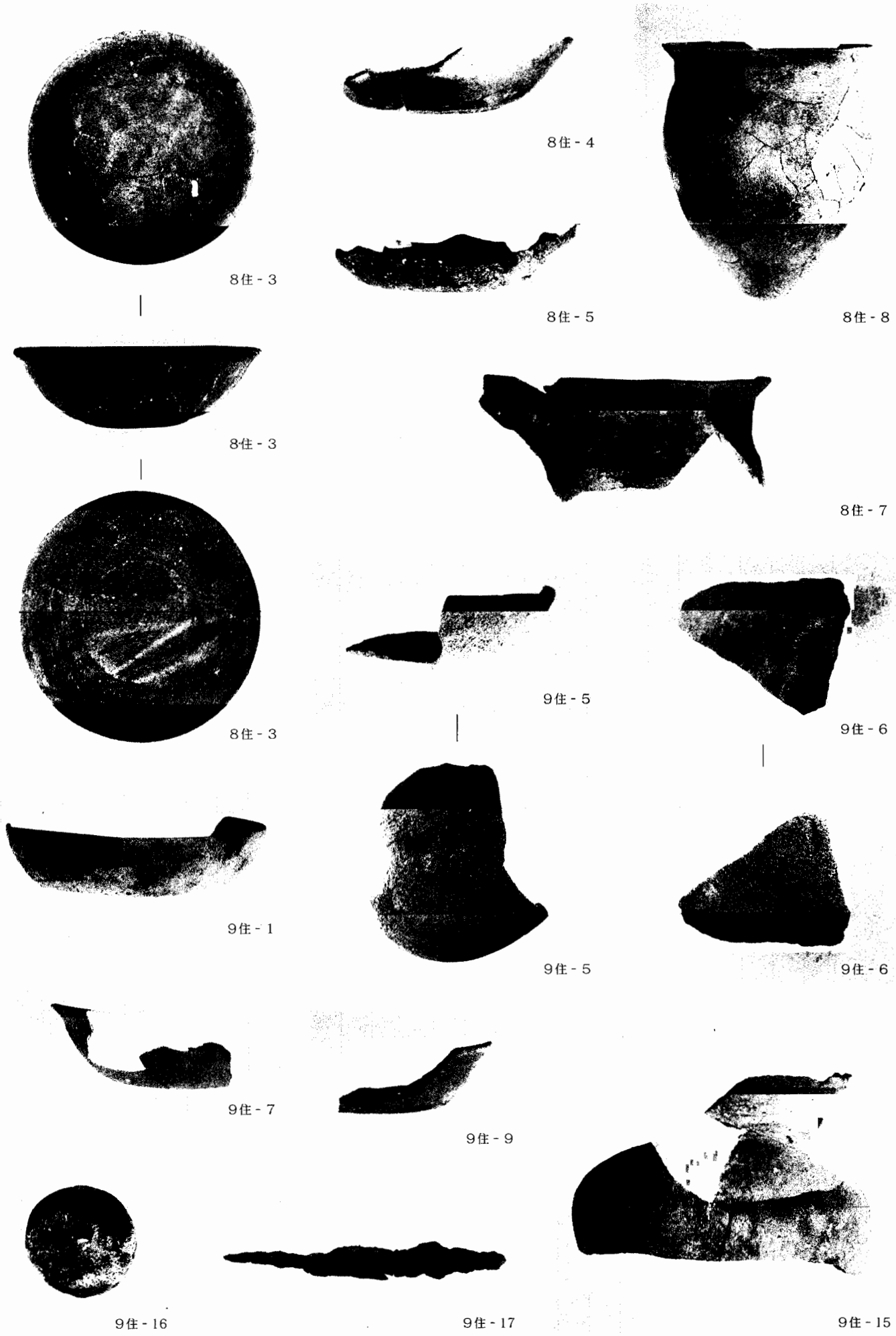
7住-23

7住-23

7住-24

7住-25

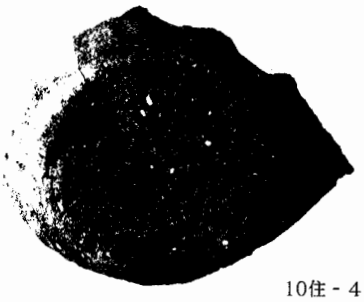
7号住居跡出土遺物



８号・９号住居跡出土遺物

10住－1

10住－5

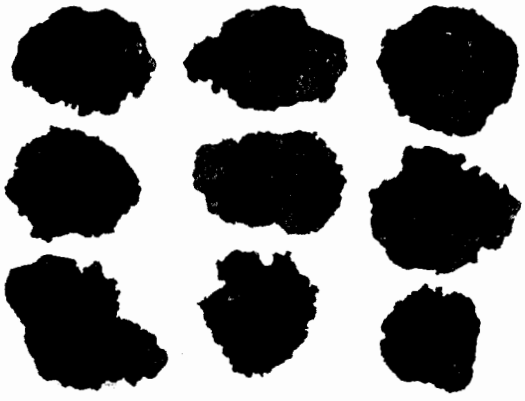


10住－4

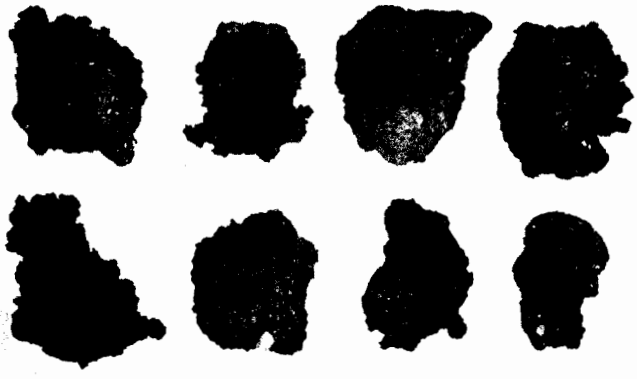
10住－6

10住－8

10住



10住



10住

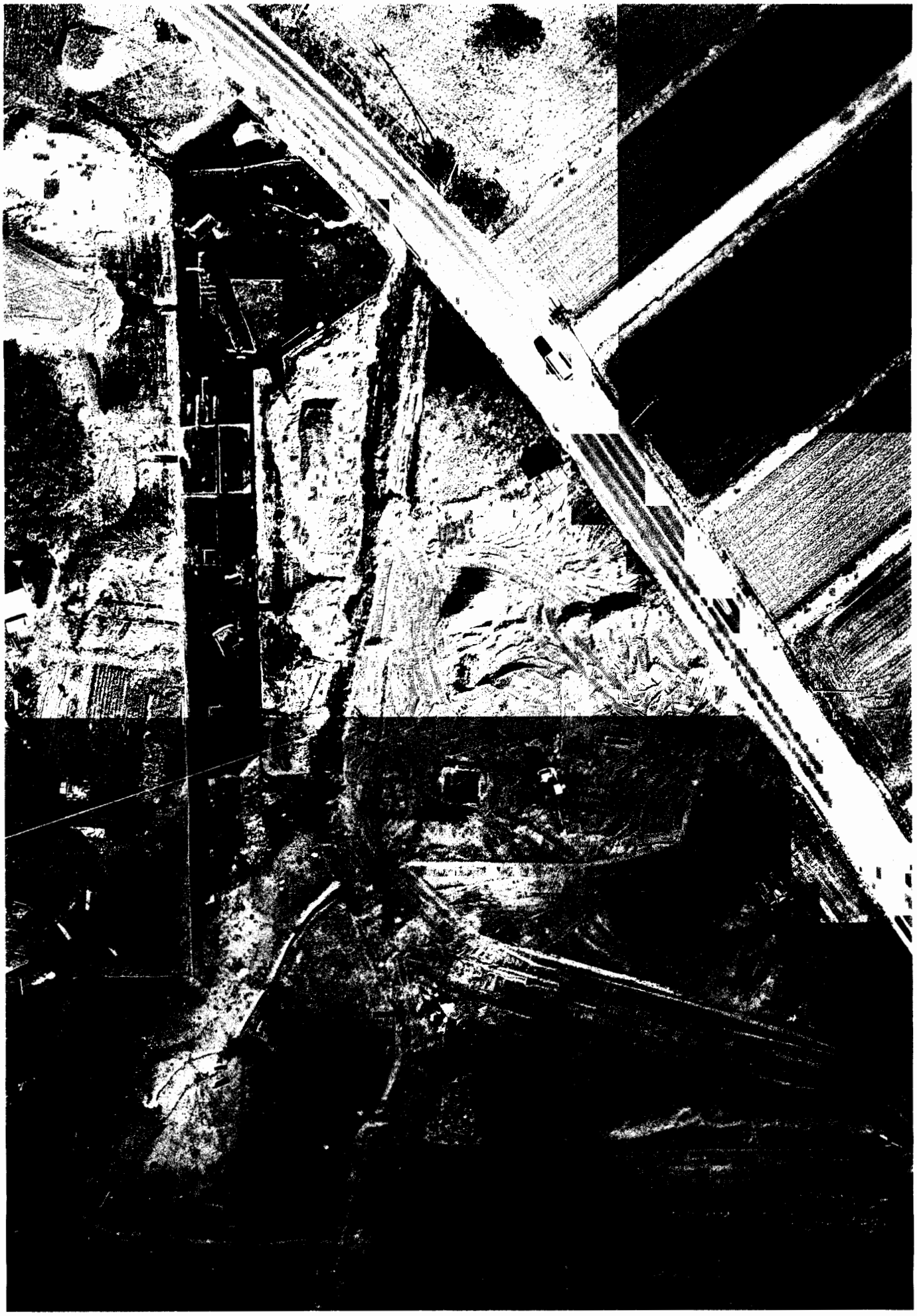
10住

13住－1

13住－4

13住－6

10号・13号住居跡出土遺物

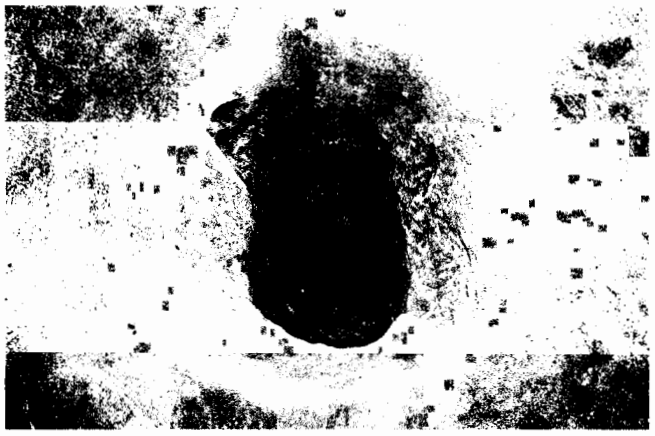


寺間遺跡全景（上が北）

1．Ｊ２号住居跡全景（北から）

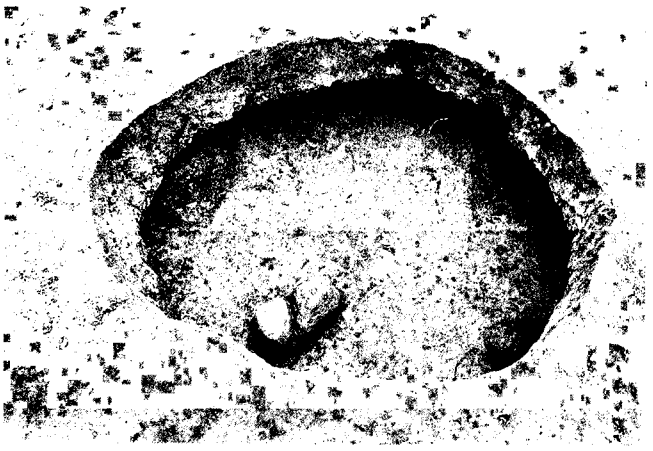
2．Ｊ１号住居跡全景（北から）

3．Ｊ１号土坑（東から）



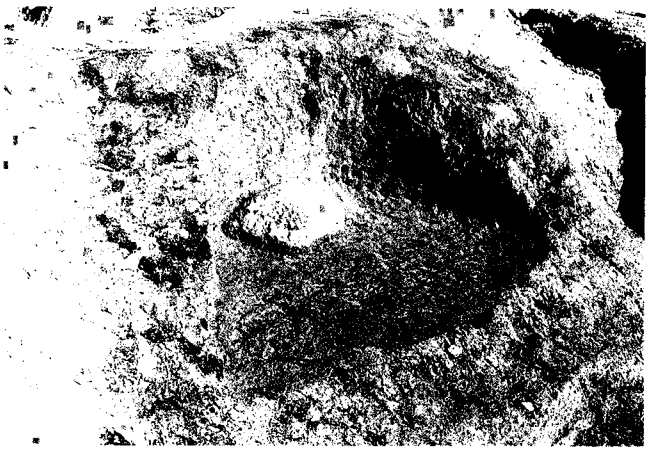
4．Ｊ２号土坑（南から）

5．Ｊ３号土坑（北から）



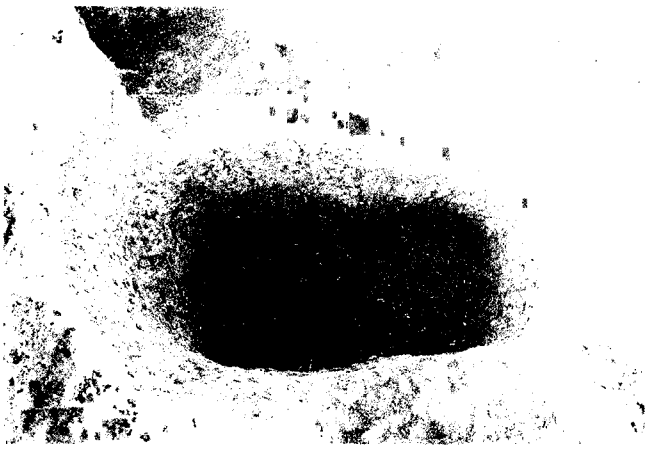
1．J４号土坑（西から）

2．J７・８号土坑（北から）



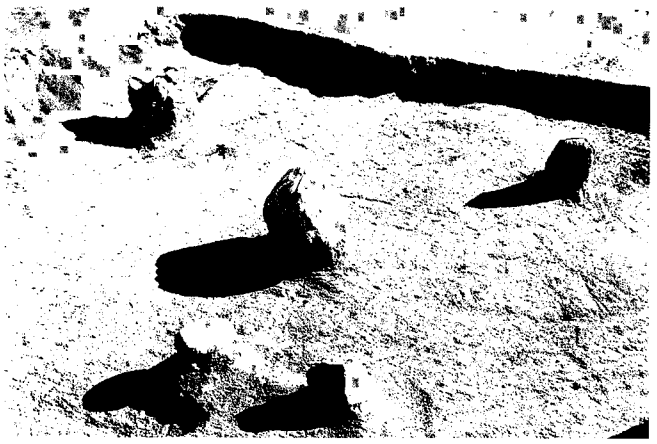
3．J９号土坑（西から）

4．J10号土坑（北から）



5．J11号土坑（北東から）

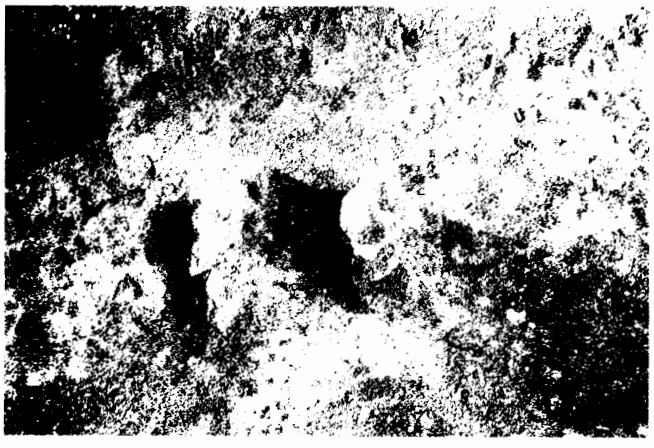
6．J12号土坑（北から）



7．包含層遺物出土状態（西から）

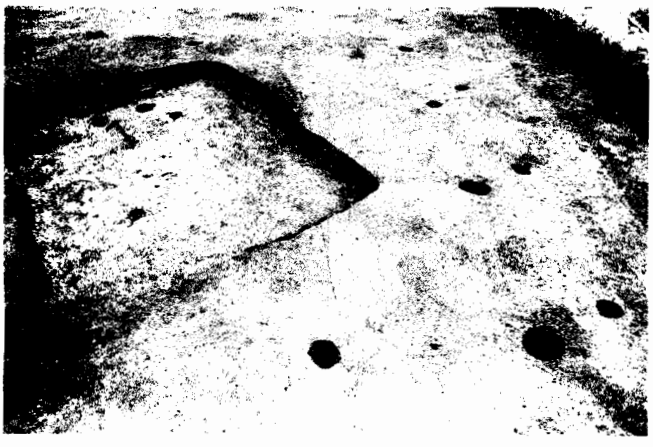
8．縄文小ピット群（東から）

1．1号住居跡全景（西から）



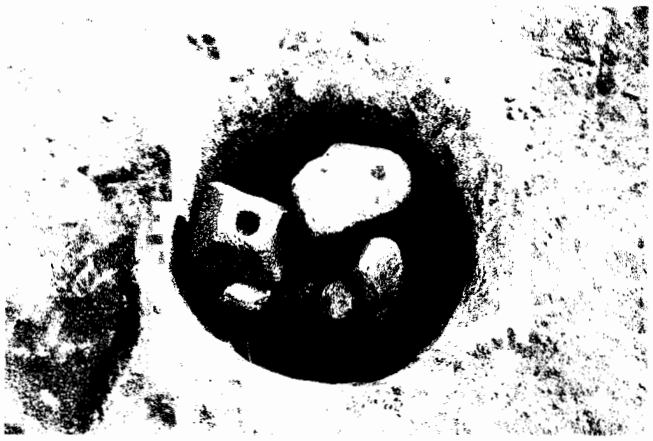
2．1号住居跡遺物出土状態（西から）

3．1号住居跡入口ピット（北から）

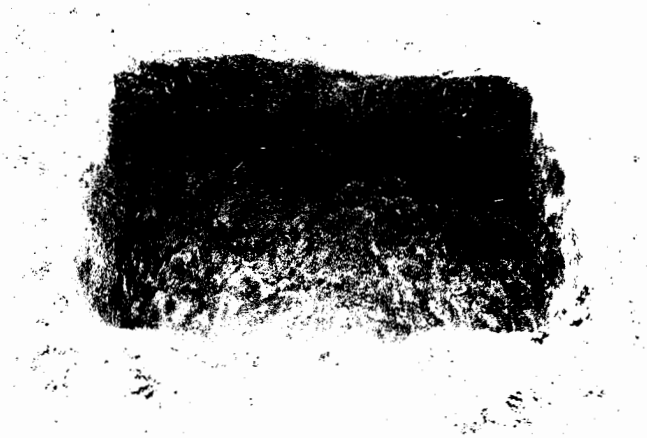


4．1号掘立柱建物跡全景（北から）

5．2号掘立柱建物跡全景（西から）



1．1号井戸（西から）



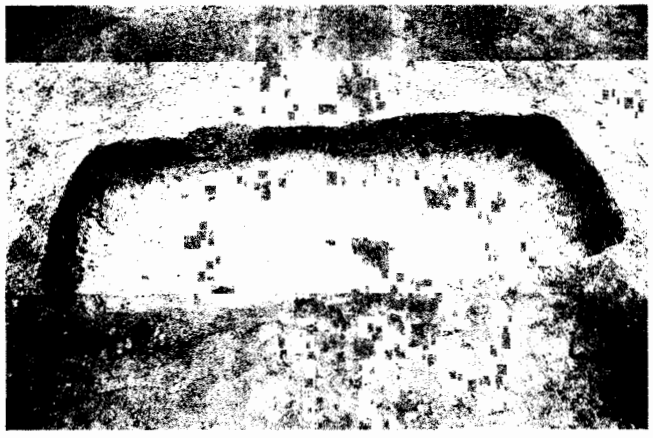
2．2号土坑（北東から）

3．3号土坑（西から）

4．4号土坑（北から）

5．5号土坑（北から）

6．6号土坑（西から）



7．7号土坑（北から）

8．8号土坑（西から）

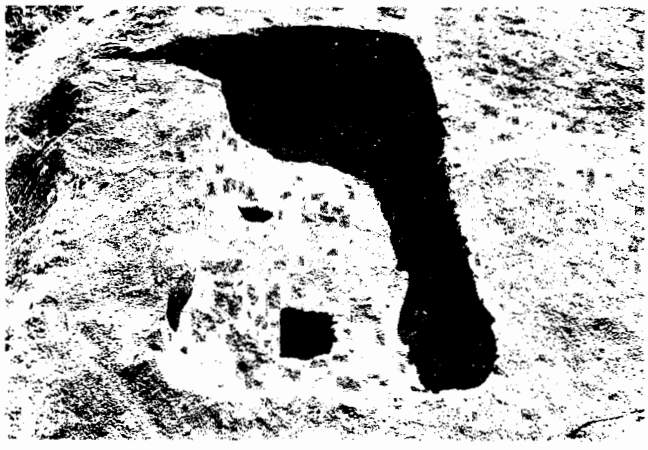
1．9号土坑（北から）

2．10号土坑（北から）

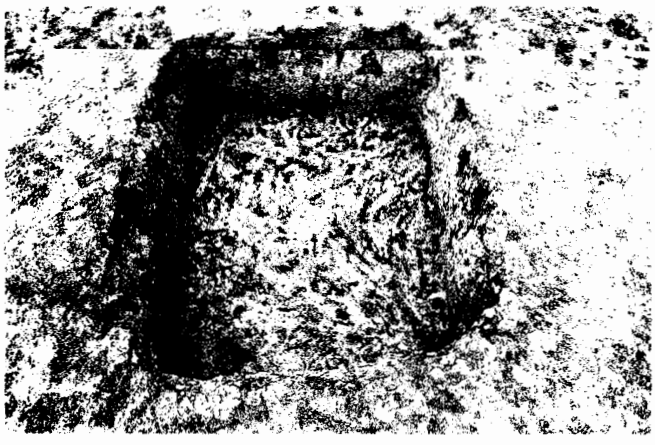
3．13号土坑（北から）

4．14号土坑（北西から）

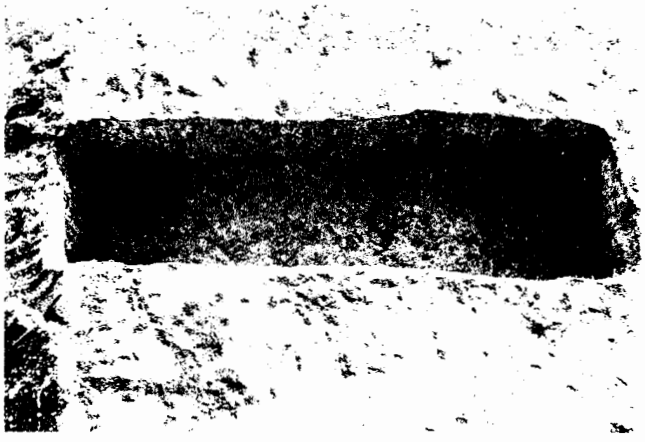
5．15号土坑（北から）



6．16号土坑（北から）

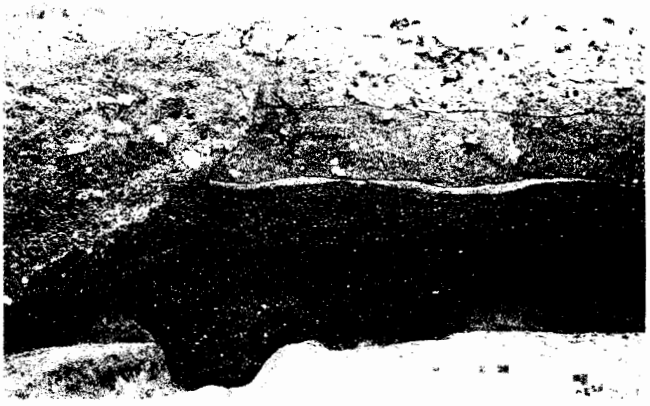


7．18号土坑（北西から）

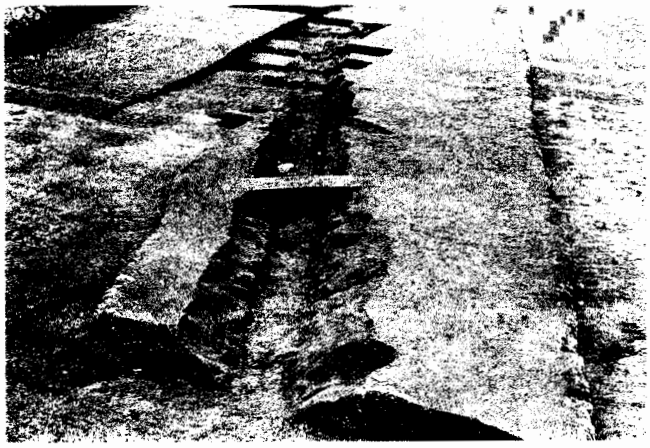


8．19号土坑（北から）

1．1号溝（東から）



2．1号溝土層断面（西から）



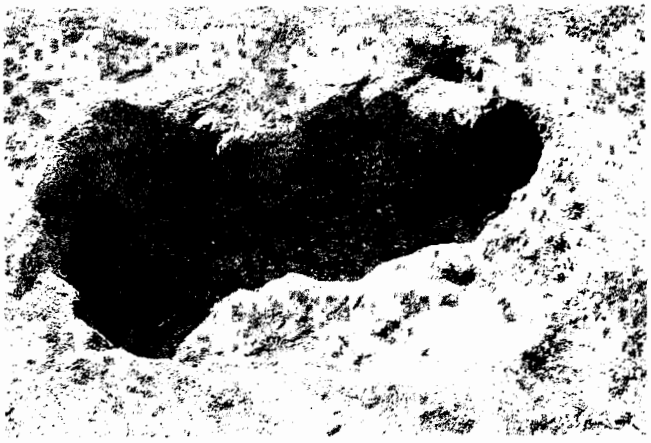
3．2号溝（南から）

4．3号溝（西から）

5．4号溝（西から）

6．4号溝東半部（東から）

7．1号溜井（北から）



8．2号溜井（北から）

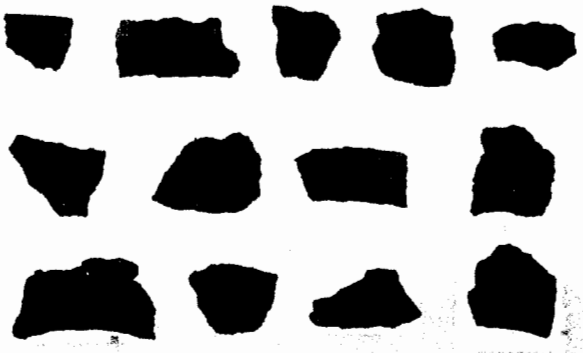
J 1住

J 2住

J 2住

J 2土　　J 5土

J 10土

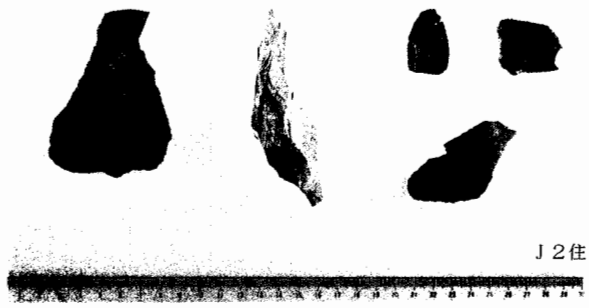


外

外

外

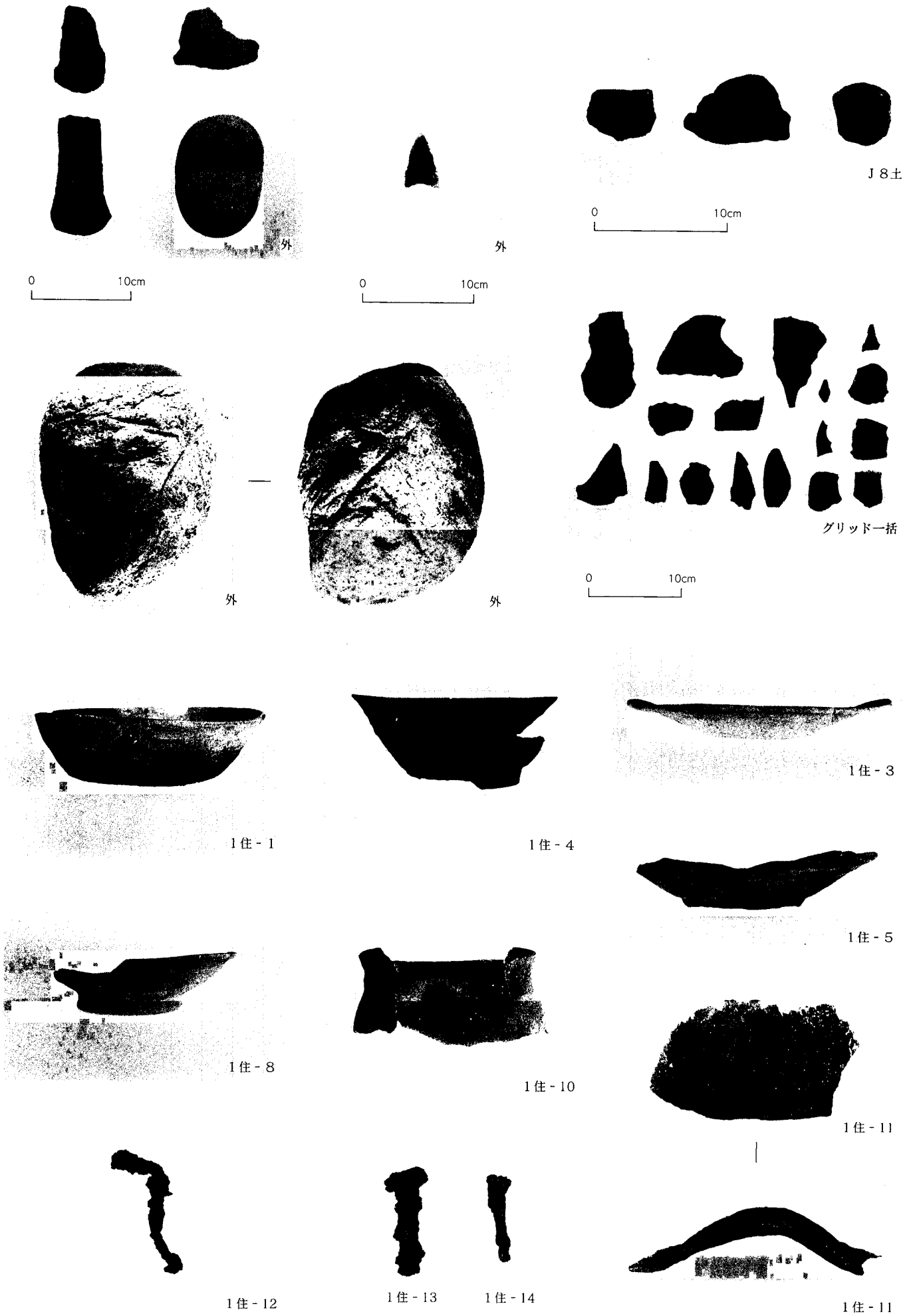
J 2住



J 2住

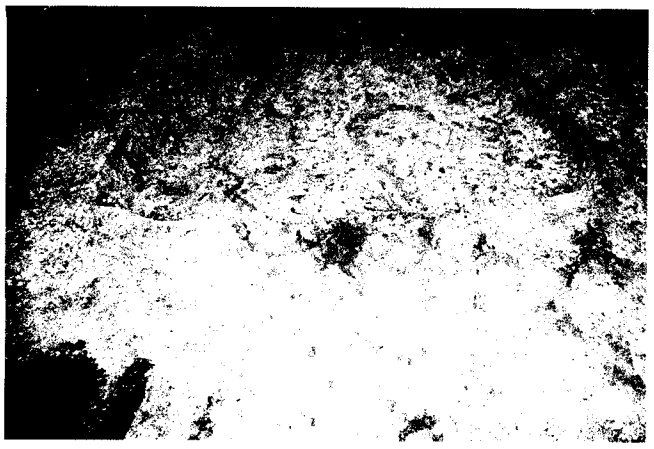
0　10cm　　0　10cm

縄文時代出土遺物

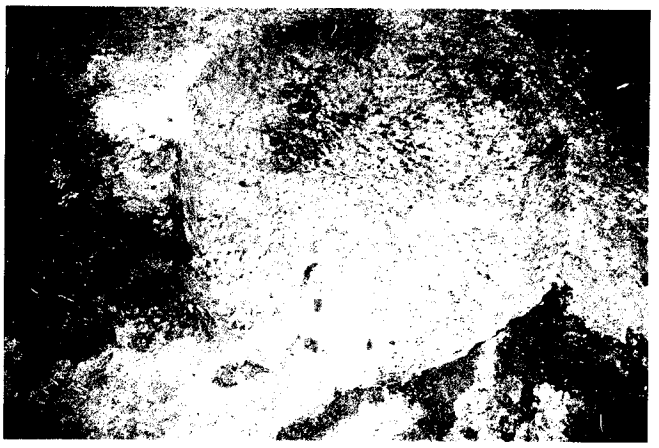


縄文時代出土遺物、1号住居跡出土遺物

孫田遺跡全景（上が北）



1．Ｊ１号土坑（北から）

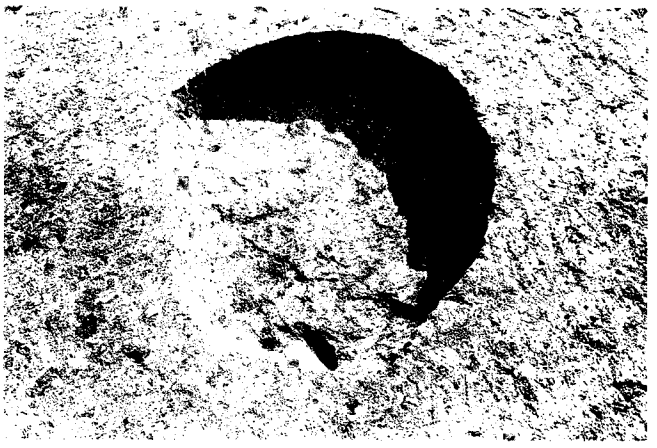


2．Ｊ３号土坑（北から）

3．Ｊ４号土坑（北から）

4．Ｊ６号土坑（北から）

5．Ｊ７号土坑（北から）



6．Ｊ８号土坑（北から）

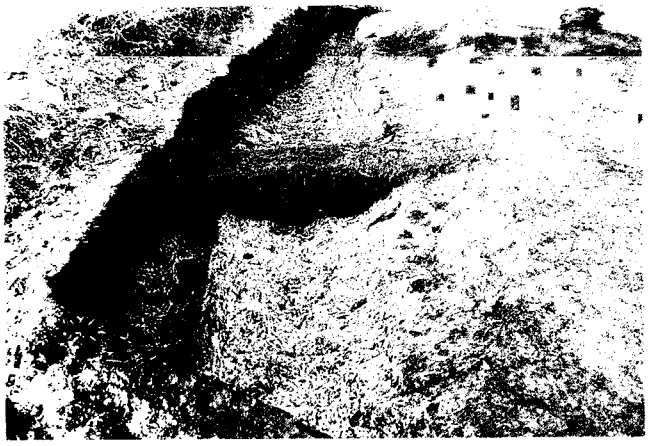
7．１号溝（南東から）

8．１号溝土層断面（南から）

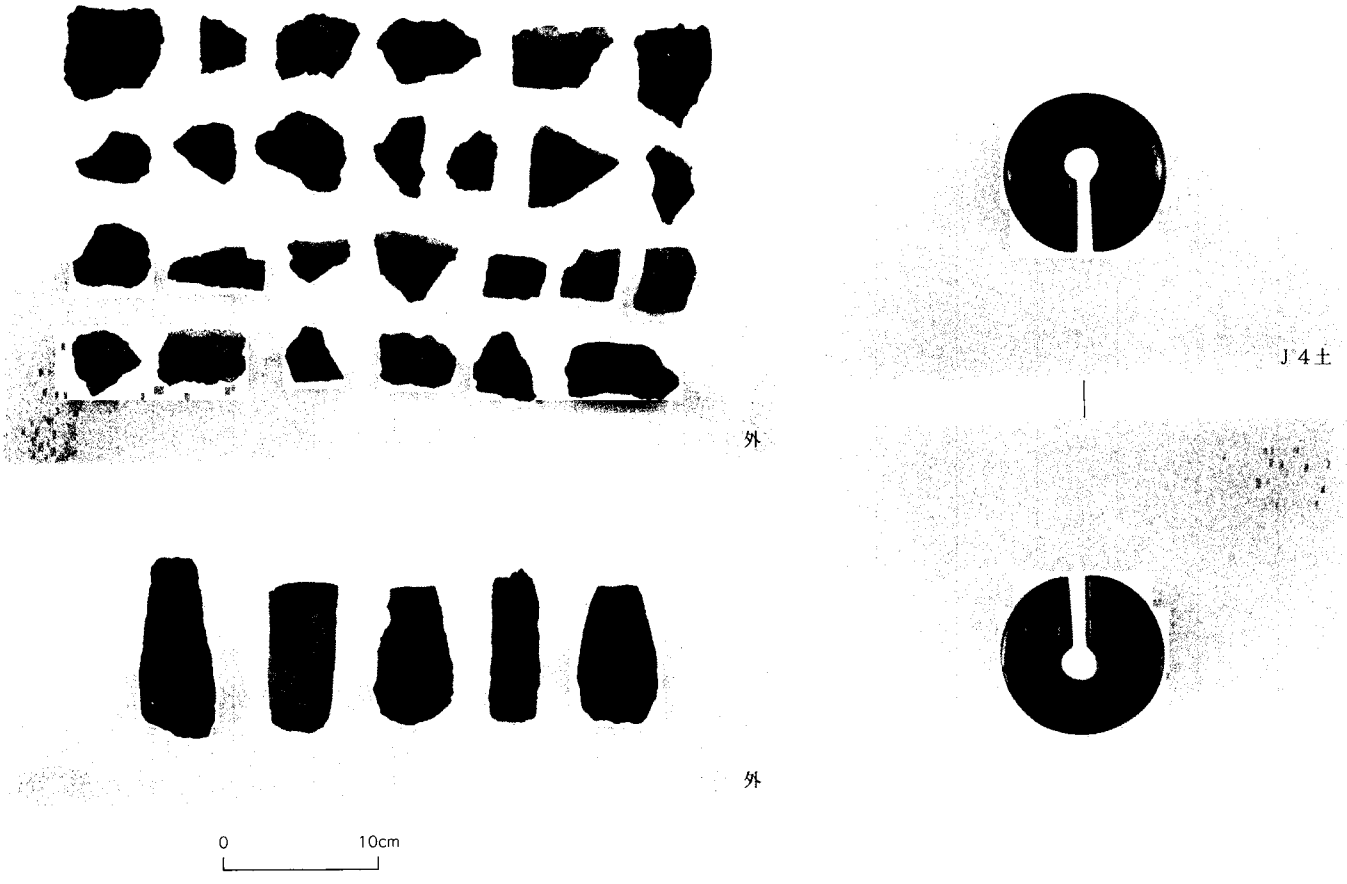
1．2号溝（北東から）

2．2号溝土層断面（南東から）

3．3号溝（南から）



4．4号溝（南から）



出土遺物

J 1住

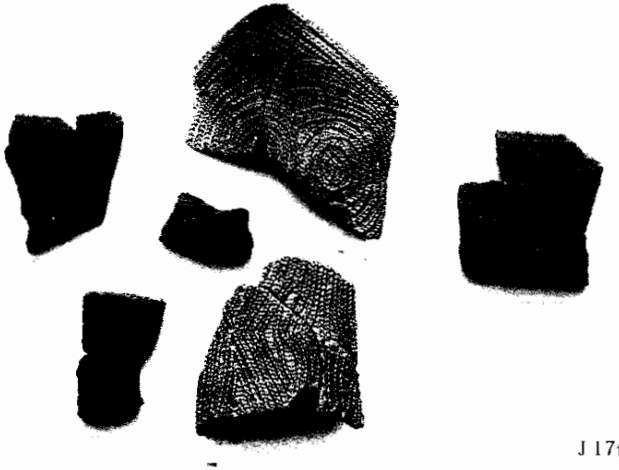
J 9住1

J 9住2

J 17住

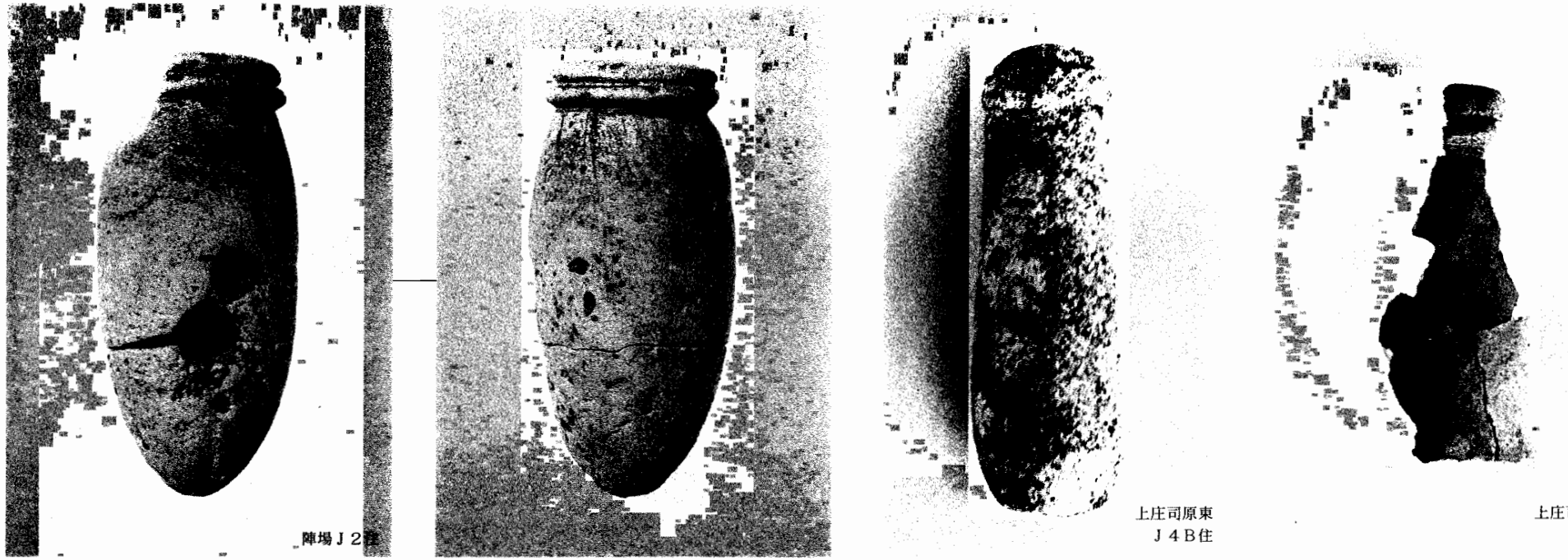
J 17住

J 17住



J 17住

庚東



陣場Ｊ２住

上庄司原東
Ｊ４Ｂ住

上庄司原東
Ｊ２住

PL
43
参考資料

小暮地区遺跡群
上百駄山遺跡
寺間遺跡
孫田遺跡

平成5年度県営ほ場整備事業嶺地区
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成7年3月15日　印刷
平成7年3月22日　発行

編集・発行/群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866-1
電話(0272)88-6111
印　　刷/朝日印刷工業株式会社